

ジョン・ウェスレー説教53上巻／目次

ジョン・ウェスレー 説教53(上)



翻訳 竿代 忠一
勝間田充夫
藤本 満
訳者ノート 藤本 満

イムマヌエル綜合伝道団教学局

	まえがき	5
	ウエスレーによる説教集への序文	27
1	信仰による救い	33
2	あと一步でキリスト者	55
3	眠っている人よ、目をさませ	73
4	聖書的キリスト教	97
5	信仰による義認	129
6	信仰による義	153
7	神の国への道	175
8	御霊の最初の実	195
9	奴隷の霊と神の子とする霊	217
10	御霊の証し(I)	243
11	御霊の証し(II)	268
12	私たち自身の霊の証し	289
13	信仰者のうちにある罪について	309
14	信仰者の悔い改め	338
15	大審判	365
16	恵みの手段	395

まえがき

新しい「ウエスレー全集」をもとに

本格的ウエスレー研究の開花を見てしばらく後、その最盛期とでも言うべき一九六〇年、米国の四大メソジスト大学（ドリユー・デューク・エモリー・南メソジスト）の著名なウエスレー研究者が集まり、新しい、より完全なウエスレー全集の刊行企画が話し合われていた。それまでは、ジャクソンの編集による「ウエスレー全集」（1899、32）が、ウエスレー研究の標準的なテキストの役割を果たしてきた。この全集は、ウエスレーの著作を後世の人々の目に触れさせ、学びにおいては共通の引用書を提供するという点でその役目を果たしてきたものの、文献の背景等の説明を欠いており、研究の質的な助けにはなり得ないのが実状であった。その後、日誌については、カーノックの編集によるもの（1909、1916）、手紙については、テルフォードの編集によるもの（1931）が、それぞれ歴史的な注釈とともに全八巻にまとめられた。加えてサグデンもウエスレーの五三篇の説教に序文を付けて「標準説教」としてまとめた（1921）。これらの著作集がウエスレー研究の土台を形成してきたのである。しかし、こうした説教、日誌、あるいは手紙も、ウエスレーの膨大な著作をカバーするにはなお不十分であった。本格的研究が進むにつれ、また新しい研究ステージを開くために、テキストの正確さを期し、文書の万全性を備えた、学的にも恥じるところのない、本格的な全集の登場が待たれていた。このような経緯から、新しい「ジョン・ウエスレー全集」が企画されたのである。

当初、オックスフォード大学出版がこの刊行事業を引き受け、〈Oxford Edition〉の名の下に数巻の出

まえがき

版を見るが、その後、経済的な理由のために、米メソジストのアビンドン出版社が刊行事業を引き継ぎ、米メソジスト教会誕生二百年を記念して〈Bicentennial Edition〉の名の下にすでに十数巻の出版を果たしてきた。完成すると、全三四巻にウエスレー文書のほぼすべてが収録されることになる。ウエスレー研究の第一人者と称されるフランク・ベーカー博士が、このプロジェクトのために英国からデューク大学に招かれ、以来、生涯をかけて、全体の編集責任を負うことになる。各巻のイントロダクション、あるいは脚注には、英米のウエスレー研究者の総力を結集した成果が存分に現れており、期待通りに、他の追従を許さないほど完成度の高い全集となっている。

一九七六年、全集の出版第一号を記念して、ドリユー大学で記念講演が行なわれた。ベーカーをはじめとして、南メソジスト大学のアルバート・アウトラー、ケンブリッジのゴードン・ラップ、ハイデルベルグのマルチン・シュミットといった歴史神学者に、超教派運動を研究するカトリックのマイケル・ハーレー（アイルランド）を加え、五名が講演を行った。それぞれの論文が一冊の本にまとめられ、本のタイトルには、アウトラーによる講演の題名であった「キリスト教伝統の中のウエスレーの占める場所」(The Place of Wesley in the Christian Tradition)が選ばれた。アウトラーは、新しい全集の企画の初期段階から指導的立場にあり、全集の第一巻から四巻、すなわちウエスレー神学の最大の遺産とされる一五〇篇の説教の編集に当たるのであるが、この論文の題名に、彼の新しい全集にかけられるビジョンが凝縮されていると言える。そして、実際、全集第一巻の序文で次のように述べている。

伝統的に（メソジストもメソジストでない人々も同様に）、ウエスレーは（メソジストの創設者・教父といっ

た)彼の生涯的な働きの諸成果という光の中で注目されることがあっても、一八世紀の神学論争という複雑なフオーラムに彼がどのような関わりを持っていたかに着目して、ウエスレーを論じる人はほとんどいなかった。そのような状況下で、ウエスレーがキリスト教伝統にどれほど深く根を下ろしていたか、そして当時、激動の時代にあつて、彼がどのようにこの伝統を再確認していったかという肝要な点を、私たちは見落としてきた。しかし、彼の説教に浸れば浸るほど、彼の考えも、そのレトリックも、源泉となつていくキリスト教伝統という膨大なモザイクに照らして読むことによつて、より理解が進む(興味深いものとなる)ことを、私は確信するようになった。ときに、ウエスレー説教が根を下ろしているこのモザイクの背景は、実に巧みに説教の中に隠されていて、ほとんどすべての説教が「バリンプセスト」(元の字句を消してその上に字句を記した羊皮紙)のように思えるほどである(序・Ⅻ)。

アウトラーはウエスレーを読むに際し、彼の生きて一八世紀英国のキリスト教会の実態を把握し、一七世紀の背景を考慮に入れ、そして一六世紀の宗教改革、ギリシャ・ラテン神学の流れ、初代教会の背景、次いで一八一―一九世紀における神学の発展を把握するといふ、きわめて労を要する作業を積み重ねていく。その上でウエスレーがキリスト教伝統をどのように体得し、それをどのように時代に適用していったかを意識しながら、さらにウエスレーと現代との関わりを追求していったのである。

この「ジョン・ウエスレー説教53」は、ベーカー／アウトラー編集による新しいウエスレー全集に収録されているウエスレー説教の順番に従い、説教1から説教53までを訳出したものである。残念ながら、アウトラーによる膨大な脚注を翻訳することは不可能に近い。また、本書に載せてある各説教への「訳者ノート」は、アウトラーによる各説教への序文を参考にさせていただいたが、ウエスレー

の説教のインパクトを引き出したいと願うなら、新しいウエスレー全集を直接参照されることは必須である。なお、アウトラーの研究成果の集大成としても言うべき、一〇〇ページにも及ぶ全集一―四巻へのイントロダクションは、アピンドン社から単行本で出版されているので、その部分を手にするだけでも、メソジストにおける、いやキリスト教伝統における、ウエスレー説教が持つ意義の深さ・広さを味わうことができる。

説教〈53〉という数字の意味

一七四六年の夏、ウエスレーはしばらくメソジストの働きから退いて、説教集のために準備をした。彼が当初計画した説教集は三巻にわたるもので、四六年に発行された第一巻には一二の説教が収められている。その後四八年、五〇年と続けて出版され、活字となった説教は全部で三六を数えた。タイトルには、英国キリスト教会では「一般的な、*Sermons on Several Occasions* (さまざまの機会における説教とでも訳すべきか)」という名称が用いられた。リバイバルの進展に伴い、さらにウエスレーは、一七六〇年に、七つの説教と六つのトラクトを収録した第四巻を出版し、説教の数は四三となる。六二年に、第三巻が再版されるが、そのときそこに説教がもう一つ加えられ、これで数は四四となる。

一七五三年に死を覚悟するほどの病に打たれたウエスレーは、再び元気を回復するものの、五九年に第四巻を準備しつつ、「おそらくこれが説教集の最後となろう」(1759, 10.1)と日誌に記した。しかし、メソジストの成長は一七六〇年を境に加速することになる。その年の五月に始まる日誌の一二部の序文に、「これは、我々の時代になされたものの中で最も輝かしい神の御業である」と記されている

とおり、この年を前後して「全き聖化」を体験するメソジストが急増し、それに伴いソサエティーの数も会員数も急成長を遂げる。そうした中で、一七七〇年までに新たに九つの説教が出版され、こうして出版された説教は五三となる。

一七七〇年に、ウェスレーは著作活動に一つの区切りをつけるかのように、三二巻に及ぶ著作集 (*The Works of the Rev. John Wesley, M.A., Late Fellow of Lincoln College, Oxford, 1771-74*) の刊行に着手することになる。著作集の冒頭四巻に収められたのが、これまでの五三の説教である。このとき、ウェスレーが自ら施した説教の番号付けにアウトラーも倣っており、本書でもそれに従っているわけである。

このようにして、ウェスレー説教集に含めるべき説教の数は、三六、四三、四四、五三と増えていった。そもそも、説教集の題は、「さまざまの機会における説教」であるから、数については何ら限定を要するものではない。ウェスレーは必要に応じて説教を出版しており、それを機会あることに説教集にまとめ、その度に一七四六年の「説教集への序文」を引き続き掲載してきた。

一七七〇年以降は、特に神学的な課題として、カルヴァン派との論争が取り上げられる。さらには、円熟したウェスレーが、これまでの教理的な展開を土台に、メソジストのあり方、キリスト者の生活、文化批評に至るまで、さまざまな教理の応用を展開する時期である。こうした中、一七八八年、ウェスレーはこれまでの *Sermons on Several Occasions* の一―四巻に五―八巻を加え、全八巻で一〇〇の説教を収録して出版した。アウトラーは、この五―八巻を指して、次のようなコメントをしている。

彼の「説教集」の第二部〔五―八巻〕は、一―四巻の付け足し以上のものである。それらは、ウェスレーの考

えと心との新しい、新鮮な局面を現し、「民衆神学者」(folk theologian)として彼の役割を説明する試みを、さらに多面化している(全集一・47)。

それらは、「一般民衆」(plain people)が必要としていると判断して、一―四巻ですでに確立した福音的救済論を「文化の神学」(theology of culture)に組み入れていくという、円熟期のウェスレーの努力の結果を現している(同上・49)。——参照・藤本満「ウェスレーの神学」(福音文書刊行会、78―87頁)。

本訳も、アウトラーの意見に全面的に同意するものである。五三の説教をもって、あるいは三六、四四という数をもって、メソジスト教理の「標準説教」とするサグデンの意図は必ずしも誤りではない。事実、メソジスト教会の歴史は、そのような扱いをして、これらの説教を教理のスタンダードとみなしてきた。しかし、その数にこだわり、初期や後期のウェスレー説教を学びの対象から排除してしまう結果となるなら、ウェスレーという人物から益するところはきわめて限られてしまう。アウトラーが危惧しているように、そのような読み方では、ウェスレーをメソジストの枠組みから引き出して、キリスト教伝統の流れの中に立たせ、その独自の神学的貢献を味わうことは、困難なこととなる。同様な理由で、本書も、ここにある五三篇の教理的枢要性を十分に認めつつも、「ウェスレー説教」と言えば、「アルミニアン・マガジン」に彼が掲載したものを含めて「活字となった一五〇の説教を指すべきである」という主張に立っている。事実、本書刊行の背後にある日本ウェスレー出版協会では、本書の訳者の一人である竿代忠一師を中心に、53以降の説教の全訳に務めており、その道のりも後わずかを残すところまで来ている(まえがきの最後に、この三巻以外で、すでに訳された説教のリスト

を付加する)。これまで、説教1から説教53については、すぐれた翻訳が、サグデン編のテキストをもとに「ウエスレー著作集」(日本ウエスレー協会)の側で提供されてきたが、ここに別途、新訳を出させていただき、同時に全訳を目指すものである。

ウエスレーの説教と神学

リバイバルがプリストルで火を噴いてから五年後の一七四四年に、メソジスト伝道者の第一回年會が開かれた。出席者は、ジョンとチャールズを含める六人の国教会司祭と信徒伝道者四人であった。活字となつて残っている議事録の大半は、教理的な問題の討議でしめられている。一七四二年、ロンドンのソサエティーだけでも一〇〇名に達するほどの伸びを見せる。メソジストの働きは、イギリス全土へと巡回区域を拡大していた。外からの神学的な批判が激化する中、ウエスレーを含めたメソジスト伝道者たちには、それに対する責任ある明確な回答が求められる。いや、年會を主催するウエスレーの頭の中では、破竹の勢いで進展する運動の暴走をいかにして回避し、リバイバルの地盤固めをすることができるかという課題の方が比重が大きかったかもしれない。どちらにしても、外的・内的プレッシャーに耐えるところのへ神学的アイデンティティーを形成する場として、当初、年會が機能していたことは確かである。

「メソジストと呼ばれる人々の明白な説明」(A Plain Account of the People Called Methodists, 1748)の中で、ウエスレーはメソジスト組織の由来と成り立ちを説明しつつ、そもそも組織編成については前もって青写真や計画があつたのではなく、状況に応じて自発的に組織されたものであると弁明してい

る(メソジスト・ソサエティーに関するウエスレー文献は、すべて先に説明した新「ウエスレー全集」九巻に収められている)。しかも、ソサエティーの入会門戸は当初から一貫してきわめて広く、その条件は「来るべき神の御怒りを避け、罪から救われたいという願望を持つていること」とあるように、単純なものであつた。この、ウエスレーの周りで巨大な車輪として回りはじめたメソジストという集まりに、一つの方向付けを与えるということは至難の業である。無論そのためには、それを率いるソサエティーのリーダーや巡回伝道者たちに、さらにきめ細かい具体的な神学的・靈的整えが必要である。この両方の必要のためにウエスレーが選んだ手段が、活字として出版された自らの説教であつた——一七五五年に出版された「新約聖書略注」もこの目的のために大切な働きを担うことになる。

これらの説教は、書物とするため綿密に手を入れたものであるから、この通りにウエスレーやメソジスト伝道者たちが人々に向けて説教していたとするのは、あまりに単純な発想である。しかし、へ説教集」といっても、現代の我々が想像しているものとはレベルが遠うことは、一読して得られる印象であろう。第一巻につけられた序文に、「これらの説教を精読する人はだれでも、私が真の宗教の本質として捕らえ、教えている教理がどのようなものであるかを、明確に理解することでしょう」(序文・1)とある通り、それはきわめて神学的な説教である。ときに読者は、かつて論理学を専攻していたウエスレーの退屈なほど論理的な顔をかいま見ることもある。しかし、このソリッドで緻密な、きわめて神学的な営みが、メソジストという大きな聖靈の働きの背後にあつたことは注目に値する。こうした神学の営為がなければ、確固たる永続的な流れを教会歴史の中に残すことはできなかつたであらう。

神学的営みのために、説教という手法を用いることは、英国の土壌では特異なことではない。そもそも英国国教会の伝統は、教理の問題に専心していたルターやカルヴァンの宗教改革でなく、エラスムスやコレットを中心とした人文主義運動に端を発している。それは、英国の教会が教理を問題としていなかったという意味ではないが、キリスト教人文主義の理想として教理的偏狭・頑迷というものを嫌い、生活・徳・人格というものにキリスト教らしさ(エートス)を求めるといふ氣質がはじめからあったことは事実である。それを受けて、英国国教会神学の基盤を作ったトーマス・克蘭マー(1489-1536)は、英国宗教改革の進行を教義書ではなく、「説教集」(Book of Homilies)や「祈祷書」(Book of Common Prayer)に託した。ましてウエスレーは、信仰と純粹教理とを同一視し、教理からキリスト教を捕らえようとするプロテスタント・スコラ主義に反発して、明確な体験意識を持ってキリストの恵みを受け、そこに生きるという敬虔主義的の流れを汲んでいる。ウエスレーによれば、キリスト教のリアリティーは、教理や概念の集合体にあるのではない。それは、キリスト体験の中に、すなわちわれわれが生涯において実際にキリストを体験して生きていくことの中に存在する。ウエスレーが絶えず巻き込まれた神学論争において、彼は自分なりの答えを積極的に、論理的に、明快に提示していくが、それでも彼にとって神学の拠り所は、常に「あなたの心が神との正しい関係に入っているか、主イエス・キリストを知っているか、主を愛しているか、隣人を愛しているか、主が歩まれたように歩んでいるか」という問題である(「さらなる訴え」Ⅲ・iv・10、説教4「聖書的キリスト教」序・5、説教112「新しい礼拝堂の基礎を据えるにあたって」二・i・17、「メソジストと呼ばれる人々への助言」§2、「メソジストの性格」§5-6)。キリスト教の現実が、これらの中に存在するとし

たら、その現実には組織体系の中に幽閉できるものではないし、固定化された教条や限定された用語で表現できるはずもない。彼が常に目を向けていたのは、信仰の表現形式でなく、信仰そのものであり、教理上の言葉遣いではなく、教えの實質・結実であった。そのように考えていたウエスレーがメソジスト神学を説教の形で残したことは、容易に理解できる。

さらに、ウエスレーが説教を神学的アイデンティティー追求の場として用いたことに一歩深い意味を認めることができる。「説教集」第一巻の序文の中で、彼は次のように記している。

私がここで真実に意図していることは、(普段、私が語っているように)大衆に向かつて(ad populum)書くことです。彼らこそが、人類の大半を占めるのです。別段、雄弁な技法を賞味し理解するわけではないと思いますが、大衆は現在と未来の幸福について必要な真理の数々を立派に審査することができます。……私が意図しているのは、飾り気のない人々のための飾り気のない真理です。(序文・2-3)。

ウエスレーは独自の発想をもって新しい学派を形成するような人物ではなかった。組織体系を築くような神学者好みの神学者ではなかった。彼は、自称するように、一般の人々に語ることを常に自覚していた神学者である(ad populum)についての詳細な説明は、アウトラー「新ウエスレー全集」I・25)。彼は、普通のクリスチャンに対して、神学的な信頼と期待とを抱いていた。普通のクリスチャンは、深遠な教理には無関係という発想も、彼らはただ建徳的な生活を送っていればよいというような神学者のおごりも、ウエスレーには疎遠なものであった。そのような普通のクリスチャンに対す

る信頼と期待から、彼は講壇の上で神学をたたき上げ、講壇を通して、神の御教えの全体を信徒の末端に至るまで浸透させようとしていた。メソジストの主要構成メンバーは、中産階級より下の民衆である。しかも、リバイバルは体験を重視し、どちらかと言えば、教理は二の次になるような雰囲気を持っていった。しかし、メソジストと呼ばれる民衆の集まりは、教会史上でも類を見ないほど、理解をもって信じ、理解をもって生きた人々の集まりであったと言われるように、神学的にハイレベルな理解を持っていた。それを可能にしたのが説教であることを忘れてはならない。

このような意図をもって記され集められた説教には、常に次の二つの段階が組み込まれていたと理解してよからう。

- (1) 理解して、信じる (understand……believe)
- (2) 信じて、それを生きる (believe……live)

第一のポイントでは、ウエスレーは、メソジストは自分で考え、また相手にも考える自由を与えるべきであることを強調した。<think and let think>は彼のモットーである。彼自身、「私は、いかなる人間もラビ (先生) と呼ぶつもりはない」(手紙 1772.1. to Christopher Hopper; 1777.2.15; to Joseph Benson; 1785.7.8. to Thomas Wride) と宣言している。盲目的に信じたたり、他人から聞いたことを右から左へ受け売りするのはなく、まず自分が理解しそして信じるという個人の判断を尊重する精神が、また同じ判断の自由を他人にも与えるという他人の理解を尊重する精神が、これらの説教の中に生きている。説教集の序文に、ウエスレーは自分自身も偏見や先入観から解放されるために、なるべく聖書一書から事を論じたいとし(序・4)、また自らが誤っている可能性があることを十分に認め、もしそうであ

るなら、罵声を浴びせるのではなく、愛と忍耐をもって自分を導いてほしいと訴えている(8~10)。

第二のポイントでは、信仰者に理解を与えることで神学者の仕事は終わりでないと強調している。さらに重要な課題は、理解して信じている事柄を、どう生きるかという点である。その意味で、神学者の課題は最後は倫理・実践へと帰結しなければならない。主の山上の説教シリーズ(説教21~33)は、福音と律法のバランスを取りながら、<信仰のみによつて>の名の下に律法無用論に陥る危険性を警戒したものであるが、先に述べたように、ウエスレーの説教は、一七六〇年以降、服装・言葉遣い・金銭・時間の使い方・家庭の問題・文化批評といったさらに具体的な問題を取り扱うようになる。ウエスレーは確かに<ヘメソジスト>と呼ばれるような几帳面な性格であった。しかし、この具体的な詳細にわたる生活のあり方を論じた説教を、律法主義や道徳主義として批判するのは早計である。それはあくまで、信仰の原則を生活のあらゆる局面に浸透させ、常に信仰と行動、あるいは心と生活を統合することを目指した姿勢の現れである。一七世紀のピューリタンの伝統には、こうした生活マニュアル的な説教を数多く見いだすことができる。そのひとつに、アレストリー (Richard Allestree) が著したといわれる、*The Whole Duty of Man* (1657) があるが、ウエスレーはそれを要約して、自分の「クリスチャン・ライブラリー」シリーズに載せて、出版した。その序文に、こうしたマニュアル的教えの意義が以下のように記されている。少々長いが、<理解して信じ、信じた事柄を生きる>という原則に忠実であろうと務めたウエスレーの姿がよく現れているので引用することにする。

以下の抜粋を読む人は、だれであってもそれが記された時代を考慮していただきたい。キリストへの信仰・信

仰による義認・御霊の実などに関しては、これほど多く語られた時代はなかったと思う。ところが、正義・慈悲・真実といった単純な道徳的義務に関しては、これほど話題に上らなかつた時代もない。そんな時代であるから、大概に無視されてきた問題を説き聞かせる必要が特にあつたと見えよう。……これらの背景を踏まえたとき、以下に記されている事柄は、「あなたがたは、恵みの故に、信仰によって救われたのです」という原則や「キリスト・イエスにある贖いによって無代価で義とされたのです」という原則と矛盾していないことは理解できるであろう。……望んでいることは、すでにキリスト・イエスにある神の自由な恵みを体験した人々が、これによって、キリストの内に歩むことをより深く (more fully) 教えられ、すべての善き言葉と業により徹底して (more thoroughly) 備えられるようになることである。(Christian Library, xii, 25-26)

最後に、ウエスレー説教の焦点について一言触れておきたい。その焦点とは、「以下の説教集に、私が〈天への道〉について聖書から学んだことを、人間が考え出した他のすべての道を神の道と区別するという観点も添えて、書き留めることにします」(序文・6)と序文にあるように、まぎれもなく教済論である。これらの説教は、いわゆるキリスト教信条の伝統的要素をすべて包含しており、それらを深め、ウエスレー独特の解釈を導き出すことは可能である。しかし、救いの問題こそが、ウエスレー神学の固有な強調点であることを忘れてはならない。説教1「信仰による救い」に見られるような救いの原理、あるいは説教43「聖書における救いの道」に見られるような救いの順序・過程などは、全体を見渡すことができるような概括的色彩を持っている。また、罪・悔い改め・義認・救いの確証・新生・聖化・信仰者の罪・キリスト者の完全・栄化などの個別の教理を集中して扱う説教、あるいは心の宗教と生活を論じる二三篇にわたる主の山上の説教、福音と律法との関係を論じる三篇の説

教(34-36)など、ウエスレーの教済論の総括がここにあり、言っても過言ではない。

そして、序文・6で前もって自らの視点を明らかにしているように、ウエスレーは二つの問題意識をもってこの課題に取り組んでいることを覚えておきたい。一つは、教会の制度・組織・教理・儀式・伝統といった宗教の外側のこと終始しているキリスト教に對抗して、心の宗教 (heart religion) がいかなるものかを説くことである。これは一八世紀英国の福音的リバイバルのために神がメソジストに課せられたテーマであつた。このとき、ウエスレーは特に当時の国教会の霊的状况を意識していた。いま一つは、信仰によって救われ、聖霊によってたましいのうちに神の愛を注がれた人物が、生きた信仰によってどのように神の愛に応答し、神と人との愛に生き、世にあつて御心を実現させていくかという問題である。この問題を語るとき、ウエスレーは当時のモラビア派やカルヴァン派の中に派生した不健全な信仰至上主義を意識していた。信仰による義認という一大教理が、聖化と矛盾したり、行いや生活を軽んじたりするような誤解を生じないように、また神の主権と恵みの絶対性を説くことが、人間の責任と役割を軽んじる論理にはまることのないように、ウエスレーは説教のバランスを考えている。救いは、恵みの故に (by grace)、信仰によって (through faith)、神があらかじめ備えてくださった良い行いに歩むように (unto good works)、キリスト・イエスにあつて新しく造られることである (エペ二8-10) というのがウエスレーの変わることのない主張であつた。

本書の翻訳は、イムマヌエル綜合伝道団創立五〇周年を記念して企画された。ウエスレー本文の訳出には、上巻は竿代忠一(船橋教会牧師)・勝間田充夫(長岡教会牧師)・藤本満(高津教会牧師)

が担当し、中巻は竿代信和（名古屋教会牧師）・藤本満が、下巻は竿代忠一・勝間田充夫・藤本満が担当の予定である。まえがきと訳者ノートは、藤本満の執筆による。また、DTP組版のために矢木良雄牧師、最終校正のために河村崇子牧師の労を頂戴した。

なお、ここに収められている五三の説教の他に、すでに日本ウエスレー出版協会（Wesley Book Club）から「ジョン・ウエスレー標準説教集」の名のもとに出版されているものリストを最後に付け加えておく。これらのものは、イムマヌエル綜合伝道団出版局（東京都千代田区神田駿河台二・一〇〇Cビル内、電話〇三―三三三三―〇八七九）を通して入手可能である。

一九九五年一〇月一日

イムマヌエル綜合伝道団創立五〇周年の恵みを感謝して

教学局

- 説教 54 「永遠について」(On Eternity) ……日本ウエスレー出版協会訳……VI 卷
説教 55 「三位一体について」(On the Trinity) ……VI 卷
説教 56 「ご自身の御業に対する神の嘉納」(God's Approbation of His Works) ……VI 卷
説教 57 「人間の墮罪について」(On the Fall of Man) ……VI 卷
説教 58 「予定について」(On Predestination) ……VI 卷
説教 59 「墮落した人間に対する神の愛」(God's Love to Fallen Man) ……VI 卷
説教 60 「全被造物の解放について」(On General Deliverance) ……VII 卷
説教 61 「不法の秘密」(The Mystery of Iniquity) ……VII 卷
説教 62 「キリスト降臨の目的」(The End of Christ's Coming) ……VII 卷
説教 63 「福音の一般的宣布」(The General Spread of the Gospel) ……VII 卷
説教 64 「新創造」(The New Creation) ……XI 卷
説教 65 「隣人を訓戒する義務」(The Duty of Reproving our Neighbour) ……XI 卷
説教 66 「時のしるし」(The Signs of the Times) ……XI 卷
説教 67 「神の摂理について」(On Divine Providence) ……XI 卷
説教 68 「神の知恵と知識」(The Wisdom of God's Counsels) ……XI 卷
説教 69 「人間知識の不完全」(The Imperfection of Human Knowledge) ……XI 卷
説教 70 「理性に関する公平な考察」(The Case of Reason Impartially Considered) ……XII 卷
説教 71 「天使について」(Of Good Angels) ……XII 卷

- 説教 72 「悪魔について」(Of Evil Angels) ……Ⅻ巻
 説教 73 「地獄について」(Of Hell) ……Ⅻ巻
 説教 74 「教会について」(Of the Church) ……Ⅱ巻
 説教 75 「分裂について」(On Schism) ……Ⅱ巻
 説教 76 「完全について」(On Perfection) ……Ⅻ巻
 説教 77 「霊的礼拝」(Spiritual Worship) ……Ⅻ巻
 説教 78 「霊的な偶像礼拝について」(On Spiritual Idolatry) ……Ⅻ巻
 説教 79 「心の分散について」(On Dissipation) ……Ⅻ巻
 説教 80 「世の友となることについて」(On Friendship With the World) ……Ⅴ巻
 説教 81 「どのような意味で世を離れるべきか」(On What Sense we are to Leave the World) ……Ⅴ巻
 説教 82 「誘惑について」(On Temptation) ……Ⅱ巻
 説教 83 「忍耐について」(On Patience) ……Ⅲ巻
 説教 84 「重要な質問」(The Important Question) ……Ⅲ巻
 説教 85 「自分の救いを達成するため」(On Working out our own Salvation) ……Ⅲ巻
 説教 86 「墮落者への呼びかけ」(A Call to Backsliders) ……Ⅲ巻
 説教 87 「富の危険」(The Dangers of Riches) ……Ⅰ巻
 説教 88 「服装について」(On Dress) ……Ⅱ巻
 説教 89 「もっとも優れた道」(The More Excellent Way) ……Ⅳ巻

- 説教 90 「まことのイスラエル人」(An Israelite Indeed) ……Ⅳ巻
 説教 91 「愛について」(On Charity) ……Ⅳ巻
 説教 92 「熱情について」(On Zeal) ……Ⅳ巻
 説教 93 「時をあがなうことについて」(On Redeeming the Time) ……Ⅳ巻
 説教 94 「家庭宗教について」(On Family Religion) ……Ⅰ巻
 説教 95 「子女の教育」(On the Education of Children) ……Ⅰ巻
 説教 96 「両親への服従について」(On Obedience to Parents) ……Ⅰ巻
 説教 97 「牧師への服従について」(On Obedience to Pastors) ……Ⅱ巻
 説教 98 「病人を見舞うことについて」(On Visiting the Sick) ……Ⅴ巻
 説教 99 「義の報」(The Reward of Righteousness) ……未定
 説教 100 「すべての人を喜ばせることについて」(On Pleasing All Men) ……Ⅴ巻
 説教 101 「絶えず聖餐に与る義務」(The Duty of Constant Communion) ……Ⅱ巻
 説教 102 「昔は」(On Former Times) ……Ⅳ巻
 説教 103 「人とは何者か」(What is Man?) ……Ⅳ巻
 説教 104 「公会出席について」(On Attending the Church Service) ……Ⅱ巻
 説教 105 「良心について」(On Conscience) ……Ⅱ巻
 説教 106 「信仰について」(On Faith) ……Ⅳ巻
 説教 107 「神の葡萄園」(On God's Vineyard) ……Ⅳ巻

- 説教 108 「富について」(On Riches) ……Ⅰ巻
 説教 109 「義人の苦難と安良」(The Trouble and Rest of Good Men) ……Ⅹ巻
 説教 110 「自由の恵み」(Free Grace) ……Ⅹ巻

以下については、左記の説教以外は未完(一九九五現在)

- 説教 116 「人間とは何か」(What is Man?) ……Ⅹ巻
 説教 117 「信仰の発見」(On the Discoveries of Faith) ……Ⅹ巻
 説教 122 「キリスト教の無力の原因」(Causes of the Inefficiency of Christianity) ……Ⅴ巻
 説教 126 「世の愚か者」(On Worldly Folly) ……Ⅴ巻

ウェスレーによる説教集への序文

1 ここに収められている説教は、私が過去八、九年の間に説教してきた事柄の実質です。その間、私はこの説教集にある一つ一つの主題について、幾度となく公に説教をしてきました。私が公に語ることを常としていた教理のいかなるポイントであれ、ここですべてのクリスチャン読者の前に広げられることにならないものはないと感じています——それが中心題目としてではなく付随的な扱いになるかもしれませんが。それ故、これらの説教を精読する人はだれでも、私が真の宗教の本質として捕らえ、教えている教理がどのようなものであるかを、明確に理解することでしょう。

2 しかし、これらの説教が世間の期待に添うようなスタイルでまとめられてないことを十分に認めております。どの説教も、磨き抜かれた、エレガントな、あるいは雄弁な衣をまとっているわけではありません。そのように書くことを願ひ、計画したとしても、私にはそのような時間が許されません。私がここで真実に意図していることは、(普段、私が語っているように) 大衆に向かつて (populum) 書くことです。彼らこそが、人類の大半を占めるのです。別段、雄弁な技法を賞味し理解するわけではないと思いますが、大衆は現在と未来の幸福について必要な真理の数々を立派に審査することができません。私をはじめにこう言うのは、物好きな読者が、ここに意図されていないものをあえて探し求める労を止めていただくように願うからです。

3 私が意図しているのは、飾り気のない人々のための飾り気のない真理です。ですから、私は意図して、体裁を繕うだけの哲学的な思索や、複雑化された巧妙な理論付けにはいつさい頼らず、また時折原典の聖書を引用する以外は、学識を誇示するようなことはすべて差し控えます。普段の生活に使われていない、難しい用語を極力避けます。特に、神学の世界で頻繁に用いられる専門用語や、読書家は使い慣れていても一般の人々にとっては知られざる言語であるような話し方は避けるように努力します。しかし気がつかないうちにそれらの中に滑り込んでいくようなときが全くないとは、断言できません。私たちは、自分が使い慣れている言葉が世間一般の人々にとってもそうであると、実に自然に想像してしまふからです。

4 それどころか私は、ある意味で今まで読習した知識を一旦忘れようと思図しています。全体として、古代の或いは近代の、どんな著書もこれまで読んだことがないかのように(もちろん靈感を受けた聖書は常に例外ですが) 話すつもりです。こうすることで、一つには、他の人々の思想とかわり合いを持たずに、自分自身の思想の連鎖を単純にたどることによって、私の心の思いをより明確に表現することを可能にしてくれると確信しています。また、そうすることで、論争の重荷を自分の心にあまりかけずに、しかも偏見や先入観にそれほど捕らわれることなく、福音の真理そのものを自らが探求し、他の人々に伝えることができるかと確信しています。

5 公平な、理性のある人に対して、私は自分の心の奥底にあつた考えまでも開示することを躊躇しません。私は、自分自身が、空を飛ぶ一本の矢のように生涯を駆け抜けていく、ひと日のいのちにすぎない被造物であると思ってきました。私は神から下ってきて、また神へと帰っていく一つの霊です。大きな淵の上をさまよって、しばらくすればもはや見えなくなり、不変の永遠の中へ落ちこんで

いくのです。私は、一つのことを知りたい。天への道、あの幸福の岸辺に無事に上陸することです。その道を教えるために、神ご自身が天から身を低くして降りて来られました。神は、その道の一つの書に記されました。その本を私に与えてください。どんな犠牲をも払いますので、神の書を与えてください。私はそれを持っているのです。ここに、私のために十分な知識があります。私をして「一書の人」(homo unius libri)としてください。そうして世間の喧噪から離れてここにいます。私は一人でここに座り、神のみがここにおられます。天への道を見いだす目的で、私は神の臨在の中で、神の書を開きます。私が読んでいる事柄の意味について、疑問があるでしょうか。意味不明で複雑に思える箇所があるでしょうか。私は光の父である神を仰いで祈ります。「主よ、これはあなたのみことばではありませんか。【だれでも知恵の欠けた人がいるなら、神に願いなさい】。あなたは、「惜しげなく、とがめることなくお与えになる」(ヤコ15)方です。あなたは言われました。【だれでも神のみこころを行おうと願うなら……その人にはわかります】(ヨハ717)と。私はそう願っておりますので、どうかあなたのみこころを教えてください。そして私は、「御霊によって御霊のことを解釈しながら」(1コリ213参)、並行聖句を探し求めて、熟考します。あらん限りの注意深さと熱心さとを傾けて、考えをめぐらします。それでも疑いが残るようなら、神の事柄について熟練している人々に相談し、次に現在生存していなくてもこれらのことについてなおも語ることでできる著作に相談します。そのようにして学んだことを、私は教えます。

6 したがって、以下の説教集に、私が「天への道」について聖書から学んだことを、人間が考え出した他のすべての道を神の道と区別するという観点も添えて、書き留めることにします。私は、真の、聖書的、実験的(experimental)宗教を描くことに努力してきました。この宗教の実質に関わることは何一つもらすことなく、またそれに関わらないことは何一つ付加することのないように努力してきました。そしてここで特に私が意図していることがあるとすれば、第一に、いま顔を天に向け始めている人々(神の事柄について未だほとんど知識がなく、道から逸れてしまいう傾向がより強い人々)を、この世界から心の宗教(heart religion)をほとんど抹殺しかけてしまったような形式主義・単なる外側だけの宗教から守ることです。そして第二に、心の宗教、すなわち愛によって働く信仰を知っている人々が、いつのまにか信仰によって律法をむなしくしないように、そのようにして悪魔の罠に陥ることのないように警戒させることです。

7 数人の友人の助言と要望により、オックスフォード大学での私の説教三つと弟の説教一つを、この巻に含めた諸説教の冒頭に置きました。これらの説教が扱う主題について若干の論説を展開したく願っていました。そしてこれらの説教が、他のどれにもまさって、その願いをかなえてくれると判断しました。というのは、私たちが最近教理を変更し、また数年前説いていたものを今は説いていないと頻りに批判する人々がいるのです。彼らに対する最も強力な答えがこの初期の説教にあります。理解のある人はだれでも、これら初期の説教と後のものとを比較してご自分で判断していただきたいと思えます。

8 しかし中には、私が他を教える立場にいながら、私自身が道を誤っていると批判される人もいることでしょう。多くの人々がそう思っていることもあり得るでしょう。また、私が実際に道を誤っている可能性も大いにあることでしょう。しかし、間違っているところがあるとしても、私の考えは

その指摘に対してオープンであると信じています。誤っていれば、よりよく教えていただきたいと誠実に望んでいます。私は神と人の前に告白します。「私の知らないことを、あなたが私に教えてください」(ヨブ二四32参)。

9 ご自分は、私以上に明白に理解していると確信している方がいらつしやいますか。それは十分に可能性のあることです。だとしたら、私を教えてください。ただ、そのときご自分を私の立場に置き換えて、自分だったらこのように扱ってもらいたいと思うような方法で私を扱ってください。私がこれまで知っているよりさらによい道を、明白な聖書的根拠をもって示してください。もし私がこれまでだどってきた道に慣れているがあまりに、そこを離れることに躊躇するようであれば、いましばらく忍耐をいただき、私の手を取って、私が担うことのできる能力に応じて導いてください。私の歩みを速めるためとはいえ、私が倒れてしまうような強引な方法で扱わないでくださいと願っても、機嫌を悪くしないでください。ベストを尽くしても、か弱いゆっくりとした歩みです。強引に急がせられたら、行くことさえできなくなります。さらにお願ひしたいことは、私を正しい道に導こうとして、私に不快な名前を着せないでいただきたいのです。仮に私がそれほど誤っているとしても、そのような方法で私が正しい道に導かれることはありません。むしろ、あなたからますます遠くを走らせ、よって、ますます道から離れさせる結果になってしまいます。

10 いやそれどころか、もしあなたが怒るなら、私もそうなることでしょう。そうなれば、真理を見いだす希望は希薄になります。ひとたび怒りが、*The kurios* (ホーマーがどこかで言っているように)立ち上るなら、この煙は私たちのたましいの目を曇らせ、私は何も明瞭に見ることはできなくな

ります。お願いですから、互いを怒らせないように努力しましょう。互いの中に、この地獄の火を起すことがないように、ましてやそれを炎として燃え立たせることがないようにしましょう。この恐るべき光によって真理を見分けることができたとしても、それは益ではなく損失ではないでしょうか。というのは、愛こそは、たとえそれが多くの誤った意見を伴っていたとしても、愛のない真理よりはるかに好ましいからです。人は多くの真理を知らずとも、死んで、アブラハムのふところに運ばれることでしょう。しかし、もし私たちが愛なくして死んだなら、知識が何の役に立つのでしょうか。それがちよつと悪魔や天使たちに役立つほどしか意味はないのです。

愛なる神は、そんな試みを禁じておられます。神が私たちの心をあふれるばかりのご自身の愛で満たし、信仰によるあふれるばかりの喜びと平安で満たすことにより、すべての真理を知る知識へと導いてくださるようにならう。

説教 1

信仰による救い

Salvation by Faith

訳者ノート

ウエスレーは、「七三八年六月一日、アルダスゲイト体験の興奮冷めやらぬうちに、オックスフォードの聖マリヤ教会で、「信仰による救い」を説教した。オックスフォード大学総長の指示で、英国国教会の按手札を受けた修士の資格者が、日曜日及び聖徒の記念日に大学チャペルで交代で礼拝説教をするというのが習慣であった。これ以前に、ウエスレーはすでに九回、大学チャペルで説教をしている。アウトラーが指摘しているように、三回目の説教「心の割礼」(1733.11)は、特に好評であったようで、それ以後の当務回教の頻度が普段より増していることがわかる。

聖書の箇所は、エペソ人への手紙「2:8」あなたがたは、恵みの故に、信仰によって救われたのです」である。これより続く五〇余年、記録されているだけでも、彼はこの聖句から百回以上も説教をしている。あらゆる状況・あらゆる方法を駆使してウエスレーが開示した、救いの大原則がここに要約されている。福音的回心後の第一号の説教であるから、教理的に未整理の部分がないわけではないが、まさに、説教の「1」を飾るにふさわしい内容を有している。聖マリヤ教会は、オックスフォード学府を代表する教会である。かつて、トーマス・克蘭マーが「信仰による義認」を全面告白し、ラティマーやリドレーの足跡を追って焚刑所へと引き出された教会である。一九世紀にはJ・H・ニューマンがカトリック・リバイバルの旋風を英国国教会に吹き込んだのも、この教会の講壇である。しかし、「ジョン・ウエスレーが福音のリバイバルの最初のトランペットを吹き鳴らしたこの日ほど、宗教史上で重要な響きが、このいにしえのチャペルの壁に響いたことはなかった」と

サグアンが述べているのは、決して現実離れした評価ではない。その響きは、ルターがウイッテンベルク教会の扉に九五箇条の抗議文を打ちつけた音のような、歴史的意義を持っていた。

ウエスレーは、この説教の中で、(一) 信仰の本質、(二) 救いの本質を論じた後、それに対して予想される反論にかなりの時間をかけて答え、そして最後に、英国国教会とルターを引き合いに出して、自分の説く「恵みの故に信仰によって救われる」という教理こそ福音の真髄であると主張している(三・819)。この説教によって、ウエスレーは英国国教会の源流とルターの福音理解への「復帰」を宣言した。

一七三八年一月二四日、ジョージアからの帰国の船の上で、ウエスレーはこれまで自分が信頼してきた救済論を次のように簡単にまとめている。「多年にわたって、私はさまざまな教義の風にもてあそばされてきた。ずっと以前、私は、救われるために何をなすべきかと問いを投げた。聖書は答えた。「戒めを守れ。信ぜよ、希望を持って、愛せよ。これらを手にするまで、死ぬまで、すべての外的な善行と手段とによって、またキリストが歩まれたように歩むことによって、徒え」。

オックスフォードで、そしてジョージアで、彼が聖書を読むとき、福音がどこかで律法にすり変わり、キリストに倣いて「模範としてのキリスト」というモチーフが偏重され、その陰にキリストの十字架とその意義は隠れてしまっていた。自己否定と服従は熱心に説かれていたものの、キリストの贖いの業への信仰と信頼はきわめて希薄にしか述べられていない。初期ウエスレーは「彼を「もてあそんできた」一七世紀英国キリスト教会の救済論は、ルターがプロテストしたところのオックスカムのウィリアムなどに見られる後

期中世の救済論と酷似していることがわかる。

少々遠回りになるが、ウエスレーが主張する救い・恵み・信仰の結び目を理解するために、論争の歴史をさかのぼることは無益ではない。中世神学の救済論をごく一般的な形にまとめれば、それはまず恵みの賜物に始まる。人間が自然的な傾向から行動を起しても、神に喜ばれることは不可能である。神に喜ばれる信仰・希望・愛といった徳を得るためには、まず神の恵みの賜物が人間の外側から注入され、人間の内に新しい性質が形成されなければならぬ。しかし、ここで終わりではない。ペラギウスとアウグスティヌスの論争以来、中世の神学は神の主権と人間の努力とのバランスを確保するかのようになり、救済論に「功績」という概念を導入してきた。恵みの賜物に基づいて神の御心にかたが生活をし、神の前に価値ある功績を獲得し、最後に、この功績に報いる意味で、神は私たちが救いに入れてくださるといふ。恵みは、いわば、天への階段の出発点であり、階段を上昇するのに必要な力である。しかし、救済論の力点は、恵みを最大限に生かし、功績を勝ち取ることにある。救いは功績に対する「報酬」とみなされ、恵みは功績を獲得することを可能にする「手段」とみなされるようになった。こうして、救いと功績との間の切っても切れぬ関係が出来上がる。

いうまでもなく、ルターもウエスレーも、救いと功績の結び目を断ち切るように、*solus deus* / *solus iustus* の救済論を展開する。人間の抱えている罪の問題は、恵みの賜物を用いて霊的資格を上昇させるというような「程度」の問題ではない。墮罪によって、人生の中心は自分自身に向けられ、エゴがすべてを支配してきた。人生がエゴに向かっている限り、神秘主義に没頭し、道徳に専念し、教会の礼典を完璧に守ったところで、人生の中心が狂

っているのであるから、神の御前に誇れる功績など何一つ獲得できない(序・2、三・3)。しかも今の自分も、自分が有しているものも、元をたどればすべて神の恵みである。たとえ神の掟を完全に守ったとしても、神の前に稼いだ功績など一つもない。

福音の本質は、神が人間から遠くはなれて存在し、人間が努力して神に近づこうと階段を昇ることにない。福音の本質は、その逆の事実にある。即ち、人間が罪の故に神から遠ざかっているのに、神の方でキリストを通して人間に近づかれたということである。そうなれば、人間が自分の義を努力して勝ち取って、それを神の前に差し出して救いを得るという功績の概念は、極めて不適切なものである。救いの原理は、救いのためにすべてを勝ち取ってくださったキリストから、その義と功績をわが身に受け取り、必要な恵みと助けを獲得するために、キリストに全く依りすがって、十字架の功績を自分の身に受け取るための空っぽの乞食の手のような信仰である(ウエスレー説教1、一・5)。救いの原理は、恵みと信仰の結び目にある。

こうしてルターもウエスレーも、恵みと功績を結合する代わりに、恵みと信仰とを堅く結び合わせた。この説教に展開されている信仰原理は、単なる救済論の一部ではなく、救いの原理そのものであることを覚えておきたい。ウエスレーが、義とされた後の愛の行いや聖化の必要性を強調した点で、それは、信仰によって成されるものではなく、信仰が生きているときに梅結するしかるべき結果である。救いは今与えることができ、同時にやがて完成に導かれるものである(二・1、7)、その全過程を貫く原理は、キリストを崇め、キリストに信頼し、自らをキリストの恵みのうちにつなぎ止め、キリストを目指す、信仰である(“Blow at the Root,” 11, Works, viii, 358参照)。

説教1「信仰による救い」

「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです」。

(エペソ人への手紙二・8)

序

1 神が人間に与えられたすべての祝福は、ただ神の恵みと恩沢と顧みのみから出たものです。それは、神の無代価で、受けるに値しない顧み、全く受ける資格のない顧みであって、人間は神のあわれみを少しも要求できません。「土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなり」(創世二・7)、その生きものの上に神のかたちを印刻し、「万物を彼の足の下に置かれ」(詩篇八・6) たのは、無代価の恵みでした。今日もこの同じ恵みは継続して、私たちにいのちと息と万物とを与えています。私たちの存在も、所有も、行動も、神の御手の中で何らかの価値を勝ち取ることができるようなもの何一つありません。「私たちのなすすべてのわざも、あなたが私たちのためにしてくださったのですから」(イザ二六・12)。これらは無代価のあわれみの数多くの実例です。人間のうちにいかなる義が見いだされるとしても、これもまた神の賜物です。

2 それでは罪ある人が自分の罪を少しでも贖うための手段は何でしょうか。自分のわざによって

でしょうか。いいえ。自分のわざがいかにもくまた聖くあっても、それは自分のものではなく、神のものなのです。しかしまことに人間は全く汚れており、罪深くあります。ですからすべての人が新しい贖いが必要とされています。腐った木には腐った実だけが生じるのです。そして彼の心は全く腐敗しており、けがらわしく、「神からの栄誉」、すなわち、彼の偉大な造り主のみかたちに従って、彼のたましいに最初に印刻された栄光ある正義を「受けることができ」（ロマ三23）なくなりました。従って自分たちの正しさもわざも何物も弁護できませんので、「すべての口が神の前にふさがれて」（ロマ三19参）しまいました。

3 もし罪ある人が神の前に恵みを見いだすことができるとすれば、それは「恵みの上にさらに恵みを受け」（Xaphiv avri Xaphitogヨハ一16）ることを意味します。もし神が私たちに新鮮な祝福を注ぐことをお許しになるなら——そうです、すべての祝福の中で最大のものは救いですが——これらのものに対して「ことばに表わせないほどの賜物のゆえに、神に感謝します」（IIコリ九15）と述べる以外に何を言えましょうか。そしてその通りなのです。「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちを救うために死んでくださった」（ロマ五8参）のです。ですから「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです」。恵みは救いの源泉であり、信仰は救いの条件です。

さて、私たちが神の恵みに達しないことがないために、以下のことを注意深く尋ねたいのです。

- 一 私たちが救われるための信仰とは何か
- 二 信仰によって救われる救いとは何か
- 三 いくつかの反論にどのように答えるべきか

私たちが救われるための信仰とは何でしょうか。

1 第一に、それは単なる異邦人の信仰ではありません。それは神が異邦人に対して「神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であること」（ヘブ一6）を信じ、すべての事について神に感謝をささげ、隣人に対して道徳的な徳行、公義、あわれみ、真実を注意深く行なうことによって、神を崇めるようにと求めていらっしやることを信じる信仰です。もしここまで、すなわち、神の存在と属性、報賞と刑罰についての未来の状態、道徳的な品徳の必然性、までを信じないギリシヤ人、ローマ人、そうです、スクテヤ人、インド人があつたとしたら、言い訳はできません。これは異邦人の信仰にしか過ぎないからです。

2 第二に、それは悪魔の信仰でもありません。その信仰は異邦人の信仰よりも進んでいます。なぜならば、悪魔は恵み深く報い、正しくさばくことのできる知恵と力に満ちた神が存在するということだけでなく、イエスが神の子、キリスト、世界の救い主であることも信じています。ですから、彼が明白なことばで「私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です」（ルカ四34）と宣言していることを知っています。また私たちは、あの不幸な霊が聖なる方の口から出たすべてのことばを信じていることを疑えません。いにしえの聖なる人々によって記されたすべてのことから、彼「悪魔」があの輝かしい証しをせざるを得なくなった一人の例を挙げてみましょう。「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人たちです」（使徒一六17）。神と人との大い

なる敵は、「神は肉において現われ」(一テモ三16参)、主が「すべての敵をその足の下に置」(一コリ一五25)き、また「聖書はすべて、神の靈感による」(二テモ三16)というところまで信じており、信じておののいているのです。ここまでが悪魔の信仰です。

3 第三に、私たちが救われる信仰とは、このことばの意味はあとで説明しますが、キリストが地上におられた頃に使徒たちが持っていた信仰だけではありません。彼らは「何もかも捨てて、主に従う」(マコ一〇28)ほどに主を信じ、「あらゆる病苦、病弱を直す」(マタ一〇一参)ほどの奇蹟を行なう力を持っており、そうです。「すべての悪霊を追い出す力と権威とを」(ルカ九一)持ち、これらのすべてにまさって、彼らは神の国を宣べ伝えるために主に遣わされたにもかかわらず、です。しかし、彼らがこれらすべての力あるわざを行なって帰還したのちに、主は彼らを「不信仰な、曲った世」と(ルカ九4)お呼びになりました。悪霊を追い出せなかったのは、彼らの不信仰のゆえであると、主は語られました。しかもそれからしばらくして、すでに自分たちがいくらかの信仰を持っていたと仮定して、彼らは主に「私たちの信仰を増してください」(ルカ一七5)と願いました。その時、主は明白にこのような信仰を彼らは持ち合わせていないこと、からし種一粒ほどの信仰も持っていないことを語られました。「主は言われた。『もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があったなら、この桑の木に、『根こそぎ海の中に植われ』と言えば、言いつけどおりになるのです』」(ルカ一七5、6)。

4 それでは私たちが救われるその信仰とは何なのでしょうか。こう答えることができるでしょう。第一に、概括的に、それはキリストを信じる信仰です。キリストとキリストを通して現わされた神が、信仰の正当な対象なのです。従ってここにこそ、古代と現代の異邦人の信仰と、十分に、絶対的に区

別する信仰があります。それは単に探索的、理知的なもの、冷たい、いのちのない同意、頭脳の中の一連の概念ではなく、心のあり方(性情)であるという点で、悪魔の信仰とは全面的に区別されるものです。と言うのは、聖書のことばによれば、「人は心に信じて義と認められ……るのです」。また「もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです」(ローマ一〇9、10)。

5 そしてここに使徒たち自身が、主の御在世当時に持っていた信仰と、救いの信仰との違いを見るのです。すなわち、後者は主の死と主の復活の必要性といさおしとを承認します。それは主の死を人間を永遠の死から贖い、主の復活を私たちすべての人をいのちと不死へと回復する、唯一で十分な手段であることを認めます。それは、主が「私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです」(ローマ四25)。ですから、キリスト教信仰は、キリストの福音全体に対する同意であるだけでなく、キリストの血潮に対する全面的な依存、主の生涯、死、復活に対する信頼、主が私たちの贖いといのちのために、すなわち、私たちのために与えられたいのちと、私たちのうちにあるいのちをくださったという信頼なのです。それはキリストのいさおしによって人の罪が赦され、人が神の恩恵を受けるように和解させられ、その結果、人が主に近づき、私たちの「知恵、義、聖め、贖い」、ひびこりて言え、救いとしての主につき従うようになるとの確信です。

第二に考慮しなければならないことは、この信仰によってもたらされる救いとは何か、ということです。

1 第一に、それはどのような意味を持つにせよ、現在の救いです。それはこの信仰にあずかる人々によって獲得できるもの、すなわち、地上において事実与えられるものです。パウロもエペソにある信仰者に対して、またあらゆる時代の信仰者に対して、「あなたがたは、救われるであらう。」(これも真実なのですが)とは言わず、「あなたがたは、救われた(救われている)のです」(エペ二8)と言っています。

2 あなたがたは(すべてのことをひとこととまとめるならば)罪から救われたのです。これが信仰によって与えられる救いです。これは神がその独り子を世に遣わされる前に、天使によって予告されていた大いなる救いです。「その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です」(マタ二21)。そして聖書のこの箇所であれ、他の箇所であれ、どのような制限も制約もありません。すべての神の民、あるいは他の場所で明らかに示されているように、神を信じるすべての人々を、神はすべての罪——原罪であれ、犯罪であれ、過去の罪であれ、現在の罪であれ、肉の罪であれ、靈の罪であれ——から救ってくださるのです。神に対する信仰によって、彼らは罪の責めと力から救われるのです。

3 第一は、すべての過去の罪の責めからの救いです。なぜなら「全世界が神のさばきに服するためです」(ロマ三19)。もし神が、「誤ってしたこと」に厳しく目を向けられるなら、御前に立ち得る者はひとりもいません」(詩篇一三〇3参)。また、「律法によっては、かえって罪の意識が生じ」(ロマ三20)

ますが、罪の赦しはないからです。その結果、「律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められない」のです。さて、「イエス・キリストを信じる信仰によ」って、「神の義が」「すべての信じる人に与えられ」るに至りました。今や彼らは「神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。神は、キリスト・イエスをその血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました」(ロマ三20、25)。さて、キリストは「私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました」(ガラ二13)。神は「私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました」(コロ二14)。「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」(ロマ八1)。

4 彼らは罪責から救われるだけでなく、恐れからも救われるのです。「親を」怒らせまいとする子としての恐れからだけでなく、すべての奴隷的な恐れ、「刑罰が伴」(一ヨハ四18)う恐れ、罰則への恐れ、神の怒りを恐れる恐れから救われます。彼らはもはや神を厳しい主人としてではなく、寛大な父親と考えます。「彼らは奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。彼らは御霊によって、「アバ、父」と呼びます。彼らが神の子ともであることは、御霊ご自身が、彼らの霊とともに、あかししてくださいます」(ロマ八15、16参)。彼らはまた、神の恵みから落ちる恐れ(その可能性はないことはありませんが)、大いなる貴い約束に達することができないのではないかという恐れから救われます。彼らは「約束の聖霊をもって証印を押されました。聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であります」(エペ一13、14)。こうして彼らは「私たちの主イエス・キリストによ

って、神との平和を持っています……〔彼らは〕神の栄光を望んで大いに喜んでいます……〔また〕神の愛が〔彼らの〕心に注がれているからです〕（ロマ五1、2、5）。さらにこれによって彼らは「こう確信しています（恐らくいつでも、また同じ充実感をもって確信しているのではないとしても）。死も、いのちも、今あるものも、後に来るものも、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」（ロマ八38、39参）。

5 さらに、この信仰によって、彼らは罪責からだけでなく、罪の力からも救われるのです。ですからヨハネは宣言しました、「キリストが現われたのは罪を取り除くためであったことを、あなたがたは知っています。キリストには何の罪もありません。だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪のうちを歩みません」（一ヨハ三5、6）。また「子どもたちよ。だれにも惑わされてはいけません。罪のうちを歩む者は、悪魔から出た者です」（一ヨハ三7、8）。「信じる者はだれでも、神によって生まれたのです」（一ヨハ五1）。また、「だれでも神から生まれた者は、罪のうちを歩みません。なぜなら神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪のうちを歩むことができないのです」（一ヨハ二9）。

さらに、「神によって生まれた者はだれも罪の中に生きないことを私たちは知っています。神から生まれた方が彼を守っていてくださるので、悪い者は彼に触れることができないのです」（一ヨハ五18）。

6 信仰によって神から生まれた者は罪を犯しません。すなわち、(1)いかなる常習的な罪も犯しません。なぜならば、すべての常習的な罪は支配する罪だからです。しかし、信じているいかなる人も罪は支配することはできません。(2)いかなる意図的な罪も犯しません。なぜならば、信仰に留まって

いる限り、彼の意志はすべての罪に対して全面的に反対しており、罪を死の毒のように嫌悪するからです。(3)また、いかなる罪深い願望によっても罪を犯しません。なぜならば彼は絶えず、神の聖く、完全なみこころを願望するからです。また彼は神の恵みによって、不浄な願望が生まれようとする時、それをふみつぶします。(4)またこのとき、行いにおいても、言葉においても、思いにおいても、弱さによって「罪を犯す」という表現は不適當でしょう。なぜならば、彼の弱点は彼の意志と併在せず、この意志の働きなしには、弱点は正当な意味で罪ではないからです。こうして、「神から生まれた者は、罪のうちを歩みません」（一ヨハ三9）。彼は自分が「罪を犯したことがない」とは言えませんが、今は「罪を犯さない」のです。

7 これこそが現世にあつて、信仰による救いなのです。罪と罪の結果からの救いであり、この両者はしばしば、「義認」——それは最も広い意味では、今、キリストを信じている罪人のたましいに具体的に適用される、罪責と刑罰からの釈放を意味します——と罪の力からの釈放——すなわち、心「のうちにキリストが形造られる」（ガラ四19）ことによつて——ということばによつて表わされています。その結果、このように義とされた人、あるいは信仰によつて救われた人は、たしかに「新しく生まれ」た人です。彼は「御霊によつて生まれ」（ヨハ三5）、「キリストとともに神のうちに隠されてある」（コロ三3）新しいのちを与えられます。そして「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粹な（godly）、みことばの乳を慕い求め、それによつて成長し」（一ペテ二2）、神である「主にあつて、その大能の力によつて強められ」（エペ六10）、「信仰から信仰」（ロマ一17）、「恵みから恵み」（ヨハ一16）へと進み、「ついに、完全におとなになつて、キリストの満ち満ちた身だけにまで達する」（エペ

四13)のです。

三

このことに対する反対は、通常、次のようであります。すなわち、

1 信仰のみによる救いあるいは義認を説教することは、きよめと良いわざに反対することを説くというのです。これに対しては、短い答えで十分でしょう。すなわち、もし私たちがこれらのことと切り離して信仰を語り、実践するならば、そのとおりと言えるでしょう。しかし、私たちはそうでない信仰、すべての良いわざとすべてのきよめを必然的に生み出すような信仰を説いているのです。

2 しかしこのことをもって全面的に考慮することは有益でしょう。特にこれは新しい反対ではなく、パウロの時代から続いているのですから。と言いますのは、その頃でも「信仰によって律法を無効にすることになるのでしょうか」(ロマ三31)と質問されていたからです。第一に、私たちは答えま
す、信仰を説かないすべての人は、明らかに律法を無効にすると。それは直接的、総合的に、「聖書の」本文のすべての精神を食いつくしてしまうような制約や注釈によって、また間接的に、これを実行することを可能にする唯一の手段を指摘しないことによってです。ところが、第二に、私たちは律法の十分な範囲と霊的な意味を示すことによって、またすべての人を「律法の要求が全うされる」(ロマ八4)生きた道へ招くことによって律法を確立するのです。彼らはキリストの血だけに信頼しながら、神が定めてくださったすべてのいましめを守り、神が「私たちが良い行ないに歩むように、あらかじ

め備えてくださった」すべての「良い行ない」(エペ二10)を行い、あらゆる聖い、天的な気質、すなわち、「キリスト・イエスのうちにあるのと同じ心」(ペリ二5英訳)を喜び、表すのです。

3 しかしこの信仰を説くことは人々を高慢に導くのでしょうか。私たちは答えます、それは偶然あるかもしれませんが。従ってすべての信仰者は(偉大な使徒のことばのとおり)真剣に警戒しなければなりません。「彼らは不信仰によって折られ、あなたは信仰によって立っています。高ぶらないで、かえって恐れなさい。もし神が台木の枝を惜しまれなかつたとすれば、あなたをも惜しまれないでしょう。見てごらんなさい。神のいつくしみときびしさを。倒れた者の上にあるのは、きびしさです。あなたの上にあるのは、神のいつくしみです。ただし、あなたがそのいつくしみの中にとどまっていればであって、そうでなければ、あなたも切り落とされるのです」(ロマ一一20、22)。またここに留ま
っているかぎり、「それでは、私たちの誇りはどこにあるのでしょうか。それはすでに取り除かれまし
た。どういう原理によってでしょうか。行ないの原理によってでしょうか。そうではなく、信仰の原
理によってです」(ロマ三27)という、パウロがこの反対を予見し、答えているこれらのことばを思い
起こすでしょう。もし私たちが行いによって義とされるのであれば、私たちがそれによって誇るでし
ょう。しかし「何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら」(ロマ四五)、
誇るどころは何もありません。この本文に先行し、また伴うことばも同じことを述べています。「あ
れみ豊かな神は、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救
われたのは、ただ恵みによるのです——それは、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスに
おいて私たちに賜わる慈愛によって明らかに告示しになるためでした。あなたがたは、恵みのゆえに、

信仰によって救われたのです」(エペ二4、5、7、8)。自分自身からは、信仰も救いも生じません。「それは神からの賜物です」(エペ二8)。あなたがたが救われる信仰も、無代価で受けるに値しない賜物であり、神がご自分の喜びなさるままに、神の顧みによつてのみ与えられる救いも、これと結びついているのです。あなたがたが信じるということは神の恵みの一例であり、信じることによつて救われるということはもう一つの例です。「行ないによるのではありません。だれも誇ることもないためです」(エペ二9)。なぜならば、私たちが信じる前のすべての行ない、すべての義は、神から断罪を受ける以外の何物でもありませんでした。それは信仰を受けるに価するものとはほど遠くありました。ですから、信仰が与えられるのはいつであつても、「行ないによるものではありません」。また私たちが信じる時、それは私たちが行うわざによる救いではありません。私たちの「うちに働いてくださるの」は神だからです(ピリ二13)。従つて、神ご自身だけが働いてくださることの故に、神が私たちに報いを与えられるということは、神のあわれみの豊かさを表すもので、私たちには誇る余地がありません。

4 しかしながら、神のあわれみを信仰だけによつて無代価で救つたり、義と認めたりすると語ることは、人々が罪に留まることを励ましたりはししないでしようか。たしかに、そうでしょうし、そうなるかもしれません。多くの人々は「恵みが増し加わるために罪の中にとどまる」(ロマ六1)でしょう。しかし彼らの血は彼らの頭上にかかっています。神の慈愛は彼らを悔い改めに導かなければなりません。そして心の眞実な人々はそのとおりになるでしょう。彼らは神に赦しがあると知つて、イエスに対する信仰によつて彼らの罪が消し去られるようにと叫び求めるでしょう。そしてもし彼らが熱

心に叫んで気落ちしないならば、もし神が定めてくださったすべての手段を用いて求めるならば、もし神が来られるまで慰められることを拒もうとするならば、主は「来られ、おそくなることはない」(ヘブ一〇37)のです。また神は短期間に多くのわざをなさいます。使徒の働きの中には、稲妻が天からくだるように速やかに神が人々の心の中にこの信仰を働かせなされるという多くの実例があります。パウロやシラスが説教し始めると同時に、看守は悔い改め、信じ、バプテスマを受けましたし、ペンテコステの日にペテロの最初の説教によつて三千人がみな悔い改めて信じたのもそうでした。また、神は賛むべきかな、神がなお「救うに力強い者」(イザ六三1)であられるという多くの生きた証拠が今も存在しています。

5 しかし他の観点から見れば、全く正反対の論議がこの同じ眞理についてなされます。「もし人が自分のなし得るすべてによつても救われないとすれば、それは彼を絶望に追いやるのではなく、それがあるか」。たしかに、自分自身のわざや自分自身の功績や義によつて救われることには絶望するでしょう。またそうでなければなりません。なぜならば、自分自身のいさおしを徹底的に否定するまでは、だれひとりキリストのいさおしに頼ることができないからです。「自分自身の義を立てよう」と(ロマ一〇3)する人は、神の義を受け入れることができないのです。律法による義に頼っている間は、信仰による義が与えられないのです。

6 しかしこれは不安をもたらず教理であると言われています。悪魔は人々にその通りであると示唆するとき、悪魔らしく、すなわち、眞理も恥らもなく語っているのです。これはすべての自己を破滅させ、自己を責めている罪人にとつて唯一の慰めに満ちた教理であり、「慰めに満ちたされ」(二コ

リ74)た教理です。すなわち、「彼に信頼する者は、失望させられることがない」(ロマ九33)し、主は「すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられる」(ロマ一〇12)のです。ここに天に届くほど高く、死よりも強い慰めがあります。何ですって、すべての人に対して恵み深くあられるのですか。公然たる罪人ザアカイにも、公然たる遊び女であったマグダラのマリヤにもですか。私がいいますのに、「では私、私のような者でも恵みを望むことができるのですね」と言う人のことばが聞こえてきます。神はあなたの祈りを退けなさいません。そうです、次の瞬間に、「子よ。しっかりとしなさい。あなたの罪は赦された」(マタ九2)と言われるでしょう。その罪はもはやあなたを支配しないほどの救しを与えられるでしょう。そうです、そして「あなたが神の子であることは、御霊ご自身が、あなたの霊とともに、あかししてくださいます」(ロマ八16参)。ああ、よろこばしきおとずれよ。すべての人に伝えられる大いなる喜びのおとずれよ。「ああ。渴いている者はみな、水を求めて出て来い。金のない者も。……金を払わないで、……代価を払わないで、……買え。」(イザ五五1)。あなたの罪がどのようであつても、たとえそれが「緋のように赤くても」(イザ一18)、「あなたの頭の髪の毛よりも多く」(詩篇四〇12参)あつても、「主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださいから」。

7 もはや反対論が起こらなくなったとき、私たちが聞かされることは、信仰のみによる救いは、優先的に教えらるべき教理ではないとか、少なくともすべての人に伝えられるべきではないとの声です。しかし、聖霊は何と語っておられるでしょうか。「すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです」(1コリ三11)。ですから

「彼を信じる者は、救われます」(ヨハ三16参、マコ一六16)。これがすべての私たちの説教の土台でなければなりません。ですからこれが優先的に説教されなければなりません。「よろしい、でもすべての人に対してではない」と言われるのですか。それならばだれに対して説教してはならないのでしょうか。だれを除外すべきでしょうか。貧しい人々ですか。いいえ、彼らは福音を宣べ伝えてもらう特別な権利を持っているのです。無学の人々ですか。いいえ、神は初めからこれらの事を無学の人々、無知の人々に示してくださいました。若い人々ですか。決してそうではありません。どのようにしてでも「彼らをキリストのところに来させなさい。止めてはいけません」(マコ一〇14参)。罪人たちですか。とんでもないことです。主は「正しい人を招くためではなく、罪人を招くために」(同二17)来られたからです。では、除外するとすれば、富者、学者、名士、道徳家を除外するべきでしょうか。彼らがいばいば聞くことを自ら拒んでいるというのは事実です。しかし私たちは主のことばを語らなければなりません。なぜなら、私たちに与えられた命令の基調は、「出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい」(マコ一六15)です。もしだれであつても、その命令あるいはその一部をねじ曲げて滅びに至らせたら、彼は自分の重荷を負わなければなりません。しかもなお、「主は生きておられる。主が私に告げられることを、そのまま述べ」(1列王二二14参)なければなりません。

8 今の時代に私たちは、特に「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によつて救われたのです」ということを語らなければなりません。なぜならば、この教理を主張することが今日ほど時になつていない時はないからです。私たちの間でローマ教会(カトリック)による惑わしの増大を効果的に防ぐためには、これ以外にありません。ローマ教会のすべての誤りをひとつひとつ責めるのは際限のない

ことです。しかし信仰による義認は根底を撃つことであり、すべてを堅立している土台を倒すことになりません。この教理を英国国教会が「キリスト教宗教の強固な岩であり基盤である」と呼んでいるのは正統です。この教理こそ、この王国からカトリック主義をまず駆逐し、これだけが今もそれを続けているのです。この地を洪水のように覆っていた不道徳を阻止し得たのは、これ以外の何物でもありません。あなたがたは深いふちを一滴ずつ空にすることができませんか。もしできるなら、あなたがたは特定の悪をとどめることによって改革をすることができるとでしょう。しかし「信仰に基づいて、神から与えられる義」(ピリ三9)が導入される時、高慢な波はとどめられます。これ以外の何物も「自身の恥」(同)を誇りとし、「自分たちを買い取ってくださった主を否定する」(IIペテ二一)人々の口をふさぐことができません。彼らは、神によってその心に律法を書いてくださった方のように、律法について気高く語ることができません。この主題について語っているのを聞いてみると、彼らは神の国から遠くなくと考えさせます。しかし彼らを律法から福音へと移してごらん下さい。信仰による義、「信じる人」(を)「みな義と認め」させる「律法を終わらせられた」(ロマ一〇4)キリストから始めてごらん下さい。そうすれば、今、全面的なクリスマスチャンではないとしても、ほとんどクリスマスチャンと見えている人々が滅びの子と告白せざるを得ず、地獄の深さが天の高さと隔たっているのと同じように、彼ら(神よ彼らをあわれんでください)はいのちと救いから遠ざかっているのです。

9 この理由から「信仰による救い」が世に対して宣言される時はいつでも、敵は怒り狂います。この理由から「この教理を」優先的に説教した人々を滅ぼそうとして、天と地を動員するのです。またこの同じ理由から、彼は信仰だけが彼の王国の基を覆すことを知っているのです、その全勢力を招集

し、その偽りと中傷のすべての技術を動員し、万軍の主のあの輝かしい闘士であるマルチン・ルターが「この教理を」復活させるのを脅かそうとしたのでした。私たちはそれに驚くことはできません。なぜならば、かの神の人は「高慢で強い男が、手に一本のあしを持って彼を阻止し、倒そうと向かってきた幼子にどれほど腹を立てたことか」と述べています。そのとき彼はその幼子が、たしかに彼を倒し、彼を足の下に踏みつけるであろうと知っていたのです。「アーメン、主イエスよ」(黙示二二20)。こうしてあなたの力は「弱さのうち完全に現われるから」(IIコリ一一九)です。ですから、主を信じる幼子よ、前進しなさい。そうすれば、彼の「右の手は、恐ろしいことをあなたに教え」(詩篇四五4)るでしょう。あなたは幼い時のように、無力で弱くあるとしても、あの強い男はあなたに立ち向かえないでしょう。あなたは彼に勝ち、征服し、覆し、足もとに踏みつけるでしょう。あの偉大な救いの君のもとで前進し、あなたのすべての敵が滅ぼされ、「死が勝利にのまれ」(Iコリ一五54)るまで、「勝利の上にさらに勝利を得ようとして」(黙示六二)前進しなさい。

さて、私たちは私たちの主イエス・キリストによって勝利を与えてくださる神に感謝をささげましょう。父なる神と聖霊とともに、主イエス・キリストに祝福と、栄光と、知恵と、感謝と、ほまれと、力と、勢いとが、永遠にありますように。アーメン。

説教 2

あと一步でキリスト者

Almost Christian

訳者ノート

一七四一年七月二五日の日記に次のように記されている。「三年に一回ぐらい回つてくる私の当番だったので、私は大学の前にある聖マリヤ教会で説教した。収穫は実に豊かであり、これほどの無数の会衆（どんな動機から来たにしろ）を、私はオックスフォードで見たことがないほどであった」。説教1は同様のセッティングで一七三八年に、説教4は四四年に、また説教3は、同じ大学のクライスト・チャーチ・カレッジのチャペルで四二年になされた弟チャールズのものである。三九年春にプリストルで始まったリバイバルは、この年までに、相当な勢いでロンドンを中心に広がりをを見せていた。ウェスレーはもはや、オックスフォードの人ではなく、リバイバルの指導者である。「時の人」とでも言うべき彼を一目見ようと、チャペルも満杯であった。

説教9「奴隷の霊と子とする霊」で、ウェスレーは、人間の生きる姿勢を「生まれながら」の状態、「律法の下にある」状態、そして「福音の下にある」状態の三段階に分けて説明しているが、この説教では、第二段階と第三段階とのギャップを強調して、二つに分けている。いわゆる一般的な道徳人に始まり、聖書の啓示に従って神を熱心に追い求めながらもキリストの福音を真に体験していないなら、その人は未だ「あと一步でキリスト者」(Almost Christian) にすぎず、「全面的にキリスト者」(altogether Christian) には至っていないことだ。

そもそもこの区別は、有名無実なキリスト者、生まれや育ち、或いは文化的な背景、思想的・宗教的な帰属意識でキリスト者を自称する者と、真にキリストを体験した信仰者を

区別する意味で、一七世紀に広く使用されていたことは、アウトラーが指摘するところである。オックスフォードのホーリー・クラブ時代、ウエスレーらが講読テキストとして使用したノーリス (John Norris) の「キリスト者の慎重な分別について」にも、この区別は登場する。

この説教の中で、ウエスレーはどのような人が「あと一步でキリスト者」に属するかを詳しく説明した後、自らが、オックスフォードとそれに続くジョージア宣教時代、すなわちアルダスゲイトの体験を経るまでは、あれほど熱心に神を求め、御心を追求していながら、「あと一步でキリスト者」の域を出ることができなかったと告白している(一・13)。いったいなぜであろうか。それは、私たちを「全面的にキリスト者」とする土台 (ground) である信仰(二・3)、すなわちキリストの十字架の功績により、罪が赦され、神と和解し、永遠の滅びから救われるという、十字架への心からの信頼という意味での「正真正銘のキリスト教信仰」(二・5)を欠いていたからである。

この信仰こそが、私たちを正真正銘のキリスト者とする決定的要因である。アルダスゲイトの日、ウエスレーはこれまでの魂の遍歴を整理し、オックスフォード時代を振り返って次のように述べている。「私はすべての罪と格闘し、律法になかった自己否定を怠ることなく、機会あることに公的にも私的にも、あらゆる恵みの手段を注意深く実行し、善行の好機を見逃すことがなかった」。しかし、それらすべてが、キリストという唯一の土台に据えられていない「砂上の楼閣」であったことを認めている(『日誌』1738.5.24, §11)。当時のウエスレーは、洗礼を通して与えられた恵みを、罪を避け、慈愛に励み、敬虔を修業することですらに育て、聖化に成長し、「神に認めてもらおう、キリストの生・死が備

えた義認を獲得しよう」(Letter to Richard Morgan, Sen, 1734.3.15)と必死になっていた。その神学は、墮罪と罪責を論じ、恵みなくしては人間が完全に無力であることを認めるものの、受けるに値しない罪人に注がれる神の愛の味わいに欠けていた。決定的なポイントで「私たちがまた罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださった」(ロマ五8)というメッセージが隠れてしまっているのである。罪の故に遠ざかっている人間へと神の方からキリストを通して近づき、キリストは十字架において私たちの救いのためにすべてを勝ち取ってくださったということを知らずに、「義を勝ち取らなければ、神にささげなければ、認めてもらわなければ」と必死になっていれば、自然とそこには十字架の福音とはかけ離れた、自分の行いや霊性を土台とした自己義認の傾向が生まれてくる。

オックスフォード時代に誠実を尽くした努力を振り返って、「砂上の楼閣」と呼ぶことは、今のウエスレーにしてみれば決して言い過ぎではない。「あと一步でキリスト者」と「全面的にキリスト者」、二者の違いは、あと一步であっても、天地の差をつける非常に大きな一步であることをウエスレーは強調する。それがこの説教の力点である。

説教2「あと一步でキリスト者」

「あなたは、わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている」。

(使徒の働き二六28)

ここまで来た人々は多く存在しています。キリスト教がこの世に存在するようになって以来、「あと一步でキリスト者になっていた」人々が、いかなる時代・国にも多く存在していました。しかし神の前には、ここまでだけでは何にもならないことがわかっていますので、私たちが以下のことを考えることはきわめて重要です。

第一に、あと一步でとはどのような状態を意味するか

第二に、全面的にクリスチャンとなるとは、どのような状態を意味するか

一

1 さて、第一に、「あと一步でキリスト者」という状態には異教徒の正直さが含まれています。私がお思いますのに、だれひとりこのことについて何の疑問も持たないでしょう。特に異教徒の正直さの意味するところは、彼らの哲学者によって薦められているばかりか、ふつうの異教徒が相互に期待し

ているものであり、実際に彼らの多くがそれを実行しているものです。異邦人の道徳規則によれば、不正を行ってはならず、強奪であれ、盗みであれ、隣人の物を取ってはならず、貧しい人々を虐げてはならず、いかなる人からも搾取してはならず、どのような商売に携わっていても、ごまかしたり、だましたりしてはならず、だれからもその権利を欺き取ってはならず、もし可能であれば、だれからも借りを作ってはならないのです。

2 さらに、ふつうの異教徒は、公正とともに真実さにある程度の配慮がなされるべきであると認めています。従って、彼らは、嘘の誓いを神の名を用いて誓う人や、隣人を中傷する人、いかなる人であっても偽って訴える人を罪に定めました。たしかに彼らはいかなる種類の偽り者であっても、意識的であるならば、彼らを少しも善良であるとは評価せず、彼らを人類の恥、社会の疫病と考えたのでした。

3 さらに、異教徒であっても、正直な人々は、互いに一種の愛と助けを期待しています。どんな人に対しても偏見を持たず、与えることのできるいかなる助けも期待していました。そして彼らは、この助けの手を、大した代価や労力も払わずにできる人道的な立場からの小さいつとめから、さらに進んで、もし余分の食物があれば飢えた人々を養い、自分たちの余った衣服で裸の人々に着せ、一般的に言えば、自分たちの必要としない物をもって隣人の必要を満たすところまで、その手を伸ばしたのです。ここまで(それを最低に評価しても)異教徒の正直さは届いています。これが、「あと一步でキリスト者」という表現に意味されている最初のことです。

4 「あと一步でキリスト者」である第二の意味は、敬虔、すなわち、キリストの福音に命じられ

ている敬虔の形を持つていること、本当のクリスチャンの「外見」を持つていることです。従って、「あと一步でキリスト者」は福音が禁じていることは何ひとつ行いません。神の名をみだりに唱えません。彼は祝福し、のろうことをしません。決して誓うことをせず、その言葉は「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」です。彼は主の日をけがすことをせず、町囲みの中にいる在留異邦人によってけがされることを許しもしません。すべての事実上の姦淫や、淫行や、不潔を避けるだけでなく、直接的であれ、間接的であれ、そのような方向に傾くあらゆる言葉や状況を避けます。さらに、彼はあらゆるむだな言葉を避け、すべての非難や陰口やうわさ話や悪口から遠ざかり、すべての「愚かな話や下品な冗談」(civitate エベ54) (これは異邦人の道徳家の記述によれば一種の品徳でさえあるのです)を避けます。要するに、「人の徳を養うのに役立」たないすべての行状から遠ざかり、その結果、「賤いの日のために証印を押して」くださった「聖霊を悲しませ」(エベ49) することになります。

5 彼は「放蕩」をもたらず「酒」からも遠ざかり、遊興や大食も避けます。すべての争いや戦いが自分のうちにある限り、それを避け、すべての人と平和に生きるよう絶えず努めます。もし悪を被つても、復讐をしたり、悪をもつて悪に報いることをしません。隣人の欠点や弱点をののしつたり、口論したり、あざけつたりすることをしません。故意にいかなる人にも悪を行なつたり、傷つけたり、悲しませたりすることをしません。むしろ、すべてのことにおいて、「人があなたのして欲しくないことをあなたにしたとしても、それをあなたは他人にしてはならない」(マタ712参) という明白な基準に従って行動し、語ります。

6 また彼は良いことをするにあたって、手間や労力のかからない程度の親切に限らず、多くの

人々の益を求めて労し、苦しみます。それはあらゆる手段をつくして幾人かの人を助けるためです。労力や苦痛の伴うことがあつても、それが友のためであれ、敵のためであれ、悪人のためであれ、善人のためであれ、彼はその「手もとにあるなすべきことはみな」(伝道910) 力をつくして行います。いかなることであれ、「勤勉で怠らず」(ロマ1211)、「機会のあるたびに、すべての人に對して」その肉体に對してと同様にたましいに對しても、あらゆる種類の「善を行ない」(ガラ610) ます。悪人を誹責し、無知な人々を教え、動揺する人々を堅立させ、善良な人々を励まし、苦しんでいる人々を慰めます。眠っている人々を目覚めさせ、すでに神によつて覚醒されている人々を彼らが洗つてきよくされるために、罪と汚れのために開かれた泉へと導き、信仰によつて救われている人々には、すべてのことについてキリストの福音を飾るべく励ますように努めます。

7 敬虔の形を持つている人は、恵みの手段を、しかもそのすべてをあらゆる機会に実行して、います。絶えず神の家を訪れます。ある人々は、金や高価な飾りで着飾つたり、けばけばしい空しい服装で飾り立てたりして、いと高き方のもとに集いますが、彼らはそうではありません。そういう人たちは、互いに対する不適切な礼儀や折にかなわぬ派手なふるまいによつて、敬虔の力だけでなく、その形さえも否認してしまつていのです。願わくは私たちの中で、この同じ断罪を受ける者がひとりもありませんように。主の家に来て、あたりを見回したり、気のない、軽はずみな無関心のしるしに満ちている人々がありませんように。時には自分たちが始めようとしている事業に祝福があるよう、神に祈りをささげているように見えはしますが、こうした人々は神の恐れに満ちた集會の間、眠っているか、ぞんざいな姿勢で気楽にしているような人々です。また、神が眠っておられるかのように考

えて、何も仕事がないかのように、おしゃべりをしたり、きよろきよろしたりする人々です。こうした人々が、私たちの間には一人もいることがありませんように。またこうした人々が、果たして敬虔の形を持っているかどうかというレベルで論じられることもありませんが、そんなことは論外です。敬虔の形だけでも持っている人なら、敬虔な集会のいかなる部分もまじめさと注意深さをもって守るものです。特に、主の聖餐のテーブルに近づくときは、軽々しい、無思慮なふるまいでなく、ただ「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」(ルカ一八13)と告白しつつ通った態度、身振り、ふるまいで近づくのです。

8 もしこれに加えて、家族の長たる者によって家庭の祈りが絶えず行なわれ、神に対して個人的に物語るために時間が聖別され、日ごとのふるまいがまじめになされるなら、この外面的な宗教を規律正しく行う人は、敬虔の形を持っていると言えましょう。「あと一步でキリスト者」であるために、もう一つのことが必要ですが、それは誠実です。

9 誠実の意味は、外側の行動が生じるための、宗教のまことの内面的な原理です。もしこれがなかったら、異教徒の正直さのレベルにも届いていません。それは異教徒のエピキュロス派のある詩人の要求にも答えることはできません。この哀れな男は、まじめな誇りで次のように述べています。

善人は徳を愛するがゆえに罪を避け

悪人は刑罰を恐れるがゆえに罪を避ける

(ホラティウス、Epistles I, xvi, 52-53)

もし人が刑罰を避けたいがために、悪を行なうことから遠ざかっているとすれば、

なんじは木にかけられることはない (同上、ま)

とこの詩人は述べています。そこであなたは「自分の報いを受け取っているのです」(マタ六2)。しかし、彼はこのように無害な人間であっても善良な異教徒と認めないでしょう。とすれば、もしだれかが同じ動機から(すなわち、刑罰をまぬかれるため、友や利益や名声を失いたくないために)悪を行なうことから遠ざかるだけでなく、多くの善を行おうとするならば——そうです、恵みの手段を用いて——この人が「あと一步でキリスト者」であるというのは適切ではないでしょう。もし彼が心の中に優る原理を持っていないなら、彼は全くの偽善者にしか過ぎないのです。

10 従って、「あと一步でキリスト者」であるには、誠実が必然的に含まれてきます。すなわち、神に仕えようとする真実な意図、神のみこころを行おうとする心からの願望です。すべてのこと、すなわち、すべての行状、すべての行動、すべてのなすこと、しないことにおいて、神を喜ばせようとの誠実な目的を持っているということが、当然含まれています。もしだれかが「あと一步でキリスト者」でありたいと思うなら、この意図がその人の生涯全体を貫かなければなりません。これこそが、彼が善を行い、悪から遠ざかり、神のいましめを守る重要な原理なのです。

11 しかしここで尋ねられることは、生きている人間がここまで届きながら、ただの「あと一步でキリスト者」でとどまっていられるか、ということですが、「全面的なキリスト者」となるためには、こ

れ以上、何が要求されているのでしよう。私は答えます、第一に、ここまで届きながら、なお「あと一步でキリスト者」であることは可能なことです。それを神のことばからだけでなく、経験という確かな証しからも知ることが出来ます。

12 兄弟たちよ、このことに関する「私のあなたがたに対する信頼は大きい」(Ⅱコリ七4)のです。もし私があなたのためにまた福音のために、自分の愚かさを屋上から宣言しても「どうか、赦してください」(Ⅱコリ一二13)。私が他人のことのように、自分自身のことを自由に話したとしても、どうぞ許してください。私はあなたがたが高められるために、喜んで低くされ、主の栄光のためにより喜んで卑しくされます。

13 この地にいる多くの人々が証しできるように、私は長年にわたって「ここまで届いていました。すなわち、すべての悪から遠ざかり、良心の責めがないように努め、時を賤い、すべての人々になし得るかぎりの善を行なうあらゆる機会をとらえ、絶えずまた注意深く、すべての公的および私的な恵みの手段を守ってきました。いつでも、どこでも、堅実でまじめなふるまいをするように努めてきました。そして私がその前に立っている神は、私がこのすべてを誠実に行ってきたことを記録しておられます。私は神に仕えようとの真実な意図を持ち、すべてのことを通して神のみこころを行い、私を「信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得」(Ⅰテモ六12)するように召してくださった方を喜ばせようとの心からの願いを持ってきました。しかし私自身の良心が聖霊によって証しすることは、この間中、私は「あと一步でキリスト者」に過ぎなかつたということなのです。

二

もし「全面的なクリスチャン」になるためには、これ以上、何を求められているのですか」と問われるなら、私は次のように答えます。

1 第一に、神への愛です。神のみことばは、「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ」(マコ一二30)と述べています。心全体を占領し、すべての愛情を満たし、たましいの金能力に充滿し、その金機能の極限までを働かせるような神に対する愛です。このように神である主を愛している人は、その霊が彼の「救い主なる神を喜びたたえる」(ルカ一47)人です。その人は「主」であり、彼のすべてである方を「喜びとし」(詩篇一二)、この方に「すべての事について、感謝し」(Ⅰテサ五18)ます。彼は「主の御名、主の呼び名を慕います」(イザ二六8参)。その心は常に「天では、あなたのほかに、だれを持つことができません。地上では、あなたのほかに私はだれをも望みません」(詩篇七三25)と叫びます。たしかに、彼は神のほかに何を慕うことができませんか。世ですか。世の物ですか。「世界は彼に対して十字架につけられ、彼も世界に対して十字架につけられた」(ガラ六14参)のです。彼は肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢に対して十字架につけられています。そうです、彼はあらゆる種類の誇りに対して死んでいます。「愛は自慢せず」(Ⅰコリ一三四)、愛のうちにいる人は「神のうちにおり、神もまたその人のうちにおられ」(Ⅰヨハ三24)るので、自分の眼には無以下の者だからです。

2 第二に、「全面的なキリスト者」には、隣人愛が含まれています。主は次のように述べられました

た、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」(マタ二39)。もし「自分の隣人とはだれか」と問われるなら、「世にあるすべての人、「すべての肉なるもののいのちの神」(民数二七16)のすべての子です」と答えます。隣人から、私たちの敵や神に敵対する者や彼らのたましいを除外してはなりません。すべてのクリスチャンは彼らを自分自身のように、しかも「キリストが私たちを愛」(エペ五2参)されたように、愛するのです。この愛がどのようなものであるかを十分に知ろうとする人は、パウロの愛の教えを考えることができます。それは「寛容であり、親切です。また人をねたみません。それは無思慮に、性急に、判断しません。それは自慢せず」(1コリ一三4参)、彼を、愛する者、最も小さい者、すべての人のしもべとします。愛は「礼儀に反することをせず、ふさわしくない振る舞いをせず」(1コリ一三5参)、「すべての人に、すべてのものとなりませす」(1コリ九22)。愛は「自分の利益を求めず」、他の人々の益、すなわち、彼らが救われることを求めます。愛は「怒り」ません。それは愛に欠けている人の持つ怒りを追いやります。それは「人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます」(1コリ一三五7)。

3 前述した「全面的なクリスチャン」の意味を考えようとするとき、それと(実際)には切り離すことはできませんが、切り離して考えなければならぬ、もう一つのことがあります。それはすべての根底にあるもの、すなわち、信仰です。神のことは全体を通して、このことについて非常にすばらしいことが語られています。愛された弟子は、「信じる者はだれでも、神によって生まれたのです」(ヨハ五1)と述べています。「この方を受け入れた人々、すなわちその名を信じた人々には、神の子ど

もとされる特権をお与えになった」(ヨハ一12)のです。「私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です」(ヨハ五4)。そうです、主ご自身は宣言しておられます、「御子を信じる者は永遠のいのちを持ち」(ヨハ三36)、「さばきに会うことがなく、死からのちに移っているのです」(ヨハ五24)と。4 いかなる人も自分のたましいを欺いてはなりません。良く心に留めておかなければならないことは、「悔い改め」や愛やすべての善行に「ふさわしい実を」(マタ三8)結ばない信仰は、ここで語られているような「正しい生きた信仰」ではなく、「死んだ信仰、悪霊どもの信仰です」。なぜならば、悪霊どももキリストが処女から生まれ、あらゆる種類の奇蹟を行ない、自分自身が神であることを宣言されたこと、私たちが永遠の死から贖うために最も苦痛に満ちた死を受けられたこと、三日目によりみがえられたこと、天に昇り父なる神の右に座しておられること、この世の終わりに生きている人々と死んでいる人々とを審くために再び来られること、を信じているからです。悪霊どもはこれらの信仰箇条を信じ、旧・新約聖書に書かれているすべてを信じています。これらのすべてを信じていても、なお、彼らは悪霊どもに過ぎません。彼らはまことのキリスト教信仰を欠いていますから、のろわれべき状態に依然として留まっているのです。

5 「真正正銘のキリスト教信仰は」(英国国教会の言葉で言えば)「聖書と信仰箇条が真実であると信じるだけでなく、キリストによって永遠のいのちから救われるというたしかな信頼と確信を持つこと」です。それは「キリストの功績によって、自分の罪がいま赦されており、神の恵みへと和解させられたという、たしかな信頼と確信」であり、その結果、「神の戒めを守ろうとする愛の心が伴う」のです。

6 さて、うちに宿っている神の力によって、心を高慢、怒り、欲望から潔め、「すべての悪からきよめ」(一ヨハ一9)、「いっさいの霊肉の汚れからきよめ」(二コリ七一)信仰、心を神と全人類に対する愛——それは死よりも強いのですが——神のわざを行うことを愛する愛で満ちた信仰を持つてゐるすべての人、すべての人々のために財を費やし、また自分自身を注ぎ出すことを誇りとし、キリストのそしり・すべての人々からの嘲り・侮り・憎しみだけでなく、神のみはかりによって許されてゐる限り、人々や悪霊が与えようとしてゐる悪意を喜びをもつて耐え忍ぶ信仰を持つてゐるすべての人、「愛によつて働く」(ガラ五6)この信仰を持つてゐるすべての人は、あと一步でキリスト者であるというよりも、全面的なキリスト者であるのです。

7 しかしこれらのことの生きた証人となるのはだれでしょうか。「よみと滅びの淵とは主の前にある。人の子らの心はなおさらのこと」(箴言一五〇)という神のみ前で、兄弟たちよ、私はあなたがたに勧めます、あなたがたひとりひとりが自分の心に「果たして、私は全面的なキリストチャンの教の中に入っているだろうか。異邦人の正直な規定が要求するほどに、今まで公正と憐れみと真実を實行してきただろうか。もしそうとしても、キリストチャンの外見を持つてゐるだけでしょうか。敬虔の形を持つてゐるだけでしょうか。悪から遠ざかり、聖書に禁じられてゐるすべてのものから遠ざかつてゐるだろうか。私の手もとにあるなすべきことはみな、自分の力で行つてゐるだろうか(伝道九10)。私はあらゆる機会に神のすべての定めをまじめに守つてゐるだろうか。そしてこのすべてを、神に喜んでいただくことの真実な意図と願望をもつて行つてゐるだろうか」と問ひかけることをお勧めします。

8 あなたがたの多くは、決してここまで達してゐないと自覚してゐるのではないでしようか。「あと一步でキリスト者」という状態にも達してゐないのではないでしようか。異邦人の正直さの標準にまで達してゐないのではないでしようか。少なくとも、キリスト教の敬虔の形にすら達してゐないのではないでしようか。ましてや、神があなたがたの中に、すべてのことにおいて神に喜んでいただくことの真実な意図、あなたがたの中の誠実さを見ておられないのではないでしようか。すべての言葉と行い、あなたがたの事業、学び、娯楽が、神の栄光のためにと意図してなされてゐることは、ほど遠いではありませんか。あなたがたのなすすべてのことが「主イエスの名によつてなし」(コロ三17)、「キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえ」(一ペテ二五)とならなければならぬということ、考えもせず、願望せずにはありませんか。

9 しかしもしあなたがたがそれを意図し、願望してゐたとしても、良い意図と願望があなたをクリスチャンとするのでしょうか。決してそうではありません。それらが正しい結果をもたらすまでは、そうではありません。ある人は「地獄は善良な意図で敷きつめられてゐる」と言いました。すべてのものにまさつて大切な質間がお残ります。神の愛はあなたの心に注がれていますか。あなたは「私の神、私のすべて」と叫ぶことができますか。あなたは神以外のものを願望しませんか。あなたは神にあつて幸福ですか。神はあなたの栄光、あなたの喜び、あなたの喜びの冠ですか。「神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです」(一ヨハ四21)という戒めはあなたの心に記されていますか。あなたの隣人を自分のように愛していますか。すべての人、自分の敵、神の敵すらも自分自身のたましいのよう愛してゐますか。しかもキリストがあなたを愛されたようにですか。またキリストがあなたを愛し、あ

あなたのためにご自分を与えてくださったと信じていますか。主の血潮を信じていますか。神の小羊があなたの罪を取り除いて、石が海の深みに投げられるように、捨ててくださったと信じていますか。主があなたに対する証書を消し去り、それを除いて、十字架にかけてくださったと信じていますか。あなたは主の血潮によって確かに贖われ、あなたの罪は赦されていますか。主のみ霊があなたの霊とともに、あなたが神の子であると証ししておられますか(ロマ八16)。

10 私たちのただ中に今立っておられる主イエス・キリストの父なる神は、もしいかなる人であってもこの信仰とこの愛を持たずに死んだとすれば、決して生まれない方が良かったことを知っておられます。ですから、眠っている人よ、目を覚ましなさい。あなたの神を呼び求めなさい。神を見いだすことのできる間に呼び求めなさい。主がその「あらゆる善をあなたの前に通らせ、主の名で、あなたの前に」、「主なる神は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み、恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す者」と宣言なさるまで、休んじてはなりません(出エ三三19、三四6、7)。あなたを上召してくださる主の栄光に届かないで満足するようなむなしき勧めに心を傾けてはなりません。むしろ「私たちがまだ弱かったとき、不敬虔な者のために死んでくださった」(ロマ五6)方に昼も夜も叫び求めなさい。そうすれば、あなたは信じた方を知り、「私の主。私の神」(ヨハ二〇28)と言うに至るでしょう。あなたが手を天に向かって伸べ、永遠に生きておられる方に対して、「主よ。あなたはいつさいのことをご存じです。あなたは、私があなたを愛することを知っておいでになります」(ヨハ二二17)と申し上げるに至るまで、「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを」(ルカ一八)憶えておかなければなりません。

11 願わくは、私たちすべての者が、あと一步でキリスト者となるまでに成長し、そこに留まらず、全面的なキリスト者となることを体験することができましように。それは、イエスによる贖いを通して、主の恵みにより無代価に義とされ、イエス・キリストによって神との平和を持つに至ったことを知り、神の栄光を望んで喜び、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれることです。

説教 3

眠っている人よ、目をさませ

Awake, Thou that Sleepest

訳者ノート

チャールズ・ウエスレーは、一七四二年四月四日、オックスフォード大学のクライスト・チャーチ・カレッジのチャベルでこの説教を披露した。活字となってウエスレー説教として残されている一五〇篇の中で、唯一チャールズの手によるものである。

この説教を、同じく「眠れる者を呼び覚ます」ことを目的としたジョン・ウエスレーによる説教2、4、或いは9と比較してみると興味深い。兄の説教の方が神学的、論理的な重厚さを感じる。しかし、チャールズの方がポイントが絞られ、流れはスムーズである。英語そのものの品格まで判断する能力は持ち合わせていないが、読みやすいのは明らかにチャールズの方だ。兄の説教に比べて、格段に歯切れのよい文章で、次から次へと迫ってくるスタッカートのような調子が読んでいて伝わってくる。一篇の説教で比較して結論づけるのは危険であるが、「兄ジョンが論理家とすれば、弟のチャールズは詩人であった」というサグデンの評は、決して的外れではない。

一七三九年九月、プリストルの野外でチャールズの説教を聞いた人物は、そのスタイルを次のように記録している。「野原の真ん中に据えたテーブルの上に立って、説教者は、その目と両手を天に向けて上げ、非常な熱心さと流暢な言葉で祈りをささげ、それから約一時間の説教でした。あのような説教を聞くのははじめてです。人受けの良いという点では、もつとすぐれた説教を何度も聞いたことがあります。しかし、あのような情熱をあらわにして、人々が生まれながらにして神の前に失われた、無益な罪人であると、真剣に聴衆に訴える説教は、これまで聞いたことがありません。彼は、私たちがキリストを信じる

とき、いかに大いなる変化が私たちの全体に及ぶかを教えていました。……その手には聖書以外に、説教ノートも何も持っていないが、実に豊かな思想と、自由自在な表現力と、快い礼節を持ち合わせている説教者です」(サグデンに引用)。

さて、この説教は、その題「眠っている人よ、目をさませ」にあるように、リバイバルの疾風を強く感じる説教である。(一)で「眠れる者」の状態とそれが呼び覚まされる過程の神学的な説明を手短かに説明した後、説教者は(二)で聴衆が自らの魂を省察すべく、質問を連発していく。「あなたは、キリスト・イエスにあつては、割礼を受ける受けないは大きなことではなく、愛によって働く信仰だけが、また新しい創造だけが大事だ(ガラ5・6、六15)ということを知らないのですか。このうちなる変化が、霊的な生まれ変わりが、死からのよみがえりが、このホーリネスが必要であることがわかりますか」(二・11)。真のキリスト教が教義や伝統や形式にあるのではなく、キリスト体験にあることを説き(二・6、7)、最後は、英国キリスト教の精鋭であるオックスフォードの聴衆に向かって「兄弟たち、今こそ眠りから覚めるべきです」と訴えて締めくくられている。オックスフォードのだけれども、また国教会のだけれども、英国はキリスト教国であるという見解に立っていたのに反し、ウエスレー兄弟は国教会にも英国にも、そして最高学府も、退廃的文化と異教徒の生活がうちに充満しているという見解に立っていた。神学的理解という点でも、英国キリスト教の霊的現状把握という点でも、また魂への情熱という点でも、兄のジョン・ウエスレーと一つとなつてリバイバルを率いていたチャールズの姿が目につかぶ説教である。

説教3「眠っている人よ、目をさませ」

「眠っている人よ、目をさませ。死者の中から起きあがれ。そうすれば、キリストが、あなたを照らされる」。 (エペソ人への手紙五14)

これらのことばを解き明かすにあたって、私は神の助けによって

第一に、ここで言われている「眠っている人々」とは何かを説き、

第二に、「眠っている人よ、目をさませ。死者の中から起きあがれ」との勧告を強調し、

第三に、目をさまし、起きあがった人に与えられる、「キリストがあなたを照らされる」との約束を説明したいと思います。

一

1 第一は、ここで述べられている眠っているとは人間の生来の状態を意味します。それは、アダムの罪が彼の腰から生まれたすべての人々を投げ込んでしまったたましいの深い眠り、無気力、怠惰、愚かさ、自分の本当の状態に対する無感覚を意味します。この世に生まれるすべての人はこの状態に

あり、神の声が彼を目覚めさせるまで、その状態に留まっています。

2 さて「眠る者は夜眠るのです」(一テサ五7)。生まれながらの状態は全面的な暗黒の状態です。「やみが地をおおい、暗やみが諸国の民をおおっている」(イザ六〇2) 状態です。哀れな、覚醒されていない罪人は、他のことについてどのように多くの知識を持っていても、自分自身のことを知りません。この点において、「その人はまだ知らなければならぬほどのことも知ってはいないのです」(一コリ八2)。彼は自分が墮落した霊であり、この世における唯一の仕事は、自分の墮落した状態から回復すること、また自分の造られたときに与えられた神の似姿を取り戻すこと、であることを知りません。彼は「どうしても必要なことは一つだけ」(ルカ一〇42) であること、すなわち、内なる全般的な変化、全面的な更新のはじまりである「上からの誕生」(ヨハ三3、これはバプテスマの比喩です)と、霊とたましいと体のきよめ(一テサ五23)——これがなければ「だれも主を見ることができません」(ヘブ一二14)——とを認めようとしません。

3 その人はあらゆる病気に満ちているのに、完全に健康であるかのように考えています。悲惨と鉄の枷につながれているのに、自分は幸福で、自由であると夢みているのです。「強い人」すなわち悪魔が「十分に武装して」(ルカ一一21) 彼のたましいを占領しているのに、「平安だ、平安だ」(エレ六14)と言っています。地獄が彼を迎えるために下から上ってきているのに、もう引き返すことのできない穴が彼を呑みこもうと口を大きく開いているのに、彼は眠りつづけ、休んでいきます。火が彼の回りに燃えているのに、彼はそれを知りません。それが彼を燃やしているのに、心に留めません。

4 ですから、眠っている人々とは、自分の罪の内に留まっていることを良しとして、墮落した状

態のままにいる人、神の似姿を持たないままで生き、また死に至る罪人、自分の病気のこともその唯一の治癒のことも知らない人、「必ず来る御怒りをのがれるように」(マタ三7)との神の警告の声を決して聞いたこともなく、心にとどめたこともない人、自分が地獄の火の中にいることを決して知らず、また、たましいの底から真実に「救われるためには、なにをしなければなりませんか」(使徒一六30)と叫んだことのない人と理解しています。(願わくは、私たちすべての者がこれを理解しますように。)

5 たとえこの眠っている人が外面的に邪悪でなくとも、その眠りは非常に深いもので、それが「冷たくもなく、熱くもない」(黙示三15) というラオデキヤ的な心の持ち主であれ、先祖の宗教を告白している、静かで、理性的で、つまずきを与えない、善良な性質を持った人であれ、また熱心で、正統的で、「私たちの宗教の最も厳格な派に従って、パリサイ人として生活して」(使徒二六5) いる人であれ、その人の眠りは深いものです。すなわち、聖書の記述によれば、彼は自分を義とする人、自分が神に受け入れられる根拠として「自分自身の義を立てよう」と(ロマ一〇3) 努力する人です。

6 これこそ「見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者」(二テモ二三5)、いや、おそらく「その実」を軽んじる人、それが見いだされるところではいつでも、それを単なるぜいたくや幻想として軽蔑する人です。それでありながら、このあわれな自己欺瞞者は神に感謝しながら、自分が「ほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを感謝し」(ルカ一八11) ています。確かに、彼はいかなる人に対しても何の悪いこともしていません。

ん。彼は「週に二度断食し」あらゆる恵みの手段を守り、教会にも聖礼典にも忠実で、「受けるものはみな、その十分の一をささげ」（ルカ一八12）、なし得る善はすべて行っています。彼は「律法による義についてならば非難されるところのない者です」（ピリ三6）。しかし彼は敬虔を持っていないがその力を持たず、宗教を持っていないがその精神を持たず、キリスト教を持っていないがその真理といのちを持っていないのです。

7 しかしこのようなクリスチャンが人々の間でどのように高く評価されているにせよ、彼は自分が神の前では忌まわしい者にしか過ぎず、神の御子がきのうも、きょうも、どこしえまでも、「偽善の律法学者、パリサイ人たち」（マタ一三13）と宣告されたのろいを相続する者となっているのを知らないでしようか。その人は「杯や皿の外側はきよめるが」（マタ二三25）、その内側はあらゆる汚れに満ちています。「邪悪なものが、彼に取りついて」（詩篇四一8）いて、その結果、「その心には破滅があるのです」（詩篇五9）。主は彼を的確に「白く塗った墓」にたとえられました。「その外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱい」（マタ二三27）です。たしかに骨はもはや枯れてはいません。筋と肉が生じ、皮膚がその上をおおっています。しかし、その中に息はないのです（エゼ三七8）。生きた神の霊がありません。そして「キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません」（ロマ八9）。「もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら」（同）、「あなたがたはキリストのものです」（一コリ二三）。

8 これがここで語られている眠っている人のもうひとつの特色です。彼は自分では知らないかも知りませんが、死の中にいるのです。彼は神に対して死んでおり、「罪過と罪との中に死んでいた者」

（エペ二）です。「肉の思いは死である」（ロマ八6）からです。「ちようとひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死が全人類に広がった」（ロマ五12）と記されているように、一時的な死だけでなく、霊的な死、永遠的な死もたらされたのです。神はアダムに「それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ」と言われました。肉体的に死ぬと言うよりも（さもなければ、彼はその時死んでいたでしょう）、霊的に死んだのです。あなたはあなたご自身の生命を失う、あなたは神に対して死に、あなたのいのちと幸福の源である神から分離される、という意味なのです。

9 このようにして、まず私たちのたましいの神との生命的な結合は消失してしまいました。それは私たちが生来のいのちを持っていないが、霊的な死の中にいる限りはそうなのです。そして、第二のアダムが私たちを活かす霊となり、罪と快楽と富と誉れの中に死んでいる者をよみがえらせてくださるまで、私たちはそこにとどまっています。しかしどのような死んだたましいでも生き返る前には、「神の子の声を聞く」（ヨハ五25）のです。彼は自分の失われた状態に気づき、自分に対する死の宣告を受け入れます。彼は自分が「生きてはいても」、神と神に關するすべてのことに対して「もう死んだ者」（一テモ五6）であることを知るようになり、死んだからだが生きている人の役割を果たすことができないのと同じように、生きたクリスチャンとしての行為をなすことができないと知るようになります。

10 最も確かなことに、罪に死んでいる人は、霊的な「良い物と悪い物とを見分ける感覚」（ヘブ五14）を持っていません。「目がありませんが、耳が聞こえない……耳が聞こえながら聞かない」（マコ八18）のです。彼は「主のすばらしさを味わい、これを見つめる」（詩篇三四8）ことをしません。「いまだかつ

て神を見た者はいない」(ヨハネ18)し、その「御声を聞いたこともなく」(ヨハ537)、「いのちのこ
とば」を「手でさわった」(1ヨハ1)者もありません。イエスの御名は「注がれる香油」(雅歌1
3)や「没薬、アロエ、肉桂のかおりを放つ」(詩篇四五8)着物のようにむなしのです。死の中に
眠っているたましいは、このような種類の対象をいっさい悟ろうとしません。彼の心は「感覚をはる
かに越えて」おり、これらのことをひとつも理解しないのです。

11 従って、霊的な感覚も、霊的な知識への糸口も持っていないのですから、生来の人は神の御霊
に関することを受け入れることができません。彼はそれを受け入れることができないので、霊的にわ
きまえられることは何であつても、彼の目にはおろかで見えるのです。彼は霊的な事柄に関して全く
無知であることに満足しているだけでなく、霊的な事柄のあることすら否定しています。霊的な感覚
すら愚の骨頂なのです。彼は言います、「これらのことはどうして知り得るのですか」と。だれであつ
ても、自分が神に対して生きていようと、言うことをどうして知ることができようか。あなたが自
分の体が生きていると知っているのと同じように知ることができようか。信仰はたましいのい
のちです。もしあなたのうちにこのいのちが宿っているなら、あなたはあの *δαίμων* *Δεσποτός* (聖霊
の証し)、神からの自覚、「神のあかし」を持っています。それは人間によるあかしよりもはるかに多
く、大きいのです。これ以外に証拠となるしは必要ではありません。

12 「私たちが神の子であることは、(御霊)自身(が) 私たちの霊とともに、あかししてください」
(ロマ八16) ということをもし知らなかったら、あなたは未だあわれな目覚めていない罪人ですから、
神がその現れと力によって、自分が悪魔の子であることを強く示してくださいますように。ああ、私

が預言するとき、「音」と「どろき」があり、「骨と骨とがたがいにつながる」(エゼ三七7)りますよ
うに。「息よ。四方から吹いて来い。この殺された者たちに吹きつけて、彼らを生き返らせよ」(エゼ
三七9)。心を頑なにして聖霊に逆らつてはなりません。聖霊は、あなたが「神のひとり子の御名を信
じなかったので」(ヨハ三18)、「罪について(あなたがたに)その誤りを認めさせる」(ヨハ一六8)お
方です。

二

1 ですから、「眠っている人よ。目をさませ」。神は今、私の言葉によってあなたを招き、墮落し
た霊であるあなたに、自分自身の本当の状態を知るように願っておられます。あなたにとって、地上
における唯一の関心事は、「いったいどうしたのか。寝込んだりして。起きて、あなたの神にお願
いなさい。あるいは、神が私たちに心を留めてくださつて、私たちは滅びないですむかもしれない」
(ヨナ一6)ということ。強い嵐があなたのまわりに吹きまくり、あなたは滅びの深み、神の審き
の淵に沈みつつあるのです。もしこれから逃れたいと願うのなら、あなたをその審きに投げ込みなさ
い。「もし私たちが自分をさばくなら、主にさばかれることはありません」(1コリ一31参)。

2 目覚めなさい。目覚めなさい。この瞬間、立ち上がりなさい。「あなたが主の手から、憤りの杯
を飲」(イザ五17)まないために。「私たちの正義」であられる主(エレ二三6)、「救うに力強い」
(イザ六三1)主をとらえるように努めなさい。「ちりを払い落とし」(イザ五二2)なさい。多少なり

とも、神による脅威の地震があなたを震わせてくださいますように。目をさましておののく看守とともに、「救われるためには、何をしなければなりませんか」(使徒一六30)と叫びなさい。神の賜物であり、神の御霊の働きによる信仰をもつて主イエスを信じるまで安んじてはなりません。

3 私がだれよりも語りかけたいのは、この勧告とは無関係であると思っただけあなたに對してです。「私にあなたへの神のお告げがあります」(士師三〇)。主の御名によって私は「必ず来る御怒りのがれるように」(マタ三七)警告します。ああ、汚れたたましいよ、罪に定められたペテロと自分を重ね合わせてごらんなさい。彼は暗い牢獄の中で、兵卒たちの間に、二つの鎖で縛られ、扉の前では番兵たちが牢獄を監視していました。これらの恐ろしい状況の中で、あなたは深く眠っているのです。あなたは悪魔の腕の中で、滅びの穴の縁で、永遠の滅亡の入り口で、深く眠っているのです。

4 ああ、「主の御使いが現われ、光が牢を照らし」(使徒二二七)てくださいますように。また全能的御手が「急いで立ち上がりなさい。帯をしめて、くつをはきなさい。上着を着て、私について来なさい」(同七)という声とともにあなたを引き起こしてくださいますように。

5 永遠の霊であるあなたよ、世的な幸福という夢から目をさましなさい。神はあなたをご自分のために造られたではありませんか。とすれば、あなたは神にあつて憩うまでは、平安を得ることはできないはずです。ここはあなたの住み家ではありません。さまざまに憩っている者よ、立ち返りなさい。あなたの箱舟に急いで戻りなさい。この世に住処を作ろうなどと考えるはなりません。あなたは「地上での」「異国人であり、居留している者」(一歴代二九15)、はかない被造物にすぎず、まさに不変の世界へと乗りだそうとしているところなのです。急きなさい。永遠が迫ってきています。永遠は今の

瞬間に決定されるのです。すなわち、幸福な永遠か、悲惨な永遠かが決まるのです。

6 あなたのためにはどのような状態にありますか。私が話している間にも、神があなたのためを求められるとしたら、あなたは死と審判に直面する用意がありますか。あなたは「あまりきよくて、悪を見」(ハバ一13)ない目を持っておられる神の前に立つことができますか。あなたは「光の中にいる、聖徒の相続分にあずかる資格」(コロ一12)を持っていませんか。「勇敢に戦い、信仰を守り通しました」(二テモ四七)か。「どうしても必要な一つだけ」(ルカ一〇42)を獲得しましたか。神のみかたち、すなわち、「真理に基づく義と聖」(エペ四24)を回復しましたか。「古い人を脱ぎ捨て、新しい人を身に着」(エペ四22、23)しましたか。キリストを着ていますか。

7 あなたは灯火に油を持っていますか。恵みを心に持っていますか。あなたは「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛して」(マコ一二30)いますか。キリスト・イエスにある心は、本当にあなたの心ですか(ピリ二5英訳)。本当のクリスチャンですか。すなわち、「新しく造られた者」ですか。「古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなつて」(二コリ五17)いますか。

8 あなたは「神のご性質にあずかる者とな」(二ペテ一4)つていますか。「もし捨てられる者でなければ、イエス・キリストがあなたがたの中にいらっしゃるの知らないのですか」(二コリ一三5英訳)。「神は私たちに御霊を与えてくださいました」が、「それによって、私たちが神のうちにおり、神も私たちのうちにおられること」(一ヨハ四13)を知っていますか。「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる聖霊の宮で」(一コリ六19)あることを知らないのですか。あなたがたは「御

国を受け継ぐことの保証」(エペ一14)である「あかしを自分の心の中に持って」(一ヨハ五10)いますか。「あなたがたは、贖いの日のために」「約束の聖霊をもって証印を押され」(エペ四30、一13)ていますか。「信じたとき、聖霊を受けましたか」(使徒一九2)。あるいは、聖霊のあることすら知らず、この質問に耳を傾けてはいませんか。

9 もしこれがあなたのつまずきとなるなら、あなたはクリスチャンではなく、クリスチャンとなることを願ってさえおられないことを、たしかに知っていたいただきたいのです。そうです、「あなたの祈りが罪とな」(詩篇一〇九7)っているのです。しかもあなたは、聖霊を受けるといふことがあることすら信じないで、「聖霊の靈感」を求めて祈ることによって、今、このとき、厳かそうに神を愚弄しているのです。

10 しかし、私は神のことばと英国国教会の權威に基づいて「信じたとき、聖霊を受けましたか」という同じ質問を繰り返さなければなりません。もし聖霊を受けていなければ、あなたはまだクリスチャンではありません。なぜならば、クリスチャンとは「聖霊と力を注がれた」(使徒一〇38)人だからです。あなたはまだ「きよく汚れのない宗教」(ヤコ一27)にあずかる者となっていない。あなたは宗教とは何であるか、知っていますか。それは神の性質、人のたましいの中にある神のいのち、にあずかることです。それは「キリストが心の中に形づくられること」(ガラ四19参)、「あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望み」(コロ一27)、幸福と聖き、天国が地上で始まること、「あなたがたのただ中にある」「神の国」(ルカ一七21)、「飲み食い」という外面的なことではなく、「義と平和と聖霊による喜び」(ロマ一四17)、あなたのたましいにもたらされた永遠の王国、「人のすべての考えにま

さる神の平安」(ピリ四7)、「ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜び」(一ペテ一8)のことです。

11 あなたは、「キリスト・イエスにあつては、割礼を受ける受けないは大事なことでなく、愛によって働く信仰だけが、また新しい創造だけが大事なのです」(ガラ五6、六15)ということを知らないのですか。この内的変化・霊的な生まれ変わり・死からのよみがえり・このホーリネスが必要であることがわかりますか。あなたは「聖くなければ、だれも主を見ることができ」(ヘブ一12)ないと徹底的にうなずいていますか。あなたはそれを得ようと努めていますか。「あなたがたの召されたことと選ばれたことを確かなものとし」(一ペテ一10)ていますか。「恐れおののいて自分の救いを達成して」(ピリ二12)いますか。「努力して狭い門からはいつて」(ルカ一三24)いますか。自分のたましいのことに熱心ですか。また、心を探ってくださいとさるお方に対して「ああ神よ、あなたは私の慕い求めているお方です」(ヨブ六8参)、「主よ、あなたはいつさいのことをご存じです。あなたは私がおなたを愛そうとしていることをご存じです」(ヨハ二17参)と言うことができますか。

12 あなたは救われたいと願っています。しかしあなたのうちにある希望について説明をすることができませんか(一ペテ三15参)。それはあなたが他に害を与えたことがなかったからですか。あるいは多くの善を行ったからですか。またほかの人々のようではなく(ルカ一八11参)、賢明で、学識があり、正直で、道徳的に善良であるからですか。人々から評価され、良い評判の持ち主だからですか。ああ、これらすべてはあなたを決して神に近づけることをしないでしよう。それらは神の前では、息よりも軽いのです。あなたは神が「遣わされたイエス・キリストを知って」(ヨハ一七3)おられますか。主

はあなたに「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることもないためです」(エペ二・8、9)と教えてくださいましたか。あなたは、あなたの希望のすべての土台が「イエス・キリストは、罪人を救うためにこの世に來られた」(1テモ一・15)という真実なことを受け入れましたか。あなたは、「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために來たのです」(ルカ五32)、また「わたしは、滅びた羊以外のところには遣わされていません」(マタ一・524)ということの意味が判りましたか。あなたは(聞く耳を持つている人は悟りなさい)すでに失われ、死んで、呪われている者ですか。あなたは自分の渴きを知っていますか。自分の欠乏を感じていますか。あなたは「心の貧しい者」(マタ五3)ですか。神を求めて悲しみ、慰められることを拒んでいませんか(マタ五4参)。放蕩息子は「我に返り」(ルカ一五17)しましたか。そして豚の残したいなご豆で腹を満たしている人々(ルカ一五16参)によって、あなたは「気が狂った」(マル三21)と言われても満足していますか。あなたは「キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願」っていますか。その結果、「迫害を受ける」ことをよしとしていますか(IIテモ三12)。「人の子のために、ありもしないことで悪口雑言を言われたりする」(マタ五11参)ことがありますか。

13 ああ、あなたがこれらすべての質問の中に死者を自覚めさせる声を聞き、「岩を砕く金槌のように」(エレ二三29)なみことばを感じ取れますように。「きょう、もし御声を聞くならば」「きょうと言われている間に」「心をかたくなにしてはならない」(ヘブ三13、15)のです。いま、靈的な死の状態にあり、しかし永遠的な死の状態にはない「眠っている人よ。目をさませ」。あなたが失われた状態にある

ことを自覚して「死者の中から起き上がれ」。罪と死の中にある古い仲間から離れなさい。イエスに「ついて来なさい。死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい」(マタ八22)。「この曲がった時代から救われなさい」(使徒二40)。「彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ」(IIコリ六17)ると主は言われます。「そうすれば、キリストが、あなたを照らさるれ」(エペ五14)ます。

三

1 最後に、私は次の約束を解説しましょう。主の召しに従う人はだれであっても、主のみ顔を空しく求めることにはならないからです。これは、何という勵ましでしょう。もしあなたがいま、「目をさまし、死者の中から起き上がる」なら、主は必ず「あなたを照らして」くださいます。「主は恵みと栄光を授け」(詩篇八四11)てくださいます。主の恵みをこの地上において、また主の栄光の光をあなたが「しほむことのない栄光の冠を受ける」(Iペテ五4)時に授けてくださいます。「そのとき、暁のようにあなたの光がさしいで」(イザ五八8)、「あなたの暗やみは、真昼のようになり」(イザヤ五八10)ます。「光が、やみの中から輝き出よ、と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです」(IIコリ四6)。「主を恐れる者には、義の太陽が上り、その翼には、癒しがあり」(マラ四2参)ます。その日、あなたにはこう言われます。「起きよ。光を放て。あなたの光が来て、主の栄光があなたの上に輝いているからだ」(イザ六〇一)。キリ

ストは「ご自身をあなたのうちに現してください。主は「まことの光」(ヨハ一9)であられるからです。

2 神は光であられ(一ヨハ一5参)、待ち望むすべての覚醒された罪人にご自身をお与えになります。あなたは「生ける神の宮」(二コリ六16)となるのです。そしてキリストは「信仰によってあなたがたの心のうちに住ん」でくださいます。「また、愛に根ざし、愛に基礎をおいているあなたがたが、すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどあるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができ」、「こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされ」(エペ三17、19)るに至ります。

3 兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらん下さい。私たちは「御霊によって神の御住まいとなる」(エペ二22)べく召されたのです。また私たちのうちに宿っておられる御霊によって、聖徒となるべく(ロマ一7参)、また「光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格を与え」(コロ一12)られるべく召されたのです。ですから、「尊い、すばらしい約束が私たちに与えられ」(二ペテ一4)ているのです。事実は、信じる私たちに、与えられているのです。なぜならば、「私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊」——これこそすべての約束の総計です——「を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜ったものを、私たちが知るためです」(一コリ二12)。

4 むかし、いろいろな方法で約束されていた御霊は、キリストが栄光を受けられて以来、十分に与えられているものです。かつて先祖たちになされた約束を、神は成就されました。「わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませる」(エゼ三二六27)。「わたしは潤いのない地に

水を注ぎ、かわいた地に豊かな流れを注ぎ、わたしの霊をあなたのすえに、わたしの祝福をあなたの子孫に注ぐ」(イザ四四3)。

5 あなたがたすべては、これらのこと、すなわち、罪の赦しと聖霊の賜物との証人です。「できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできるのです」(マル九23)。「あなたがたのうち、だれが主を恐れ」ていながら「暗やみの中を歩き、光を持たない」(イザ五〇10)のですか。私は主の名によって尋ねます。あなたは「主の御手が短く」(イザ五九一)ないと信じますか。今も「救うに力強い」(イザ六三二)方であると信じますか。「きのうも、きょうも、いつまでも同じで」(ヘブ一三8)あられると信じますか。主が今も、「地上で罪を赦す権威を持って」(マタ九6)おられると信じますか。「子よ。しっかりと祈いなさい。あなたの罪は赦された」(マタ九2)。神はキリストのゆえにあなたを赦してくださいましたのです。「あなたがたは、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れ」(一テサ二13)なさい。そうすれば、あなたは、「価なしに義と認められるのです」(ロマ三24)。またあなたは、イエスに対する信仰によって潔められ、「神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということ」(一ヨハ五11)にあなたの「確認の印を押した」(ヨハ三33)のです。

6 兄弟たちよ、どうか確信をもって語ることを私に許し、教会の中で最も小さい評価を受けている者の「勧めのことばを受けてください」(一ヘブ一三22)。これらのことが事実であることを、あなたの「良心も、聖霊によってあかししています」(ロマ九一)。もしそうであるなら、「あなたがたはずでに主がいつくしみ深い方であることを味わっているのです」(一ペテ二3)。「永遠のいのちとは、唯一

のまことの神であるお方と、神が違わされたイエス・キリストとを知ることです」(ヨハ一七三参)。
この体験的な知識、これだけがまことのキリスト教です。キリストの御霊を受けた者がクリスチャン
なのです。御霊を受けていない者はクリスチャンではありません。御霊を受けていながら、それを知
らない人はありません。なぜならば、(主は言われます、その方が来られる)「その日には、わたしが
父におり、あなたがたがわたしにおり、わたしがあなたがたにおることが、あなたがたにわかりませ
(ヨハ一四二〇)。「その方は真理の御霊です。世はその方を受け入れることができませぬ。世はその方を見
見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたが
たとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです」(ヨハ一四一七)。

7 世はこの方を受け入れることができず、むしろ完全に御父の約束に反抗し、これを汚すことによ
よって、拒絶したのです。これを言い表すことをしないすべての霊は、神から出たものではありません
ん。そうです、「それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今
それが世に来ているのです」(一ヨハ四三)。聖霊の霊感を否定する者はだれであつても反キリストで
す。また内住される神の御霊がすべての信仰者の共通の特権であり、福音の祝福であり、いい尽くせ
ない賜物であり、普遍的な約束であり、まことのクリスチャンの基準であることを否定する者も反キ
リストです。

8 「われわれは神の御霊の助けを否定していない。ただこの霊感、すなわち、聖霊を受け聖霊を
知、知ることを否定しているだけだ。健全な宗教に何の関わりも持っていないとわれわれが主張している
のは、この御霊を感じること、御霊に動かされること、御霊に満たされることだけだ」と言うことは、

彼らを助けることにはなりません。しかしこれを否定する「だけだ」と言うことによつて、あなたは
聖書全体、すなわち、神のすべての真理と約束と証しとを否定しているのです。

9 英国国教会には、このような悪魔的な区別は存在しません。ただ単純に「キリストの御霊に感
じる」とか、「聖霊に動かされる」とか、「われわれが救いを得られるのは、イエスの御名のみによる
ことを知つて、うなづくこと」と言っているだけです。この教会が教えていることは、「聖霊の感動」
を求めて祈るように、すなわち、「われわれが聖霊に満たされるように」と言うことです。そうです、
しかも教会のすべての長老は、「手を按くことによつて聖霊を受ける」と表白しています。ですから、
これらのいづれかを否定することは、結果的には英国国教会を拒絶すること、それはキリスト教の啓
示全体を拒絶することにつながります。

10 しかし、「神の知恵」は、いつでも人にとつては「愚か」(一コリ一二一、二三)です。ですから、
福音の偉大な奥義が、むかしの日のように今も「賢い者や知恵のある者には隠」(マタ一一二五)されて
おり、至るところで単なる狂乱として拒否され、嘲られ、非難され、またこれに忠実に従おうとする
人々が狂人や熱狂主義者という名前の烙印を押されていることは、ふしぎではありません。これは来
るべき「背教」(二テサ二三)、すなわち、あらゆる階級や種類の人々の全般的な背教のことで、それ
はずでに地上が増え広がっていることを覚えます。「エルサレムのちまたを歩き巡り、さあ、見て知る
がよい」(エレ五一)。一人でも、彼の神である主を心を尽くして愛し、力を尽くして仕えるような人
を見つけることができるでしょうか。私たちの国土(遠くを見るまでもなく)は、はびこる不敬虔の
ためにいかに嘆いていることでしょうか。あらゆる種類の罪悪が日毎に行われていることでしょうか。

しかも公然と罪を犯し、自分たちの恥を誇りとしている人々によって、何にもとがめられることなく、行われているのです。だれが私たちの国土を洪水のように覆っているのろい、ののしり、汚しごと、冒瀆、偽り、中傷、悪口、安息日破り、むさぼり、酩酊、復讐、淫行、姦淫、さまざまの不潔、欺き、不正、圧迫、搾取を数え上げることができませんか。

11 さらにこれらの大きな冒瀆から自分自身を深く守ってきた人々の間でさえ、怒りや誇り、怠惰や怠慢、柔弱さやめめしさ、ぜいたくや放縦、どん欲や野心、賞賛への渴望、世俗への愛、人に対する恐れが、いかに多く見いだされることでしょうか。これに反して、まことの宗教はいかに乏しいことでしょうか。神が私たちに命じられた通りに、神を愛し、隣人を愛している人をどこに見いだせるでしょうか。一方では、敬虔の形だけを持っている人々があり、他方では、その形すら持っていない人々があります。そこには開いた墓、白く塗った墓があります。その結果、事実、人々が公の場に集まっている会合を熱心に観察する人は（残念ながら教会に集まっている人々も例外ではないと思いますが）容易に認めることですが、「彼らの一部がサドカイ人で、一部がパリサイ人」（使徒二三6）、前者は、「復活はなく、御使いも霊もない」（使徒二三8）というほど宗教に関してほとんど無関心であり、後者は、まことの信仰もなく、神に対する愛も、聖霊による喜びも（ロマ一四七参）ないままに、宗教を外面的な行事の無為な繰返しという、生命のない形式としてしまっています。

12 願わくは、神が私たちをこのような状態から救い出してくださいませよう。「兄弟たち。私心の望みとし、また彼らのために神に願い求めているのは、彼ら」が、この不敬虔の氾濫から「救われ」（ロマ一〇一）て、その高慢な波がとどめられることです。しかし、本当にそうなるでしょうか。

神も私たちの良心も知っているように、そうはなりません。私たちは自分自身を深く保っては来ませんでした。私たちもまた腐敗し、汚れた者です。これ以上霊的理解を得ている人はほとんどいません。霊とまことをもって神を礼拝する人はほとんどいません。私たちがまた「心定まらず、たましいが神に忠実でない世代の者」と（詩篇七八8）なってしまうてはいるのです。主はたしかに私たちを「地の塩」となるように任じられました。しかし、「もし塩が塩けをなくしたら、もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです」（マタ五13）。

13 「これらに対して、わたしが罰しないだろうか。——主の御告げ。このような國に、わたしのたましいが復讐しないだろうか」（エレ五9参）。そうです、私たちは知っています。主がすみやかに剣に向かつて、「剣よ。この地を行き巡れ」（エゼ一四17）と語りなされることを。主は悔い改めるために長い時間を与えておられます。主はこの年も私たちを許してくださいませ。しかし、私たちに雷を通して警告と覚醒を与えておられます。主の審きは地にあまねく及んでいます。さらに最も重大なこととは、「悔い改めて、初めの行ないをしないならば」、福音の真理性と単純さである宗教改革の原理に立ち返らないならば、「主は私たちのところに来て、私たちの燭台をその置かれた所から取りはずして」（黙示二5参）しまわれるということです。あるいは私たちが自身に対する神の忠告を拒否し、主の使者たちを追いつくことによって、ほとんど「罪の目盛りの不足分を満たし」（マタ二三32）てしまったのかもしれませんが。

14 ああ、神よ。「激しい怒りのうちにも、あわれみを忘れないでください」（ハバ三2）。私たちの破壊ではなく、私たちの改革を通して、栄光を顕してください。「杖とそれを定められたお方の声を」

(ミカ六九英訳) 聞こうではありませんか。今や「そのさばきは全地にわたって」(一歴代一六14) います。「世界の住民が義を学びます」(イザ二六九) ように。

15 兄弟たち。「大きな角笛が鳴り渡り」(イザ二七13)、私たちの土地が血の畑になる前に、今は眠りからさめる絶好の機会ではありませんか。物事が私たちの目から隠されてしまう前に、平和を促進するよう急ごうではありませんか。恵み深い主よ。「どうか、私たちに対する御怒りをやめてください」(詩篇八五4)。ああ、主よ。「天から目を注ぎ、よく見て、このぶどうの木を育て」(詩篇八〇14)、訪れの時を知らせてください(ルカ一九44参)。「私たちの救いの神よ。御名の栄光のために、私たちを助けてください。御名のために、私たちを救い出し、私たちの罪をお赦しください」(詩篇七九9)。「私たちを生かしてください。私たちは御名を呼び求めます。万軍の神、主よ。私たちをもとに戻し、御顔を照り輝かせてください。そうすれば、私たちは救われます」(詩篇八〇18、19)。

「どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン」(エペ三20、21)。

8110/2007

99.5.26 week

説教 4

聖書的キリスト教

Scriptural Christianity

訳者ノート

前回のオックスフォード説教(説教2)より三年後、一七四四年八月二四日、最後の大学講壇の当務がウエスレーに回ってきた。リバイバルの勢いは止まるところを知らず、すでにメソジスト・ソサエティーはウエールズにも進出し、この年の六月には、はじめての年会が開かれている。

この日の説教の様子を、当時まだオックスフォードの大学生であり、後に著名なヘブル語の学者になるベンジャミン・ケニコット(Kennicott)が詳細に記しているので、長文ではあるが参考までに引用しよう。

「金曜日、聖バルトロマイの記念日、リンカーン・カレッジの研究員である、かの有名なメソジスト、ウエスレー氏が大学チャペルで説教した。現在、非常な関心の的であり、将来その影響力はさらに増大するであろう、この人物の説教の様子を特に注意して記すことにする。……ウエスレー氏は、聖マリヤ教会に十時に到着。チャペルには、大学の総長、各カレッジの学生監、ほとんどの寮監、また膨大な数の学生、それに大学外からも彼に従う多くの男女が集っていた。……彼が講壇に上がるとき、私は彼の挙動を見守った。背が高くもなく、太つてもいない。最も後者はメソジストとして失格なのである。彼の黒髪は、なめらかで、二つにきちんと分けられていた。加えて、その表情には独特な静けさがあり、並の人物でないことは明らかであった。その祈りは、ソフトで短く、大学の雰囲気になじんでいた。聖句は使徒の働き四三、「そして、彼らはみな、聖霊に満たされた」である。ここで彼は声を上げ、聖句をゆつくりと、強調しながら読み上げた。説教の序で、

ウェスレー氏は、この聖句に含められることすべては、使徒たちと聖霊の特別な賜物を受けた人々に限らず、聖霊を通常の意味で受ける人々のすべてに当てはめられるべきであると述べた。また事実初代教会においては、自らの生涯を変貌させる他は、さして特別な使命を負っていない人々、すなわち聖霊の通常の働きのみを必要としている人々が、その回心の経験を新たにし、キリスト者としてのあり方を完成させるために、この聖句に約束されている恵みを必要として述べた。初代教会において、個々のキリスト者に、そのことが求められているとすれば、すべての時代のキリスト者にそれが当てはまるといふのが彼の論理である。説教はまず、キリスト教の影響力が、個人の体験から始まっていること、次に時代から時代へキリスト教が進展し、最後にはキリスト教信仰が全世界に対して勝利することを、解説した。これら三つのポイントの解説を聞きながら、ウェスレー氏が実に健全な学者であるとの印象を受けた。しかし、その情熱は並々ならぬものがあった。ここから説教者は、明白かつ実地的な結論と自称する事柄へと話を進めた。これまで、この結論を引き出そうと組み立ててきたのであろう。その情熱の炎を燃やし、またたつぷりの皮肉を込めて語った。私は、この皮肉が説教の品性を損なったと思っている。賛同する部分もあるが、その話に嫌悪感を抱いた。第三のポイントで、世が完全にキリストへと覆る幸せを説いたまではよかったのだが、「さあ、この聖書的キリスト教をどこに見いだすことができるのでしょうか。英国はキリスト教国家と言えるでしょうか。オックスフォードはキリスト教の町と言えるでしょうか」と、説教者は問う。無論、彼の答えは「否」である。学生ほとんどが「軽率な世代」であると云ってのけるような自由さは歓迎だ。しかし、キリスト教の栄光のためになされてきた数々の輝ける灯火がこの町にあることを考

えると、彼の聖なる審判は、過剰に厳しく強いものであり、その愛は許容力に乏しいと感じた。しかし、そこまでは許されたとしても、最後に大学の様々な罪をまとめた後で、いかにも厳粛なポーズで目を天に上げ、「主よ、ここから先は、あなたに、あなたの御手におまかせします。」と結んだことは、実に惜越な見せかけの祈りのようで、大きなショックを引き起こした。この結びと、オックスフォードがキリスト教の町でなく、またこの国がキリスト教国家でないとの主張が、説教の中で最も反感をかった部分であった」(「メソジスト・マガジン」1866, January, に活字となる)。

リバイバルの聴衆とは異なり、実に冷静な、いや、冷めた反応がウェスレーを待っていたわけである。説教の後で、大学側は彼の説教原稿の提出を要求した。この晩、ウェスレーは日誌にこう記している。「私は聖マリヤ教会で説教した。おそらくこれが最後であろう。それでもかまわぬ。私はこれで彼らの血の責任から解かれた。私は腹藏なく語ったのだ」。この短い文の中に、ウェスレーの気持ちを読みとることができよう。それは、大学権力に媚びることなく、反感を覚悟で、福音を「聖書のキリスト教」と題してストレートに語ったという満足感である。またそこには一抹の悲哀も感じられる。今後、彼はオックスフォードの講壇に立つことはない。十数年慣れ親しんできた最高学府との決別は、学的なカリスマを持つウェスレーにとって簡単なことであつたはずはない。その彼は、今やプリストルやロンドンの野外で大衆を相手に説教し、大衆を集めてソサエティーを組織し、宣教の最前線に労している。

さて、ウェスレーが自ら説教集を出版したとき、その配列の1から4までは(説教3チヤールズのものを含めて)、いずれもオックスフォード大学での説教である。新ウェスレ

―全集の説教4巻を編集したアウトラーは、最前列に置かれた四つの大学説教を―まとまりとみなして、一つの序文をつけているが、その最後に、このまとまりの意義を次のように述べている。

「これら、最前列に並べられた大学説教は、説教集全体の中で一つのブロックとして、固有な働きをしている。これらは、ウエスレーのメッセージを預言者的な姿で語り、彼の忠誠がアカデミーから大衆へと移り、「飾り気のない真理を飾り気のない人々に」をモットーとした説教者として自らの使命を新しく自覚したことを示している。そして、この一群のメッセージは、後の彼の説教と何ら矛盾がないことがわかる。リバイバル胎動期、聖マリヤ教会におけるメッセージは、後のモアフィールド（ロンドンの大衆地区）でのメッセージと同じである。このようにして、これら四つの説教は、説教集という大きな企画に付けられた、多面的なカルテットによる前奏曲として、その独特な役目を果たしている」(I・115,116)。

説教4「聖書のキリスト教」

「一同は聖霊に満たされ」。(使徒の働き四31)

序

1 同じような表現が第二章にも出てきます。そこでは、こう書かれています。「五旬節の日になって、みな(使徒たち、婦人たち、イエスの母、イエスの兄弟たち)一つ所に集まっていた。すると突然、天から、激しい風が吹いてくるような響きが起こり……また、炎のような分かれた舌が現れて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、みな(聖霊に満たされ)(使徒二一、4)。その直接的な結果、集まっていた「バルテヤ人、メジャヤ人、エラム人」や他の外国人たちは、「この物音が起こり」、「それぞれ自分の国のことばで弟子たちが」「神の大きなみわざを語るのを」「聞き」ました。

2 四章では、私たちは使徒たちや兄弟たちが祈って、神に讚美していたとき、「その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされた」と記されているのを見ます。これは、それ以前の例にあったような、目に見える降臨の現象が認められたというのではなく、また「いやしの賜物、奇蹟を行う力、預言、霊を見分ける力、異言、異言を解き明かす力」(Iコリ二二、9、10)が彼らのすべて、あ

るいは彼らのうちのある者たちに与えられたという聖霊の特殊な賜物のことを伝えているのでもありません。

3 これらの聖霊の賜物が、あらゆる時代を通じて同じように留まるのか、あるいは「万物の改まる時」(使徒三二)が近づくとつれてこれらが回復されるようになるのかどうか、ということは、決定する必要のない問題です。しかし心に留めて置くべきは、教会の初期でさえ、神がこれらをきわめて控えめに分け与えられていたということです。「みなが使徒でしょうか。みなが奇蹟を行う者でしょうか。みながいやしの賜物を持っているでしょうか。みなが異言を語るでしょうか」(一コリ二二九、30)。いいえ、決してそうではありません。おそらく千人にひとりもないでしょう。おそらく教会の中で、教師を除いたら、ひとりもないでしょう。しかもその教師も教名も知れません。従って、「一同が聖霊に満たされた」ということは、とらにすぐれた目的のためだけのためです。

4 それは彼らに(あらゆる時代のすべてのクリスチャンにとって本質的であることをだれも否定できません)「キリストの心」(ピリ二五英訳)、聖い御霊の果(その御霊を持たない人は「キリストのものではありません」(ロマ八九)、すなわち、彼らを「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」(ガラ五二二、二三)で満たす心、「自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしま」(ガラ五二四)、その内面的な変化の結果、すべての外面的な義を全うできる心、「信仰の働き、愛の労苦、望みの忍耐」(一テサ一三)をもって「キリストが歩まれたように歩む」(一ヨハ二六)心を彼らに与えるためでした。

5 御霊の特別な賜物に関する好奇心に満ちた、不必要な質問に答えようと時を費やす代わりに、これらの通常の実(これはどのような時代にも残ることを私たちは確信しています)、ひとこと言えば、一般に「キリスト教」と呼ばれる人の子らの間になされている大いなる神のみわざについて、考察を深めてみましょう。ここで言うキリスト教とは、一連の意見や教理の体系を意味しているのではなく、人々の心と生活に関する事柄のことです。このキリスト教を次の三つの明確な観点から考察することは、有益です。

- 一 個人のうち存在し始め、
 - 二 相互の間に広がり行き、
 - 三 地上を覆いつつあるキリスト教
- 最後に、私はこれらの考察を平明で実地的な適用をもって閉じたいと願っています。

一

第一に、キリスト教の起源、すなわち、それがどのようにして個人の間存在し始めたかを考察してみましょう。

1 ペテロが「悔改めと罪の赦し」(ルカ二四四七参)を説教しているのを聞いた人々のうちのひとりが「心を刺され」(使徒二三七)、罪を認め、悔い改め、「イエスを信じた」(ガラ二一六)としましょう。この「望んでいる事がらを保証し」事柄の実体または実質である、「目に見えないものの実証的証拠」(ヘブ二一一参)である信仰、「この神の力を信じる信仰によって」、私たちはただちに、「子としてくだ

さる御霊を受け」(ロマ八15)、「御霊によって、アバ、父、と呼ぶ」(Iコリ二二3参)ことができ、「御霊」ご自身が、私たちの霊とともに、私たちが神の子どもであることを、あかししてくださいます」(ローマ八16参)。そのとき、本当に「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し、私のためにご自身をお捨てになつた神の御子を信じる信仰によるのです」(ガラ二20)と言うことができます。

2 これこそが彼の信仰の実質なのです。すなわち、父なる神の愛の上からの 確証 (evidences) で、それは神の愛する御子を通して、罪人である私たちに与えられ、彼は(神の)「愛する方によって受け入れられた」(エペ一6)のです。そして「信仰によって義と認められ、神との平和を持つ」(ロマ五1)に至りました。そうです、神の「平和が心を支配する」(コロ三15)ようになり、「人のすべての考え (thoughts) にまさる神の平安が、(彼の) 心と思いをすべての疑いや恐れから守っていました」(ピリ四7)。それは「自分の信じてきた方を知って」(IIテモ一12) いるからです。従って彼は「悪い知らせを恐れませんか」(詩篇一一二7参)。なぜならば、彼は主を信じて、「主にあつてしつかりと立つて」(ピリ四一) いたからです。外から受ける危害を恐れることはありませんでした。彼の「頭の毛さえも、みな数えられている」(マタ一〇30) のを知っていたからです。彼は暗黒の力を少しも恐れませんでした。なぜならば、神は日ごとに彼の「足でサタンを踏み砕いてくださる」(ロマ一六20) からです。言うまでもなく、死を恐れることはありませんでした。彼は「世を去って、キリストとともにいること」(ピリ一23) を願っていました。キリストは「その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯、死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださいました」(ヘブ二14、15) のです。

3 従って、彼の「たましいは主をあがめ、(彼の) 霊は、救い主なる神を喜びたたえます」(ルカ一46、47)。彼は「ことばに尽くすことのできない喜び」(Iペテ一8) をもって主を喜びます。主によって神と和解したのです(IIコリ五18)。彼はこの方の「うちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです」(エペ一7)。自分が「神の子どもである」ことを「御霊」ご自身と自分自身の「霊」によって証しされているのを喜び、さらに「神の栄光を望んで大いに喜ん」でいました。それは、神の輝かしい似姿、すなわち、「心の霊において新しくされ、真理に基づいて義と聖をもって神にかたどり造り出される」(エペ四23、24参) ことを望むことです。また「栄光の冠」(Iペテ五4)、すなわち「朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産」(Iペテ一4) を喜んでいました。

4 また彼に「与えられた聖霊によって、神の愛がその心に注がれて」(ロマ五5参) いました。彼は神の子どもですから、神はその御子の御霊をその心に遣わして「アバ、父」(ガラ四6) と呼ばせなさいます。神の赦しの愛について「自分の心の中に持っている」「このあかし」により、また「私たちが神の子どもと呼ばれるために、御父はどんなにすばらしい愛を与えてくださった」(Iヨハ三一) かを見ることによつて、子どもとしての神への愛はますます増大していきました。その結果、神こそが彼の目の願うところ、彼の心の喜ぶところとなり、この世にあつても永遠の世界にあつても、彼のゆずりとなりました。

5 このように、「神を愛する者は、兄弟をも愛さざるを」(Iヨハ四21参) 得なくなりません。しかも、「ことば」でだけでなく、「行いと真実をもって」(Iヨハ三18) です。「もし神がこれほどまでに私

たちを愛してください。わたしたちもまた互いに愛し合うべきです」(一ヨハ四11)と仰いました。そうです、神の「あわれみは造られたすべてのものの上にあります」(詩篇一四五9)から、すべての人を愛し合うべきです。これと同様に、この神を愛する人の愛情は、神のために全人類を包みます。それはまだ肉体にあつて一度も会ったことのない人々や、自分たちが神の「子孫である」(使徒一七29)ということ以上は何も知らない人々を除外しません。それらの人々のためにも御子は死んでくださいました。また悪しき者、感謝しない者、さらには敵対する者、自分を主のゆえに「憎み、迫害し、足蹴にする人々」(マタ五44参)も除外しません。この人々は彼の心と祈りの中に特別な地位を占めていません。彼は「キリストが私たちを愛されたように」(エペ五2)、彼らを愛しました。

6 また「愛は自慢しません」(一コリ一三4参)。愛は、愛の宿っているすべてのたましいを塵につくほどにへりくだらせます。従つて、彼は「心がへりくだっていますから」(マタ一29参)、自分の眼に小さく・いやしく・貧弱に見えました。彼は「人の榮譽を」(ヨハ一二43)求めもせず、受けもしません。むしろ「神からの榮譽を求め」(ヨハ五44参)ます。柔和で、寛容で、すべての人にやさしく、教えられやすくありました。誠実さと真実さは決して彼を離れません。それらは、彼の首に結ばれ、心の板に書きしるされていきました(箴言二三参)。彼は、同じ御霊によつて「あらゆることについて自制し」(一コリ九25)、「乳離れた子のように」(詩篇一三二2)自分のたましいを静めました。彼は「世界に対して十字架につけられ、世界は彼に対して十字架につけられ」(ガラ六14参)、「肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢」(一ヨハ二16)を凌駕しました。同じ全能の愛によつて欲望や高ぶりから、肉欲や虚栄から、野心や貪りから、キリストのうちになくすべての気質から救われていたのです。

7 この愛を心に持っている者が「隣人への悪を行いません」(詩篇一五3参)ということは、容易に信じることができます。彼は故意に、意図的に、いかなる人に対しても害を加えることはなかったでしょう。残虐や害悪から、またいかなる不正で不親切な行動からも全く遠ざかり、同じような注意深さで「彼の口に見張りを置き、彼のくちびるの戸を守つて」(詩篇一四一3参)いました。彼が舌によつて、正義に対して、また憐みと真実に対して、罪を犯すことがないためです。彼はすべての「偽りを捨て」(エペ四25)、虚偽や欺きを捨て、「その口に何の偽りも見いだされません」(一ペテ二22)。かれは「誰をもそしらず」(テト三2)、またそのくちびるから少しも不親切なことが出ることはありません。

8 **彼**は「私を離れては、あなた方は何もすることができないからです」(ヨハ一五5)ということばの真実さを深く認識しており、「絶えず」神から「水を注がれる」(イザ二七3参)必要を覚えて、彼は「毎日」、神のすべてのいましめ、すなわち、神が人に恵みを与えるために定められた手段を守り、「使徒たちの教えを堅く守つて」受け入れやすい心でたましいの食物を受け、「キリストの体にあずかること」を意味する「パンを裂き」、多くの人々によつて献げられる「祈り」と讚美を欠かすことはありませんでした(使徒二42、46、一コリ一〇16)。こうして彼は日ごとに「恵みに成長し」(二ペテ三18参)、力と神を知る知識と神への愛が増大していました。

9 しかも、**彼**は悪から遠ざかるだけで満足しません。彼のたましいは善を行おうとして渴いていました。その心は絶えず「私の父は今に至るまで働いておられます。ですから私も働いているのです」(ヨハ五17)と語ります。私の主は「巡り歩いて良いわざを」(使徒一〇38)なさったのですから、私

も「その足跡に従う」(1ペテ二21)べきではありませんか。従って彼は「機会のあるたびに」(ガラ六10)、もしそれ以上の高い種類の善を行うことができないうとしても、飢えた人々を養い、裸の人々に着せ、みなしごや旅人を助け、病気の人々や牢獄にいる人々を訪問し、助けました。彼は「持っている物の全部を貸しい人たちに分け与え」(1コリ一三3)ます。彼は貧しい人たちのために労し、苦しむことを喜びます。他の人の益となることは何であつても、「自分を捨てる」(マタ一六24)ことを喜びとします。彼らのために自分のものを分け与えることを少しも惜しいと思いません。「あなたがたがこれらの私の兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、私にしたのです」(マタ二五40)という主のことは覚えていたからです。

10 キリスト教の始まった時の状況はこのようでありました。いにしへのクリスチャンはこのようでした。彼らは「祭司長たちや長老たち」の脅かしを聞いたとき、「心一つにして、神に向かい、声を上げて言った……一同は聖霊に満たされた……信じた者の群れは、心と意思を一つにした」(使徒四23、24、31、32)とあります。(その結果、彼らが信じていたお方に対する愛が、彼らに互いに愛し合うようにと迫ったのです)。「だれひとりその持ち物を自分のものと言わず、すべてを共有にしていた」(使徒四32)。それほど彼らは、世界に対して全く十字架につけられ、世界も彼らに対して十字架につけられていたのです。「彼らは心一つにして、使徒たちの教えを堅く守り、パンを裂き、祈りを」(使徒一42参)続けました。また「大きな恵みが……彼らすべての者の上にあった。彼らの中には、ひとりも乏しい者がなかった。地所や家を持っている者は、それを売り、代金を携えてきて、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に従つておのおのに分け与えられた」(使徒四33、35)からです。

個人はよいよ、よい、

一一

1 第二に、このキリスト教が人から人へと広がり、徐々に世界に進んでいったことを見てみましょう。これこそが、キリスト教に関する神の御心でした。神は「あかりをつけて、それを枘の下に置く者はありません。家にいる人々全部を照らします」(マタ五15)と語られました。そしてこのことを主はご自分の最初の弟子たちにこう宣言されました、「あなたがたは、地の塩です……あなた方は、世界の光です」(マタ五13、16)。同時に主は「あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい」(マタ五16)との大きな命令を与えられたのです。

2 事実、もしこれらの人類を愛する人々のうちの幾人かが「全世界は悪い者の支配下にあることを知って」(1ヨハ五19参)いたとすれば、彼らとその光景に対して無関心であったなど信じることができでしょうか。主が死んでくださった人々の悲惨さを見ても無関心でいられるでしょうか。彼らの心は滅び行くたましいを慕い求め、その心は悩みのために「溶け去ら」(詩篇一〇七26)ないでしょうか。彼らは「一日中仕事もしないでここにいる」(マタ二〇6)ことができるでしょうか。たとえ、彼らが愛していた方から何の命令も受けていなかったとしてもです。むしろ彼らはあらゆる可能な手段を尽くして「火から燃えさしを取り出す」(ゼカ三2参)ように努めたことでしょうか。疑いもなく彼らはそうでした。彼はだれであつても、「さ迷っている羊を自分のたましいの牧者であり、監督者である方のもとに」(1ペテ二25参)引き返すように労したことでしょう。

3 このように昔のクリスチャンたちは努めたのです。彼らは「機会のあるたびに、すべての人に對して善を行い」(ガラ六10)しました。彼らに「必ず来る御怒りをのがれるように」(マタ三7)警告し、今こそ、「ゲヘナの刑罰をのがれる」(マタ二三33)よう警告しました。彼らはどう宣言しました。「神はそのような無知の時代を見過ごしておられました。今は、どこでも、すべての人に悔い改めを命じておられます」(使徒一七30)。彼らは大声で叫びました、「悔い改めよ、悪の道から立ち返れ」(エゼ一八30)。彼らは「節制と正義」または公平と彼らを支配する罪と反対の品德と、「やがて来る審判」、すなわち、神が世界を審かれる日に悪を行う者たちに対してたしかに執行される神の怒りについて「論じた」(使徒二四25)のです。

4 彼らはすべての人に對して、それぞれの必要に応じて語ろうと努めました。無思慮な人々に對して、暗黒と死の陰の中に無関心のままでいる人々に對して、「眠っている人よ、目を覚ませ。死者の中から起き上がれ。そうすれば、キリストがあなたを照らされる」(エペ五14)と大声で語りました。すでに眠りからさめており、神の怒りを意識しながらうめいている人々に對しては、「私たちには御父の御前で弁護してくださいださる方があります。この方こそ私たちの罪のための供え物なのです」(一ヨハ二1、2)と語りました。同時に、信じた人々には「愛と善行を促し」(ヘブ一〇24參)、「忍耐をもって善を行い」(ロマ二7)、それがなければ「誰も主を見ることができません」(ヘブ一二14)という聖潔に成長するように勧めました。

5 彼らの労苦は主にあつてむだではありませんでした。神の「みことばは早く広まり、また崇められ」(二テサ三1)しました。それは「驚くほど広まり、ますます力強く」(使徒一九20)になりました。

しかしそれとともに反対も増大し、世は全体として彼らに抵抗しました。なぜなら彼らは「世について、その行いが悪いことをあかしするからです」(ヨハ七7)。快樂を愛する人々がつますいたのは、これらの人々が快樂を愛する人々の考えをいわば叱責したからだけではありません。快樂を愛する人々は言います。「彼は神を知っていると告白しており、自分を主の子ともであると叫んでいます」。「彼の生活は他の人の生活と違っています。不潔なものから遠ざかっているかのように、私たちの風習から遠ざかっています。彼は神が自分の父であると誇っています」と。またそれ以上に、彼らの仲間が多くが彼らから取り去られ、「自分たちといっしょに度を過ごした放蕩に走らない」(一ペテ四4)からと言うのです。評判を愛する人々がつますきました。なぜならば福音が広まるにつれ、彼らに對する評価は落ちて行ったからです。また多くの人々がもはや彼らにへつらいの称号を与えなくなり、神にだけ帰さなければならぬ尊敬を人間に帰することをしなくなつたからです。商いをする人々は互いに語り合いました、「皆さん、ご承知のように私たちが繁盛しているのはこの仕事のおかげです。ところが皆さんが見てもいるし、聞いてもいるように、この人々は大ぜいの人々を説き伏せ、迷わせているのです。これでは私たちのこの仕事も信用を失う危険があるのです」(使徒一九25、27參)。これらの人々以上に、いわゆる宗教家——外面的な宗教を信じている人々、「この世の聖徒たち」——もつますきました。そしてあらゆる機会に「イスラエルの人々、手を貸してください」(使徒二二28)、「この人々はベストのような存在で、世界中に騒ぎを起こしている者です」(使徒二四5)、「この人々は、この民と、律法とに逆らうことを、至る所ですべての人に教えている者です」(使徒二二28參)と罵ろうと待ちかまえていました。

6 このようにして天は雲で暗くなり、嵐は全速力で集まってきました。キリスト教が広がれば広がるほど、これを受け入れない人々は「より多くの害悪がなされました」とキリスト教を批判しました。そして「世界中を騒がせてきた(覆した)者たち」(使徒一七六)に対して怒る人々の数はいよいよ増加してきました。その結果、彼らは「こんな男たちは、地上から除いてしまえ。生かしておくべきではない」(使徒二二二参)と声を大にして叫びました。そうです、彼らは「この人々を殺す者はだれでも神に奉仕しているのだ」(ヨハ一六二)と本気で信じていました。

7 その間、彼らは「この宗派については、至る所で非難がある」(使徒二八二)ので、彼らの「名をあしざまにけなす」(ルカ六二二)ことを試みましたが、できませんでした。人々は彼ら「より前に来た預言者たち」にしたように、「ありもしないことで悪口雑言を言い」(マタ五一一五)ました。ある人が確信をもって語ることを、他の人々が信じたので、その結果、つまずきは天の星のように数多く増えて行きました。この故に、御父のあらかじめ定めてくださった時に、迫害がさまざまな形で起こりました。はずかしめと非難を受け、「自分の財産を奪われ」(ヘブ一〇三三参)、「あざけられ、むちで打たれ」、「鎖につながれ、牢に入れられるめに会い」(ヘブ一一三六)、「血を流すまで抵抗し」(ヘブ一二四)というさまざまな種類の迫害が続きました。

8 しかし、地獄の柱は揺れ動き、神の国はいよいよ広がりました。罪人たちは至る所で「暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返り」(使徒二六八)ました。主はその子らに「どんな反対者も反証もできないようなことばと知恵を」(ルカ二一五)与えてくださいました。しかしすべてにまさって彼らの苦難は全世界に伝えられました。彼らは「自分を神のしもべとして推薦しているのです。す

なわち、悩みと乏しさと痛みの中でも、むち打たれるときにも、入獄にも、暴動にも、労役にも」(コリ六四、五参)です。「海上の難、荒野の難、勞し、苦しみ、飢え渴き、寒さに凍え、裸でいたこともありました」(コリ一二六、二七参)。そして「信仰の戦いを勇敢に戦った」(一テモ六二)のちに、彼らは「羊のようにはふり場に連れて行かれ」(使徒八三二参)、彼らの「信仰の供え物と礼拝とともに、注ぎの供え物」(ペリ二一七)となりました。しかし、一人一人の血は、物語り、異邦人も彼らは「死にましたが、今もお話っています」(ヘブ一一四)と認めています。

9 このようにキリスト教は地上に広がりました。しかし速やかに麦の中に毒麦が現れました。「不法の秘密」(二テサ二七)が「敬虔の奥義」(一テモ三三六)とともに働いていたのです。サタンはきわめて敏速に「神の宮の中にさえ座を設け」(二テサ二四参)ました。「女が荒野に逃げる」(黙示一一六)まで、そして「誠実な人々が再び人の子らの中から消え去る」(詩篇一一一参)まで、それが続きます。私たちは踏み固められた道を歩んでいます。あとに続く世代のますます増大して行く腐敗は、神が起こしてくださいださった証人たちによって、時代から時代へと広く描写されて来ました。それは主が「岩の上に主の教会を建てます。ハデスの門も全面的には打ち勝てません」(マタ一六八参)ということを示すためでした。

三

1 しかし私たちはこれらよりも大いなることになるでしょう。そうです、世界の始め

から見て来たよりも大いなることをです。サタンは神の真理を打ち負かすことができるでしょうか。神の約束を無効にさせることができるでしょうか。もしできなければ、キリスト教がすべてに勝利し、地上を覆う時が来るでしょう。しばらく立ち止まって、この未だかつて見たことがなかった光景、すなわち、キリスト教世界と呼ばれるもの（提示された第三のことですが）を聖書の中から見てみましょう。「この救いについては、いにしへの預言者たちも、熱心に尋ね、細かく調べました」。このことについて「彼らのうちにおられるキリストの御霊が、あかしされた」（1ペテ10、11参）のです。「終わりの日に、主の家の山は、山々の頂きに堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての国々がそこに流れてくる。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない」（イザ22、4）。「その日、エッサイの根は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く。その日、主は再び御手を伸ばし、ご自分の民の残りを買い取られる。……主は国々のために旗を揚げ、イスラエルの散らされた者を取り集め、ユダの追い散らされた者を地の四隅から集められる」（イザ11、10、12）。「狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。……わたしの聖なる山のどこにおいても（主は言われる）、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海を覆う水のように地を満たすからである」（イザ11、6、9）。

2 同じことを偉大なパウロも述べています。それは明らかにまだ成就されていません。「すると神はご自分の民を退けてしまわれたのですか。絶対にそんなことはありません。かえって、彼らの違反によって、救いが異邦人に及んだのです。もし彼らの失敗が異邦人の富となるのなら、彼らの完成は、

それ以上の、どんなにかすばらしいものを、もたらす事でしょう。兄弟たち。私は、あなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは、異邦人の完成のなる時までであり、こうして、イスラエルはみな救われる、ということですよ」（ロマ11、11、12、25、26参）。

3 もし今、時が満ち、預言が成就されるとすれば、それは何という光景でしょうか。すべてが「平和ととしへの平穏と信頼」（イザ33、17）です。そこには武器の騒音もなく、混乱した物音もなく、「血にまみれた着物」（イザ9、5）もありません。「破壊は永遠に絶え果てます」（詩篇96参）。戦争は地上から姿を消しました。もはや内部の衝突はありません。兄弟が兄弟に逆らうこともなく、国家や都市も分裂して抗争したり、自分の腸を引きちぎることもありません。内部の不一致は永遠に終止符を打ち、だれもその隣人を破壊したり、傷つけたりすることがありません。もはや「知恵ある者を愚かに」（伝道77）するような圧迫もなくなります。「貧しい者の顔をすりつぶす」（イザ33、15）ような搾取もなく、強奪や悪行もなく、略奪や不正もありません。なぜならば、すべての人が「今持っているもので満足して」（ヘブ13、5）いるからです。こうして「義と平和とは、互いに口づけし」（詩篇85、10）、「深く根を張り、地にはびこりました」（詩篇80、9）。義は地から繁茂し、平和は「天から目を注いで」（詩篇80、14）います。

4 義や公平とともに憐れみも世界を包みます。地上はもはや残酷な者の住みかの満ちている場所ではありません。「主は血を流す者と」（詩篇56）悪意に満ちている者と、妬む者と復讐心に満ちている者とを滅ぼしなさい。もし怒らせる材料があったとしても、「悪をもって悪に報いる」（1テ

愛を行なう

廿五15)ことを知っている人がひとりもないのです。「善を行なう人はいない。一人もない」(ヨハ14:12) 律法)のです。すべての人が「鳩のように素直」(マタ10:16)になっており、「信仰による喜びと平和をもって満たされ」(ロマ1:13)、ひとつの御霊によってひとつの体に結び合わされ、すべての人々が「兄弟として愛して」(1ペテ3:8参)います。彼らは「心と思いを一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものと言いません」(使徒四32)。彼らの中にはひとりも乏しい者がありません。すべての人が隣人を自分のように愛しているからです。すべての人が「何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい」(マタ7:12)という一つの基準によって歩んでいるからです。

5 その結果、不親切な言葉は彼らの間で少しも聞かれませんが——「舌の争い」(詩篇三120)もなく、いかなる種類の争いもなく、ののしりや悪口もありません。むしろすべての人が「口を開いて知恵深く語り、その舌には恵みの教えが」(箴言三126)あります。同時に彼らは欺きや偽りを行うことができません。「愛には偽りがあってはなりません」(ロマ二19)。彼らのことばはいつでも彼らの思いの表れで、彼らの胸には窓があげられています。望むなら、彼らの心を見ることができ、そこには愛と神だけがあることを知るでしょう。

6 こうして「全能の神であられる主がその力に訴えて、統べ治めておられる」(黙示一九6参)ところでは、神は「万物をご自身に従わせ」(ピリ三21)、すべての心を愛で溢れさせ、すべての口を讚美で満たされます。「幸いなことよ。このようになる民は。幸いなことよ。主をおのれの神とするその民は」(詩篇一四四15)。「起きよ。光を放て」と主は言われる。あなたの光が来て、主の栄光があなた

の上に輝いているからだ。あなたは、わたしが、あなたを救う主、あなたを贖うヤコブの全能者であることを知る。わたしは平和をあなたの管理者とし、義をあなたの監督者とする。あなたの国の中の暴虐、あなたの領土のうちの破壊と破滅は、もう聞かれぬ。あなたは、あなたの城壁を救いと呼び、あなたの門を讚美と呼ぼう。あなたの民はみな正しくなり、とこしえにその地を所有しよう。彼らはわたしの栄光を現す、わたしの植えた枝。わたしの手で造ったもの」(イザ六〇1、16、18、21)。「太陽がもうあなたの昼の光とはならず、月の輝きもあなたを照らさず、主があなたの永遠の光となり、あなたの神があなたの光栄となる」(イザ六〇19)。

四

このようにキリスト教の始まりと進展と地上を覆って行く状況を考察しました。残されていることは、全体を平明で実地的な適用で締めくくることがです。

1 第一に私が尋ねたいのは、今、このようなキリスト教が存在しているのでしょうか、ということですが。このようなクリスチャンがどこに存在するのかを教えてくださいたいのです。住民がこのように「みなが聖霊に満たされて」(使徒二4)いると言える国はどれでしょうか。すべての人々が「心と思いを一つにして」(使徒四32)いる国はあるのでしょうか。「彼らの中には、ひとりも乏しい者がなく」(使徒四34)、「必要に従ってのおのに分け与えられた」(使徒四35)という国はあるのでしょうか。神の愛によって心を満たされ、自分を愛するように隣人を愛するようにされているのはだけでしょうか。

「深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けて」（コロ三12）いるのはだれでしょうか。いかなること、すなわち、ことばでも行いでも、公正と憐れみと誠実に反することはせず、すべてのことを人にしてほしいようにしている人々はだれでしょうか。このような描写（説明）に答えられない国をキリスト教国と呼ぶのは不適切ではありませんか。とすれば、私たちはまだ地上でいかなるキリスト教国も決して見たことがないと告白するべきではありませんか。

2 「私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします」（ロマ二二一）。「もし私を愚かと思うなら、私を愚か者扱いにしないで」（Ⅱコリ一一16）。必要なのはだれかがあなたがたに対してきわめて平明な言葉で語ることです。今こそそのことが特に必要なのです。と言うのは、今が最後の時かもしれないからです。正しい審き主が「あなたは、この民のために祈ってはならない」（エレ七16）と語られるときが間もなく来ることをだれが知っていますでしょうか。「たとい、そこに、ノアとダニエルとヨブがいても、彼らは自分たちのいのちを救い出すだけ」（エゼ一四20）です。もし私がこのように平明な言葉で語らなかつたら、だれが語るでしょうか。ですから、私が敢えて語っているのです。私は生ける神によってお願いします。私の手から祝福を受けるということに、心をかたくなにしないでください。心の中で *Non persuadebis, etiamsi persuaseris*（たとえあなたに説得力があっても、あなたに説得されることはない／ウェスレーの時代によく使われたギリシャ語の表現で、アリストフアネス、*Plautus*, I, 600 参照）と言わないでください。「ああ主よ。どうかほかの人を遣わしてください」（出エ四13）と言わないように。この人によって救われるよりは、血の中で滅びたほうがましだと言わないように。

3 兄弟たち、「私はこのように言いますが、あなたがたについては、もっと良いことを確信しています」（ヘブ六9）。あなたがたに柔らかな愛をもって、柔和な心でお尋ねしたいのですが、この町はキリスト教の町でしょうか。キリスト教、聖書のキリスト教がここに見いだされるでしょうか。私たちは「聖霊に満たされた」人々の集団であると考えて良いでしょうか。あの純粋な御霊の実を心の中で喜び、生活の中で示しているほどキリスト教化されているでしょうか。すべての為政者、すべての大学や講堂の、またそれぞれの組織の責任者や管理者（その町の住民とまでは言わないまでも）は、「心と意思を一つにして」（使徒四32）いるでしょうか。「神の愛は私たちの心に注がれている」（ロマ五5）でしょうか。私たちの気質は主のうちにあったそれと同じでしょうか。私たちの生活は主に受け入れられるものでしょうか。私たちは一召してくださった聖なる方にならって、あらゆる行いにおいて一聖なるものとされて」（Ⅰペテ一15）いるでしょうか。

4 今、考慮している事柄は特殊な概念に関するものではなく、提議されている問題はあれやこれやという疑わしい意見に関するものではないということ、を理解してください。それはむしろ、私たちの一般的なキリスト教の疑う余地のない、基本的な分野（もし分野というものがあるとすれば）に関するものです。そしてその決定については、神のことはに導かれてなされるよう、あなたがたの良心に訴えます。心に責められない者は、自由に進むのが良いのです。

5 ですから、あなたがたも私も、まもなくその前に立たなければならぬ大いなる神を畏れ、また覚えつつ、私たちに対して權威を持っているあなたがたに対して、その職務の故に尊敬を持って、お願いします。あなたがたは「聖霊に満たされて」いるかどうかを、（神に対する偽善者のようには

なく) 熟慮していただきたいのです。あなたがたが代理を務めるように任じられたお方の生きた肖像画となつて、人々の間で振る舞っていますか。「わたしは言った。あなたがたは神である」(ヨハ一〇34)。行政官であり、支配者であるあなたがたよ、あなたがたはその職務の故に天の神に非常に近く結び付いています。あなたがたはそれぞれの立場や身分に応じて「私たちの支配者であられる主」(詩篇八一参)を示すべきです。あなたがたの心のすべての思い、すべての気質や願望は、高貴な召しにふさわしくありますな。あなたがたの口の言葉は、神の口から出たもののでしょうか。すべての行動の中に品位と愛がありますか。言葉では言い表せない、神に満ちている心からだけ流れ出ることのできる権威、偉大でありながら「うじである人間、虫けらの人の子」(ヨブ二五6)と少しも抵触しないところのおこることのない権威を持っていますか。

6 特に若者の柔らかい心を形作り、そこから無知や誤りの影を追い払い、彼らを救いに至らせるまでに賢く育てるようにと召された尊敬すべき人々よ、あなたがたは「聖霊に満たされて」いますか。あなたがたの大切な職責を果たすのに不可分である「御霊の実」(ガラ五22)に満たされていますか。あなたがたの心は神の前に正しいですか。神の国を地上に打ち立てたいとの愛と熱心に満ちていますか。あなたがたの保護のもとにある人々に対して、私たちの学びの合理的な結論は、「唯一のまことの神と、神の遣わされたイエス・キリスト」(ヨハ一七3)を知り、愛し、この方に仕えることであることを絶えず思い起こさせていますか。彼らに日毎に「絶えることのない愛」(一コリ一三8参)を教え込んでいますか。なぜなら「異言ならばやみ」、哲学的な「知識ならばすたれる」(一コリ一三8)からです。また愛がなければ、すべての学識もきらびやかな無知、尊大な愚かさ、霊の悩みにしか過ぎ

ないことを教え込んでいますか。あなたがたが教えていることはすべて、神を愛すること、神のゆえに全人類を愛することに現実的に向かっていますか。あなたがたが彼らの学びの種類、方法、程度について指示することは何であつても、この目的に眼を向けていますか。これらのキリストの若い兵士たちの定めがどのようなになるにせよ、彼らが多くの「燃えて輝くともしび」(ヨハ五35)となるように、また、「彼らがあらゆることで、キリストの福音を飾るようになるために」(テト二10参)、願い、労していますか。さらにあなたは全力をつくしてあなたがたが受けたあの広大な職務に全力を注いでいるか、と尋ねることを許してください。あなたがたはこのことに全力を傾けていますか。あなたがたのたましいの全機能を働かせていますか。神があなたがたに与えておられるすべての才能を用いていますか。しかもそれを力の限り行っていますか。

7 あなたがたの顧みのもとにあるすべての人々が、聖職者にならなければならぬと言っているのではありません。ただ、彼らはみなクリスチャンにならなければならぬと言っているのです。しかし先祖たちの恩沢を十分に受けている私たちは、私たちの仲間・学徒・学者たちは、特に著名な立場にある人々は、どのような模範を彼らに残しているでしょうか。兄弟たちよ、あなたがたは御霊の実・心の謙遜さ・自己否定と自己疎殺・霊のまじめさと落ちつき・忍耐・柔和・謹厳さ・節制に富んでいますか。またすべての人々にあらゆる種類の善をなし、彼らの外的な欠乏を救うため、さらに彼らのたましいを神の愛を知るまことの知識に至らせるために、たゆまない努力をしていますか。これが大学の教師たちの一般的な特色でしょうか。残念ながらそうではありません。むしろ心の誇りや高ぶり、いらだちや不満、怠慢や怠け心、貪りや肉欲、さらに「ことわざ」になるようなほどの無益さが、

私たちに対する抗議となっているのではないのでしょうか。それも必ずしも敵からではなく、また全く根柢のないことではないと言う状況なのです。ああ、神がこのはずかしめを私たちから運び去り、そのすべての記憶が永久に消えうせませうように。

8 私たちの多くは、もつと直接的に神に身を献げ、「宮に奉仕している者」(1コリ9:13)と呼ばれています。それで私たちは他の人々に対して「ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも」(1テモ4:12)模範となっているのでしょうか。私たちの額や心に「主への聖なるもの」(出エ二八:36)と記されているのでしょうか。どのような動機でこの務めに入ったのでしょうか。それは確かに、単一の眼をもつて「神の栄光を拡大し、神の民を建て上げるために、聖霊によって内面的に動かされて、この職務を受けたと信じて神に仕えて」いますか。また「神の恵みによってこの職務に全面的に献げ切るうとはっきり決心」しましたか(「祈祷書」、執事と司祭の任命式より)。私たちの中にあるすべての世俗的な心づかいや学びを捨てて離れましたか。私たち自身をこの一事に全面的にあてはめ、すべての心づかいや学びをこのように進めていますか。私たちは「よく教え」(2テモ2:24)ているのでしょうか。他の人を教えるために、「神によって教えられて」(ヨハ六:45)いますか。神を知っていますか。イエス・キリストを知っていますか。神は「御子を私たちのうちに啓示され」(ガラ1:16)しましたか。「新しい契約に仕える者となる資格を下さいました」(2コリ3:6)か。「私たちが使徒であることの証印」(1コリ9:2)はどこにありますか。「罪過と罪との中に死んでいた者」(エベ二:1)のうち、だれが私たちのことばによって生かされましたか。たましいを死から救い出すために、しばしばパンを食べるのを忘れるほどの燃えるような熱意を持っていますか。「真理を明らかにし、神の御前で

自分自身をすべての人の良心に推薦する」(2コリ4:2)ことによって、明白に語っていますか。世と世の事に死んで、「自分のすべての宝を天にたくわえて」(マタ六:20)いますか。「割り当てられている人たちを支配して」(1ペテ五:3)いますか。それとも最も小さい者となり、「みなに仕える者」と(マコ九:35)なっていますか。キリストのゆえに受けるそしりを担うとき、それは私たちに重くのしかかっていますか。それともそれを喜びとしていますか。「右の頬を打たれた」とき、憤りますか、侮辱されたとき、いらだちますか。それとも「悪い者に手向かわず」、「左の頬を向け」(マタ五:39)、「善をもって悪に打ち勝ち」(ロマ二:21)ますか。「迷っている人々」(ヘブ五:2)を激しく、真剣に追い求めるように促す強い熱意を持っているのでしょうか。それとも私たちの熱心さは愛の炎となっていますか。私たちのすべてのことばは賢い甘美さと謙遜と柔和を伴うほどになっているのでしょうか。

9 もう一度お尋ねします。この場所にいる若者たちについて何と言ったらいでしょうか。あなたがたはクリスチャンの敬虔と力とを自分のものとしていますか。あなたがたは謙遜で、教えられやすく、勧めを受けやすくありますか。それとも頑固で、自己中心で、向こう見ずで、高ぶっていますか。両親に対するように、上司に従っていますか。それとも最も柔和な尊敬を払わなければならない人々を侮っていますか。簡単な仕事でも勤勉に行い、学びも全力を注いでいますか。「機会を十分に生かして用いて」(エベ五:16)いますか。毎日を充実して、仕事で満たしていますか。それとも、毎日、キリスト教に向かわせる傾向性を持っていない読書に、また狩猟に、あるいは自分でも判らないことに、空しく時を費やしていることに気がつかないままですか。時間よりも富をさらに正しく管理していますか。原則的に「だれに対しても、何の借りもないように」(ロマ一三:8)心していますか。

「安息日を覚えて、これを聖なる日と」(出エ二〇8) していますか。神を直接礼拝するために日曜日を通していますか。神の家にいるとき、そこに神がいらっしやると考えていますか。「目に見えない方を見るようにして」(ヘブ一27) 行動していますか。「自分のからだを、聖く、また尊く保つ」(一テサ四4) ことを知っていますか。あなたがたの中に酔酒や汚れはありませんか。そうです、「あなた

がたの栄光はあなたがた自身の恥」(ピリ三19参) ではありませんか。多くの者が、常習的に、何の悔いも恐れもなく、「神の御名を、みだりに唱えては」(出エ二〇7) いまませんか。あなたがたの多くの人々が偽証しているではありませんか。私は、そのような人々が急速に増えつつあることを恐れています。兄弟たちよ、驚いてはなりません。神とこの会衆の前で私はその人々の仲間であったことを告白します。その当時、私が何も知らなかった「すべてのおきて」を守り、また私がその時も、数年後にも読んだこともなかった「すべての定めを守って」いたと厳肅に誓っていたのです。これが偽証でないとするれば、何でしょうか。しかしもしこれが罪であるとすれば、何と重い罪、そうです、普通の種類ではない罪が私たちに負わされることでしょうか。「いと高き方はこのことをごらんにならないでしょうか」(詩篇七三11参)。

10 あなたがたの多くの人々が軽率な世代と呼ばれるのは、これらのことの結果の一つではないでしょうか。神に対して軽率であり、互いに対して軽率であり、自分のたましいに対して軽率ではありませんか。毎週毎週、個人的な祈りのために一時間を用いている人々の何と少ないことでしょうか。あなたの生活全体の流れの中で、神を思っている人々の何と少ないことでしょうか。少しでも御霊の働き、すなわちその人のたましいのうちになされている超自然的な働きを知っている人々の何と少ないこと

でしょうか。聖霊に関する話を聞くことが、まれになつていいるのではありませんか。もしだれかがそのような会話を始めたら、偽善や熱狂として片づけてしまうのではありませんか。全能なる神、主の御名によつて私は尋ねます。あなたはどのような信仰に属していますか。キリスト教のことを語ることにすらできないし、しようとしません。兄弟たちよ、この町がキリスト教の町と呼ばれてよいのですか。「主よ、今こそあなたが御手を置かれる時です」(詩篇二一九126参)。

11 果たして、キリスト教・聖書的キリスト教が、再びこの地の宗教となる蓋然性、むしろ(人間の言い方をすれば)可能性はあるのでしょうか。私たちの間で、あらゆる階級の人々が「聖霊に満たされ」て語り、生活する可能性はあるのでしょうか。だが、このキリスト教を回復するのでしようか。権威ある地位ある人々ですか。あなたはこれこそが聖書的キリスト教であると確信していますか。それが回復されなければならぬと願っていますか。その回復の管となるためならば、富も、自由も、いのちも惜しまないで用いることができますか。もしこの願望があるとしても、だれがそれを実現するにふさわしい力を持っていますか。おそらく、ある人々は弱々しい試みをしなが、ほとんど成功を見なかつたでしょう。それでは、キリスト教は若い、未知の、無思慮の人々によつて回復されるでしょうか。あなたがた自身がそれに耐えられるかどうか判りません。ある人は叫び出すでしょう、「若者よ、あなたはそうすることでわれわれを辱めている」と。しかしあなたが試されたところで危険はありません。それほど「悪が大水のように広がって」(詩篇六九2参) いるのです。それでは神は私たちをはじめの愛へと改革するために、だれを遣わされるべきでしょうか。飢饉ですか、疫病(これは罪を犯した地に対する最後の使者です)ですか、剣ですか。ローマの外国人居隊ですか。いい

99. 5. 27 Thu
01. 10. 12 Fri

え、むしろ「主よ、あなたの手に陥らせてください。人の手には陥りたくありません」(IIサム二四14 参)。

主よ、救ってください。さもなければ、滅びます。沈まないように、どろの中から救ってください。人の助けはむなしからず。あなたにとってすべてのは可能です。あなたの大きい力によって死に定められている人々を保ってください。御心になつた方法で私たちを保ってください。私たちの願うようではなく、あなたの願っていらつしやるように。

説教 5

信仰による義認

Justification by Faith

訳者ノート

一七三九年九月三日の日記の中で、ウエスレーは、当時の英国国教会が説いていた義認の教理が、誤謬に満ちた混沌としたものであったことを次のように指摘している。「(1) 彼らは義認と聖化とが同じものであるかのように説いている。(2) 彼らの説によれば、我々の聖化や善行が、義認の源である……。 (3) 善行が義認の条件であって、必ず義認に先立たなければならぬ」。説教150「オックスフォードの偽善」の中では、ウエスレーは当時のオックスフォードに流布していた義認の教理に説明を加え、その誤りの源が一七世紀の国教会の神学者ティロットソン (John Tillotson) やブル (George Bull) にあると分析している。これら二人だけでなく、ジェレミー・テイラーも、あるいは非国教徒のバックスターも、概して一七世紀の英国キリスト教会は、神はありのままの罪人を義とするのではなく、悔い改めて、すでに与えられている恵みを最大限に活用して、誠実を尽くして聖化を追求している者を義とする、という教えに飲み込まれていた。以下に引用するのは、オックスフォード時代のウエスレーが母スザンナに宛てた手紙の一部であるが、その中で当時の彼が、ジェレミー・テイラーの義認の理解に触れ、それに感激とともに同意している様子が記されている。

「私がいへん気に入ったのは、罪の赦しに関する彼の説明です。これほど明確なものに出逢ったことはありませんでした。そこには、次のようにありました。福音において罪の赦しは聖化です。……私たちが罪を憎み、恵みに成長し、聖化の状態に近づきます。これはまだ悔い改めを必要とする不完全な状態ですが、そこにおいて誠実な心と勤勉な努力

があるなら、その誠実さの度合いに応じて、罪の赦しを判断すべきです。というのは、これこそが福音的救済だからです」(1730228)。

説教5「信仰による義認」は、こうした一七世紀アングリカンの義認理解に対する明確なアンチテーゼである。この説教の中心メッセージは、表題聖句になっているローマ人への手紙四5のとおり、神が義とされるのは、聖徒ではなく罪人であるということである。「赦されるのは聖徒でなく罪人です。それは罪人であるという概念のもとに、罪を赦すということとは成り立っているからです。神は敬虔な者ではなく、不敬虔な者を義とされます。すでにきよい者ではなく、不浄な者を義とされるのです」(三・2)。人間の努力や功績は、義認を受けるために全く無力である。罪人が神の前に罪を赦免され、義と認められるのは、十字架の功績による他はない。こうしてウエスレーは、ルターやカルヴァンと同じく義認の概念を次のように定義している。「義認とは、神のひとり子の血によるなだめの供え物の故に、「人が今まで犯した罪を見逃すことによってご自身の義(あわれみ)をお示しになった」(ロマ三25)という、父なる神の行為(ergo)です」(二15)。

この説教でウエスレーが強調するもう一つの力点があるとすれば、それは「信仰による」義認である。すでに説教1の一・2〜5で、ウエスレーは信仰を神的現実を見るための〈霊的知覚〉として定義し、次に人を救う信仰は、それが漠然と神の現実を知覚することではなく、特に、キリストの十字架が私個人の罪のために達成された願いの業であることとを堅く信頼し、その事実によりかかることであると説明している。

この説教で、彼は話を一歩進めて、信仰が、神の御前で罪深い無力な自己を認識させ、人間的傲慢を砕く姿勢を持っていることを強調している。「この信仰によって神のみもと

に来る人は、自分の中にあるいかなる善をも省みず、またいかなる徳をも省みず、ただ自分の罪深さと罪責と無力さだけに目を留めなければならない。」「彼は自分に絶望し、自分を責め、不敬虔さ以外には何も神に差し出すものを持っていない、内も外も全くの罪人として神のみもとに來ます」。しかし、このように遜った瞬間、彼は「自分の罪のためのなだめの供え物」(一ヨハ二)として、唯一の全き贖いとして、イエスを見上げることが出来ます。このようにして、信じる者は「キリストの中にある者と認められ」(ピリ三9)、「信仰による神の義」(ロマ三22)を受けるのです」(四・8)という。

ここに私たちは、神の御前に義とされる者は、信仰という一つの功績を神に差し出しているのではなく、信仰を通して、キリストの功績を自分の上に受け取っているにすぎないという、純プロテスタント的な主張を見る。信仰とはそれ自体、一つの業とか功績ではなく、人をキリストの恵みに結びつける手段にすぎない——だが、これこそは「唯一の手段」(the only instrument, 四・3)である。これ以外に、人が神の御前に義とされる手段はない。「人は、他のすべてのものを持っていたとしても、信仰なくしては義とされません。同じように、人は、他のすべてのものを欠いていたとしても、信仰があれば、必ず義とされます」(四・6)。

この説教がこの形で出版されるのは一七四六年のことであるが、このテキストからはじめて説教がなされたのはアルダスゲイト体験の直後、一七三八年五月二十八日である。それから、一七四二年六月八日、エプワースで彼の父の墓石の上に立って、同テキストから説教するまで、すでに九回を数えていたとアウトラーは計算している。リバイバル初発期の教理の土台をなしていた重要な説教である。

「何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。」（ローマ人への手紙四5）

序

1 すべてのもの主であり裁き主である神の御前に、罪人はいかにして義とされるのでしょうか。これは、すべての人にとって非常に重要な質問です。私たちが神と敵対関係にある間は、この世でも永遠の世界でも、真の平安と確かな喜びはないのですから、すべての希望の土台がこの質問に含まれていると言えましょう。自分の心が責めているとき、いかなる平安が可能なのでしょう。まして「私の心より大きく、そして何もかもご存じ」（Ⅰヨハ三20）である神が責めているとき、どうなるのでしょうか。この世でも来るべき世でも、「神の怒りが私たちの上にとどまる」（ヨハ三36参）間、確かな喜びなどはたして存在できるのでしょうか。

2 これほど重要な問題であるにもかかわらず、義認は、これまできわめて理解の乏しい領域でありました。多くの人が、義認について混乱した考えを抱いてきました。混乱しているばかりか、往々

にして、光が闇と対照を描くように真実と対照的な、全く誤った考え、すなわち、みことば全体と、〈信仰の類比〉（analogy of faith）とに全面的に矛盾する考えを抱いてきました。まさに土台から誤っているのですから、その上を構築することなど不可能です。少なくとも、火によって試されても残るような「金、銀、宝石」の建物を建てることはできません。せいぜい「木、草、わら」の建物であり（Ⅰコリ三12）、それは神に受け入れられることはなく、また人にも無益です。

3 この課題の持つ膨大な重要性に対して、私に関する限り、公平な取り扱いをするために、また誠実に真理を追い求めている人々を「無益な議論」（Ⅰテモ一6）と「ことばの争い」（同六4）から救い、多くの人々が引き入れられている神学的混乱を整理し、この偉大な敬虔の奥義の真実で正しい理解を得るために、私は以下に次のことを示そうと努めていきます。

第一に、義認の教理全体を支えている総合的な土台は何か。

第二に、義認とは何か。

第三に、義とされるのはどのような人々か。

第四に、どのような条件で彼らは義とされるのか。

一

まず、義認の教理全体を支える総合的な土台とは何かを考えてみましょう。

1 人は、神の似姿に造られました。人を創造された神が聖く、慈悲深いように、人は聖く、慈悲

深く、また天の父が完全であるように完全な者として、創造されました。神が愛ですから、愛に住む人は神の中に住んでおり、神もその人の中に住んでおられました。神は、ご自身の永遠性の似姿として、栄光の神の朽ちることのない写しとして、人を造られました。ですから人は、神に汚れがないように、罪のあらゆる汚れとは無関係でした。人は、いかなる種類の罪も全く知らず、内的にも外的にも罪のない、汚れを知らない状態にありました。人は、「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして主を愛していました」(マコ一20参)。

2 神は、このように正しく完全な人間に完全な律法を与え、それに全く服従するように求められました。戒めのすべての点において全き服従が求められていたのです。人が誕生して以来、その試験期間の終了に至るまで、絶え間ない服従が要求されてきました。それを果たせなくても、いかなる酌量もありません。人は、その完全な律法にふさわしく創造され、すべての良い言葉と働きとにふさわしく整えられていたのですから、酌量の必要はありませんでした。

3 人の心に刻まれた愛の律法全体(それに反して、直接的に罪を犯すことはできなかったはずです)に加えて、神は、その崇高な知恵の故に、「あなたがたは、園の中央にある木の実を食べてはならない」という一つの命令を与えられ、さらにこの命令を犯した際の罰則として「それを食べた日には、あなたは必ず死ぬことになる」(創世三3参)と言われました。

4 これが、エデンの園でのアダムの状態でした。価なしに与えられる神の愛の故に、人は聖く、幸せであり、神を知り、神を愛し、神を喜んでいました。実質的にこれが人に与えられた永遠のいのちの意味するところです。そして人があらゆる点で神に服従し続けるなら、この愛によって与えら

るいのちの中に永遠に留まるはずでした。しかし、そうでないなら、すべてを失うことになるのです。「その日には、あなたは必ず死ぬことになる」と神は言われました。

5 アダムは神に逆らいました。「食べてはならないと神が命じておられた木から食べた」(創世三17参)のです。そしてその日、彼は神の正しい裁きにより罪に定められました。前もって警告を受けていた裁きが、そのとき下りました。人があの木の実を食べた瞬間、彼は死んだのです。彼の魂は、神から離れて死んだのです。肉体が魂から離れていのちを持つことができなると同じように、魂は神から離れていのちを得ることはできません。同様に、彼の身体もやがて朽ちて死ぬことになりました。こうして死は肉体をも捕らえました。霊的に、神に対して死んでおり、罪の中に死んでしまった「人」は、決して消えることのない火の中で身体も魂も滅ばされるといふ永遠の死へと道を急ぐことになりました。

6 このように「ひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がりました」(ロマ五12)。それは、アダムが私たち人類の共通の父であり、代表であったからです。このように、「ひとりの人の違反によって」、すべての人が神に対して死に、罪の中に死に、朽ちるべき死ぬべき、やがて消えてなくなる肉体に宿り、永遠の死という裁きのもとに生きることになったのです。「ひとりの人の不従順によって、すべての人が罪人とされた」(同五19)のと同じように、「ひとりの人の違反によってすべての人が罪に定められ」(同五18)しました。

7 私たちが、いや人類すべてがこの状態にいたとき、神はそのひとり子をお与えになったほどに世を愛されました。それは私たちが滅びることなく、永遠のいのちを持つためでした(ヨハ三16参)。

時が満ち、御子は人ととなり、人類のもう一つの共通のかしら、すなわち人類全体の第二の総括的な親・代表者となりました。このようにして「彼は私たちの悲しみをにない」、主は「私たちすべての者の罪を彼の上におかれた」のです。それ故、彼は「私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれ」(イザ五三4、5)、「彼は自分の生命を罪過のためのいけにえとした」(同五三10)のです。主は罪人のためにご自分の血を注ぎ出されました。その傷によって私たちがいやされるために、「十字架の上で、私たちの罪をその身に負われ」(1ペテ二24)しました。そして、ただ一度捧げられたご自身の供えものによって、主は私と人類全体とを贖ったのです。主はそれによって全世界の罪のために、充分な、完全な、欠けない犠牲と満足とを果たされました。

8 神の子が「すべての人のために死を味わわれた」(ヘブ二9)ことの故に、神は今や「この世を yourself と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせることをしない」(IIコリ五19)のです。こういうわけで「ちょうどひとりの人の違反によってすべての人が罪に定められたのと同様に、ひとりの人の義の行為によって、義にいたらしめる自由な賜物がすべての人におよんでいます」(ロマ五18参)。神は、愛しておられる御子の故に、すなわち御子が私たちのためになされたことと苦しまれたことの故に、今やただ一つの条件によって(神ご自身が、その条件を果たす力を私たちに与えてくださいます)罪の報いである罰を免れさせ、私たちをその好意の中に再び受け入れ、永遠のいのちの保証として、死んだ魂を霊的ないのちに回復してくださいませ。

9 よって、義認の教理全体の普遍的な土台として、以下のようにまとめることができます。第一のアダムの罪によって——彼は人類の父であつたばかりか、代表者であつたわけですが——私たちはみな「神の栄光を受けるに価しない」(ロマ三23)者、「御怒りの子」(エペ二3)となり、使徒の言葉を借りれば、「すべての人が罪に定められた」のです。しかし、それと同じく、私たちすべての代表である第二のアダムが捧げた、罪を贖う犠牲によって、神は全世界に新しい契約を与えてくださるまでに、世と和解されました。その契約の単純な条件がひとたび満たされるなら、私たちは「もはや罪に定められることがなく」(ロマ八1)、「神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いの故に、価なしに義と認められる」(同三24)のです。

二

1 ここで、義とされるとは、どういうことでしょうか。義認とは何でしょうか。これが私が示そうと思つている第二の事柄です。既述の事柄から明らかですが、義認とは実際に正しい・義なる者となることではありません。それは、聖化のことです。聖化が、ある程度、義認の直接的な実であることは事実ですが、それ自体神の異なった賜物であり、義認とは性質を完全に異にします。義認は、神がひとり子を通して私たちのためになしてくださる(works in us) (does for us) を意味し、他方、聖化は聖霊によつて私たちの内に働いてくださる(works in us) を意味します。よつて、義とされる、あるいは義認という言葉が、非常に広義に解されて、聖化をも含むように用いられる場合もないわけではありませんが、一般的に両者は、パウロによつても、ほかの聖書の記者によつても、十分に区別された概念です。

2 また義認とは、私たちを告発から、特にサタンの告発から解放することであるという途方もない思いつきも、聖書の明白な教えから、その誤りを証明することは容易なことです。上に並べたような聖書の記事のどこを見ても、サタンが告発者であるとか、サタンの告発といったことは登場しません。もちろん、サタンが「人間の告発者」(黙示一二一〇)であることは否定できません。しかしながら、パウロがローマ人への手紙やガラテヤ人への手紙の中で義認に触れつつ、多少ともこの問題に言及しているとは思われません。

3 また、義認は私たちを律法の告発から自由にするのだという発想も、聖書に明白に証明されているというより、むしろそう思い込まれている考えにすぎません。少なくとも、もしこのお仕着せられた不自然な話が単なる思い込み以上のものであるとしたら、私たちは神の律法を犯し、地獄の呪いに値するのですが、神は義とされた人々に、当然受けるべき刑罰をお与えにならないということになってしまいます。

4 こうした誤解の中でも最も外れなのは、義認において神が欺かれていて、すなわち神が実際はそうでない人々をそうであると考え、実際とは異なる存在としてみなすという考えです。義認は、事の実態に背いて私たちを裁くという意味では決してなく、また神が実際よりも良いものとして私たちを評価したり、実際は不義であるのに義なる者として私たちを信じたりすることではありません。絶対にそうではありません。全知なる神の裁きは、常に真実に従ってなされます。キリストが無罪で、義と聖にあふれているからといって、私もそうであると考えたり、判断することは、決して誤りを犯すことのない神の知恵と矛盾することです。神によって理解力の与えられた人が、先入観を交えるこ

となくこの問題を考えてみれば、このような義認の概念が理性とも聖書とも相いれないことを必ず悟るはずですが。

5 義認の明白な聖書的概念は、赦免、罪の赦しです。それは、神のひとり子の血によるなだめの供え物の故に、「人が今まで犯した罪を見逃すことによつてご自身の義(あわれみ)をお示しになった」(ロマ三二五)という、父なる神の行為です。これこそが、ローマ人への手紙全体を通してパウロが説いている、義認についての無理のない自然な解釈です。そのようにパウロは、この書の三章と四章とで義認を説明しています。ですからパウロは、「信仰が義と認められる」(ロマ四五)という聖句から一つ跳んだ7、8節において「不法が赦され、その罪をおおわれた人たちは幸いである。主が罪を認めない人は幸いである」と述べているのです。義と認められ、赦された人に対して、神は「罪を認めず、有罪としません。この世にあつても来るべき世にあつても、このために有罪とはなりません。その人の罪、すなわち思いと言葉と行いにおける過去のすべての罪は、「おおわれ」、消し去られ、それらの罪がその人に対して記憶されたり、論告されたりすることはありません。あなたもそれらが存在しなかったごとくにです。罪人に代わつて苦しんだ愛する御子の故に、神は、罪人が当然受けるべき罰を下すことをされません。そして、私たちが「神の愛する方によつて受け入れられ」(エペ一六参)、
「彼の血によつて神と和解させられた」(ロマ五九、一〇参)時から、神はあなたも私たちが罪を犯したことがないかのごとくに私たちを永遠に愛し、祝福し、見守ってください。

もつともパウロはローマ人への手紙二一三で「律法を聞く者が神の前に正しいのではなく、律法を行なう者が正しいと認められるからです」と言つて、義認の意味を広げていると解釈しているように思

えます。ここで彼が言及しているのは、最後の審判での義認であると考えられます。主ご自身が「あなたが正しいとされるのは、あなたのことばによるのであり」と述べられたのも、疑いなく最後の義認についてです。「人はその口にするあらゆるむだなことばについて、裁きの日には言い開きをしなければなりません」(マター二37、36)。しかし、パウロの記した物を調べてみますと、義認をそのような遠い先の意味で解釈しているのは、既述のケースぐらいなものでしょう。パウロ書簡全体において、義認と言えば最後の義認のことでないことは明らかです。もちろんのこと、このローマ人への手紙四5では、パウロは「走るべき道のりを走り終え」(IIテモ四7)ようとしていて人のことを語っているのではなく、スタートを切ったばかりの人、「彼らの前におかれている競走を走り」(ヘブ二二一参)始めた人のことを語っているのです。

三

1 ここで私たちが検討しようとしている第三の課題が浮上します。それは、義とされるのはどのような人であろうか、ということですが、ローマ人への手紙四5で、パウロは義とされるのが不敬虔な者であることを紛れもなく語っています。神は「不敬虔な者を義と認める」とあります。それは、あらゆる種類の、あらゆる程度における不敬虔であり、神が義と認めてくださるのは、不敬虔な者以外の誰でもないのです。「義なる人は悔い改めを必要としない」(ルカ一五7参)ように、罪の赦しも必要としません。赦される理由を持つているのは、罪人だけであり、赦されるという概念が適応される

のは罪に対してだけです。それ故、赦しということは直接罪に関してだけであり、(その点において)ほかの何物にも関係していません。赦免の神が「あわれみ深い」のは、私たちの「不義」に対してであり、「思い出さない」のは私たちの「罪」のことです(ヘブ八12)。

2 これらのことは、人が義とされ得る前に聖化されなければならない、きよくなければならぬ、と熱心に論じる人々によっては、全く考慮されていないようです。特に、全般的な聖潔・服従が、義認に先立たなければならぬと主張する人々にとつてはそうです(ここで彼らが義認ということ、最後の日の義認を意味するならば話は別ですが、このことは今の問題とは無関係です)。そのような主張は、単純に不可能なものであるばかりか——というのは、神への愛がないところに、聖潔は存在せず、神が愛していただくという意識がないところに、神への愛は存在しないからです——本質的に不合理であり、それ自体矛盾しています。なぜなら、赦されるのは聖徒でなく罪人です。それは、罪人であるという概念のもとに、罪を赦すということが成り立っているからです。神は敬虔な者ではなく、不敬虔な者を義とされます。すでにきよい者ではなく、不浄な者を義とされるのです。いかなる条件の元に神がこれをなさるのかを、次に検討しますが、少なくとも、聖潔はその条件ではありません。それが条件であるとすれば、神の小羊は、前もって取り去られた罪だけを取り去ることになってしまいます。

3 良き羊飼いはすでに見いだされた者だけを捜し求めて救うのでしょうか。そうではありません。彼は失われた者を捜し求めて救い、赦しのあわれみを必要としている者を赦し、あらゆる種類の・あらゆる程度の罪人を、罪の責苦から(同時にその力からも)救うのです。彼らは、その時まで全く不

敬虔な者であり、その内に父なる神の愛は宿らず、従って内に宿っているのは、良いこと、良い氣質・真実なクリスチャンの氣質ではなく、傲慢・怒り・世に対する愛・「神に敵対している肉の思い」(ロマ八7)といった邪悪な嫌悪すべき事柄です。

4 「医者が必要とする」のは、「病人」、その罪の重荷が耐え難いほどになっている人たちです(マタ九12)。罪責に苦しみ、神の怒りの下にうめいている人々が赦しを必要としています。神によればかりか自分の良心によつて「すでにさばかれています」(ヨハ三18)人々、また周りの多くの人々も認めるように、その思いと言葉と行いにおける不敬虔さを裁かれている人々が、「キリスト・イエスによる贖いのゆえに」(ロマ三24)「不敬虔な者を義と認めてくださる方」(同四5)に向かつて叫ぶのです。——ここで「何の働きもない、不敬虔な者」とあるのは、義とされる以前には、私たちは良いこと、すなわち、真に徳があり聖なることを生み出すことができず、常に悪を生み出すからです。それは、神の愛が私たちの心の中に注がれる前、その心は必然的・本質的に邪悪であるからです。木が悪ければ、その実も悪く、「悪い木が良い実をならせることもできません」(マタ七18)。

5 もし、「いや、そんなことはない。義とされる前にも、人は飢えている者に食べさせ、裸の者に着させることができる。これらは良き業ではないのか」という反論があれば、答えは簡単です。その人は、義とされる以前に、そのようなことをすることもありません。そして、これらはある意味において「良き業」、「良いこと、人々に有益なこと」(テト三8)です。しかし、だからといって、それらが厳格な意味で、それ自体良いこと、すなわち神の目に良いことであると結論できません。真実な意味での「良き業」は(英国国教会「三九宗教箇条」・第12項「良き業について」にあるように)、

「義認の後に続く」ものであり、それ故に「キリストにあつて神に良きものとして受け入れられる」のです。なぜならそれらは「真実な生ける信仰から生じている」からです。それから類推して、「義認以前になされた業」はすべて、キリスト教の観点から「イエス・キリストに対する信仰から生じていない限りにおいて(もつともある種の神に対する信仰から生じている可能性はあるが)、良いものではない」。「むしろそれらが神が意図し命じておられることになされていないが故に、(ある人々には奇妙に思えたとしても)それらが罪の性質を帯びていることに疑いはない」(同13項「義認以前の業について」とあります。

6 これを疑う人々は、いかなる業であつても、人が義とされる以前は、真実に適切な意味で「良き業」と呼ぶことができないという命題の背後にある厳粛な理由を、正しく把握していないのでしよう。その理由は、次のような論理によつて成り立っています。

いかなる業も、それが神が意図し、命じられたとおりになされていないならば、「良い」ものではない。そして義認以前の業は、神が意図し、命じられたとおりになされているものではない。

よつて、義認以前の業は「良き業」ではない。

第一の命題は自明の理です。第二の命題についても、もし私たちが、神が意図し命じておられるのは「いつさいのことを愛をもつて(εραγαλίζω)行ないなさい」(1コリ一六14)ということであり、そしてその愛とは神への愛であり、その愛から人類すべてへの愛が流れ出るということを熟慮するなら、第一の命題と同様に明らかで、疑いの余地はないということがわかります。父なる神の愛が私たちのうちになければ、私たちは愛をもつて行なうことはできません。そして、神の愛は、私たちが「子と

してくださいる御霊、私たちの心の中で「アバ、父」と呼ぶ御霊（ロマ八15参）を受けるまでは、私たちのうちにはないのです。ですから、もし神が「不敬虔な者」、この意味で「何の働きもない者」を義としてくださいるものでなければ、キリストは死んでも、義とされる人はいません。十字架の死の事実があったとしても、もし神が良き業を条件に私たちを義とするのであれば、義とされる可能性のある人はだれひとりいません。

四

1 では、全く「不敬虔な者」であり、義とされるまで「何の働きもない者」が、どのような条件で義とされるのでしょうか。ただ一つの条件です。信仰による以外にはあり得ません。「不敬虔な者を義と認めてくださいる方を信じるなら」とあります。そして「御子を信じるなら、さばかれない」（ヨハ三18）、また「信じる者は……死からのちに移っているのです」（同五24）とあります。「イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。……神はキリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました」（ロマ三22、25）。それは「神ご自身が義であり、またご自身の義に二貫して」イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです（26）。よって、「人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰による、というのが私たちの考えです」（28）。義認はそれ以前になされた律法への服従行為によるものではありません。義とされる時点に至るまで、そのような行いを正し

く実行することはできないのです。ここで言う「律法」が、道徳律法を指していることは、それに続く箇所から明らかです——「それでは、私たちは信仰によって律法を無効にするのでしょうか。絶対にそんなことはありません。かえって、律法を確立することになるのです」（31）。信仰によって確立する律法とは、モーセの祭儀律法のことではなく、偉大な普遍的な愛の律法、神と隣人とを聖愛をもって愛すべしという偉大な普遍的な愛の律法のことです。

2 一般的な定義で、信仰とは、神が与える、超自然的な「確証」(evidenc)です。それは、過去、未来、或いは靈的な事柄についても、肉体の知覚では発見することのできない、「目に見えない事から」（ヘブ一1）についての保証です。しかし、私たちを義とする信仰は、「神はキリストにあって、この世をご自分と和解された」（IIコリ五19）ということの神的な確証・保証を意味するだけでなく、キリストは私の罪のために死なれ、キリストは私を愛し、私のためにご自身をお捨てになられたということの確かな信頼と確信を意味します。そのように信じたのが、罪人の人生のどの時期であったとしても、それが幼年期であれ、青年期であれ、白髪の混じる老齢期であったとしても、神は不敬虔な者を義としてくださいます。その時点まで何も良いものを持ち合わせていなかった者を、御子の故に、神は赦し、赦免されます。義認の以前に、神が悔い改めを与えられることは事実です。しかし、この悔い改めとは、自分の内側に良いものはいっさいなく、ただ汚れのみが満ちているということを深く意識することにはすぎません。人がキリストを通して神を信じた瞬間から、うちに何か良きことが生じるようになったら、信仰がすでにある良き業を見いだすのではなく、信仰がそれらを生み出すのです。それらの良き業は信仰の実です。まず、木が良くなり、それから実が良くなるのです。

3 この信仰の性質を説明するにあたって、以下の英国国教会の言葉を引用するのが最善だと思います。「救いを引き出す唯一の手段は（義認は救いの一つの枝であるが）信仰です。それは、キリストの死と受難の功績の故に、神が私たちの罪を赦された、また赦してくださいと、そしてご自身の好意のうち私たちに迎え入れてくださることを確かに信頼し確信することです。しかしここで私たちは、不連続な揺れ動く信仰によって、神の働きをとどめてしまわないように気をつけなければなりません。ペテロは水の上を歩いてキリストのところまで来ましたが、信仰につまずき、おぼれかけました。ですから、もし私たちの信仰が揺れて、疑い始めるなら、ペテロのように沈みかけることになりません。水の中にはなく、地獄の火の底知れぬ穴の中へです」(Homilies 受難についての第二の説教、ウエスレーによる抜粋)。

ですから「確かな信仰を常に保ちなさい。単にキリストが全世界のために死なれたことを信じるだけでなく、キリストはあなたのために全き十分な犠牲を払われ、あなたの罪を完全に洗いきよめてくださった。その結果、あなたはパウロと同じく、キリストがあなたを愛し、あなたのためにご自身をお捨てになったと告白するような信仰です。このような信仰こそ、キリストをあなた自身のものとし、その功績を自分に適用する信仰です」(Homilies、サクラメントについての説教、第一部、ウエスレーによる抜粋)。

4 この信仰こそが義認の条件であると言うとき、そこには第一に、信仰なくして義認はないという主張が含まれています。「信じない者はすでにさばかれている」(ヨハ三18)のです。そして信じない限り、その裁きは取り除かれることはなく、「神の怒りがその上にとどまります」(同三36)。「世界中で

ナザレ人イエスの御名の他には、私たちが救われるべき名としては、どのような名も与えられていない」(使徒四10、12参)のであり、罪に定められた罪人が罪責から救われるような功績は他にないので、すから、イエスの「御名を信じる信仰のゆえに」(使徒三16)による他、私たちが主の功績の一端に与る方法はありません。ですから、この信仰を失えば、私たちは「約束の契約については他国人」となり、「イスラエルの国から除外され」、「この世にあつては神もない人」となります(エペ二12)。人がいかなる徳(いわゆる)を持つていたとしても——ここで私は福音がすでに伝えられている人々について言っています。というのは、「外部の人たちをさばくことは、私のすべきことではないからです」(一コリ五12)——またいかなる良き業(一般に認められる)に励んでいたとしても、それは何の益にもなりません。その人は、イエスを信じるまでは、依然として「御怒りの子ども」(エペ二3)であり、呪いの下にいます。

5 それ故、信仰は義認の必要条件です。これこそが、そのための唯一の必要条件です。これが、私が見て深くおさえておきたい第二のポイントです。「何の働きもない者」「不敬虔な者」に、神が信仰を与えてくださる瞬間(信仰は神の賜物です)、「その信仰が彼にとって義とみなされる」(ロマ四5)のです。彼は、これ以前にいかなる義も——消極的な義、すなわち無垢さえも——持つていません。しかし信じる瞬間、「信仰によって義とされ」ます。(先に見たように)神が、その人物の実際の姿に目を伏せて、実際とは違ったものとして考えようというのではありません。「神は私たちの代わりにキリストを罪とされた」(二コリ五21)ように——すなわち、キリストを罪人として扱い、私たちの罪のためにキリストを罰したように——神は、私たちが信じたときから、私たちが義なるも

のとして見なしてください——すなわち、私たちの罪のために私たちを罰することをせず、あなたも私たちが罪の責任のない、義なるものであるかのように取り扱ってください。

6 信仰が義認の唯一の条件であるという条項に同意しかねると言うのであれば、それはたぶんこのことについての無理解に起因しているはずですが。私たちはこの条項によって、それなくしてはだれも義とされ得ることができない、義認の唯一の条件があるとすれば、それは信仰であり、信仰こそが赦しを得るための直接的に、不可欠に、絶対的に要求されている唯一のものであると言っているのです。人は、他のすべてのものを持っていたとしても、信仰なくしては義とされません。同じように、人は、他のすべてのものを欠いていたとしても、信仰があれば、義とされずにはいられません。どんな種類の、どんな程度の罪であれ、彼のすべてが不敬虔で、その思いも言葉も行いも、善を指向するのに全く不可能であり、裁きの火にきわめてふさわしい罪人がいたとしましょう。仮に、この無力で、絶望的な罪人がキリストにある神の憐れみに全的に自分自身を投げ込んだとすれば（こうすることも神の恵みによるのですが）、その瞬間に彼の罪が赦されることをだれが疑うことができましょう。その罪人が義とされる前に、それ以上の何が不可欠に要求されているなどとだれが主張することができます。

さて、世界のはじめからこのような例が一つでもあるとしたら（そしてそのような例が万の万倍もあったであろうし、今もそうであると思うのですが）、上記のような意味における信仰こそが、義認の唯一の条件であるということは明白に理解されます。

7 神のなさる行為についてその理由を神に問うことは、哀れな、罪深い、虫けらのような人間にふさわしいことではありません。私たちはあらゆる祝福（舌を冷やす一滴の水から永遠の栄光の無限の富に至るまで）を恵みのうちに、報酬としてではなく、純粹な神の好意のうちに受けているのです。私たちは、「自分の方法をいっいち釈明することのない」（ヨブ三三三参）神を呼び出して、「どうして信仰を義認の条件、唯一の条件と定められたのですか」、どうしてあなたは信じる者だけが救われるように定められたのですか、と尋問することはできません。これは、パウロがローマ人への手紙九章で、強調しているポイントです。すなわち、罪が赦され神に受け入れられるための条件とは、私たちの側にあるのではなく、「私たちを召してくださいとされる方による」（一一）のです。私たちの思いではなく、ご自身の御心のままに、ご自身の条件を決定されるとき、「神に不正があるのですか。絶対にそんなことはありません」（14）。神が、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ」（15）、すなわちイエスを信じる者をあわれむと言われても、神には何の不正もありません。「したがって」、神に受け入れられる条件を選ぶのは、「人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです」（16）。神はご自身の無償の愛・ご自身の無条件的恵み以外の理由からは、だれも受け入れないのです。「こういうわけで神は、人をみこころのままにあわれみ」、すなわちその愛するひとり子を信じる者をあわれみ、また信じない人々を「みこころのままにかたくなにされ」（18）、すなわちついに彼らの心のかたくなさにまかされます。

8 しかしここで、神が義認の条件として「主イエスを信じるならば、あなたは救われます」（使徒一六三参）と定められた理由をひとつ、謙虚になつて考えたとすれば、それは「人間から高ぶりを離れさせる」（ヨハ三三三17）ためであったと言えるでしょう。これまで傲慢は神の天使たちを破滅させ、

「星の三分の一」（黙示八12）を打つてきました。誘惑者がアダムに近づき、「あなたがたがそれを食べるその時）あなたがたが神のようになり」（創世三5）とささやき、堅実に歩んでいた彼をころばせ、罪と死をこの世界にもたらした原因は、傲慢でした。ですから、神がこのような和解の条件をアダムとそのすべての子孫とに定め、彼らを謙遜にさせ、塵にまでへりくだらせるのは、神にふさわしい知恵の一つのあらわれと言えます。そのような条件が信仰なのです。信仰はこの目的のために特に適しています。というのは、この信仰によって神のみもとに来る人は、自分の中にあるいかなる善をも省みず、またいかなる徳をも省みず、ただ自分の罪深さと罪責と無力さだけに目を留めなければならぬからです。その人は、自分に絶望し、自分を責め、不敬虔さ以外には何も神に差し出すものを持っていない、内も外も全くの罪人として神のみもとに來ます。自分の罪とみじめさ以外に、何の言い訳も持ち合わせていません。「口がふさがれ」、「神のさばきに服する」（ロマ三19）とき、まさにこのとき彼は「自分の罪のためのなだめの供え物」（一ヨハ二2）として、唯一の全き贖いとして、イエスを見上げることができます。このようにして、信じる者は「キリストの中にある者と認められ」（ピリ三9）、「信仰による神の義」（ロマ三22）を受けられます。

9 これらの言葉を聞き、また読んで、不敬虔な、罪深い、無力で、みじめな罪人であるあなたに、強くお勧めします。神はすべての裁き主です。あなたはあなたのありのままの不敬虔な姿で、ストリートに神のみもとへ行きなさい。大したことない自分の義をかざして、自分の魂に滅びを招くことのないように注意しなさい。全く不敬虔な、罪深い、失われた、破滅を招いている、地獄にふさわしい、そこに墮ちるべき者として、神のみもとへ行きなさい。そのとき、神の恵みを見いだし、

神は不敬虔な者を義と認めてくださる方であることを知るでしよう。どうしようもない、無力な、呪われた罪人として、あなたは「注ぎかけの血」（ヘブ一二24）のもとに連れて来られねばなりません。そうして「イエスを仰ぎ見るべし」（ヘブ一二別訳）です。ここにあなたの「罪を取り除く、神の小羊」（ヨハ一29）がおられます。あなた自身の行為や義を主張してはなりません。あなたの謙遜も、懺悔も、誠実さも、決して主張してはなりません。そのようなことは、あなたを贖われた主を拒絶することです。契約の血だけを、あなたの傲慢で、かたくなな、罪深い魂を救うために流された贖いの犠牲だけを主張しなさい。自らの内と外とに、その罪深さを見て、感じているのはだれでしよう。あなたがその人なのです（Ⅱサム一二7参）。私は、あなたを主のために差し出したい。信仰によって神の子どもとなることをあなたにチャレンジします。神はあなたを求めておられます。地獄にふさわしいと自分自身を見ているあなたこそ、神の栄光を示すのにふさわしいのです。不敬虔な何の働きもない者を義とすることによって、神の無償の恵みの栄光が現れます。今すぐおいでください。主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたは、あなたのような人でも、神と和解するのです。

説教 6

信仰による義

The Righteousness of Faith

訳者ノート

説教集におさめられている最初の七つの説教は、いずれも一七三八年から一七四六年というリバイバルの初発期に記されている。その内容は一貫してアルダスゲイト以降のウエスレーのあらゆる働きの原動力となった「恵みによってのみ」へ「信仰によってのみ」という救済論を詳細かつ明白に叙述したものである。この六番目の説教も、全く同じテーマを扱いつつ、しかし、今回は契約神学の概念を素材にして論じているのが特徴である。

「律法による義」と「信仰による義」という対照を描いているローマ人への手紙一〇五、6が説教のテキストであるが、ウエスレーが実際に論じるのは、「契約神学」(covenant theology)に特有な「行いの(に基づく)契約」と「恵みの(に基づく)契約」という対照概念である。契約神学は、オランダと英国の改革派神学の流れの中で独特な発展を遂げた。ウエスレーがここで述べている二つの契約は、たとえば「ウエストミンスター信仰告白」(1647)の中に、次のように表現されている。

「神が人間と結ばれた最初の契約は、行いの契約である。そこにおいて、アダムと彼の子孫とに、神への完全かつ個人的な服従を条件に、いのちが約束された。しかし罪に堕ちた人は、この契約によっていのちを得ることはできなくなり、主はあわれみの故に第二の契約、すなわち恵みの契約を結ばれた。そこにおいて主は、罪人に対してイエス・キリストによるいのちと救いを無代価で提供され、救われるためにご自身を信じる信仰を要求された」(VII・2-3)。ウエスレーは、他の説教(説教12「私たち自身の霊の証し」§20、説教35「信仰によって確立される律法」I・二・3-4、説教127「婚礼の礼服について」§19)

においても、この対照概念を用いている。

この説教で、ウエスレーは、まずこの二つの義・二つの契約の違いを説明し、その後、律法の義、すなわち行いによる救いを追求することが、いかに愚かなことであるかを力説している。律法の義は行いの契約に基づく義であり、これは墮罪以前のアダムのみにみ適應されていた救いのあり方である。よって墮罪以降に生きる人間が、律法の義によって救いを得ようと努力するならば、それは見果てぬ夢を追いかける全く見当違いな試みとなる。そのような試みは、「その出発点において誤っています。彼らの第一歩が根本的に誤っているのです」(二・一)とウエスレーは訴える。エデンの園にいたアダムの状態からはるかに彼方で墮落している自分に対して、行いに基づく契約を課すことは、負いきれない重荷を背負うことである。それは、絶望的に愚かなことであるという。逆に、ベストの目標をベストの方法で追求することこそ、真の知恵である。ベストの目標とは、「神の好意と神の似姿の回復」であり、それを追求するベストの、そして唯一の方法が「信仰による義」を受けるとであるとウエスレーは訴えている(二・8)。

最後のセクションで、ウエスレーは義を追い求めている人において自己義認の傾向性に警戒を発している。恵みの契約を忘れて、義を勝ち取らねば、神に認めてもらわねばと必死になつていっている人のうちに自然と生じてくるのが、義とされるためには「まず (first) ……しなければならぬ」「まだ充分ではない」(not enough)「あるいは一もの (more) ……しなければならぬ」というような一種の強迫観念である(三・1-5)。この強迫観念が、ジョージア宣教師時代のウエスレーをノイローゼとも思える霊的不安へと追い込んでいた。やがてウエスレーは、救いの希望が唯一「信仰による義」にあることを悟る。

ジョージアからの帰国の船がイギリスに着いた日、彼は日誌にこう記した。

「自分の心の中には死の宣告があり、自分の中には自分についても弁護できるようなこととは何も持っていない。それ故、キリストにある贖いを通して無代償に義とされるということを除いては、私には何の希望もない。また、キリストを探し求めて見いだして、「キリストに見いだされて、自分自身の義ではなく、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰によって神から与えられる義を持つ」ことだけが私の希望である」(1738.2.1)。

説教6 「信仰による義」

「モーセは、律法による義を行なう人は、その義によって生きる、と書いています。しかし、信仰による義はこう言います。「あなたは心の中で、だれが天に上るだろうか、と尋ねてはいけません。それはキリストを引き降ろすことです。また、「だれが地の奥底に下るだろうか、と尋ねてはいけません。それはキリストを死者の中から引き上げることです。では、どう言っていますか。「みことばはあなたの近くにある。あなたの口にある、あなたの心にある。」これは私たちの宣べ伝えている信仰のことば

の「ことば」。(ローマ人への手紙10518)

序

1 パウロはここで、モーセによる契約をキリストによる契約と対立させようとしているのではありません。もし私たちが対立していると考えるなら、それは以下のことを認め損なっているからです。すなわち、これらのことばの前者も後者も、イスラエルの民に対してモーセ自身が語ったものであり、しかもその当時存在していた契約に関するものであったということです。しかし、この契約は恵みの契約であり、神が受肉された後も、またユダヤ人の経緯の以前にも、そのただ中にあっても確立されていたものです。ここでパウロは、この恵みの契約と対立させて、神がバラダイスでアダムと結ばれた行いの契約を描いています。後者は、通常、この手紙の読者となっているユダヤ人にとっては、唯一の契約と言われています。

2 この章(一〇章)の始めにパウロが非常に愛情をこめて語っているのは、この人々についてです。「私が心の望みとし、また彼らのために神に願い求めているのは、彼らの救われることです。私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。というのは、彼らは神の義を知らず(イエスにある贖いを通して、神がその愛する御子によって、無代価で私たちの罪を赦すという、神の恵みと憐れみから生じる義認を知らず)、自分自身の義を

立てようとして(不敬虔な者を義と認めてくださる方を、赦しと受容の根拠として信じる信仰よりも、自分自身の聖さを立てようとして)、神の義に従わなかった」(ローマ一〇113)、従って人生を誤ったまままで死を求めているのです。

3 彼らは「キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められる」(ローマ一〇4)ことを知らず、主がご自身をひとたび献げることによって、最初の律法、或いは契約(それはたしかに神からモーセによって与えられたものではなく、無垢の状態にあったアダムに与えられたものでした)を終わらせなされたことを知らないのです。その律法の少しの手加減もない厳密な主旨は、「実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます」(ルカ一〇28)でしたが、主はそれを終わらせ、同時に「信じなさい。そうすれば、生きます」、「信じなさい。そうすれば、救われます」(使徒一六31)というさらに勝る契約を買い取ってくださいました。今や、罪の責めと力から、また罪の代価の結果から救われるのです。

4 そして今、キリストの御名によって呼ばれる人々の中にさえ、いかに多くの者たちが同じように無知であることでしょうか。いかに多くの人々が「神に対して熱心で」ありながら、「その熱心は知識に基づくものではなく、自分たちの赦しと受容の根拠として「自分自身の義を立てようとして」、その結果、「神の義に従」うことを激しく拒否しているでしょうか。「兄弟たち。私が心の望みとし、またあなたがたのために神に願って求めているのは、あなたがたの救われることです」(ローマ一〇11参)。そしてあなたがたの道からこの大きなつまずきの石を取り除くために、私が示そうとしたことは、第一に、「律法による義」とは何か、「信仰による義」とは何か、ということ、第二に、「律法による義

に頼る愚かさ、「信仰による義」に従う知恵です。

1 「律法による義」は、「これらのことを行う者は、それらによって生きる」と言います。間断なく、完全に、これらすべてのことを守りなさい。実行しなさい。そうすればあなたは永遠に生きます。パラダイスで神から人間に与えられたこの律法あるいは契約（通常、行いの契約と呼ばれています）は、聖きと幸福のうちに造られた人間が、永遠にその状態に保たれるためには、あらゆる部分における完全な服従、全く、欠けない服従を要求していました。

2 それは、人があらゆる義、すなわち、内のおよび外的な義、消極的および積極的義を全うするように要求し、すべてのむなしきことばから遠ざかり、すべての悪しきわざを避けるだけでなく、あらゆる感情、あらゆる願望、あらゆる思いを神のみこころに従わせることを要求しました。また、造られた方が聖くあるように心とすべての行状において聖く、神が聖くあるように、心が聖く、天にある御父が完全であるように、完全であることを要求しました。心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、神である主を愛し、神が愛されたと同じように、神が造られたすべての者をも愛し、この普遍的ないつくしみによって、「神（すなわち、愛）のうちにおり、神もその人の内におられ」（イヨハ四16）ることを体験し、神である主に、力を尽くして仕え、すべての点で神の栄光のみを現すように、要求していました。

3 これらのことが、生きるために要求されていた律法の義でありました。しかし、さらに求められていたことは、この神に対する全面的な服従、この内面的、外面的きよめ、神のみむねに対する心と生活の合致は、程度においても完全でなければならぬ、ということでした。外面的であれ、内面的であれ、一点、一面でも弱めたり、手加減したりすることは、この律法に届かないこととなります。もし外面的な事柄についてすべての戒めを守ったとしても、全力を傾けて、最高の程度で、しかも最も完全な方法で、ひとつひとつを守ったのでなければ、それは十分であったとは言えません。また、自分に与えられている全能力を挙げて、たましいのすべての可能性をもって愛するのでなければ、全力を尽くし、すべての能力を生かして、神を愛しているとは言えません。

4 律法の義の要求と不可分のもうひとつのことは、この普遍的な服従、この心と生活の全ききよめは、全く途切れることのないものでなければならぬ、すなわち、神が人間を創造し、その鼻にいのちの息を吹き入れなされた瞬間から、人間の試験期間が終わって、永遠のいのちに確立されるまで、中断なしに継続されなければならない、ということです。

5 とすれば、「律法による義は、このように語り続けます。」ああ、神の人よ、愛のうちに、あなたが造られた時に与えられた神の似姿のうちに、堅く立ちなさい。あなたがいのちに留まりたいならば、あなたの心の中に記されている戒めを守りなさい。あなたの神である主を心を尽くして愛しなさい。神の造られたすべてのたましいを、あなた自身のように愛しなさい。神以外の何物をも願望してはなりません。すべての思い、すべてのことばとわざの中に神を目指しなさい。体やたましいのひとつの動きの中にも、あなたの目標、上に召してくださいさる栄冠からそれではなりません。あなたのうちにあ

るすべてのものが、神の聖い御名を崇めますように。あなたのたましいのあらゆる能力と機能が、いかなる種類であれ、いかなる程度であれ、あなたが存在するいかなる瞬間であつても、主の御名を崇めますように。「それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます」(ルカ一〇28)。あなたの光は輝き、ついにあなたは天にある神の家に受け入れられ、主とともに永遠に治めるようになるでしょう。」

6 しかし、信仰による義はこう言います。「あなたは心の中で、だれが天に上るだろうか、と尋ねてはいけません。それはキリストを引き降ろすことです。(あたかもそうすることが、あなたが受け入れられるために神が前もってあなたに要求しておられた不可能な仕事であるかのよう)に。また、だれが地の奥底に下るだろうか、と尋ねてはいけません。それはキリストを死者の中から引き上げることです。(あたかもあなたが受け入れられるためになお残ったことがあるかのよう)に。では、どう言っていますか。みことば(文の流れから言えば、あなたは今や永遠のいのちの相続者として受け入れられているのですが)はあなたの近くにある。あなたの口にある。あなたの心にある。これは私たちの宣べ伝えている信仰のことばのことです」。それは神が今や、キリスト・イエスを通して罪人と結ばれた新しい契約です。

7 「信仰による義」の意味していることは、神のひとり子の功績と仲介によつて、神から墮落し、人間に与えられる、あの義認(その結果は、現在の救いと、私たちが終わりまで耐え忍ぶならば与えられる究極的な救い)の条件です。これは部分的ではあつても、アダムが墮落した直後、彼に啓示されたものです。その内容は、蛇の「頭を踏み砕く」(創世三15)女の子孫に関する彼と子孫とになされた原始の約束です。それはもう少し明白にアブラハムに啓示されました。神の御使いは彼にこう言

われました。「これは主の御告げである。わたしは自分にかけて誓う。……あなたの子孫によつて、地のすべての国々は祝福を受けるようになる」(創世二16、18)。それはさらに詳しくモーセに、ダビデに、あとに続く預言者に知らされ、さらに彼らを通して、それぞれの時代の多くの神の民に示されました。しかしこれらの人々の大部分は、それを知りませんでしたし、それを明瞭に理解した人々はほとんどありませんでした。いにしへのユダヤ人には、「いのちと不滅」は、今の私たちに「福音によつて」明らかに示されているほどには、「明らか」にされていません(IIテモ一10)。

8 さてこの契約は、罪ある人に対して、「罪を犯さない服従を続け、生きなさい」と言っているものではありません。もしこれが条件であるとすれば、彼(罪人)はいのちに至るために、天に上つてキリストを引き降ろし、地の奥底に(すなわち、見えない世界)に降りて行ってキリストを死者の中から引き上げることが要求されているのと同じように、キリストが彼のためにしてくださり、苦しんでくださったすべてのことから、何の益も受けていないこととなります。不可能なことを行うようにと要求するものではありません。(もつとも、単なる人間にとっては、この義が要求していることは不可能でしょうが、神の御霊に助けられている人にとっては可能です)。上述のような要求は人間の弱さを侮るだけです。厳密に言えば、恵みの契約は、私たちが義とされるために絶対的で不可分の条件として、何かを行うことを一切要求していません。むしろ、御子とその果たしたくださったための供え物(propitiation)のゆえに、「何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださった方を信じるなら、その信仰が義と見なされる」(ロマ四5)ことを信じさえすればよいのです。ですからアブラハムも「主を信じ、主はそれを彼の義と認められた」(創世一五6参)のです。「彼は、……信仰によつて義と

認められたことの証印として、割礼というしるしを受けたのです。それは、彼が、信じて義と認められるすべての人の父となる」(ロマ四四) ためでした。「しかし、彼の義と見なされた、と書いてあるのは、ただ彼のためだけでなく、また私たちのためです。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、その信仰を義と見なされるのです。(私たちが神に受け入れられるためには、完全な服従のかわりにその信仰を義と見なされるのです)。主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです」(ロマ四三、25)。私たちの罪の赦しや、信じる者に与えられる第二のいのちを確信させるためでした。

9 それでは、救しの契約、功績なしに受けられる愛、救しを伴うあわれみは、何と書いていますか。「主イエス・キリストを信じなさい。そうすれば、あなたは救われます」(使徒一六31参)。あなたが信じる日に、あなたはたしかに生きるのです。神の恵みに回復されます。神を喜ぶことにいのちがあります。のろいから救われ、神の怒りから救われます。罪の死から生かされ、義のいのちに至るのです。もしイエスを信じながら、終わりまで耐え忍ぶなら、決して第二の死を味わうことがありません。主とともに苦しむことによって、主とともに永遠に生き、治めるでしょう。

10 さて「みことばはあなたの近くにあり」ます。このいのちの条件は、明白で、平易で、常に身近にあります。神の御霊の働きによって「あなたの口にあり、あなたの心にある」のです。「あなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じる」瞬間、あなたは罪責から、過去の罪の咎や刑罰から「救われ」(ロマ一〇8、9)、生涯の残るすべての日々に、まことの聖きをもつて神に仕える力を与えられます。

11 それでは、「律法による義」と「信仰による義」との間には、どういう違いがあるのでしょうか。最初の行いに基づく契約と、第二の恵みに基づく契約との違いは何でしょうか。本質的で、不変的な違いは、これです。前者は、これが与えられる人間が、すでに聖く、幸福であり、神の似姿のように造られ、神の恵みを喜んでいると考え、また彼がその中に留まる条件は「愛と喜び、いのちの不滅、である」と規定します。後者は、これが与えられる人間が、現在は聖さも喜びもなく、神の輝かしい似姿からはほど遠く、神の怒りがその上に留まり、罪によってたましいが死んでしまっているので、彼の肉体の死と永遠の死に向かつて急いでいると考えます。そしてこのような状態にいる人間に対して、失われた真珠を見いだし、神の恵みとみかたちを回復し、そのたましいに神のいのちを取り戻し、神の知識と愛へと回復するための——これは永遠のいのちの始まりですが——条件を規定しています。

12 さらに、行いの契約は、神の顧み、神の知識と愛、聖きと幸いに留まるために、完全な人に対して、神の律法のあらゆる点に至るまで、完全な、たゆまない服従を要求します。これに反して、恵みの契約は、人間が神の恵みといのちに回復されるためには、信仰だけ——従わなかった人を義とされる方に対する生きた信仰——を要求します。

13 さらに言うならば、行いの契約は、アダムとそのすべての子孫に対して、将来のすべての神の祝福を受けるために、自分たちで代価を払わなければならない、と要求します。しかし、恵みの契約にあっては、私たちが全く何も払えないことを知っておられる神は、もし私たちが私たちのために、ご自身で代価を払ってください、「私たちの罪のための——私たちの罪だけでなく、全世界のための——なだめの供え物」(一ヨハ二二)として「自分を与えてくださった方を信じさえするならば、私たち

べての者を無代価で赦してください。

14 このように、第一の契約は、今はすべての人からはるかに離れていること、すなわち、罪を犯すことのない服従、「罪のうち」に（母が）みごもり、生まれた」（詩篇五—5参）者からはるかに離れていること、を要求していました。これに反して、第二の契約は、私たちのごく身近にあることを要求します。それはあたかもこう言っているかのようです。あなたは罪であり、神は愛です。あなたは罪によって神の栄光からはるかに離れましたが、神には憐れみがあります。ですからあなたのすべての罪の赦しを与える神のもとに持って来なさい。そうすれば、それは雲のように消え去ります。不敬虔な者を義とすると言われる神の前に、あなたは不敬虔であってしかるべきです。しかし今は、全き信仰をもって神に近づきなさい。神が語られるなら、事は成るのです。恐れてはなりません。ただ信じなさい。正しい神は、「イエスを信じるすべての人を義としてくださる」（ロマ四5参）からです。

一一

1 これらのことを考慮したあとで、第二に、私が示そうとしていることは、「律法による義」に頼ることの愚かさ、「信仰による義に従う」ことの賢さについてです。このことは容易でありましょう。「律法による義」、すなわち、「これを行いなさい。そうすれば生きます」ということばになお頼っている人の愚かさは、次のことによつて明らかです。彼らの出発がまちがっていたのです。彼らの第一歩が基本的に誤っていたのです。なぜならば、彼らがこの契約の条件について何らかの祝福を要求

することを考える前に、彼らはこの契約を結ぶその相手と同じ立場にいると考えなければならなかったからです。しかしこれは何という空想でしょうか。この契約が無垢の状態にいたアダムと結ばれたからです。従つて、このような土台の上に立っている建物全体は、何と弱いことでしょうか。このように砂の上に建てる人々は、何と愚かなことでしょうか。また行いの契約が、罪過と咎とに死んでいた人に対してではなく、神に対して生きていた時に与えられたことを考慮してはいないと思われ人々、彼が罪を知らなかった時、神が聖くあられるように聖くあつた時に与えられたことを考慮してはいないと思える人々は、何と愚かなことでしょうか。「律法による義」がひとたび失われた神の恵みといのちを回復するため意図されたものでなく、神の恵みといのちを継続し、増進し、ついには完成して永遠のいのちに至るように意図されていたことを忘れた人々は、何と愚かなことでしょうか。

2 また「律法による自分自身の義を立てようとして」いる人々は、律法が不可分のものとして要求しているのが、どのような服従や義であるかを考えません。それはすべての点で、完全に全きものでなければなりません。さもなければ、それは律法の要求に應えることができません。しかし、あなたがたのうちだれがこのような服従を全うし、その結果、それによつて生きていますでしょうか。あなたがたのうち、だれが神の外面的な一画も破らずに、守っているでしょうか。神が禁じられたことは、大きな事であれ、小さな事であれ、何一つ行わず、神が命じられたことは一つもらさずことなく従うという人がいるでしょうか。「むだなことば」（マタ二二36）を少しも語らず、いつも「聞く人に恵みを与え」（エペ四29）るような行状ですか。また「あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すために」（1コリ一〇31）していますか。さらに、神のすべ

ての内面的ないましめを守る人はいかに少ないでしょうか。あなたのためしいのすべての気質や動作が主に聖くあるように要求しているいましめを守っていますか。「心を尽くして神を愛し」(申六五) っていますか。すべての人を自分のためしいのよう愛していますか。「絶えず祈」(一テサ五七) っていますか。「すべてのことについて、感謝し」(同五八) っていますか。神をいつでもあなたの前に置いていますか。すべての愛情、願望、思念を神の律法に従わせていますか。

3 あなたがさらに考えなければならぬことは、律法の義は、消極的であれ、積極的であれ、内面的であれ、外面的であれ、神のすべてのいましめを守るだけでなく、程度においても完全でなければならぬということです。いかなる場合でも、律法の声はすべて「力を尽くして、あなたの神である主を愛し」(マコ一二三〇) なさいです。それはいかなる種類の減退も、少しの欠けも許しません。それは十分な程度の服従に少しでも足りない事を責め、ただちに罪を犯した人にのろいを宣告します。それは不変の公正の諸規則のみを重んじ、「わたしはあわれみを示すことを知らない」(シエークスピア「ベニスの商人」・V・ii・176-82) と言います。

4 誤りを犯すことに極端に目を留めなされるこの審判者の前に、だれが立つことができましょう。「だれひとり」(アダムの子孫のうち、だれひとり) 義と認められない」(詩篇一四三二) 法廷で裁かれようと願う者は、いかに弱さを感じるのでしょうか。たとえ私たちがすべてのいましめを力を尽くして守ったとしても、そのひとつでも破ったなら、私たちのすべてのいのちへの要求を完全に破壊することになります。もし一点であつても、罪を犯すなら、この義は終わるのです。なぜなら、律法は途切れることのない、完全な服従をしない人々を罪に定めるからです。

ですから、この宣告によれば、いかなる種類であつても、ひとたび罪を犯した人には、「罪のためのいけにえは、もはや残されていません。ただ、神に逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりはかはないのです」(ヘブ一〇26、27参)。

5 墮落した人間、「咎ある者として生まれ、罪ある者として母がみごもつた」(詩篇五一五) 人間、生まれつき「地に属し、肉に属し、悪霊に属する」(ヤコ三15) 人間、全く「腐っており、忌まわしい」(詩篇五三) 人間、恵みを受けるまでは、その「うちに善が住んでいない」(ロマ七18) 人間(そうです、自分の力によつてはひとつの良いいさえ持つことができません)にとつて、この義によつていのちを求めるとは、愚の骨頂です。まことにすべてが罪であり、不敬虔のかたまりにしか過ぎない人間、呼吸するすべての息によつて罪を犯している人間、言葉と行為において、実際に犯す罪の数が頭の毛よりも多い人間にとつてです。このように不潔で、罪多く、無力な虫(にしか過ぎない人間)にとつて、「自分の義」によつて受け入れられることを求め、「律法による義」によつて生きることを夢見ることは、何という愚かで、愚鈍なことでしょうか。

6 さて「律法による義」に信頼する愚かさを証明するもろもろの考察は、同時に「信仰に基づいて、神から与えられる義」(ピリ三9) に従う賢さも証明します。これは前述の考察にしたがつて、容易に示す事ができます。しかし、それを差し控えるとしても、この義への第一歩を踏み出すことの賢明さ、即ち、自分自身の義を放棄する事の賢明さは、次の事に明白に表れています。それは真理、事柄のまことの性質に従つて行動することです。それは、私たちの本当の状態を、唇とともに、心で認めることです。私たちは腐敗した、罪深い性質、私たちが安易に考えたり、表現することばを見いだ

したりすること以上に腐敗した性質とともにこの世に生まれて来たことを認めます。従って私たちはあらゆる悪に傾きやすく、あらゆる善を憎悪する傾向性を持っています。私たちは誇りと自己意志と制御されない情欲と愚かな願望といやしく不当な感情とに満ちています。神を愛するよりも快樂を愛する者です。私たちの生活もその心と同じです。多くの面で不敬虔であり、不潔でありました。私たちの**実際の罪は、言葉においても、行為はおいても、天の星のように無数でした。**ゆえに、あまりにきよくて悪を見たまわらない神の目には、私たちは喜ばれない存在であり、罪の代価である憤りと怒りと死とを受けるのが当然でした。私たちは私たちのいかなる義によっても（なぜなら、私たちは何の義も持ち合わせていませんから）、いかなるわざによっても（なぜなら、それは育ってきた木のようですから）、神の怒りをやわらげ、私たちが当然受けるべき刑罰を変えることができません。もし放っておかれるなら、いよいよ悪は増大し、深く罪に沈んで行き、私たちの悪しきわざと、肉的な心から生じる悪しき性情によって神に対する罪となります。そしてついには、悪の杯を満たし、速やかな破壊をもたらずでありましょう。これこそが、生まれつき、持っている性質ではありませんか。私たちの心とくちびるによって、このことを認め、私たち自身の義、「律法による義」を放棄することは、事柄の本当の性質に従って行動することであり、従って、まことの知恵の一例でもあります。

7 「信仰による義」に服する賢さは、これが「神の義」であることを考えるとき、明らかです。私がここで言おうとしているのは、これが神ご自身によって選ばれ、確立された、神との和解という方法である、と言うことです。神は知恵の神であられるだけでなく、天と地や、ご自分が造られたすべての被造物を支配される、主権者です。人間が神に対して、「あなたは何をなさるのですか」と語る

ことはふさわしくありません——悟りを全く欠いている者が、自分よりも強い方、すべての王国を治めておられる方に対して語るかのように。神が何を選ばれてもそれを黙って受け、すべてのことと同様にこのことについても「その方は主だ。主がみこころにかなうことをなさいますように」（1サム三18）と申し上げることが、まことの知恵であり、健全な悟りのしるしです。

8 さらに考えなければならぬことは、神が罪人に対してご自分との和解の道を開いてくださり、私たちがその御手から払いのけられることなく、その御顧みから完全に消し去られてしまわなかったのは、恵みのみ、無代価の愛、受けるに価しない憐れみによる、ということなのです。ですから神が御目の前に、与える価値のない者たちへのそのやさしい憐れみと愛とのゆえに、ご自分に対して徹底的に反抗し、長期にわたり頑強に反逆している者たちを、なお受け入れるために定められた方法は何であつても、それを感謝して受けとめることが、疑いもなく知恵のあることです。

9 もうひとつの考察を述べて見ましょう。それは最上の目的を最上の手段によって、果たそうとする知恵だからです。さて、いかなる被造物であっても、追求できる最上の目的は、神にある幸福です。そして墮落した被造物が追求できる最上の目的は、神の好意と似姿を回復することです。しかし、天の下にあって、人間が神の恵み（これこそいのち自体よりも貴いのです）と神の似姿（これがたましいのまことのいのちです）に回復する最上の、唯一の手段は、「信仰による義」に従うこと、神の御子を信じることです。

1 従つて、救され、神の恵みと和解することを願う人はだれであつても、心の中で、「私はまず、これをしなければならぬ。私はまず、すべての罪を征服し、すべての悪しき言葉と行いから離れ、すべての人にあらゆる善を行わなければならない。あるいは、私はまず、教会に行き、主の聖餐にあらずかり、もつと多くの説教を聞き、もつと多くの祈りを捧げなければならない」と言つてはなりません。ああ、兄弟よ、あなたは全く道からはずれてしまつています。あなたはなお、和解の根拠として「神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして」います。あなたは神と和解するまでは、罪を犯す以外に何もできないことを知らないのですか。なぜ、私はまず、これこれのことを行わなければならない、それから信じる、と言うのですか。そうではありません。まず、信じなさい。主イエス・キリストがあなたの罪のためのなだめの供え物であつたことを信じなさい。この大切な土台をまず据えなさい。そうすれば、すべてのことを順当に行うことができます。

2 また、心の中で、「私は十分には良くなつていないから、受け入れていただけぬ」と言つてはなりません。神の手で受け入れていただくいさおしを持つているほど、善良な人、善良だった人がいるでしょうか。アブラハムの子のうちで、これを受けるとは善良だった人はいたでしょうか。すべてのことの完成に至るまで待つても、果たしてそのような人が一人でも現れるでしょうか。あなたについて言えば、全く善良ではありません。あなたのうちには、何の良きものも宿つていません。イエスを信じるまで、決して善良にはなれません。むしろ、自分がますます悪くなつていくのを見いだすで

しよう。しかし、救われるためにますます悪くなる必要があるでしょうか。あなたは、もう十分に悪いわけではありませんか。たしかにそうです。そしてそのことを神もご存じです。そしてあなた自身、それを否定できません。遅れてはなりません。すべての物は、今、備えられています。「立ちなさい。自分の罪を洗い流しなさい」(使徒二二16)。泉は開かれています。今こそ、小羊の血によつて白く洗う時です。今こそ、「ヒソプをもつてきよめてください。そうすれば、きよくなりましょう。主はあなたを洗つてくださいます。そうすれば、あなたは雪よりも白くなりましょう」(詩篇五一7)。

3 「しかし私は十分に悔い改めていない。罪を十分に自覚してはいない」と言つてはなりません。私は知っています。私が神に願う事は、あなたがもつと罪を自覚し、今より何層倍も悔い改めてほしいのです。しかしここに留まつてはなりません。信じる前ではなく、信じることによつて、あなたを深い悔い改めに導いてくれるかも知れません。あなたが十分に赦されたがゆえに、多く愛するようになるまで、あなたは悔い改めの涙を流すことはないかもしれません。その間、イエスに目を留めなさい。見よ、主はいかにあなたを愛しておられることでしょうか。主がなさったこと以上に何ができたでしょうか。

神の小羊よこのような痛みがあつたでしょうか

あなたのような愛があつたでしょうか

(Samuel Wesley, Ser. "On the Crucifixion")

主があなたをごらんになり、あなたのかたくなな心を砕きなされるまでは、主をしつかりと見つめなさい。そのときに、あなたの「頭は水となり、あなたの目は涙の泉」(エレ九一)となるでしょう。

4 また、「私はキリストのもとに行くまでに、ほかに何かをしなければならぬ」と言ってはなりません。もしあなたの主がその来臨を遅らせているとすれば、力の限り、主の命じてくださったことは何でも行いつつ、その現れを待つのは、ふさわしいこと、ただししいことです。しかしこのような仮定をする必要はありません。主がその来臨を遅らせているということをどうして知ることができるでしょうか。おそらく主は、朝の光の前に、上からの夜明けがあるように、現れなされるでしょう。主の日を定めてはなりません。毎瞬、主を期待しなさい。今や、主は近いのです。すぐ戸口に立っておられます。

5 そしてあなたは何の目的で、罪が拭い去られる前に、より誠実さを得ようと待ち望むのですか。神の恵みにもっとふさわしい者となるためですか。ああ、あなたはなおも「自分自身の義を立てよう」としているのです。主が憐みを与えてくださるのは、あなたがそれにふさわしいからではなく、主の恵みが尽きないからであり、あなたが正しいからではなく、イエス・キリストがあなたの罪を贖ってくださったからです。

さらに、誠実さに何か良いことがあるとするならば、なぜあなたは信じる前に、それを期待していたのですか——なぜなら、信仰こそ、あらゆる良いこと、きよいことの唯一の根だからです。

何よりも、あなたはどのくらい長い間、次のことを忘れてしまっているのですか。すなわち、あなたの罪が赦される前は、あなたが何をしようが、何を持っていようが、それは神からあなたが赦しを

得るためには、少しも役に立たないということ。また、それはあなたの背後に投げ捨て、足もとに踏みつけ、何の記録も残さずにおかなければ、あなたは神の前に恵みを受けることは不可能です。咎のある、失われた、無益な、ただの罪人として、あなたはその時まで、神に何も訴えることもできず、何も献げることもできず、ただ「私たちが愛して、私たちのためにご自身をお捨てになった」(ガラ二20) 神の愛する御子の功績にすぎるほかはありません。

6 結論として、自分のうちに死の宣告を持つている人はだれでも、自分自身は罪に定められ、神の怒りがとどまっていると感じる人はだれでも、その人に対して、神が語られるのは、「これを行いなさい。私の戒めに完全に従いなさい。そうすれば生きます」ではなく、「主イエス・キリストを信じなさい。そうすればあなたは救われます」です。今、この瞬間です。このとき、今ある姿で、ありのままの罪人として、あるがままに、福音を信じるのです。そうすれば、「わたしはあなたの不義にあわれみをかけ、もはやあなたの罪を思い出さない」(ヘブ八12参)のです。

説教 7

神の国への道

The Way to the Kingdom

訳者ノート

ウエスレーは、二つの聖書の箇所に基づいて、この説教を展開している。説教の前半部分では、ローマ人への手紙一四17「神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです」を用いて、神の国の本質を論じる。後半部分は「これが道です。ここを歩みなさい」と始まり、マルコ15の「悔い改めて、福音を信じなさい」が、神の国へ至る道であると説いている。

説教の前半部分については、興味深い記述が『日誌』の中に見いだされる。一七四二年六月六日（日曜）、エプワースを訪れていたウエスレーは、司祭に、説教か祈祷書の朗読によって礼拝の手伝いをするを申し出た。ウエスレーの説教を期待して、教会は満堂であったが、司祭は、ウエスレーの申し出を断り、「御霊を消してはなりません」（1テサ五19）に基づいて、御霊を消す最も危険な道の一つが熱狂主義であると力説し、暗にウエスレーを批判した。説教の後、ジョン・テイラーが教会の庭に立ち、ウエスレーが六時に教会の庭で説教することを宣伝した。『日誌』には、以下のようにある。

「それで六時に、私が来てみたところ、エプワースでは見たことのないほどの大会衆が集まっていた。私は、教会堂の東に隣接する父の墓石の上に立って、叫んだ。「神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と御霊による喜びだからです」。

翌二三日の日曜日に至るまで、彼は毎夕、合計八日、父の墓石の上で説教をしている。

この説教の前半部分のように、キリスト教の本質を論じている箇所は、数多く指摘することができる。「クリスチャンとはいったい何者であろうか。本物の、真実のキリスト教

とはどのようなものであるのか」という質問で始まる、「キリスト教の真髓の平明な叙述」(A Plain Account of Genuine Christianity, 1753)は、その代表的なものと云えるが、他に説教4「聖書のキリスト教」・「メソジストの性格」(The Character of a Methodist)・「メソジストの原則」(The Principles of a Methodist)・「メソジストと呼ばれる人々への助言」(Advice to the People Called Methodists)などがある。キリスト教の本質は、儀式や礼拝などの宗教的な形式にあるのではなく(1・4・5)、正統的な教理にあるのでもなく(6)、神を愛し・人を愛し、ホーリネスを追い求めるというキリストの恵みの実質的な体験と実践とにあり(7・9)、それは真の喜び・幸福を伴うものであるという(10・13)。特にこの最後のポイント、すなわちホーリネスとハピネスが「一つにされていることは、ウェスレーのキリスト教観の特徴とも言える。(凡帳面)」という意味で、メソジストと名付けられた集団であるが、ウェスレーは喜び・朗らかさ・快活をメソジストの特色としていた。現に、彼自身について、友人であったノックス(Alexander Knox)は、こう証している。

「彼の顔つきも会話も、いつも心に喜びを宿していることを現していた。それは、彼の徳と罪のない生活が彼に与えたものだと思う。真実に、彼こそは、私がかつて出会った中で、道徳的幸福(moral happiness)を最も完全に具現している人間であった」(Robert Southey, *The Life of John Wesley*, II, 334)。

神の国へ至る道は、悔い改め・信仰であるが、この説教でウェスレーはより多くの紙面を悔い改めに割いている。悔い改めとは、単に心理的・感情的に悔いて嘆くことではない。それは、神の御前に罪深い自己を真に認識することである(1・1・4)。しかも、自分の罪を自分で償うことができないことを悟ることである(5・6)。このとき、人は神の

国から遠くない、その入り口に近づいている。確かに、人が自分では成し遂げることができないことに対して救いという神の可能性が存在する。けれども、人が自分の罪を認識し、自分の無力さを認め、自己の義を放棄するまでに至らなければ、自分をキリストの恵みの中に投げ込むことはできない。そういう意味で、悔い改めは「神の国の前触れ——forerunner of the Kingdom of God」(11・6)である。

マルコ15は、ウェスレーが最も好んで説教に用いた聖句である。アウトラーの計算によると、一七四二年から九〇年に至る四八年間で、彼はここから一八〇回もの説教をしてゐる。

説教7「神の国への道」

「神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」(マルコの福音書15)

このみことばは私たちに以下のことを考察するように導いています。第一に、私たちの主によって

語られたまことの宗教の性質で、主は「神の国は近くなった」と述べられました。第二に、そこに至る道のことで、主は「悔い改めて福音を信じなさい」ということばでそれを指摘されました。

—

1 第一に、「神の国」ということばで主が語られた、まことの宗教について考えてみましょう。この同じ表現をパウロはローマ人への手紙の中で用いて、「神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです」(「四七」と説明しています)。

2 「神の国」、すなわちまことの宗教は、「飲み食いのことでは」ありません。まだ回心していないユダヤ人だけでなく、キリストに対する信仰を受け入れた数多くの人々もまた、「律法(モーセに与えられた祭儀律法)に熱心な人たち」(使徒二二20)であったことは、よく知られています。従って、肉の捧げ物や飲み食いの捧げ物であれ、汚れた食べ物と潔い食べ物の区別であれ、律法の中に見いだされるすべてのことを彼らは守り、さらにそれを「神に立ち返る異邦人」(使徒一五19)にまで強要し、彼らのうちのある者たちは、その異邦人がどこの生まれであっても「割礼を受け、律法(祭儀律法のすべて)を守らなければ、救われない」(使徒一五5、一参)とまで教える者もいました。

3 これらに反対して、パウロはここでも、他の多くの箇所でも、まことの宗教は飲み食い、あるいは儀式を守ることに、さらに外面的なもの、すなわち心に対して外側のもので成り立っているのではないことを宣言し、すべての実体は「義と平和と聖霊による喜び」から成っていると宣言していま

す。

4 いかなる外面的なこと、例えば、様式とか儀式がいかに優れていても、まことの宗教は、それから成っているわけではありません。これらのものがいかに高尚で、重要であったとしても、内面的なものはいかに豊かに表現できたとしても、また、自分の思いが見えるところにさえ到達しない卑しい人々に対してだけでなく、疑いもなく悟りのある人々や能力のある人々に対して、いかに有益であったとしても、それらはまことの宗教を成り立たせるものではありません。そうです、これらのものがユダヤ人の例のように、神ご自身が定められたものであったとしても、またその定めが有効であった期間でさえも、まことの宗教は第一義的にはそれらから成っているではありません。厳密には全くそうではありません。ましてや、人間が定めただけの儀式や様式については、なおさら効力はありません。キリスト教は、これらすべてよりも、無限に高く、はるかに深いのです。これらは適所にあるなら、まことの宗教に従属している限りにおいて、良いものとなります。またそれが人間の弱さを折々に助けるために用いられている限りにおいて、それに真っ向から反対することは迷信でしよう。しかし、だれもこれ以上に進んではなりません。まただれもそれらの中に固有の価値があり、それらがなければ宗教は成り立たないなどと夢見てもなりません。これこそ、それらの儀式を主に對する冒瀆とするものです。

5 宗教の本質が、これらのもの、すなわち礼拝の形態、儀式や式典から成っていないのと同様に、宗教は、正しい意味で、いかなる種類の外的な行動からも成ってはいません。確かなことは、邪悪な、不道徳な罪を犯している人は、いかなる宗教も持つことができないということです。また他の人々が

自分に対してしようとしなかったことを、自分が同じ立場にあるとき、しようとする人も同じです。さらに「なすべき正しいことを知っていながら行わない」(ヤコ四17)人もまことの宗教を持つことができないというのも真実です。しかし外面的な悪から遠ざかり、善を行いながら、なお何の宗教も持たないでいることも可能です。そうです。二人の人が外面的には同じ仕事をしているとしみましょう。飢えた者に食べさせ、裸の人に着させながらも、彼らのうちの一人がきわめて宗教的であり、もう一人が全く宗教的でないというのは、あり得ることです。なぜなら一人は神を愛する愛から行動し、もう一人は人からの賞賛を求めて行動しているからです。まことの宗教は自ずから良い言葉と良い行いとを生み出すことは確かですが、その本質はなお深いところ、すなわち「心の中の隠れた人がら」(一ペテ三4)に存在することは明らかだからです。

6 心から申し上げます。宗教とは正統主義、あるいは正しい意見から成っているではありません。正統主義は、正当な意味あいでは外面的な事柄ではありません。しかし、それは心の問題ではなく、理解の問題です。あらゆる点で正統主義であり、正しい意見を持つているだけでなく、すべての反対者から正統主義を守ることが出来る人、主の受肉と栄光に満ちた三位一体、および神のことは含まれているすべての教理について正しく考えることができ、「使徒信条」、「ニケーア信条」、「アタナシウス信条」と呼ばれている三つの信条のすべてに同意できても、ユダヤ人、トルコ人、異邦人と同様に、キリスト教を全く信じていないことがあり得るのです。悪魔と同じように、ほとんど完璧な正統主義者となり得るのです。「ほとんど」と言って、「全く」と言わなかったのは、どのような人でも誤る可能性はあるからです。しかし悪魔については少しも間違った意見を持っていないと言えるでしょう。

う。)それでありながら、悪魔と同じように、心の宗教に関しては全く無知であり得るのです。

7 心の宗教が、いわゆる「まことの宗教」です。これだけが神の御前に価値があります。パウロはこれらすべてを「義を平和と聖霊による喜び」という三つの特色をもって要約しています。第一は義です。もし義というものの二つの偉大な枝について、私たちの主が説明を加えた言葉を思い出すなら、迷うことはありません——この二つの大きな枝の上に「律法全体と預言者とがかかっている」(マタ二二40)のです。「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。これが大切な第一の戒めです」(マタ二二37、38)。これが、キリスト教の義の第一の大きいなる枝です。あなたはあなたの神である主を喜びとし、主にあるすべての幸福を求めて、見いだしなさい。主は、今も、永遠までも、「あなたの盾である。あなたの報いは非常に大きい」(創世二五1)のです。あなたのすべての骨は言うでしょう。「天では、あなたの他に、だれを持つことができましょう。地上では、あなたの他に私はだれをも望みません」(詩篇七三25)と。あなたは「わが子よ。あなたの心をわたしに向けよ」(箴言二三26)と語られる方のことばを聞き、それを果たすでしょう。主にあなたの心、たましいの奥底を明け渡して、敵対する者なしに完全に支配していただくとき、あなたは心の底から叫び出すでしょう。「主、わが力。私は、あなたを慕います。主こそ、我が巖、私のとりです。私の救い主、私の神、私の力よ、私はあなたに信頼します。私の盾、私の救いの角、私の避け所よ」(詩篇一八1、2、三一3参)と。

8 第二の戒めもこれと同じようです。キリストにある義の第二の大きいなる枝も第一の枝と近く密接に結びついています。それは「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」(マタ二二39)です。

「愛せよ」——最も柔らかい善意をもって、最も熱心で心からの愛情をもって、すべての悪を防ぎ、また除こうとする、またすべての可能な限りの善を隣人のために獲得しようとする燃えるような願望をもって包みなさい。「あなたの隣人」——すなわち、あなたの友人、親族、知人——品徳のある人々、あなたの親切を受け入れ、応答する人々だけでなく、すべての人の子、すべての被造物、神が造られたすべてのたましい。肉体にあつては見たこともない、すなわち、顔も名前も知らない人を除外せず、邪悪で感謝を知らない者と知っている人をも除外せず、敵対したり反対したりする人をも除外しないことを含んでいます。このような人を「あなた自身のように愛する」のです。その人があらゆる種類の幸福を得るようにと、変わらない同じ渴きをもって、その人のたましいや肉体を悲しませたり、傷つけたりすることは何であつても、その人を襲うことがないようにかばおうとする不屈の注意深さをもって愛するのです。

9 このような「愛は律法を全う」(ロマ一三10) します。キリストによる義の総括です。すべての内面的な義の総括です。それは必然的に「深い同情心、慈愛」「愛は自慢しない」からです、「謙遜、柔和、寛容」(愛は高慢にならず、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍ぶからです)を意味しているからです(コロ三12、1コリ一三4)。またこのような愛こそ、すべての外面的な義の総括です。というのは、言葉によつても行動によつても「愛は隣人に対して害を与えない」(ロマ一三10参)からです。それは意識的にいかなる人をも傷つけたり、悲しませたりしません。それは「良いわざに熱心」(テト二14)です。隣人を愛する人は皆、機会のあることに、「すべての人に対して、善を行い」(ガラ六10) ます。また「えこひいきがなく、見せかけのないものです」から、「あわれみと良

い実とに満ち」(ヤコ三17) ています。

10 しかしまことの宗教、或いは神と人に対する正しい心は、聖きとともに幸福を意味していません。それは義であるだけでなく、「平和と聖霊による喜びだからです」。どのような平和でしょうか。神の平和、神だけが与えることができ、世が奪うことのできない平和、「人のすべての考え(すべての単なる理性的な思考)にまさる」(ペリ四7) 平和、「やがて来る世の力」(ヘブ六5) の超自然的な感覚、天的な味わいです。それは生まれながらの人がこの世のことにどんなに賢明であつても、わからないことです。そのような人は、今の状態のままでは、この喜びを知ることはできません。「なぜなら、御霊のことは御霊によつてわかまえるものだからです」(1コリ二14)。それは、すべての疑い、すべての苦痛に満ちた不安を追放する平和で、神の御霊は、クリスチャンの「霊とともに」、彼が「神の子どもであることをあかししてください」(ロマ八16参)。それは恐れを追放します。苦しみを伴う恐れ、神の怒り・地獄・悪魔・特に死に対する恐れを追放します。神の平和を持つている人は(もしそれが神の御心であるなら)、「世を去つてキリストとともにいること」(ペリ一23) を願います。

11 この神の平和がたましいのうちに与えられるところはどこでも「聖霊による喜び」もまた存在します。それは、聖霊によつて、常に神の栄光に満ちた御霊によつて心の中に生み出される喜びです。キリスト・イエスによつて、私たちのうちに神にある静かで遙った喜びをもたらす方は御霊です。このキリスト・イエスによつて私たちは「今や賤い、神との和解 (Katalypsiv) を得ています」(ロマ五11参)。その結果、「幸いなことよ」(ヨハ一12)。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は「詩篇三二1」という王の宣言が真理であることを、私たちは大胆に確証することができます。クリスチャンが

神の子であるという御霊の証しから生じる、平静で確かな喜びをもって、そのたましいを感動させるのは御霊です。このことは彼に「ことばに尽くすことのできない喜び」(1ペテ1-8)を与え、「神の栄光を望ませ」(ロマ5-2)ます——ここで言う希望は、神の栄光のみかたちが今は部分的に、やがて十分に「私たちに啓示される」(ロマ8-18参)ということであり、またそれは、私たちのために天に備えられている、しほむことのない栄光の冠の希望のことです。

12 この聖めと幸福は、一つに結び合わされて、神の靈感を受けた聖書の中では、「神の国」(冒頭の聖句の中で主によって用いられているように)、或いは「天国」と呼ばれています。それが「神の国」と呼ばれているのは、聖めと幸福がたましいの中を神が支配しておられる直接の実であるからです。神がご自分の大いなる力を現し、私たちの心の中の王座を占められるとすぐ、私たちは「義と平和と聖霊による喜び」に満たされます。それが「天国」と呼ばれているのは、(ある程度ではありませんが)たましいの中に天が開かれているからです。これを体験した人はだれでも、天使や人々の前に断言することができます。

永遠のいのちを獲得し

地上に栄光が開始される

(Charles Wesley, "Hymn After the Sacrament," st.6, ll.3-4; *Poetical Works*, I, 170)

至る所で記録されているように、聖書の一貫したしらべによれば、「神が私たちに永遠のいのちを与え

られたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということ、御子を持つ者は(御子がその心を支配している者は)いのち、永遠のいのちを持っています」(1ヨハ5-11, 12参)。「その永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです」(ヨハ1-7参)。このいのちを受けた人々は、火の炉のただ中にあっても、神に向かって次のように大胆に告白することができます。

神よ あなたの力に守られて

主なる神の御子であるあなたを称えます

人のかたちをとって降られたあなたに

絶えざるハレルヤを賛美します

天の御空におけるごとくに 地上で賛美を捧げます

あなたの臨在が示されるごころこそ 天だからです

(Mark Le Pla, *A Paraphrase on the Song of the Three Children*, 1724——ウヘスレーはこの詩を

A Collection of Moral and Sacred Poems, II, 101-34に収められています)

13 そしてこの「神の国は近くなった」のです。これらのことばを主が誦られたとき、それは「時が満ちた」ことを意味していました。すなわち、神が「肉において現れ」(1テモ3-16)、その王国を人々の間に樹立し、その民の心を支配しようとしておられました。今や時は満ちているのではありま

せんか。「見よ（と主は言われます）。わたしは、世の終わりまで、いつも」わたしの名によって罪の赦しを宣べ伝える「あなたとともにいます」（マタ二八20）。従って、キリストの福音が宣べ伝えられるところではどこであつても、「神の国は近く」なるのです。それはあなたがた一人一人から遠くはありません。もし「悔い改めて福音を信じなさい」との神の声に聞き従うなら、あなたがたは今、神の国に入ることが出来ます。

二

1 これが道です。これを歩みなさい。第一に、悔い改めなさい。すなわち、自分自身を知りなさい。これは信仰に先立つ認罪、すなわち自己認識です。ですから、眠っている人よ、目を覚ましなさい。自分が罪人であることに気づきなさい。どのような罪人であるかも知りなさい。創造の義から遠く離れ、いつでも「肉の願うことは御霊に逆らい」（ガラ五17）、その「肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです」（ロマ八7）とあるように、あなたの奥深い性質が腐敗しています。あなたの力のすべて、たましいの機能のすべてにおいて腐敗が進んでいることに気づきなさい。土台はすべてはずれてしまったので、あらゆる面で全く腐敗していることを知りなさい。あなたの心の目が曇っているのです、神も、神のことも識別できなくなりました。無知と誤りの雲があなたの上に臨み、あなたを死の陰で覆っています。あなたは神・世・自分自身について、知るべきことを少しも知らないのです。あなたの意志はもはや神の御心を求

めず、悪に走り、歪んでしまい、神が愛されているすべての良いことから離れて、神が憎まれているすべての悪しきこと、すべての冒涇へと傾いています。あなたの愛情は神から離れ、全地に散り散りになっています。あなたの情熱のすべては、それが願望であれ嫌悪であれ、喜びであれ悲しみであれ、希望であれ恐れであれ、正規の道から外れ、程度においても乱れが生じ、また不適当な対象に向けられるようになりました。その結果、たましいには健全なところがなく、預言者の強い表現を借りれば、「足の裏から頭まで、健全なところはなく、傷と、打ち傷と、打たれた生傷」（イザ一6）のみとなりました。

2 これが、あなたの心、その奥深い性質に及んでいる伝承的腐敗です。このような悪い根からどのような枝が成長すると期待できるでしょうか。ここから不信仰が生じ、生ける神から離れ、「主が何者なので、私たちは彼に仕えなければならぬのか」（ヨブ二二15）と言うようになりました。「神よ、あなたは少しも顧みてくださらないのです」（詩篇一〇四別訳）。そこから独立心が生じ、いと高き方のようにならうとの願いが生じました。そこからあらゆる形態の高ぶりが生じ、「自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もない」（黙示三17）と言わせるに至りました。この悪しき泉から虚栄の苦い流れ、賞賛・野心・どん欲への渴望、肉の欲・目の欲・暮らし向きの傲慢が流れ出ています。ここから、怒り・憎しみ・復讐心・ねたみ・そねみ・悪意の疑りが生じます。もしこれらが抑えられることがなければ、「非常な苦痛をもって刺し通し」、ついにはたましいを「永遠の滅びに投げ入れるような、愚かで、有害な多くの欲」（一テモ六9、10参）が生じます。

3 さらにこのような枝からどのような実が生じるでしょうか。苦々しい悪しき実だけが生じます。

ut 5:22
 ἔνοχος ἔσται εἰς τὴν γέενναν
 τοῦ πυρός.

高ぶりからは、争い・虚栄・人の称賛を求めて受けることが生まれ、それは、神にのみ属する栄光を盗むことになりませぬ。肉の欲からは大食や酔酒、贅沢や肉欲・淫行・不潔、そして聖霊の宮として意図された肉体を様々な形で汚す悪しき実が生じます。不信仰からは、あらゆる悪しき言葉や行いが生じます。しかし、すべてのこと、すなわち、いと高き方の怒りを引き起こし、イスラエルの聖者を悲しませた、あなたがたが語ったむなし言葉のすべて、あなたがたが行った悪しき業のすべて（それがそれ自体邪悪なものであっても、或いは少なくとも神の栄光のためになされなかつたことであつても）を数えようと思つたら、時が足りなくなるでしょう。実際に犯した罪は、あなたが言い表すことができる以上、髪の毛の数以上にあるのです。だれが海の砂、雨の滴、そしてあなたの罪を数えることができませんよう。

4 「罪から来る報酬は死」（ロマ六23）であり、それは一時的な死だけでなく永遠的な死であることを知らないのですか。「罪を犯した者は、その者が死ぬ」と「主の御口が語られた」（エゼ一八4）のです。これは「第二の死」（黙示二11）です。これは「主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、決して終わることのない死をもつて「永遠の滅びの刑罰を受ける」（IIテサ一9）ことです。あなたはすべての罪人が *ἐνοχος ἐστὶ τῆ γέενναι τοῦ πυρός* であるのを知らないのですか。これを「地獄の火の危険にさらされている」と訳すのは適切ではありません。この表現は弱すぎます。むしろ、「地獄の火の宣告のもとにある」と訳すべきです。すでに処刑のために引きずり出されることが定められているのです。あなたは永遠の死に断罪されています。これこそあなたの内面的、外面的罪悪に対する公正な報いです。宣告が実行されるのは正しいことです。あなたは見えないのですか、感じないので

すか。あなたは神の怒りと永遠の滅びを受けるにふさわしいことを徹底的に認めますか。もし神が今、地を裂き、あなたを呑むように命じられたら、神はあなたに不正を行われたことになるでしょうか。もしあなたがすぐに穴に落ち、消えることのない火に投げ込まれたら、どうでしょうか。そのとき、もし神が本当にあなたに悔い改めることを許されるなら、あなたはこれらのことを本当の意味で認め、あなたが滅ぼされ、地の表からぬぐい去られていないのは、神の憐れみによることを知るでしょう。

5 あなたが神の怒りをなだめ、すべての罪を消し去り、当然受けるべき刑罰から免れるために、何をしたらよいでしょうか。ああ、あなたは何もできないのです。ただ一つの悪しき行いや言葉や思いさえも償うことができません。もしあなたがすべてのことを正しく行うことができ、もし今このときからたましいが神に帰るまで、もし完全にたゆまない服従を続けることができたとしても、あなたの過去を償うことはできません。負債を増やさないことは、負債を解消することにはなりません。それは依然として同じ額で留まります。そうです、地上のすべての人々や天のすべての御使いの現在と未来の服従があつても、一つの罪を犯したら、神の正義を決して満足させるものではありません。何とむなしなことでしょうか。一人のたましいが贖われるためには、全人類が払えるよりもっと多くの代価を必要としています。よって、一人の有罪の人間のために他のいかなる助けもありません。疑いもなく、彼は永遠に滅びなければなりません。

6 しかし、もし将来の完全な服従が過去の犯した罪を償うことができるとしても、それはあなたに何の益ももたらしません。あなたはいかなる点においても、それを行うことができないからです。今始めてみてください。試してみてください。取り囲む外的な罪を振り落としてみることで、あな

たにはそれはできません。とすれば、どのようにして、悪に満ちた生活から善に満ちた生活へと帰ることが出来ますか。それは不可能です。木が悪い木であり続ける限り、それは善い実を結ぶことはできません。あなたは自分の心を罪に満ちた心から、聖きに満ちた心へと変えることができますか。罪に死んでいるたましいを生かすことができますか。神に対して死に、世に対してだけ生きていたたましいを生かせますか。死んだ身体を生かし、墓に横たわっている人にいのちを与えることができないのと同じように、不可能です。あなたは死体にいのちを与えることができないのと同様、たましいを生かすことはできません。この点において、何もできません。全く無力です。自らがいかに無力で罪深いかを深く認識することこそ、「悔いのない悔い改め」(Ⅱコリ七10)であり、これが神の国の先駆者となります。

救いに至る

7 この内面的、外面的罪への生きた認罪、自分の罪深さと無力さとの徹底した認識に対して、それにふさわしい感情が加えられるべきです。それは、神の憐れみを軽視した心の悲しみ、口を閉ざし恥ずかしさのために目を天に上げることもできない悔いと自己謙卑、自分の上に留まっている神の怒りや頭の上に臨んでいる呪いや、神を忘れ、主イエス・キリストに従わなかった者を呑み尽くそうとしている火のような怒りに対する恐れ、その怒りから逃れて悪を捨て、善を行おうとする真実な願望、これらに加えられたなら、私は主の御名によってあなたに告げます。「あなたは神の国から遠くない」(マコ二24)と。もう一歩踏み出すなら、あなたはそこに入ることができます。「悔い改めなさい」。そして今、「福音を信じなさい」。

8 「福音」(すなわち、罪責を覚え、絶望的になっている罪人のための良いおとずれ)とは、広義に解釈されれば、イエス・キリストによって人間に対してなされた啓示のすべてのこと、地上生涯での主の働きと受難との全記述を指します。それは以下の聖句に代表されるでしょう。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に來られた」(Ⅰテモ一15)。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハ三16)。「彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、私たちはいやされた」(イザ五三5)。

9 これを信じなさい。そうすれば神の国はあなたのものとなります。信仰によってあなたは「主はまことに悔い改めて、いつわりなくその聖い福音を信じるすべての人を救し、解かれる」(「祈祷書」、Morning Prayer, absolution 4)との約束を自分のものとすることができます。神があなたの心に「しっかりとしなさい。あなたの罪は赦された」(マタ九2)といわれた瞬間に、神の国は到来し、あなたは義と平和と聖霊による喜びを与えられます。

10 ただ気をつけて、あなたがこの信仰の性質についてたましいを欺かないようにすることです。信仰は(ある人々が好んで考えるように)、聖書や信仰箇条に含まれている事柄に、単に同意するといふことではありません。私やあなたと同じように、悪霊もこれを信じています。彼らは依然として悪霊なのです。しかし、信仰とは、単なる同意を越えて、キリスト・イエスを通して神の憐れみにしっかりと信頼することです。それは赦しを与えてくださる神に対する確信です。それは「神がキリストにあって、この世を yourself と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせない」(Ⅱコリ五19)こと、特に「神の御子が私を愛し、私のためにご自身をお捨てになった」(ガラ二20)こと、今、私が「十字架

の血によって和解させ」(コロ1-20参) られたという、神からの確証、確信です。

11 あなたはこのような信仰を持っていますか。それなら、神の平和はあなたの心にあり、悲しみと嘆きは逃げ去ります。あなたはもはや神の愛を疑っていません。それは真昼の太陽のように明らかです。あなたは叫びます。「私は、主の恵みを、とこしえに歌います。あなたの真実を代々限りなく私の口で知らせます」(詩篇八九1)と。もはや地獄も死も、かつては死の力を持っていた悪魔も恐れませんが。また神ご自身を苦痛をもって恐れることはありません。あなたは神を失望させまいとの柔らかい、情愛に満ちた恐れを抱いているだけです。信じるなら、「たましいは主をあがめ、あなたの霊は、あなたの救い主なる神を喜びたたえます」(ルカ1-46, 47参)。あなたは彼の血によって「贖い、すなわち罪の赦しを得ている」(コロ1-14) ことを喜んでいきます。「子としてくださる御霊を受けたのです。あなたは心の中で、御霊によって「アバ、父」と呼ぶ」(ロマ八15参) ことを喜んでいきます。「不死の希望」を喜んでいきます。「上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目指して走る」と(ピリ三14参)を喜び、「神を愛する者のために、神が備えてくださったすべての善いもの」(1コリ二9参)を熱心に期待して喜んでいきます。

12 あなたは今、信じますか。そのとき、今、「神の愛が私たちの心に注がれるのです」(ロマ五5参)。あなたは神を愛しています。神がまずあなたを愛してくださったからです。神を愛しているので、あなたは兄弟をも愛するのです。また「愛、喜び、平安」に満ちているあなたは「寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」(ガラ五22, 23)や、その他すべての御霊の実——「言でいえば、聖なる、天的、神的なすべての気質——に満たされます。「顔のおおいを取りのけられて、主の栄光を反映させながら、

栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです」(2コリ三18参)。

13 この悔い改め、この信仰、この平和、喜び、愛、この栄光から栄光への変容を、世の知恵は、狂気・単なる熱狂主義・全くの乱心などと批判します。しかし神の人よ、あなたはそれらに心を向けずにはなりません。これらのうちのいかなるものによっても動かされてはなりません。あなたは自分の信じてきた方をよく知っています。あなたの冠をだれにも奪われてはなりません。すでに獲得したものを、大いなる貴い約束を手にするまで、しっかりと保ち、追い求めなさい。また、まだ主を知らないあなたは、キリストの福音を恥とさせるようなむなし人々に動かされてはなりません。何事についても、自分たちの知らないことを悪く言う人によって驚かされてはなりません。あなたの手を下げてはなりません。しばらくすれば、主はあなたの恐れを取り除き、あなたに健全な霊を与えてくださいます。「義とする方が近くにおられる」(イザ五〇8)のです。「罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしてくださるのです」(ロマ八34)。あなた自身をすべての罪とともに(それがいかに多くあっても)神の小羊にゆだねなさい。そうすれば、「このようにあなたがたは、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御国にはいる恵みを豊かに加えられるのです」(11ペテ

2001.10.30
7 14.5

説教 8 御霊の最初の実 The First-Fruits of the Spirit

訳者ノート

ウエスレーの教理説教の中には、彼自身の霊的軌跡に当てはめた時、初めてそのインパクトを引き出せるものが、いくつかある。説教2「あと一歩でキリスト者」、ここにある説教8、そして次の説教9「奴隷の霊と子とする霊」などは、その典型である。いずれも、特殊な論争背景を持った説教ではなく、ごく一般的な教理の展開として読むことができる。しかしこれらは、アルダスゲイトを前後したウエスレー自身のたましいの苦悩や信仰確立の道筋を把握していなければ、説教の背後にある彼の心情、あるいは強調点にまで心を配ることは困難である。

アルダスゲイトの回心の日、「心が不思議に熱くなるのを覚え……神が私の罪を、この私の罪さえも取り去ってください、罪と死の律法から救ってください」という確証が、私に与えられた」とウエスレーは日誌に記している。一七三八年五月二四日、長年抱き続けてきた信仰へのあこがれが確証となり、信仰の虚像が実像へと生まれ変わったことは確かである。しかし、日誌を見ると明らかであるが、アルダスゲイト直後のウエスレーには、傑出した霊の指導者としての気迫は全く見あたらない。逆に、この年の夏から翌三九年の春にプリストルの野外説教に立つまでの間、ウエスレーは不安や挫折感に悩まされ、霊的には不安定な状態にあった。いくつが、日誌の中からこの状況を確認しておこう。

「私のたましいは、平和が続いたけれども、さまざまな誘惑のために、気分が重苦しかった」(1738.5.26)。

「私が目覚めたときは、平和であったけれども、喜びはなかった」(5.28)。

救い 罪の死との結果
というところウエスレーは強く感じて、
ヨナサンエドワードの時も、
た、
現在はどうか、
ある救い、又は罪の赦免、
ある

「聖書拝読と祈りとに数時間を費やして、私は大いに慰められた。それでもなお一種の痛みを感じたので、まだ傷が完全に癒えていないことがわかった。おお、神よ、信仰の弱い私を、またそうした人をみな、疑心に満ちた論争から救ってください。」(96)。

ウエスレーは、決して自分の信仰を疑っていたわけではなかったが、自分の問題は、その信仰が弱いことにあると痛感していた。平安とともに不安や恐れが混在し、喜びはすぐに誘惑の奇襲によって奪い去られてしまう。六月七日、彼はしばらくの間、ドイツに修行のために旅立つことを決意した。それは、モラビア派の人々の強い信仰の確信をもって、自分の信仰が成長し、確立されることを期待してのことであった。

ヘルンフォートのモラビア派コミュニティの中でも、クリスチャン・ダヴィットとの出会いは、特にウエスレーを励ました。彼の説教は、これまで自己の内省や無責任な他人の意見によって振り回されてきたウエスレーの信仰を、再び客観的な十字架の贖いに据えることができた。ダヴィットは言う。

(義認の)正しい土台は、あなたの悔いた心でもなく(もつともそれさえも、あなた自身のものではありませんが)、あなたの義でもなく、すなわち、あなたに属する何物でもなく、また聖霊によってあなたのうちになされる何物でもないのです。それは、あなたの外にあるもの、すなわちキリストの義と血のことです【日誌】86)。

こうした教えは、自分の信仰と生活に自信を失いかけていたウエスレーを励ました。ウエスレーは、この説教8で、クリスチャンがキリストを信じて最初につかるであろう障

壁——すなわち自分の信仰を疑い、罪責感が舞い戻ってくるような体験——をいかに乗り越えるべきかを説いている。「神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださいるのです。罪に定めようとするのはだれですか」(ロマ8:33, 34)。キリストの十字架に信頼する者は、過去の罪に対して定められることはない。また、罪の性質が内にあることを意識しても、それに屈服せず、戦う姿勢を堅持している限り、罪に定められることはない。多くの欠けを思っても、それは罪責感につながるものではなく、ますますもって贖いの血を常に必要としていることを意識すべきであるという(二)。

ヘルンフォートを訪れたとき、ウエスレーはアルヴィット・グラードインの(全き信仰(ヘブ10:22)の証しにも感動を覚えた。グラードインは、自分の信仰は恵みによって全くされ、「キリストに憩い、神を堅く信頼し、神の好意を信じること、すべての肉欲から解放されて、すべての罪、内的な心の罪をもとどめられて、至上の静けさと平静と平安が心にある」と証した。ウエスレーは、今の自分の信仰は弱く幼子の信仰のようであるが、やがて大人の信仰へ、全き信仰へと昇っていくことができることを確信した【日誌】89)。

彼は後の「キリスト者の完全」の中で、グラードインの説く全き信仰こそ、「私がかつて神のことばから学んできたことを、人の口を通して聞いた、はじめての説明であった」と記している(Works, xi, 369)。

弱い信仰でも「罪に定められることはない」と安心を与える説教の最後は、「約束された方は真実な方ですから」(ヘブ10:23)、必ず信仰者の中にある内的罪の矛盾に解決を与え、すでに十字架にかかっている罪のからだを完全に破壊してくださる時が来ると励まし、しっかりと希望を告白し、愛と善行に励むように締めくくられている(三・4)。

説教8「御霊の最初の実」

「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者、すなわち肉に従って歩まず、御霊に従って歩む者が、罪に定められることは決してありません。」（ローマ人への手紙八1、英訳参照）

序

1 「キリスト・イエスにある者」ということばでパウロが言おうとしているのは、明らかに主を真実に信じている人、「信仰によって義と認められ、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っている」（ロマ五1）人のことです。このように信じた人は、もはや「肉に従って歩まず」、腐敗した性質に動かされることなく、「御霊に従って歩む者」です。その思いも、言葉も、行いも、神のほむべき御霊の指示に従っています。

2 その人は「罪に定められることはありません」。神によって罪に定められることはありません。なぜならば、「キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められて」（ロマ三24）いるからです。神はすべての罪を拭い去ってくださいました。またその人は内側からも譴責されることがありません。なぜならば、彼はこの世の霊を受けたのではなく、神からの御霊を受けたからです。この

御霊は、価なしに神から与えられて、「彼らが神の子どもであることを、御霊ご自身が、彼らの霊とともに、あかししてください」（ロマ八16参）のです。これに加えて「彼らがこの世の中で、聖さと神から来る誠実さをもつて、人間的な知恵によらず、神の恵みによって行動しているという、彼らの良心のあかし」（IIコリ12参）があります。

3 しかしこの聖句はしばしば誤解され、しかも非常に危険な形で誤解されており、多くの「無知な、心の定まらない人々」（IIペテ三16、oi atucheloi kai dōtriptikoi、神から教えられていない人々で、その結果、「敬虔にふさわしい真理」（テト11）に確立されていない人々）が、「自分自身に滅びを招いて」（IIペテ三16）います。そこで、私ができる限り明白に示したいことは、第一に、「キリスト・イエスにある者、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む者」とはどのような人のことをいうのか、第二に、どうして彼らが「罪に定められることがない」か、ということですが、最後に、いくつかの実際的な結論とともに締めくくりましょう。

一

1 第一に、「キリスト・イエスにある者」とはどのような人でしょう。彼らは主の名を信じている人々ではありませんか。「キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義」（ピリ三9参）を持っている人々ではありませんか。「御子の血による贖い」（エペ一7）を得ているこれらの人々はまさしく「キリストにある」者と言われています。彼らは「キ

リストのうちにおり、キリストも彼らのうちにおられる」(一ヨハ四13参)からです。彼らは「主と交わり、一つ霊となるのです」(一コリ六17参)。彼らは枝がぶどうにつき木されるように、からだの部分がかしらに結び付いているように、キリストにつながれています。それは、言葉で表現できず、以前の彼らの心では捕らえることができないような形で結び付けられています。

2 さて、「だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪のうちを歩みません」(一ヨハ三6)し、「肉に従って歩みません」。パウロの用法によれば、肉とは腐敗した性質を意味します。彼はガラテヤのクリスチャンに手紙を書いたとき、この言葉をこの意味で用いました、「肉の行いは明白であって」(ガラ五19)とありますが、その少し前には、「御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望(または願望)を満足させるようなことはありません」(ガラ五16)と述べています。これを証明するために、すなわち、「御霊によつて歩む者は肉の欲望を満足させるようなことはない」(同上)ことを証明するために、パウロはただちに付け加えて次のように言っています、「なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです」(これは、字義通りの訳です——*hōn hōn ēvō theinre, tōvta roivte*, 五17)。「そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをできなくなるのである」と訳してはなりません。それはあなたがたも肉が霊に勝っているかのようなのです。その訳はパウロの原文とは無関係であるばかりか、彼の論議全体を無価値にし、さらに、彼が証明しようとしていることの正反対を主張することになります。

3 「キリストにつく者」(ガラ五24)、「キリストのうちにとどまる」(一ヨハ二27)者は、「自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです」(ガラ五24)。彼らはすべての肉の行い、すなわち、「姦淫、不品行」、「汚れ、好色」、「偶像礼拝、魔術、敵意、争い」、「そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、殺意、酩酊、遊興」(ガラ五19、21参)、腐敗した性質が導いて行くようすすべての思いと言葉と行いから、遠ざかります。彼らは苦い根を自分のうちに感じますが、それを自分の足の下に踏みつける上からの力を着せられていますので、それは「芽を出して悩ます」(ヘブ二15)ことはありません。ですから彼らが受けなければならぬ新しい攻撃は、新しい讚美の機会となり、「神に感謝すべきです。神は私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいます」(一コリ一五57参)と叫ぶことができます。

4 キリストにある者はいま、心と生活において「御霊に従って歩んで」います。彼らは、「泉」であり「永遠のいのちの水」(ヨハ四14)である愛をもって、神と隣人を愛することを教えられています。そして御霊によつてあらゆる聖い願望、あらゆる神祕的で天的な気質へと導かれ、その結果、心の中に起こるすべての思いは、「主への聖なるもの」(ゼカ一四20)となるに至ります。

5 「御霊に従って歩む」人々は、すべての会話において聖くなるように導かれます。その言葉は、神への愛と畏れとを伴いつつ、「いつも親切で、塩味のきいたもの」(コロ四6)です。「悪い言葉は、いっさい彼らの口から出ません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つ言葉を話し、聞く人に恵みを与えます」(エペ四29参)。彼らは神に喜んでいただきたいという唯一の願いとして、昼も夜も努め励みます。隣人との交わりにおいて、「その足跡に従うようにと、模範を残された」(一ペテ二21)方に倣い、公義とあわれみと誠実をもつて歩み、人生のあらゆる環境の中で「何をするにも、ただ神

Gal 5:16

の栄光を現すために」(Iコリ一〇31)行動します。

6 これが「御霊に従って歩む」人々です。彼らは信仰と聖霊に満たされて、言葉と行いのすべてを通して、神の御霊の純粹な実、すなわち、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」(ガラ五22、23)、および「すべての愛すべきこと、すべての誉れあること」(ピリ四8)を、心の中に宿し、生活を通して示しています。彼らは「あらゆることで、私たちの救い主である神の教えを飾るようにし」(テト二10)、またすべての人に対して「イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊」(ロマ八11)によって生かされていることを実証しています。

二

1 第二に、このように「キリスト・イエスにある者、すなわち肉に従って歩まず、御霊に従って歩む者は、罪に定められることは決してありません」とは、どのようなことであるかを示したいと思えます。

第一に、キリストを信じてこのように歩む人にとって、過去の罪に関しては一罪に定められることはありません。神はこれらの罪の何ひとつも罪に定められません。あたかも何もなかったかのようにです。石が「海の深みに投げ入れられる」(ミカ七19)ように過去の罪は投げ入れられ、神はそれらを何ひとつ思い出すことはありません。「神は、その御子を、その血による、また信仰による、過去の罪のなだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現すためです」(ロマ三25

参)。神はこれらの罪を何ひとつ彼らに負わせなさいませんでした。その記憶さえも消えうせました。

2 また罪責や神の怒りに対する恐れという意味で、その心には断罪がありません。彼らは「あかしを自分の心の中に持っています」(Iヨハ五10)。注ぎかけの血によって恵みを受けていることを意識しています。「恐怖」や窮地に追い込むような不安への「奴隷の霊をうけたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父」と呼びます」(ロマ八15)。こうして「信仰によって義と認められた彼らは、神との平和」(ロマ五一)が心中を支配するようになり、救うてくださった神の憐れみの間断なき自覚に包まれ、「きよい良心をもって、神の前に」(使徒二三一)答えています。

3 「しかし、時にはキリストを信じる者は神のあわれみを見失うことがあるかも知れません。時には目に見えない方を本当に見失ってしまうほど、贖いの血に自分があずかっているという証しを感じなくなるほど、暗黒が襲うかも知れません。そのとき、彼は内面的に自分を責め、「自分の心の中で死を覚悟する」(IIコリ一9) ことがあるのではないでしょうか」という人がいるでしょう。私は答えます、もしそうであったとすれば、もし彼が神の憐れみを見ることができなかつたとすれば、彼は信仰者ではありません。なぜなら、信仰は光、たましいを照らす神の光を意味するからです。従っていかなる人でもこの光を失ったら、一時的であっても、信仰を失うことになるのです。疑いもなく、キリストを心から信じる者であっても、信仰の光を失うことがあるかも知れません。もしこれが失われれば、一時的であっても、彼は罪に定められる状態に陥る可能性があります。しかし、今「キリスト・イエスにある者」、今主の御名を信じる者の場合は、そうではありません。彼が信じて、御霊に従

って歩んでいる限り、神も、彼自身の心も、彼を責めることはありません。

4 第二に、現在の罪についても、**現在** 神のいましめを犯していることについても、罪に定められることがありません。なぜならば、彼らは罪を犯してはいません。彼らは「肉に従って歩まず、御霊に従って歩んで」いるからです。これが彼らが「神を愛して、神の命令を守って」（ヨハ53）いるという恒久的な証明です。ヨハネが証言しているように、「だれでも神から生まれた者は、罪のうちは歩みません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪のうちは歩むことができないのです」（ヨハ39）。神の種、愛に満ちた、聖い信仰がとどまっているかぎり、罪のうちは歩むことができます。御子が「彼を守っていただくので、悪い者は彼に触れることができないのです」（ヨハ518）。今明らかなことは、自分が全く犯していない罪のために責められることはない、と言うことです。従ってこのように「御霊によって導かれる者は、律法の下にはいません」（ガラ518参）。律法ののろいあるいは譴責の下にはいません。律法は破っていない人を責めないからです。「盗んではならない」（出エ2015）という神のいましめは、盗んでいない人を罪に定めません。「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ」（出エ208）といういましめは、この日を覚えて、これを聖なる日としない人々だけを罪に定めます。しかし御霊の実を「禁じる律法はありません」（ガラ523）。パウロはテモテへの第一の手紙の大切なことばの中で、さらに大きく次のように宣言しています。「しかし私たちは知っています。律法は、もし次を知っている正しく用いるならば、良いものです」（もし認罪や指導のために、神の律法を用いるならば、彼はこのことを知り、憶えておかなければなりません）、「すなわち、律法は、正しい人のためにはあるのではなく」（*ou skaito vōmos ou ketai*、それは彼に対する強制力を持たず、彼を責める力も持たず）「律法を無視する不従順な者、不敬虔な罪人、汚らわしい俗物……などのためにあるのです……祝福に満ちた神の、栄光の福音によれば、こうなのです」（1テモ18-11）。

5 第三に、彼らは今、内なる罪が存在していても、そのことについて罪に定められることがありません。性質の腐敗が信仰によって神の子どもとなった人々のうちに留まっているということ、彼らが高ぶりと虚栄、怒り、肉欲、悪しき願望、あらゆる種類の罪の種を持っているということは、毎日の経験の問題であり、明白すぎて否定できないほどのです。このためにパウロは、はじめに「キリスト・イエスにある人々」（1コリ12参）、「神のお召しによって、御子イエス・キリストとの交わりに入れられた」（1コリ19）人々と証言した人々に対して、次のように宣言しています、「兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かつて、御霊に属する人に対すようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対すように話しました」（1コリ31）。「キリストにある幼子」ですから、彼はキリストにあったのです。低い段階ではありましたが、信仰者だったのです。しかしなお、彼らのうちにいかに多くの罪が残っていたことでしょうか。「神の律法に服従」しない「肉の思い」（ロマ87）が残っていたことでしょうか。

6 これがあってもなお、彼らは罪に定められていません。彼らは肉、すなわち、自分のうちにある悪しき性質を感じていますが、彼らは日々、自分たちの「心は何よりも陰険で、それは直らない」（エレ179）ことを知っていますが、それに屈服しない限り、悪魔に所を得させない限り、すべての罪、高ぶり、怒り、欲情と間断なき戦いを続けている限り、そしてその結果、肉が彼らを支配せず、

「御霊に従って歩み」続けるならば、「キリスト・イエスにある者は罪に定められることはありません」。神は彼らの不完全であつても、真実な服従を喜んでくださいます。彼らは「神が私たちに与えてくださった御霊によって知る」(ヨハ三24)ことができる「神に対する確信」を与えられます。

7 第四に、彼らは自分たちのしているすべてのことに固着している罪を絶えず自覚し、思いやことばやわざにおいて、完全な律法を全うしていないことを自覚しています。もちろん彼らは、神である主を心をつくし、知力をつくし、たましいをつくし、力をつくして愛していないことを知っており、最善をつくして義務を行っているときでさえ、多少なりとも高ぶりや自己意志が忍び込んでいることを知っています。大いなる会衆とともに集まるときであれ、ひそかに心の思いや意図を見ておられる方にたましいを注ぎ出して、神と親しく交わっているときであれ、なお彼らは自分たちのさ迷い出る思いや神への情熱が死んでいるか鈍くなっていることを絶えず恥じているのです。それでもなお、彼らには神から、あるいは自分の心からの責めはありません。これらの何重もの欠けを考えれば考えるほど、彼らは、神の耳もとで彼らを弁護してくださいとさる注ぎかけの血を常に必要としていることをより深く認識し、「いつも、生きていて、彼らのためにとりなしをしてください」(ヘブ七25) 弁護者をより深く認識することになります。こうした罪を意識することは、彼らを信じた方から遠ざけるよりも、むしろすべての瞬間に彼らが必要としている主に近づけることになります。同時に、彼らがこの必要を深く覚え、より熱心な願望を持ち、より真剣であればあるほど、「主イエスを受け入れたのですから、彼にあつて歩みます」(コロ二6)。

8 第五に、通常へ弱さの罪(sins of infirmity)と呼ばれているものについて、彼らは罪に定められることがありません。(あるいはそれを弱さ、(infirmities)と呼ぶ方が的を得ているかもしれません。それはこのように罪を弱さと結び付けることによって、罪を黙許したり、あるいは罪を少しでも軽減すると思わせないためです。)しかしもし弱さの罪、というあいまいで危険な表現を用いなければならぬとすれば、私はそれを次のような意味で用います。弱さからくる罪とは、事実は誤りであるにせよ、それを正しいと信じて語ることや、良い意図を持つているのに、知らずに、また意図せず、隣人を傷つけてしまう、という例に見られるような無意識的な失敗のことです。これらは神の聖く、充分で、完全なみこころからの逸脱ではありませんが、しかし正当に罪と呼ばれるものではありません。また「キリスト・イエスにある者」の良心に罪責をもたらすものでもありません。これらは神と人とを離しませんし、主のみ顔の光を妨げることもありません。それは「肉に従って歩まず、御霊に従って歩む」という、彼らの全体としての信者の特質と抵触しないからです。

9 最後に、自分の力で及ばないすべてのもの(それが内面的なものであれ、外面的なものであれ、またそれが何かをしたり、何かをしないでいたりすることであれ)について、彼らは「罪に定められることはありません」。たとえば、主の聖餐が執行されるのに、あなたがそれを守らなかったとします。なぜ守らなかったのですか。病気で閉じこめられて、欠席せざるを得なかったのが理由でしたら、あなたはそれによって罪に定められません。選択の余地がなかったのですから、罪責もありません。「もし熱意があるならば、持たない物によってではなく、持っている程度に応じて、それは受納されるのです」(IIコリ八12)。

10 信仰者は、自分のたましいが求めていたことを行うことができなために悲しむことがあるか

も知れません。大いなる集いで神を礼拝することをとどめられたために、泣き叫ぶことがあるかも知れません。「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。私のたましいは、神を、生ける神を求めて渴いています。いつ、私は行って、神の御前に出ましようか」(詩篇四二・1、2)。彼は多くの人々とともに「神の家へとゆっくり歩いて行く」(詩篇四二・4)ことを切に願っていることでしょう(心の中で「わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように、なさってください」(マタ二六・39)と言いながらであるかも知れませんが)。それでもなお行くことができなければ、彼は罪に定められることなく、罪責や神の怒りを覚えることがありません。むしろ喜んで自分の願望を「わがたましいよ。神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。御顔の救いを」(詩篇四二・5)と申し上げることができません。

11 判断が最も難しいのは、通常「不意をつかれた罪」(sin of surprise)と呼ばれているものについてです。それは普通、たましいに忍耐を持っている人が、突然のしかも激しい試みにさらされて、王の戒めである「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」(レビ一九・18)と矛盾するような態度で語ったり、行動したりすることを言います。おそらくこの種類の違反に関して一般的な基準を定めることは容易ではないでしょう。人々が一般的に言う不意をつかれた罪の故に罪に定められるかどうかについては、私たちは確言できません。しかし信仰者が驚きによってある咎を負った場合、多少なりとも彼の意志が伴うことなので、多かれ少なかれ罪に定められることがあるように思われます。罪に満ちた願望・言葉・行動は、それに伴う故意の程度に従って、神はそれを嫌われ、たましいに對する罪責が決まってきました。

12 もしそうであるなら、多くの罪責と譴責を伴ういくつかの不意をつかれた罪もあり得るようになります。ある例を挙げれば、私たちが不意をつかれるのは、意識的でとがめられるべき怠慢の故であるかも知れません。未然に防ぐことができたのに、また誘惑が来る前にふるい落とすことができたのに、たましいが眠り込んでしまった故であるかも知れません。試みや危険が間近に迫っていると神や人から前もって警告されているのに、心の中で「しばらく眠り、しばらく手をこまねいて、また休む」(箴言二四・33参)と言っています。このような人が気づかなかつたにせよ、避けることのできたはずの罠に陥つたとすれば、気づかず倒れたと言っても、それは弁解にはなりません。彼は危険を予測したり、避けることができたはずだからです。この例に見るような不意をつかれて倒れることは、実際は、意識的な罪です。こうしたことは、罪人を神と自分の良心から来る断罪の前にさらすことになりません。

13 これに反して、世から、この世の神から、また自分の邪悪な心から、しばしば予期せぬ、また予期できない、突然の攻撃があるかも知れません。それによって、信仰者であっても、信仰の弱いときには、ほとんど否応なしに一種の怒りや悪意に引きずり込まれることもあるでしょう。このような場合に、熱心な神は疑いもなく、彼が愚かな行いをしたと示してください。彼は、自分が完全な律法から離れ、キリストのうちにある心から離れていることをうなずき、その結果、敬虔な悲しみをもって悲しみ、愛の故に神の前に恥じることでしよう。しかし彼は罪に定められる必要はありません。神は彼の愚かさを責められることなく、むしろ「父がその子をあわれむように」(詩篇一〇三・13)彼を憐れまれます。彼の心は彼を責めません。その悲しみと恥の中にあっても、彼は次のように言う

ことができます。「見よ。神は私の救い。私は信頼して恐れることはない。ヤハ、主は、私の力、私のほめ歌。私のために救いとられた」(イザ二二二)。

三

1 最後に、上述の考察から引き出すことのできるいくつかの結論を申し上げましょう。

第一に、もし過去の罪については、「キリスト・イエスにある者、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む者が、罪に定められることはない」とすれば、「なぜこわがるのか、信仰の薄い者たち」(マタハ26)よ。あなたの罪が「砂よりも数多い」(詩篇一三九18)としても、キリスト・イエスにあるあなたにとつて、それが何になるでしょうか。「神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてください。罪に定めようとするのはだれですか」(ロマ八33、34)。あなたが幼い時から「神がその愛する方によってあなたを受け入れてくださった」(エペ一6参)時に至るまで犯してきたすべての罪は、もみがらのように吹き散らされ、消え、失せ去り、呑みこまれ、もはや覚えられていません。今やあなたは「御霊によつて生まれた者」(ヨハ三6)です。あなたは生まれる前にしたことについて、悩んだり、恐れたりしなければなりませんか。恐れを捨て去りなさい。恐れるために召されたのではなく、「愛と慎みの霊」(IIテモ一7)へと召されました。召されたことを知りなさい。救い主である神を喜び、主によつて父なる神に感謝をささげなさい。

2 しかし「御子の血による贖いを受けた」(エペ一7)のちにも、再び罪を犯してしまいました。

ですから「私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます」(ヨブ四二6)と仰うのですか。あなたが自分自身をさげすむことはふさわしいことです。あなたをこの状態に導かれたのは神です。しかし、いま信じていますか。また主は「私は知っている。私を贖う方は生きておられる」(ヨブ一九25)、「いま私が、この世に生きているのは、神の御子を信じる信仰によつてです」(ガラ二20)とあなたに言わせておられますか。そうだとすれば、その信仰は過去にあるすべてのものを帳消しにし、あなたは罪に定められることはありません。神の御名によつて心から信じる時には、いつであつても、その時以前のすべての罪は、朝の露のように消え去ります。ですから「キリストが解放してくださったその自由にしっかりと立ちなさい」(ガラ五1参)。さらに主は、罪責や罪の刑罰からだけでなく、罪の力からも私たちを解放してくださいました。ああ、「またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい」(ガラ五1)。また罪、悪い願望、悪い気質、ことば、行為、この地上における最も悲しむべきくびきである地獄、という汚れた、悪魔的な束縛からも解放してくださいました。さらに奴隷を苦しめるような恐怖、罪責、自己譴責、という束縛からもです。

3 しかし第二に、「キリスト・イエスに」とどまっているすべての人は、「肉に従って歩まず、御霊に従って」歩んでいるでしょうか。もしそうであれば、私たちは、現在罪を犯している人は、だれであつても、このことに何のかかわりも持っていないと推論します。彼は今でも自分の心に責めを持っていきます。「もし自分の心が責めるなら」、もし自分自身の良心が有罪という証しを立てているなら、疑いなく、神もそのように証しされます。「なぜなら、神は私たちの心よりも大きく、そして何もかもご存じだからです」(Iヨハ三20)。ですから、私たちは、たとい自分を欺くことができても、神を欺

くことはできません。「私はひとたび義と認められたのだから、罪はみな赦されたのだ」と言おうと思つてはなりません。私には判りません。本当にそうなのかどうかについて論じるつもりはありません。おそらく、これほど時間が隔たっている時に、それがまことの、純粹な神のわざであったのか、それとも自分のたましいを欺くだけだったのか、それを確実に知ることは、ほとんど不可能に近いでしょう。しかし私が最も確かに知ることができるのは、「罪のうちを歩む者は、悪魔から出た者です」(イヨハ三八)ということですから。あなたの父である悪魔から出た者です。それは否定できません。あなたが行っているのは、あなたの父のわざだからです。むなししい希望に欺かれてはなりません。平安がないのに、たましいに向かつて、「平安だ、平安だ」(エレ六四)と言つてはなりません。大声で呼び求めなさい。深い淵から神を呼び求めなさい。あるいは神はあなたの声を聞かれるかも知れません。最初がそうであったように、惨めで、貧しい者として、罪ある、あわれな、盲目で、裸の者として、神のもとに來なさい。赦しを与える神の愛が再び示されるまで、神が「あなたの背信をいやして」(エレ三二)「愛によつて働く信仰」(ガラ五六)を再び満たしてください。たましいに休みを与えてはなりません。

4 **第三に**「御霊によつて歩む」人々が、内なる罪が残っているという理由で——彼らがその罪に屈服していないのに——罪に定められることがあるでしょうか。また彼らのしているすべてのことに入り込んでくる罪が存在するという理由で、罪に定められることがあるでしょうか。不敬虔があなたの心に残っているからといって、そのことの故に苛立つてはなりません。神の輝かしい似姿にまだ届いていないからといって、また高慢・自己意思・不信仰が言行のすべての中に入り込んでいるからと

いつて、嘆いてはなりません。心のすべての悪を知ることを恐れてはなりません。神に知られているように自分自身を知ることが、恐れてはなりません。むしろ思うべき限度を越えて思い上がることがないように、神に願ひ求めなさい。次のように絶えざる祈りを捧げなさい。

私のたましいは耐えまますから

内住の罪の深さを示してください

すべての不信仰を表してください

内に潜んでいる高慢も

(Charles Wesley, "Waiting for Christ the Prophet", st.5, *Poetical Works*, II, 263)

しかし、主があなたの祈りを聞き、あなたの心を明らかにし、あなたがどのような霊の持ち主であるかを徹底的に示してください。信仰がくじけないように、あなたの盾が奪われないように、注意しなさい。低くなりなさい。ちりの中にへりくだりなさい。あなたは無です。無以下、空しさ以下です。しかし「あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません」(ヨハ一四二七)。「この私には、御父の御前で弁護してください。義なるイエス・キリストがある」(イヨハ二一参)ことをしっかりと信じなさい。「天が地上はるかに高いように」(詩篇一〇三三参)、主の愛は私の罪よりも大きいのです。ですから、神は、罪人であるあなたを憐れんでください。あなたのような罪人を憐れんでください。神は愛です。キリストは死なれました。ですから御父はあなたを愛しておられま

す。あなたは神の子です。ですから主は、あなたから良い物を何ひとつ保留なさいませぬ。今やあなたの中で十字架につけられた罪の体が滅ぼされるのは幸いなことではありませんか。そのわざはなされず。あなたは「いつさいの霊肉の汚れから自分をきよめなさい」(Ⅱコリ七1)。あなたの心の中に神に対する純粹な愛以外のものが残らないのは、幸いではありませんか。勇気を出しなさい。「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ」(マコ一20・30)。「約束された方は真実な方ですから、きつとそのことをしてください」(ヘブ一〇23参、Ⅰテサ五24参)。あなたのなすべき分は、「万軍の主の熱心がこれを成し遂げる」(イザ九7)まで、静かで、ゆだねきつた、しかも熱心な期待をもって待ち望みつつ、忍耐深く信仰の行い・愛の労苦・明るさに満ちた平安・謙虚な確信のうちに保たれ続けることです。

5 第四に、もし彼らが「キリストにあり、御霊に従って歩んで」いるなら、故意でない失敗、自分ではどうすることもできないすべてのことについて罪に定められることがないのと同様に、弱さの罪について罪に定められることはありません。だとすれば、主の血を信じているあなたは、このことについて「サタンに欺かれぬように」(Ⅱコリ一二)心しなさい。あなたはなお、愚かで、弱く、盲目で、無知です。言葉で言い表せる以上に弱く、心で考える以上に愚かで、知るべきほどのことも知らないのです。しかしあなたのすべての弱さ・愚かさ・その避けることのできない実によって、あなたの信仰、神に対する愛に満ちた信頼を揺るがせ、主にある平和や喜びをかき乱してはなりません。ある人が故意に犯した罪について示している寛容な規則は——故意の罪に対しては、それほど寛容な姿勢をとることは危険であると思いますが——もしそれが弱さや欠けに対して当てはまるとすれば、

疑いもなく賢明であり、安全です。神の人よ、あなたは倒れていますか。そこに倒れたままで、心をなやましたり、弱さを嘆いたりしてはなりません。むしろこう言いなさい。「主よ、あなたが御手をもって支えてくださるのでなければ、私は毎瞬間倒れてしまいます」。ですから、起きなさい。立ち上がって、歩きなさい。「あなたの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか」(ヘブ一二1)。

6 最後に、信仰者は自分のたましいが嫌うような事柄に全く予期せず、投げ込まれたとしても(それを予期できなかったことが、自分の無思慮や怠惰によるのでないならば)、彼は罪に責められる必要はありません。もし信じているあなたが過ちに陥ったら、主に嘆き求めなさい。それは貴い香油となるでしょう。心を神の前に注ぎ出しなさい。そしてあなたのなやみを主に知っていたたたきなさい。「あなたの弱さに同情できる」(ヘブ四15参)方、あなたのたましいを「堅く立たせ、強くし、不動の者」と(Ⅰペテ五10)して、再び倒れることを許しなされない方に、力をつくして祈りなさい。なおも主はあなたを罪に定められません。なぜ恐れるのですか。あなたは「刑罰を伴う恐れ」(Ⅰヨハ四18参)を抱く必要はありません。自分を愛してくださる方を愛するのです。それで十分です。愛すれば愛するほど、力が加わります。心をつくして主を愛するともに、あなたは「何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全なもの」と(ヤコ一4)なります。「平和の神ご自身が、あなたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだは完全に守られますように」(Ⅰテサ五23)。その時を平安のうちに待ちなさい。

説教 9

奴隷の霊と神の子とする霊

The Spirit of Bondage and Adoption

訳者ノート

この説教で、ウエスレーは人が生きる姿勢を三つの状態で表現している——生まれながらの状態 (natural state)、² 律法の下にある状態 (legal state)、³ 福音の下にある状態 (evangelical state)。人が救いに至るとき、この三つの状態を段階的に経ていくという。生まれながらの状態とは、先行的な恵みによって良心を与えられていながら、霊的・道徳的に眠った状態を指す。神について、また自分について無知であり、罪責感もなく、かえって自分は道徳人であるとか、自由であると思いきこんでいる。しかし、神のみことばが聖霊の働きを通してたましいに光を与えると、人は無知のまどろみからたたき起こされ、罪の奴隷となつている自分の姿に覚醒し、神の裁きが不可避であることを自覚するに至る。これが第二の段階である。律法の下にある人は、罪から脱却しようと、真剣に罪との闘争を開始する。しかし、ローマ人への手紙の七章に描かれているジレンマと同じく、力を尽くして戦っても、所詮内側の戦力のすべてが罪に縛られていて、労すれば労するほど罪にとらわれている自分の状態を深く認識し、自己に対する絶望に突き落とされていく。これが「傷ついたたましいの苦惱」(二・6)である。この苦惱に満ちたたましいが、信仰によって、キリストの贖罪の十字架の中へと自らを投げ込むとき、聖霊を通して神の愛がたましいに注がれ、罪の赦しを体験する。それは、恐れが愛にかわり、苦惱が喜びへとかわる、意識せずにはおられない、明確な福音体験である。

神の前における人間の状態をこのように段階別に分類することは、何もウエスレーに始まることではない。アウトラーが指摘しているように、アウグスチヌス、トーマス・ボス

トン（ウェスレーより一世代前の英国人）、キルケゴール、と例は挙がる。ただ特筆すべきは、アルダスゲイトの信仰体験に至るまでのウェスレー自身が見事にこの段階を踏んできたことである。アルダスゲイトの直後、彼はそれまでのたましいの遍歴を一七三八年五月二四日の日誌に記した。その記事は、エプワースの幼児期、ロンドンの寄宿学校で過ごした少年期から始まるが、当時は振り返って、「私はキリストの福音の真義について無知であったことは言うまでもなく、律法の真義についても全く無知であった。」（§1）と告白している。少年の彼は、教えられた義務を形式上行っていたら、「救われるに違いない」（§2）と想像していた。それが、この説教でいう「生まれながらの状態」である。二二才になったウェスレーは、聖職者の道に進むことを決意し、それを契機に彼の靈性は急激に覚醒される。真の宗教が心の中にあることを示され、「神の律法のこよなき高さ、広さ、深さについて、強く納得する」（§5）ことになる。本説教の二・一に「一瞬のうちに、あるいは徐々に目が開かれ」とあるが、彼自身一七二五年に急激に目覚め、しかしさらに一二年という長い歳月をかけて、徐々に律法の真義をより深く知るようになる。ジョージア宣教時代を振り返り、彼は次のように記している。「この忌まわしい罪の奴隷としての卑しい状態にあつて、私は絶えず戦つたが、勝つことはできなかった。以前には進んで罪に仕えていたが、今は本意ながら仕えている。一転一起、またしても転倒しながら、時として勝利を得ても、それは物憂い勝利だつた。……かくして私はなお「律法の下」にあつて、「恵みの下」にはいなかった」（§10）。このような「傷ついたたましいの苦惱」を味わつたウェスレーは、とうとう「福音の真義」を知るに至る。

さて、ウェスレー本人のことよりも、「あなたはどの段階にいるのか、自分自身を調べ

てみなさい」というのが説教の力点である（四・1）。人類のほとんどが第一の「眠れる状態」にある。たとえそれが一八世紀のキリスト教国イギリスであろうと。当時の国教会のほとんどが靈的に眠っており、また目覚めても福音の真義を知られずに、奴隷の霊に苦しんでいるというのが、ウェスレー兄弟の判断したところである。

説教9「奴隷の霊と神の子とする霊」

「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは、御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。」（ローマ人への手紙八15）

序

1 パウロはここで、信仰によって神の子とされた人々について語っています。彼によれば、まさに神の子ともなった人々は、神の御霊を飲みました（1コリ一〇4参）。「あなたがたは、人を

再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、「子である故に、神は『アバ、父』と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました」（ガラ四6）とあります。あなたがたは子としてくださる御霊を受けたのです。それによって、「アバ、父」と呼びます。

2 奴隷と恐怖の霊は、子としてくださる愛の御霊とはかけ離れています。奴隷の恐怖によってのみ動かされている人を、神の子どもと呼ぶことはできません。もともとその中には、神の僕として位置づけられる人もいます。そのような人たちは「神の国から遠くはありません」（マコ一二34）。

3 しかし人類の大多数が、そう、ヘキリスト教世界と呼ばれている中でさえ、大多数の人々は、この段階にさえ達していません。神を恐れるどころか、彼らの頭の中には、神は存在しないのです（詩篇一〇4参）。神を愛する人はごく少数いるでしょう。神を恐れる人の数はさらに少ないでしょう。しかし、ほとんどの人に、「彼らの目の前には、神に対する恐れがない」（ロマ三18）、またその心には神の愛はない、ということが当てはまります。

4 神の憐れみによって今は神の子どもとしての霊にあずかっている人も、おそらくそのほとんどが、かつては彼らのようであり、同じ裁きの下にいたことを思い起こされるでしょう。しかし、初めは裁きのことさえ知らずに、自らの罪と血におぼれていました。それがあるとき、「神を恐れる霊」を受けたのです。「受けた」というのは、これもまた神の賜物だからです。それから後、恐れが消え去り、愛の霊があなたがたの心を満たしました。

5 恐れも愛もないような第一のたましいの段階を、「生まれながらの人」と聖書は呼びます（Iコリ二14）。恐れに陥れるような奴隷の霊によって生きている人は、聖書の他の場所では「律法の下」に

いる（ロマ六14、15）と表現されています——もともと、「律法の下」という言い回しは、ユダヤの律法のすべての儀式や習慣を守らなければならないと思っているユダヤ教の世界を指すことがしばしばですが。そして、この恐れと交換に愛の霊を受けた人を、正式に「恵みの下にある」（ロマ六14、15）と呼ぶことができます。

さて、私たちのたましいがどの状態にあるのかを知ることが非常に大切なことなので、これから第一に「生まれながらの人」の状態、第二に「律法の下」にいる状態、第三に「恵みの下」にいる状態を区別して説明していきましょう。

一

1 まず第一に、「生まれながらの人」（natural man）の状態はどうでしょうか。聖書は、これを眠っている状態として描いています。神の声はその人に「眠っている人よ、目をさませ」（エペ五14）と語りかけます。というのは、そのたましいは深い眠りにあるからです。「生まれながらの人」の霊的な感覚は覚めておらず、その感覚は霊的な善悪を識別することができません。理解の目は閉ざされ、瞼は閉じて、見ることはできません。雲と暗闇が引続きその上に留まっています。それは、彼が死の陰の谷に横たわっているからです。よって、霊的事柄の情報の入口を持たないのですから、その人のたましいに近づく道はすべて閉ざされ、知るべき最優先の事柄について、途方もなく馬鹿げた無知の中にいます。神について全く無知な彼は、自分について知るべき事柄をも何も知りません。神の律法

にあつては、その真の・内的・霊的意味について、全くの門外者です。「きよくなければ、だれも主を見ることはできない」(ヘブ二14) という福音的な聖潔についても、「いのちがキリストとともに神のうちに隠されている」(コロ三3) 人だけが享受できる幸福についても、何の概念も持ちあわせていません。

2. そして、ぐっすりと眠っているという理由で、「生まれながらの人」はある意味で安らぎの中に入ります。盲目である故に、安心してはいるのです。「何だつて。私に何かの危害が起こることなどあるのか」(詩篇一〇六参) と考えます。四方八方からその人を取り囲む暗闇は、一種の平安のうちに囲みます——それは、平安が悪魔の業、及びこの世的・悪魔的思いと一致している限りのことです。自分が地獄の縁に立っていることを見ることができず、よつてそれを恐れることもありません。人は、自分が知らない危険に震えることはできないからです。恐れるに十分な理解もないのです。なぜ彼は神を全く恐れないのでしょうか。それは、神について全く無知だからです。「心の中で神はいない」(詩篇一四一)と言わないにしても、或は「主は地をおおう天蓋の上に住まれ」(イザ四〇22)、「身を低くして天と地をご覧になる」(詩篇一一三6)ことをしないと云わないにしても、享樂主義的な意向と目的とに都合を合わせて、「神はあわれみ深い」(詩篇一一六5)と言つて満足します。そして、そのぶざまな、あわれみの観念の中に、本質的に罪を嫌う神の聖性と、神の義と知恵と真理とのすべてを、混同して飲み込ませてしまうのです。祝福に満ちた律法に服従しない人々に向かつて宣告されている裁きを恐れません。それを理解していないからです。彼は、要はあれこれとなせばよい、外的に非難される点がなければよいと想像して、重要な点が、心の気質と願ひと思ひと動機とのすべてに及んで

いることに気がついていません。中には、キリストが来たのは「律法や預言者を廃棄するため」(マタ五17)であり、すべての義務は廃棄されたと身勝手な想像をする人もいます。キリストご自身が「律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます」(マタ五18)と言われ、「わたしに向かつて、「主よ、主よ」という者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです」(マタ七21)と言われたにもかかわらず、そのような人は、キリストは罪から(From)ではなく、罪の中にあつて(In) 私たちを救ひ、聖潔なしに私たちを天の御国は入れてくださると考えているのです。

3. 「生まれながらの人」は、自分に関して全く無知であり、その意味で安心しています。「そのうち悔い改める」などと語りながらも、正確にいつそれをすべきかを知らず、やがて死ぬ前にとも思っています——悔い改めることが自分の力の範囲にあると錯覚しているからです。悔い改めようと思えば、それを阻止するものは何もない。ただ一度決心しさえすれば、心配は無用、立派にやつてみせると錯覚しています。

4. この種の無知は、いわゆる「教養人」と呼ばれる人々に、最も強く光っています。もし生まれながらの人が、こうした教養人に属しているなら、自分の理性の諸機能や、意志の自由、そして人間が道徳的行動者であるためにはそうした自由が絶対的に必要だということなどを、大々的に語るでしょう。人はだれでも自分の意のままに行動し、自分の目に最善と映るままに悪へ善へと心を傾けるものだと、読み、議論し、実証します。このようにこの世の神は、彼の心の上に二重の盲目の覆いをおぼせ、その上に絶対に「キリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしている」(II コリ四

4) のです。

5 自分自身と神について同等に無知であることから、生まれながらの人の中には、時に一種の喜びが生じ、自分の知恵と善を賞賛していることがあります。そしてこの世でいう喜びを持っているのもしばしばです。肉の欲、目の欲、或は虚栄を満足させるような、さまざまな享樂を持つことができ、その人々が多大な財産、豊かな資産を享受している場合はそうです。「紫の衣や細布を来て、毎日ぜいたくに遊び暮らす」(ルカ一六19) こともできます。そのようにして楽しんでる限り、まわりは賞賛を送るでしょう。その人は、いわゆる幸せな人なのです。着飾って、友人宅を訪ねておしゃべりをして、食べて飲んで、毎日が遊ぶためにある、まさにこれが世で言う「幸せ」の要約なのです。

6 こうした状況にある人が、お世辞と罪との麻薬を投与されて、白昼夢の一つとして、自分が偉大な自由の中を歩んでいると想像したとしても、驚くべきことではありません。自分がすべての「野卑な誤り」や教育の「偏見」から自由にされて、正確に判断でき、あらゆる極論から免れていると、いとも簡単に思い込んでしまいます。「自分は、弱く偏狭な心が病む狂信から全く解放されていて、また常に自分の正しさを信じ込んでしまう、愚か者と臆病者の病である迷信からも解放されている。また、自由で寛大な考え方をしない人々が常に陥る頑迷さからも解放されている」と言うこともあるでしょう。しかし、現実には彼が解放されているのは、「上からの知恵」(ヤコ三17) から、聖潔から、心の宗教から、またキリストにある心からであり、それらを完全に欠いているのです。

7 その間じゅう、その人は罪の奴隷です。程度の差はあれ、罪を犯さない日は一日もありません。

しかし、そのことで悩むこともなく、ある人が言うように「奴隷のくびきにつながれて」はおらず、罪に定められていると感じることもありません。(キリスト教の啓示が神からのものであると告白しながらも)「人間はもろい。私たちは皆、弱い。だれもが弱点を持っている」と言うことで、勝手に満足しています。聖書を引用して、「どうしてですか、ソロモンは「正しい者は日に七度罪に倒れる」(箴言二四16)と言ったではないですか。自分を隣人より良く見せようとする人々は皆、疑いなく偽善者か、狂信者です」と弁解するかもしれません。何か深刻な思いが彼を捕らえたとしても、すぐに「何も恐れることはない。神は憐れみ深く、キリストは罪人のために死なれたのだ」と言って、その思いを鈍らせます。このようにして、「生まれながらの人」は、自ら進んで罪の奴隷となり、墮落のくびきに甘んじ、内的にも外的にも汚れ、そこに留まります。罪を実際に克服するどころか、自分がいとも簡単にはまっついている罪を克服する努力さえ惜しみます。

8 「生まれながらの人」はすべて、このような状態にあります。悪名高い恐ろしい罪人であろうが、あるいは敬虔の内的力はなくてもせめて外側を敬虔に振る舞っている社会的に評判のいい人であろうか、基本的には変わらない罪人です。このような人がどのようにして「罪を確信する」のでしょうか。どのようにして律法の下に置かれ、「恐怖に陥れられるような、奴隷の霊を受けて」、悔い改めに導かれるのでしょうか。次にこの点を考えてみましょう。

1 神の畏るべき摂理によつて、すなわち聖霊の示威とともにみこばが当てはめられたとき、神は暗闇と死の陰との中に眠る人の心に触れます。彼はその眠りからおびえ震えながら目覚め、自分が直面している危険を意識するようになります。一瞬のうちに、或は徐々に、彼の理解の目は開かれ、覆いの一部取り外され、初めて自分の置かれていた現状を認識します。驚愕の光が彼のたましいに斬り込みます。それは、彼にとつて、底無しの穴から、最も深いところから、硫黄で燃える炎の海からきらめいてくるように見える光と感ぜられます。ついに彼は、愛する、あわれみ深い神が、同時に「焼きつくす火」(ヘブ一二二九)であることを、神はすべての人をその業に従つて報いる義なる神であり、不敬虔な者をその空しい言葉や心の想像にまで突っ込んで裁かれる、恐ろしい神であることを悟ります。今や彼は、偉大で聖なる神は「悪を見られないほどきよい」(ハバ一13)方であり、ご自分に反逆する者すべてに報復され、面と向かつて悪人に報いられ、「生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことである」(ヘブ一〇三)ということをはつきりと見るようになります。

2 このとき神の律法の内的・霊的な意味が、彼の上に照り輝き始めます。彼は、神の「仰せはすばらしく広く」(詩篇一一九96)、「その光に照らされない者がだれがいがようか」(ヨブ二五3)ということとを認識します。律法のあらゆる戒めが、単に外的な罪や服従ばかりか、たましいの最も秘めたる部分、すなわち神以外の何者も見通せない部分にも関連していることを確信します。もし彼がいま「あなたは殺してはならない」(出エ二〇13)と聞けば、神が雷の中で「兄弟を憎む者はみな、人殺しです」

(一ヨハ三15)、「兄弟に向かつて『ばか者』と言うような者は、燃えるゲヘナに投げ込まれます」(マタ五22)と言われるのを聞くことになりました。もし律法が「姦淫を犯してはならない」(出エ二〇14)と言えば、主の声は彼の耳元で「誰でも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです」(マタ五28)と響きます。このようにすべての点で、神のことは「生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭い」(ヘブ四12)と感ぜられます。それは、「たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し」、いやそれ以上に鋭く感じるでしょう。なぜなら、彼は今まで、そんなにも偉大な救いを無視し、彼を罪から救ってくれたであろう「神の御子を踏みつけ」、「契約の血を汚れたもの」と、ありふれた不浄な「物」と見なしてきたことを(ヘブ一〇29)、自覚するからです。

3 そして「すべてが裸であり、さらけ出されて、私たちはこの神に対して弁明する」(ヘブ四13)ということを知っている彼は、自分が裸であり、縫い合わせたいちぢくの葉をすべてはがされ、哀れな見せかけだけの宗教や美徳をすべてはがされ、また神に対して犯した罪の惨めな言い訳をものはがされている自分の姿を見るのです。今や彼は、昔のいけにえのように首から下まで二つに裂かれて(τεροχνηαλιερον)いて、それ故内側のものが全部さらけ出されているのを見ます。心は裸にされ、それが罪にまみれ、「何よりも欺きに満ち、絶望的に悪に染まっています」(エレ一七9参)、全的に腐敗し、忌まわしく、言葉で表現できるような状態ではないことを悟ります。そのうちには、良きものは何一つ宿らず、不義と不敬虔のみが宿り、そこから生まれる動機・気質・思いのすべてが、常に悪にのみ傾くのが判るようになります。

4 そして彼は、たとえ自分の生活は非難されるところがないものであったとしても(実際は、「悪

い木が良い実をならせることはできない」のです、そんなことはないし、あり得ないのですが）、自分が「ゲヘナの消えぬ火の中に落ち込む」（マコ九43）のにふさわしい者であることを、知的に認識するだけでなく、言葉では述べることができないたましいの感動によって心に衝撃を受けます。「罪の報酬」は、特に自分の罪に対する正当な報酬は、「死である」ことがわかります（ロマ六23）。それは、第二の死であって、終わりのない死、地獄での肉体とたましいとの破滅を意味します。

5 これをもって、今までの心地よい夢、惑わしの安息、偽りの平安、空しい保証は終わりを告げます。彼の喜びは雲のように消え去り、かつて慕っていた享樂はもはや喜びとはなりません。享樂は味氣を失い、その吐き氣を催すような甘味を彼は嫌うようになります。それらを背負い込むことに疲れてしまします。幸福の陰は逃げ去り、忘却の彼方に沈み、彼はすべてをばき取られて、安息を求めて右往左往するのですが、それを見出すことはできません。

6 これらのアヘンの煙がけ散らされた今、彼は傷ついたたましいの苦惱を感じます。彼は、たましいの上に野放しにされていた罪が（それが傲慢・憤り・悪い欲望であれ、我意・悪意・嫉妬・復讐、或は他のなんであれ）全くの悲惨であることに気がつきます。自分が失った祝福と自分にのしかかる呪いのために心に悲しみを覚え、そのようにして自分を破壊してきたこと、自分に与えられた恵みを軽蔑したこと故に、悔恨を感じます。また彼は、神の怒りを、そしてその怒りの結果、すなわち当然受けるべき罰が自分の頭の上にぶら下がっているのを恐れるようになります。また、傷ついたたましいは死を恐れます。死への恐れが、地獄の門となり、永遠の死の入口となります。彼は、神の怒りと義なる報復の執行者となり得る悪魔を恐れ、また人を恐れるようになります。人は私たちの身体を

殺すことが出来るのですが、それで身体もたましいも地獄にたたき込まれることを、傷ついたたましいは恐れるのです。時に恐れは異常なまでも高まり、哀れな、罪深いたましいはすべてのことを恐れて、風で揺れる葉の音さえ、陰さえ、また実在しないものにもまでおびえることもあります。時に恐れはその人を呆然とさせ、「酔うが、ぶどう酒によるのではない」（イザ二九9）とあるように、記憶や理解力という理性に備わった自然な能力さえも鈍らせてしまします。時に恐れは絶望の淵へと傷ついたたましいを追い込みます。死を聞いただけでも脅えるたましいは、絶望のあまり、逆にいつでも死に飲まれることを良しとし、「生きているよりは首をくくられて死ぬことを選ぶ」（ヨブ七15参）ことさえあります。そのような人が、「心の乱れのためにうめい」（詩篇三八8）でも、当然のことでしょう。また「人の心は病苦をも忍ぶ。しかし、ひしがれた心にだれが耐えるだろうか」（箴言一八14）と叫んでも、当然のことでしょう。

7 そして今、真に彼は罪から逃れようと欲して、罪との闘争を開始します。しかし、力を尽くして戦っても、罪を克服することができません。罪は人よりも強いのです。できることなら脱出したくても、牢獄にしっかりとつながられていて、外に出ることはできません。罪を犯さないと誓っても、罪を犯し続けます。罌を見破り、それを嫌っても、捕らわれてしまします。かつて誇りとしていた理性は、いまや罪責を強化し、惨めさを増すぐらいにしか役立ちません。意志の自由とはそんなものです。それは、悪にのみ自由であり、「不正を水のように飲む」（ヨブ一五16）の自由であり、生ける神からますますさまよい出るのに自由であり、ますますもって「恵みの御盞を侮る」（ヘブ一〇29）ことに自由です。

8 自由になろうと努力すればするほど、自由を欲して、勞苦すればするほど、その人は鎖を、嘆かわしい罪の鎖を感じます。それによってサタンは彼を縛り、「彼を捕らえて思うままにしている」(IIテモ二26)のです。嘆いても嘆いても、彼はサタンの奴隷であり、反逆しても勝つことはできません。罪のために、未だに奴隷と恐れのかげにながれています。その罪とは通常・性質・習慣・あるいは外的な状況によって彼が特にそれに向かう傾向を持っているような外的な罪を指しますが、それは必ず、内的な罪・悪い気質・あるいは不聖な思いに基づいています。それに対して苛立てばたつほど、それは彼を圧倒します。鎖を噛んでも、それを切ることはできません。よって果てしなく勞苦し、悔い改めては罪を犯し、またそれを繰り返します。この哀れな、罪深い、無力で惨めな者は、最後途方に暮れて、かよいい声でうめきます。「私は、本当にみじめな人間です。誰がこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか」(ロマ七24)。

9 このようにして「律法の下」(ロマ六14、15)にいる人が、「恐怖に陥れるような、奴隷の霊」の下で苦闘している、目覚めた人の様子を、パウロはローマ人への手紙の七章で見事に描いています。「私は(パウロは)かつて律法なしに生きていました」(七9)。そのときは、自分にはいのちも、知恵も、力も、徳も十分に備わっていると考えていました。しかし、「戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました」(9節)。神がその力をもって、戒めの霊的な意味を私の心にたたきつけたとき、私の罪の性質はあらわにされ、騒ぎ立ち、燃え上がり、私の徳のすべてが滅び去りました。「それで私には、いのちに導くはずのこの戒めが、かえって死に導くものであることが、わかりました」(10節)。それは、私に不意に襲いかかり、すべての望みを切り裂き、生きているにもかかわらず死んでいたのだと

いうことを明示しました。「ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです」(12節)。律法を責めることはしません。責任は私の墮落した心にあるのです。私は「律法が霊的なものであることを知っています。しかし、私は罪ある人間であり、売られて罪の下にある者です」(14節)と認めます。律法の霊的な性質を理解するようになった私は、自分の心が肉的、悪魔的であり、「罪の下に売られ」完全に奴隷とされていることに気がつきました。(それは、奴隷が金で買われ、絶対的に主人の言いなりになっているのと同じです)。「私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです」(15節)。私がうめいている縄目と私の主人の暴君的ありさまとがどのようなものであるかわかりでしょう。「私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています」(18、19節)。「私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理(うちなる強制力)を見いだすのです。というのは、私は、うちなる人としては、神の律法を喜んで(同意している)のです」(21、22節)。(ここで「うちなる人としては」とは、続く23節の内容を見ても **心では** (in my mind) という意味でしょう。他のギリシヤ語の文献を見ても、「うちなる人」——*ὁ εὖς ἀνθρώπος* とはそのような意味です。)しかし、「私のからだの中には異なった律法(もう一つの強制力)があつて、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法(あるいは力)のとりこにしているのを見いだすのです」(23節)。それは、征服者の戦車によって、私のたましいが嫌悪するものへと引きずられていくかのようです。「私は、ほんとうにみじめな人間です。だががこの死のからだから、私を救い出してくれるでしょう」

(24節)。だれが私をこの無力に死に行くいのちから、罪と悲惨な縄目から、救い出してくれるのでしょうか。この救いが来るまでは、「私自身は」(いやむしろ、「この私は」、*unforgotten*、すなわち罪に覚醒した人は)、「心では」、すなわち内なる人としては、「神の律法に仕え」、心と良心は神の側に立っているのですが、「肉では」、すなわち私のからだは「罪の律法に仕え」(25節)、自分では抗することのできない力によって追いついていられているのです。

10 「律法の下にいる」人の姿を実に生々しく描いています。重荷を感じながらも、それを振り払うことが出来ず、自由と力と愛に飢え渴きつつも、恐れと縄目の下に苦しんでいます。みじめな人が、この罪の縄目から、死のからだから「だれが私を救い出してくれるのでしょうか」という叫びに、神が答えられるまでは、この状態は続いていきます。そして、その答えは「キリスト・イエスによってあなたがたに与えられた神の恵み」(1コリ14)です。

三

1 △の答えが与えられたとき、悲惨な奴隷の状態から解放され、その人は「律法の下にはなく、恵みの下にある」(六14)のです。第三に、この「恵みの下にある」状態を考えてみましょう。それは、恵みを見いだした状態、すなわち恵み深い父なる神の目にあつて好意を受けたこと、また恵みを所有している状態、すなわち聖霊の力がその人の心を支配していること、そしてパウロの言葉で言えば、「アバ、父」と呼ぶことのできる「子としての御霊」(八15)を受けている状態です。

2 「この苦しみのときに、彼が主に向かって叫ぶと、主は彼を苦悩から救い出された」(詩篇一〇七6参)。恵みの下にある人の目は、かつてと全く違ったあり方で開かれ、いまや愛と恵みに満ちている神を見ることが出来ます。彼が「どうかあなたの栄光を私に見せてください」と願うと、そのたましいの奥深いところに次のような声を聞きます。「わたし自身、わたしのあらゆる善をあなたの前に通らせ、主の名で、あなたの前に宣言しよう。わたしは、恵もうと思ふ者を恵み、あわれもうと思ふ者をあわれむ」(出エ三三18、19)。そして、しばらくすれば「主は雲の中にあつて降りて来られ、主の名によって宣言される」(出エ三三四5参)。そのとき、彼は(肉の目によってではないが)「主よ、主なる神は、あわれみ深く、情け深く、怒るのに遅く、恵みとまことに富み、恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す神であることを」(出エ三四6、7参)見るとです。

3 天からのいやしの光明が傷ついたたましいに差し込みます。神は「ご自分が刺し通した者をご覧になり」(ゼカ二10参)、「光が闇の中から輝き出よ」と言われた神が、私たちのたましいを照らし、キリストの御顔にある神の栄光の愛の光を見るようになります(IIコリ四6参)。その人は、「目に見えないものを」、いや「神の深みにまでおよぶ」ことがらを確証させる(ヘブ一一1、Iコリ二10参)神の確信を持ち、特に神の愛については、すなわちイエスを信じる者におよぶ神の救いの愛については、強く確信します。その確証に圧倒され、彼はたましい全体で叫びます。「わが主、わが神」(ヨハ二〇28)。というのは、彼はそのすべてのそむきの罪を背負ってくださった御方を(一ペテ二24参)見、その罪を取り去ってくださる神の小羊を見るからです。いまや彼は、「神は、キリストにあつて、この世をご自分と和解させ、……罪を知らない方を私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが

この方であって、神の義となるためです」(IIコリ五19、21)ということと、さらに契約の血によって、自分自身が神と和解されていることを明白に理解するようになります。

4 罪の責め苦と力との両方が断ち切られました。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは(この肉の体の中に生きているのは)、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです」(ガラ二20)という告白ができます。ここに、心の嘆きや悲しみ、また傷ついたたましいの苦悩は終わりを告げます。神は彼の愛いを喜びに変えてくださいます(ヤコ四9参)。神は傷つけるが、それを包んでくださいます(ヨブ五18参)。もはや神の怒りを恐れることはありません。その怒りが彼から取り去られたのを知っているからです。怒る審判者としてはなく愛に満ちた父として、神は見えておられます。その人は、悪魔を恐れることはありません。悪魔の力は、「もしそれが上から与えられているのでなければ、何の権威もない」(ヨハ一九11)ことを知っているからです。地獄も恐れられません。いまや天の御国の相続人だからです。結果として、長年「死の恐怖につながれて奴隷とされていた」、その死も恐れませんが(ヘブ二15)。むしろ、「私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神のくださる建物があることを知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。私たちはこの幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます」(IIコリ五1、2)。私たちはこの地上の幕屋を脱ぎたいとうめいています。そのことによって「死ぬべきものがいのちのちにのまれてしまうためです。それは「神が私たちをこの世にかなう者としてくださり、その保証として御霊をくださった」ことを知っているからです(IIコ

リ五4、5)。

5 そして、「主の御霊のあるところには自由があります」(IIコリ三17)。それは、罪責や恐れからの自由ばかりか、すべてのくびきの中で最も重く、あらゆる縄目の中で最も残酷な罪からの自由です。いまや労苦は無駄にはなりません。異は破られ、自由とされました(詩篇一二四7)。苦闘するばかりでなく、圧倒することができます。戦うばかりでなく、征服するのです。「これ以降、罪の奴隷ではありません。…罪に対しては死に、神に対しては生きるのでです。…肉体にあったとしても、罪はもはや支配しません。また死ぬべきからだの情欲に従うこともしません。その手足を不義の器として罪の支配にゆだねず、義の器として神にささげます」(ロマ六11、13参)。というのは、「罪から解放されて、義の奴隷となったのです」(18節)。

6 ですから、「私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持ち」、「神の栄光を望んで大いに喜び」(ロマ五1、2)、すべての罪、すなわちあらゆる悪しき欲と悪い、言葉と行いと打ち勝つ力を持っている人は、「神の子ともたちの栄光の自由」(ロマ八21)の生ける証人です。彼らはみな、「同じ尊い信仰を受けた」(IIペテ一1)のであり、みな「私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます」(ロマ八15)と証しすることができます。

7 この御霊こそが、常に「あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、ことを行わせてくださるのです」(ピリ二13)。この御霊が、神の愛と人類を愛する愛を私たちの心に注ぎ、この愛によって私たちの心は世に対する愛、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢から(1ヨハ二16参)清められます。私たちは御霊によって、怒りと高ぶり、そしてあらゆる汚れと情欲から解放されます。こうして私たち

は、邪悪な言葉と不品行から、すべての汚れた行状から解放され、他人を傷つけず、すべての良いわざに熱心な者となるのです（テト二14参）。

8 これまでのことを要約してみましょう。「生まれながらの人」は神を恐れることも愛することもしません。「律法の下」にいる人は神を恐れ、「恵みの下」にいる人は神を愛します。第一段階にいる人は、神の事柄について何の光も与えられず、全くの暗闇の中を歩みます。第二段階にいる人は、光を受けるのですが、それは第三段階にいる人に与えられる喜びに満ちた天国の光ではなく、地獄の光におびえています。死の中に眠る者は、偽りの平安に憩うのですが、そこから自覚めたときに平安は吹き飛んでしまいます。福音を信じる人の心を、真の平安、すなわち神の平安が満たし、支配します。洗礼を受けていてもいなくても、異教徒のレベルに生きる人の自由は夢に描いたものにすぎず、それは実はふしだらな自由です。ユダヤ人のレベル、すなわち律法の下に生きる人は、重い奴隷の霊を背負っています。神の子どもとしての真の栄光に満ちた自由を享受しているのはキリスト者です。霊的に眠っているサタンの子どもは、意図的に罪を犯すでしょう。目覚めた者も、不本意ですが罪を犯します。「罪を犯さず、神に守られ、悪い者が触れることができないのは」（一ヨハ五18参）神の子どもたちです。結論は、生まれながらの人は罪に勝利するどころか戦うこともしません。律法の下にいる人は戦うのですが、勝つことはできません。恵みの下にいる人は、戦って勝つことができます。「私たちを愛してください」の方によって、……圧倒的な勝利者となるのです」（ロマ八37）。

四

1 「生まれながらの」、「律法の下」、「福音の下」という三つの段階をこのように明白に説明すれば、人々を誠実な人、あるいは不誠実な人と単純に区別するだけでは不十分だとおわかりいただけるでしょう。人は、三つのどの段階に生きていても、「子としての霊」を受けていても、また「恐怖に陥れるような奴隷の霊」を受けていても、誠実であることは可能です。もちろん、こうした恐れも愛も持ち合わせていない生まれながらの状態でも、誠実であることは可能です。誠実なユダヤ人、誠実なクリスチャンと同様に、誠実な異教徒もいるでしょう。ですから、誠実か不誠実かで、人が果たして神に受け入れられているかどうかを判断することは決してできません。

ですから、誠実かどうかだけでなく、「あなたがたは、信仰に立っているかどうか、自分自身をためし、また吟味しなさい」（IIコリ二三5）。あなたにとつて重要な問題ですから、詳細に調べてみましょう。あなたのたましいを支配しているのは、神の愛ですか、神の恐れですか。そのどちらでもなく、快楽や、利得、安楽や、評判という世の愛が、たましいを支配していませんか。だとすれば、ユダヤ人の段階にも達していません。未だ異教徒のレベルです。あなたの心の中に天の御国が広がっていますか。「子としての霊」を受けて、「アバ、父」と呼んでいますか。それとも、悲しみと恐れに圧倒されて、「よみの腹の中から」（ヨナ二2）神に叫んでいますか。それとも、こうしたことには関心もなく、私が言っていることを想像さえつかない方もいらっしゃいますか。だとすれば、仮面を取れば、異教徒ということでしょう。キリストを着たこともないのです。素直に認めてください。天を見

上げ、永遠に生きておられる方の前に立つのです。あなたは、まだ、神の子でも神の奴隷でもありません。

あなたは罪を犯していますか。だとすれば、それはすすんでですか、それとも嫌々ですか。どちらにしても、神のことは「罪のうちを歩む者は、悪魔から出た者です」(1ヨハ3:8)と語っています。喜んで罪を犯しているようなら、悪魔の忠実な奴隷です。悪魔がその働きに必ず報いてくれます。嫌々であっても、いまだ悪魔の奴隷です。しかし、神がその手からあなたを解放してくださいませ。

日々、あらゆる罪と戦っていますか。日々、圧倒的な勝利者となっていていますか。だとすれば、あなたは神の子ともです。その栄光ある自由のうちにしっかりと立ってください。戦って、克服しようとしていながらも、勝利を得ることができませんか。だとすれば、未だキリストを信じる者の域に至っていません。しかし、続けなさい。必ず主を知るようになります。まるで戦うこともせず、安逸な、怠惰な、世の流れに従って歩んでいたなら、キリストの名を名乗るようなことは、決してなさらないように。異教の人々の物笑いの種となるだけです。眠っている人は、目覚めてください。深い淵があなたを飲み込んでしまう前に、あなたの神の名を呼びなさい(詩篇六九15参)。

2 多くの人々が、思うべき限度を越えて思い上がり、自分がどの段階にいるのか識別できない理由は、たましいのいくつかの状態がひとりの人物の中である程度混在しているからでしょう。ですから、経験からわかるように、律法の下にいる状態、すなわち恐れの状態がしばしば生まれながらの状態と入り交じります。罪の中に全く眠っている人は少なく、時にはそこから多少なりとも目覚めます。

御霊は「人の子らに期待をかけない」(ミカ五7)とありますが、時には神は聞かれることを望んでおられます。御霊が彼らに恐れを起こさせるので、しばらくの間、異教徒でも「おのれが、ただ、人間にすぎないことを思い知る」(詩篇九20)のです。そのとき人は、罪の重荷を感じ、熱心に来るべき怒りから逃れようと願います。しかしそれも、長続きしません。たましいの深いところまで罪の確信の矢は刺さることはなく、すぐに神の恵みを鈍らせ、また泥の中に帰っていきます(IIペテ二22参)。

同様に、福音の下にある状態、すなわち愛の状態も、しばしば律法の下にある状態と混在します。奴隷と恐れを帯び持っている人が、常に絶望下に置かれることは滅多にありません。知恵と憐れみに満ちている神は、私たちが塵にすぎないことを覚えておられるからです。「わたしはいつまでも争わず、いつも怒ってはいない。わたしから出る霊と、わたしが造ったたましいが衰えはてるから」とあるように、神は配慮してくださいませ(イザ五七16)。よって、神が私たちの中に良いところを認められるようなときには、暗黒に座る者たちに日の出の光を輝かせてくださいませ(ルカ一79参)。神は恵みの一部をそのような人の前を過ぎ行かせ、ご自身が「祈りを聞かれる神」(箴言一五29)であることを示されます。彼らは、キリスト・イエスを信じる信仰によって与えられる約束を見ます。その成就はまだ遠くに見えても、これによって「前に置かれて競走を忍耐をもって走り続ける」(ヘブ二二一)ように励まされます。

3 多くの人が自らを欺くもう一つの理由は、生まれながらの状態の範囲の広さに気がついていないからです。道徳的に善良であっても、律法の下にいるのがせいぜいです。同情心があり、慈悲深い性格で、丁寧で、礼儀正しく、寛容で、愛想が良くても、またある程度の柔和さ、忍耐、自制、他の

多くの徳を持っていても、汚れたことから触れたくない願い、道徳的にすぐれているように努力し、多くの悪から——正義と慈悲と真実と著しく矛盾するような悪から——自らを遠ざけ、多くの善を実践し、飢えた者に食べさせ、裸の者に着せ、やもめや父親のいない子どもを助け、礼拝に出席し、個人的に祈り、霊的な書物を多く読んでいたとしても、未だ「生まれながらの」状態に生きているのです。その人は、自分自身も神も深く知ることはなく、恐れ、霊も愛の霊も持つこともなく、悔い改めにも福音の信仰にも達していません。

またこれらすべてに、深い認罪感に加えられ、神の怒りをひどく恐れるようになり、すべての罪を捨てて正しく生きることを熱烈に願い、望みを抱いてしばしば喜び、たましいの中にならば神の愛の一部が通っていたとしても、子としての霊がその人の心の中に住み、「アバ、父」と常と呼ぶことができるまでは、その人が「恵みの下に」あり、真の生けるキリスト教信仰を持っていることの証明にはなりません。

4 ですから、キリストの名を背負っている私たちは、与えられた高い召しの標準を下回ることがないように留意すべきです。生まれながらの状態に安住してはなりません。多くの人が良いキリスト者だとみなされながらも、この状態に留まっています。また、律法の下に安住することがないように。「人間の間であがめられる者」(ルカ一六15)の多くが概して、この状態に生涯留まっています。神はあなたにさらにすばらしいものを用意されたのです。そこに行き着くまで従っていくなら、必ず手にすることが出来ます。私たちは、悪魔のように恐れておびえるために召されたのではなく、神の御使いのように喜び愛するために召されたのです。「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽く

して、あなたの神である主を愛せよ」(マコ一二30他)。「いつも喜んでいなさい。たえず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい」(一テサ五16、18)。私たちは、「みこころが天で行われるように地でも」行うべきです(マタ六10参)。「何が良いことで神に受け入れられ、完全であるのか」(ロマ一二2)をわきまえ知ることです。そして自らを「神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてさげなさい」(ロマ一二一)。すでに達成したところを堅く守り、前のものに向かって手を伸ばし、ついに「平和の神が、……御前で見こころにかなうことを私たちのうちに行い、あなたがたがみこころを行なうことができるために、すべての良いことについて、あなたがたを完全なものとしてくださいますように。どうか、キリストの栄光が世々限りなくありますように。アーメン」(ヘブ一二21)。

説教 10

御霊の証し (I)

The Witness of the Spirit I

*

説教 11

御霊の証し (II)

The Witness of the Spirit II

訳者ノート

義と認められ、神より生まれた者はだれでも、恵みの特権として、自分と神との和解された関係を直接に確証できるとウエスレーは信じていた。しかも、これこそ神がメソジストに託された主要教理の一つであるという強い自覚に彼は立っていた(説教11・1・4)。「御霊の証し」と題された二つの説教は、この確証の教理を論じている。二つとも、ロマ八16を根拠に、御霊の実を意識的に認知することから得られる間接的な証し(私たちの霊の証し)だけでなく、御霊が信仰者のたましいに与える直接的な証しがあるということを教えている。

信仰者が聖霊の直接的、肉体的な印象によって救いの確証を得ることができるといふ教理は、当時の英国国教会から激しい批判の火矢をあびることになる。もともと英国には冷静さと質実さ、きまじめさを重んじる傾向があるが、加えて時代は、理神論を中心に理性主義・合理主義に傾いていた。そこに、劇的な回心や感情的高揚を伴うリバイバルのうねりがウエスレーを中心にして起こるのである。リバイバル開始直後、彼は、キリスト教有識者の筆頭であったプリストルのパトラー主教と会見している。パトラーはウエスレーの確証の教理を熱狂主義と誤解して、「聖霊による特別な啓示や賜物を持っていると主張することは、忌まわしい、大変忌まわしいことだ」(Henry Moore, *Life of John Wesley*, 1, 424)と厳しく弾劾した。

そうした批判に対する弁明の意味で、ウエスレーは、一七四六年、説教10「御霊の証し(1)」と説教12「私たち自身の霊の証し」の二つを記すが、批判の波は収まるところを知

らない。R・グリーンズの「一八世紀における反メソジスト出版物」(London, Kelly, 1902)によると、国教会側のメソジスト批判はこの問題に集中し、ウエスレーを熱狂主義者と決めつけている出版物は大小合わせて二〇も出されている。そこで一七六七年、ウエスレーは説教11「御霊の証し(II)」を記し、取り上げる価値があると判断される批判を逐一検証しつつ(四・1—10)、再びこの教理の正統性を弁護している。

67年の説教は、サグデン編の「標準説教」では説教45として掲載されている(新教出版の「ウエスレー著作集」はその順番に準じている)が、ウエスレー自身の編集による全集(一七七一一七四)では、二つ隣り合わせに掲載されており、本書ではF・ペーカー/A・アウトラー編の新しい「ウエスレー全集」の順番に倣っている。

確証の教理をリバイバルの感情的高揚や神秘主義的な直感と結びつけることは誤解の元である。この教理は、もつと基本的なところ、すなわち信仰による義認という福音の捉え方そのものに関わっているというのが、ウエスレーの主張である(説教11・三・1—9)。少しその点を、ルターにさかのぼって整理しておこう。ルターの宗教改革は、確証を求めながらも確証が得られないという不安から始まった。「私は一生懸命、規則に従って生活しようと試みた。様々な罪を悔いて、告白して、数えて、そしてしばしば告白を繰り返し、それに当てられた悔い改めの業を真剣に実行した。しかしそれでも、私の良心に確証を与えることはできなかった」(Werke, 40, 1, 15)。毎日礼典に与り、罪を告白し、善行に励んでも、確信は揺らぐ一方であった。善行を重ね苦行に精を出しても、確証どころか、逆に自分の罪深さが指摘され、不安が倍加されていった。そんな時、十字架の福音の本当の意味が彼の心を打った。「私は夜昼となく考えを巡らし、とうとう神の義と「義人は信仰に

よって生きる」という聖句の結び目を理解した。その時、神の義とは、恵みとあわれみの故に、神が我々を義としてくださったという意味の義を指していることを捉えた。それによって、私は生まれ変わって、天国の門をくぐったと感じた」(Werke, 54, 185)。義認を体験したルターは、Deus Loquens「語りかける神」という表現を用いるが、彼は自分の功績・達成・努力といった外的な基準が全く支えにならない認罪感の中で、「子よ。あなたの罪は赦されました」(マコ二・5)という聖霊による内的・直接的な語りかけを聞いたのである。

アルダスゲイトに至るウエスレーのたましいの遍歴は、ルターのそれと酷似している。あの日のことを、ウエスレーは日記にこう書き留めている。「私はキリストを、ただ一人の救い主であるキリストを信じた、と感じた。またキリストは、私の罪を、私の罪さえも取り去って、私を罪と死との律法から救ってくださったという確証を与えられた」。それは、自分は救われているであろうというデータを論理的に整理することで得られる間接的・理性的な確証とは性質を異にしていた。それは、聖霊の内的な証しによるもの、すなわち「キリストを信じる信仰によって神が心のうちに働いて起こしてくださる変化」(「日誌」一七三八年五月二四日・§14)であった。そして、それは義とされるのは罪人であるとの信仰による義認の性質上、自己吟味による良心の証しに先立つものであった。御霊の証しは、特異な感情体験でも、神秘的体験でも、特別な啓示でもない。それは、初代教会の時代に限らず、いつの時代にも、キリストに現わされた神の愛を信仰によって確信した者に約束された恵みの特権であり、普通の(ordinary/common)賜物であるということ¹⁾をウエスレーは強調した(説教10・序・2、「さらなる訴え」・一・12—32参)。

聖霊の内的語りかけが、ルターの義認の体験を支えていたことは確かであるが、宗教改革のその後で、この教理が十分な発展を見ていないことは事実である。信仰を軸にした内的確証の教理は、後期ルターの濃厚な礼典主義の陰に隠れてしまった。また信仰が信頼 (fiducia) から合意 (assensus) へと移行していったことが、プロテスタント・スコラ主義への道を開き、ダイナミックな信仰体験の世界は教義の陰に退いてしまった。他方、聖霊による確証の教理は、ルター派から派生したシュベナーのドイツ敬虔主義に引き継がれ、やがて فرانケやモラヴィア派のツインツェンドルフへと様々に発展する。ウエスレーがこの教理に引き戻されていくのはモラヴィア派のペーター・ペラーを通してである。そして、私たちはウエスレーにいたってこの教理の最も健全な解明を見いだすのである。

教理の「健全さ」が要求されている理由は、聖霊に関する教理が、ややもすると教会史の中で様々な熱狂的運動を引き起こしてきた事実にある。聖霊の直接の証しが主観的勢いや心理体験に取って代わり、独断に染まった熱狂に成り下がる危険性は、メソジストの中にもあった。そこでウエスレーは、熱狂に陥らないために、かなり精巧に、念入りに、この教理を組み立てている。その意図が、特に説教 10・二に強く現れている。直接的な証しと思われるものは、理性を用いて聖書という客観的基準に照らして検証され、確証が独断的思い込みや妄想でないことを明確にしなければならぬ。聖書に想定されているさうした客観的基準は、大別して (1) 過去の罪を悔い改めた心、(2) 新生による人生全体の変革、(3) 愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制といった御霊の実、(4) 神の戒めに従った生活であるという (説教 10・二・1—7)。これらの基準は、すべて聖霊が働いて産出する実であるが、自分がこの実を持つているか否かを調べることで、

聖霊による直接的な証しの真偽を見分けることができる。さらに、直接的な確証が不安定に揺らいだり、薄れたりしている場合、客観的な基準から御霊の実を調べることで自己の信仰を支えることができるという。ウエスレーの目標は、本人が強調しているように、一方で、直接的な聖霊の証しを否定する理性主義と、他方で、内的証しへ疾走して、客観的啓示と理性とを否定する熱狂主義者との、二つの極端の中道を舵取ることであった (説教 10・序・3、説教 11・一・2)。彼は、その中道が、パウロの「私たちが神の子ともであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてください」(ロマ 8・16) という二つの証しの共同作業 (説教 10・序・3、説教 11・四・6) にあると主張している。

説教 10 「御霊の証し」(一)

「私たちが神の子ともであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてください。」
(ローマ人への手紙 8・16)

序

1 何と多くの人々が、自分の話していること、承認していることを理解せずに、この聖句をむなしく解釈し、自らのたましいに多大な損失(それが滅びに至らないとはしても)を招いてきたことでしょうか。何と多くの人々が、自分の想像の声を神の霊の証しと取り違えて、悪魔のしわざを行っているにもかかわらず、自分は神の子どもであるとむなしく思い込んできたことでしょうか。こういう人々は、実に熱狂者と呼ばれてしかるべきです。それは、この語の持つ最悪の意味においてです。しかし、こういう人々がこの事実を納得するのは至難の業です。特に、彼らが偽りの霊を飲み込んでいるとしたらなおさらのことです(1ヨハ4:6参)。彼らの真の姿を教えようと周りの人々がどんなに努力しても、それは「神に敵対する」行為として受け取られてしまいます(使徒5:39)。通常のいかなる説得方法を用いたとしても、彼らは自分では「信仰のために熱心に戦っている」(ユダ3)という激情と一途な思いに駆られているのですから、納得させることなど「人にはできないことです」(マコ1:27)と言つてもよいでしょう。

2 ですから、多くの分別のある人々が、この迷妄の恐ろしい結果を見て、それからなるべく距離を置こうとして、かえって逆の極端に走ったとしても、驚くべき事ではありません。また彼らが御霊の証しを持っていると語る人を信じる気になれないと言ったとしても、これほどまで悲しくも誤った証しがある実状では、驚くべき事ではありません。また御霊の証しについてのさまざまな表現がこれほどまでに悪用されてきているのですから、分別のある人々がこの問題を「熱狂主義」といとも簡単に

に片づけてしまう気持ちも分らないわけではありません。いやそれどころか、この聖句で語られている立証、あるいは証しが普通のキリスト者に与えられた特権であるかどうかを疑ってかかったとしても、またそれが使徒の時代だけに属する特別な賜物の一つだと彼らがみなしたとしても、驚くべき事ではないでしょう。

3 しかし、この二つの極端な考え方のどちらかに突っ走る必然性があるのでしょうか。二つの極端の中間に舵取ることにはできないのでしょうか。誤った熱狂の霊から十分な距離を取って、しかし神の賜物を否定せず、また神の子どもたちに与えられる偉大な特権を放棄しないという道です。勿論で

きます。そのためには、神の御前に恐れをもって、次の二つのことを考えてみましょう。

第一は、この聖句にある「私たちの霊の立証(証し)」とは何か、また「神の霊の証し」とは何かを

考えることです。どのように「御霊ご自身が、私たちの霊とともに、証ししてください」のでしょうか。

第二に、どのように、神の霊と私たちの霊との共同の証しが、キリスト者以前の僭越な思い込みと、また悪魔の迷妄とから区別されるのでしょうか。

1 まずはじめに、「私たちの霊の立証、証し」とは何か、考えてみましょう。ここで私は、神の御霊による証しを、すべて理性に基づいた私たちの霊の証しに吸収させて解釈する人々に以下の事柄を

考慮するように願わざるを得ません。この聖句の中で、パウロは私たち自身の霊の証しのことだけを話しているとは、とても考えられません。そもそも私たち自身の霊の証しについて少しでも語っているのだろうか、つまり彼が話しているのは神の霊の証しについてだけではないだろうかと疑問を抱いてもおかしくありません。そう解釈しても、聖書本文に対して不公平な扱いだとは言えません。これより一つ前の聖句で、パウロは「あなたがたは……子としてくださる御霊を受けたのです。それによって私たちは「アバ、父」と呼びます」と記し、そのすぐ後で、*Autó to pneúma* (ある写本は、*o autó pneúma* と読む) *sympartepoi tō pneúmati hēmōn, ón egiév tekna theou* と付加しています。これは、「同じ御霊が、私たちが神の子どもであることを私たちの霊に証ししてくださる」と訳すことができます。(この場合、前置詞の *o* は、御霊が証ししてくださるのと、御霊が私たちをして「アバ、父」と呼ぶことを可能にしてくださるのが同時である、ということを示すこととなります。) しかし、私はその訳を採用しません。ひとりひとりの信仰者の内に、神の御霊の証しと、その人自身の霊の証しの両方が与えられて、その人が神の子どもであると証しされるということは、他の多くの聖書の箇所が、キリスト者のすべての真実な経験とともに、十分に証明していることだからです。

2 私たち自身の霊の証しについて言えば、その根拠は、神の子どもたちの特徴を記している数えられないほど多くの聖書の箇所にあります。しかも、あまりに明白に書かれていますので、走っている人でも読みとれるほどです (ハバ二2参)。これらの聖書の箇所を集約し、特にこの教えに光を当てたような書物は、今も昔も著されています。さらに強い光を求めているなら、神のことはが説教されている礼拝に出席したり、みことばを密かに神の御前に黙想したり、また神の道によく通じている人と交わることをお勧めします。そして、自分が神の子どもであるかどうかを見分ける光は、神が与えてくださる理性、あるいは理解力によって与えられるのです。宗教は、理性を滅ぼすためにあるのではなく、それを完成することを目指しています。「兄弟たち、物の考え方においては子どもであってはなりません。悪事においては幼子でありなさい。しかし考え方においては大人になりなさい」と一コリント一四20にあるとおりです。聖書に記されているこれらの特徴を自分自身に当てはめてみるなら、だれでも自分が神の子どもであるかどうか判別することができます。ですから、だれでも、もし第一に「神の御霊に導かれて」すべての聖なる気質と行動に至る人なら、「だれでも神の子どもです」(ロマ八14) ということを知り (このことについては、聖書の誤ることのない確証が与えられています。)、次に自分がそのように「神の御霊に導かれている」ということを知るなら、その人は容易に「それ故、私は神の子どもです」と結論することができます。

3 次に挙げるみことばは、すべてヨハネ第一の手紙に見いだされるものですが、その明白な声明のすべてが上述の事柄と一致しています。

「もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります」(一三)。

「しかし、みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。それによって、私たちが神のうちにいることがわかります」(二五)。

「もしあなたがたが、神は正しい方であると知っているなら、善を行なう者がみな神から生まれたこともわかるはずです」(二九)。

「私たちは、自分が死からのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死のうちにとどまっているのです」(三14)。

「それによって、私たちは、自分が真理に属する者であることを知り、そして、神の御前に心を安らかにされるのです」(三19)。すなわち、「私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもって」互いを「愛する」(18)からです。

「神は私たちに(愛する)御霊を与えてくださいました。それによって、私たちが神のうちにおり……」(四13)、それによって「神が私たちのうちにおられるということは、神が私たちに与えてくださった(服従の)御霊によって知るのです」(三24)。

4 このことばを記したときの使徒ヨハネほど、またこの手紙を受けた「信仰の父たち」(1ヨハ13)ほど、神の恵みと私たちの主イエス・キリストの知識において卓越している神の子どもたちは、おそらく世のはじめから今日に至るまで他にはいないでしょう。ヨハネ自身、また神の宮の支柱と呼ばれる人々が、神の子どもであることの特徴を軽視することなく、それらを自分たちのたましいに当てはめて信仰の確証を得ていたという事実は明白です。にもかかわらず、これらすべては理性的な証拠、「私たちの霊の証し」、私たちの理性あるいは理解力以外の何ものでもありません。それは、これらの特徴を持っている人々が神の子どもであるという結論へ導くものです。私たちはこれらの特徴を持っていて、よって私たちは神の子どもであるということなのです。

5 しかし、私たちがこれらの特徴を持っていることがどのように明らかになるのでしょうか。ここで、この質問に答えることが求められます。私たちが神と隣人への愛を持っており、神の戒めを守

っているということは、どのように明らかになるのでしょうか。この質問の意味に注意してほしいのですが、それが周りの人々に対してではなく、私たち自身に対してどのように明らかになるかということです。そこで、次の質問を持ち出す人に尋ねてみましょう。自分が生きていくということ、また自分が安楽の状態にあつて苦痛の中にないということが、あなたにどのように明らかになりますか。あなたはそれを直接的に意識しているのではないのでしょうか。同じ直接的な意識によって、自分のたましいが神に対して生きていくか、傲慢な怒りの苦痛から救われて、柔和で静かなたましいの安楽を得ているかどうか、あなたは知ることができません。同じ方法で、自分が神を愛し、神を喜び、楽しんでいくか、あなたは知覚せざるを得ないと思います。同じ方法によって、自分が自分を愛するのと同じように隣人を愛しているかどうか、人類に対して博愛の情を持っているか、心優しさと同様に満たされていくか確信するはずですが、神の子どもたちが持っている外的な徴についても——それはヨハネによれば、神の戒めを守ることですが——神の恵みによって、その特徴を自分が持っているかどうかを、あなたは胸の中で疑いなく知っているはずですが、私たちが、神の聖名を口にするとき、真剣さと敬虔な思い、そして畏敬と畏怖の念が伴っているかどうか、また安息日を覚えてきよく守っているか、両親を敬っているか、自分がしてもらいたいように、他のすべての人に対しては、身体をきよく、大事に保っているか、食べるにも飲むにもすべてのことを、節制のうちに神の栄光のために行っているか——これらのことを良心は、日々あなたに告げています。

6 これこそが「私たちの霊の証し」です。それは、神が私たちに心の聖潔をお与えになり、外側に出てくる振る舞いもきよいということ、私たちの良心が証しするものです。神の子どもとする御

霊のうちにあつて、またそれによって、聖書の中に述べられている神の子どもにふさわしい気質が私たちのうちにも与えられたことを自覚することです。すなわち、神と全人類に対する愛の心、私たちの父である神に子どものように信頼する信仰、神以外の何ものをも望まないこと、私たちの心配をすべて神にゆだねること、キリストがそのいのちを私たちのために捨ててくださったように、私たちもまた兄弟のためにいのちを喜んで捨てるほどの真剣でやさしい愛情をもってすべての人を包むこと（一ヨハ三16参）です。私たちの霊の証しは、このように私たちが聖霊によって御子のかたちに内的にかたどられ、義とあわれみと真理のうちに神の御前に歩み、御前に喜ばれる歩みをしているという自意識です。

7 しかし、これに加えられ、これと共同して働く「神の霊の証し」とは何でしょう。どのようにして神の霊は、私たちの霊とともに、私たちが神の子どもであることを証ししてくれるのでしょうか。私たちが人間のことは「神の深み」（一コリ二10）について説明することは至難の業です。実に、神の子どもとして私たちが経験する事柄を適切に説明できる表現というものはありません。しかしおそろく、次のような表現は妥当ではないかと思えます。（神によって教えられている人がいたら、その表現を弱め、強め、正してほしいと思います。）御霊の証しとは、たましいに与えられる内的印象であり、それによって神の霊が直接に私の霊に、私が神の子どもであり、イエス・キリストが「私を愛し私のためにご自身をお捨てになり」（ガラ二20）、私の罪がすべて消され、私、この私が神と和解しているということを経験されることです。

8 この「神の霊の証し」は、事の性質上どうしても、私たちが自身の霊の証しに先立たなければならぬことは、次のことを考えただけで明白です。私たちが心も生活も聖いと自分で自覚する以前に、すなわち内も外も聖いという「私たちの霊の証し」を持つ以前に、まず自分が実際にそうであればなりません。そして、私たちは少しでも聖くある以前に、まず神を愛さねばなりません。なぜなら、愛こそがすべての聖潔の根だからです。ここで、「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです」（一ヨハ四19）とあるように、私たちが神の愛を知るまで、神を愛することはできません。そして、御霊が私たちの霊に神の愛を証ししてくれるまで、神の赦しの愛を知ることができないのです。よって、「神の御霊の証し」は神を愛することに先立ち、すべての聖潔に先立ちます。結果としてそれは、神への愛とすべての聖潔とについての私たちの内的自覚、すなわちそれらについての私たちが霊の証しに先立たなければなりません。

9 御霊が私たちの霊に「神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました」（一ヨハ四10）、「御子は私たちを愛して、その血によって私たちが罪から解放放ち」（黙示一5）と証しするとき、そのときはじめて、私たちが愛してくださった神の愛を受け、そして神を愛し、また神のために兄弟をも愛することができま。このとき、「恵みによって神から賜わったものを、私たちが知る」（一コリ二12）とあるとおり、私たちは必ずこの現実を自覚します。私たちは、自分が神を愛し、その戒めを守っていることを認識し、それによって「私たちが神からの者である」（一ヨハ五19）ことを知るのであります。これが私たちが自身の霊の証しです。それは、私たちが神を愛しその戒めを守っている限り、神の霊の証しと共同して、「私たちが神の子であること」を証しし続けます。

10 このように二つの証しを区別して扱っているとき、私が「私たちが自身の霊の証し」から神の霊

の働きを除外しているかのように、絶対に受け取らないでください。決してそうではありません。私たちのうちに働いてすべての善きことを生み出し、またそれを外に向かつて輝かせ、その働きを顕現することは、すべて聖靈の働きです。したがってパウロは、私たちが御霊を受けた一大目的は、「恵みによつて神から賜わったものを、私たちが知る」(「コリニ」) ためであると記しています。聖霊は、私たちの「聖さと神から来る誠実さ」とを指し示し、私たちの良心の証しをより確かなものとし、私たちが神に喜んでいただけることを行っているということをし、より十分に強い光で認識できるようにしてください。

11 その上なおも、いかにして神の霊が「私たちが神の子どもであることを、私たちの霊とともに証ししてくださるか」——あらゆる疑問を排除し、私たちが神の子どもである現実を明白にするような方法で答えてくださいと迫られるなら、次のように考えてください。私は答えはすでに上述のことから明らかだと思えますが、第一に、私たちの霊の証しについて言えば、神を愛し、喜び、楽しむということは、地上のいかなる物を愛し楽しむときと同じように、たましいはそれを親密かつ明白に感じとるものです。たましいは自分の存在を疑いなく感じ取るように、愛し、喜び、楽しむことを自覚します。それ故、理性は以下のように正しく論を進めることができます。

▽いま神を愛し、受けた恵みをまっすぐに喜び、聖なる楽しみと、従順な愛をもって神を喜び、楽しんでる人は、神の子どもである。

▽そして、私はそのように神を愛し、喜び、楽しんでる。

▽それ故、私は神の子どもである。

このようにキリスト者が論を進めるなら、自分が神の子どもであることに疑いはありません。第一の命題は、聖書が神のことばであるという命題と同様、十分確かなことです。そして、自分がそのように神を愛しているという第二の命題については、自分の内側に証拠に欠くことのない内的根拠を持っています。このように、「私たち自身の霊の証し」は、神の子どもとされた現実を疑いを持たせるような理にかなった疑惑の声をことごとく消し去るような、心に現された最も親密な確信を従えているのです。

12 神の霊の証しがどのよう、に、私、た、ち、の、心、に、現、さ、れ、る、か——その方法を説明しようとは思っていません。「そのような知識は私にとって、あまりにも不思議、あまりにも高くて、及びもつきません」(詩篇一三九六)。神は「その思いのままに吹き、その音を聞き」ますが、私は「それがどこから来てどこへ行くのかを知りません」(ヨハ三八参)。ひとりの人に関する事柄は、その人の中にある霊以外だれも知らないように、神についての事柄は、神の霊以外だれも知りません。しかし、私たちは事実を知っています。神の霊は、信じる者が神の子どもとされたことを信仰者のたましいに明確に証しします。その現実には、人が太陽の直射の中に出て太陽の輝きを疑うことができないのと同じように、疑うことができません。

二

1 神の霊と私たちの霊の、この共同の証しは、どのようにしてキリスト者以前の生まれながらの

心が持つ思い込みと、また悪魔の迷妄とから明白に確かに区別されるのでしようか。この点を次に考えましょう。この問題は、神の救いを待ち望む人すべてにとつてきわめて重要ですから、自分のたましいを欺くことがないように細心の注意を払って考慮すべきです。このことで誤ると、最も致命的な結果を招くと一般に見られています。それは、当人が自分の過ちに滅多に気づくことがなく、取り返しのつかないところまで行ってしまうからです。

2 まず、この証しは、どのようにして生まれながらの心が持つ思い込みと区別されるのでしよう。認罪感を持たない人は、いつも自分自身にへつらい、特に霊的な事柄については、思うべき限度を越えて、思い上がる傾向があります(ロマ二・3参)。ですからそのような人が、真のキリスト者に与えられたこの特権を耳にしたとき、その肉적인思いからむなしく思い上がって、疑いなしに自分をキリスト者とみなし、この特権にすでに与っていると得意がっていると、不思議なことではありません。世の中にはそのようなケースがたくさんあります。いつの時代でもそうです。では、この破滅的な思い込みと、神の霊と私たちの霊との真実な証しをどのように区別したらよいのでしよう。

3 聖書には、この区別の基準となる特徴が数多く記されているというのが私の答えです。それらの徴は、神の霊が信仰者の霊とともに証しする、真実で偽りのない証しに、どのような状況が先行し・伴い・後に続くかを非常に明白に述べています。だれでもこれらを注意深く推し量り、心に留めるなら、闇を光と取り違えることはありません。聖書の描く基準に照らしてみれば、真実な証しと偽りの思い込みとはあまりに大きな違いがあるので、この二つを混同する危険性、いやその可能性さえも、全くないと言えるでしょう。

4 神の賜物だとむなしく思い込んできた人は、本人が本当に望むなら、これらの特徴に照らして自己吟味し、自分がこれまで「惑わす力に渡されて」、「偽りを信じるように」(IIテサ二二)「されてきたことを、確かに知ることができるのです。なぜなら、聖書はこの賜物に先立ち・伴い・後に続くはずの、見誤ることができないような明白な特徴を列挙しているのですから、少しでも思いめぐらすなら、自分のうちにそうした徴がないことぐらい、疑いなく確信することでしょう。たとえば、聖書は、罪の赦しの証しの前に悔い改め、すなわち認罪感がたえず先行するものと教えています。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」(マタ三三)。「悔い改めて、福音を信じなさい」(マコ一15)。「悔い改めなさい。そしてそれぞれ罪を赦していただくために……バプテスマを受けなさい」(使徒二38)。「あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい」(使徒三19)。これと合致して、英国国教会もまた、常に悔い改めが赦し、あるいはその証しに先行するものとしています。「神は、真実に悔い改め、その聖なる福音を偽りなく信じる者を、すべてを赦し赦免してくださる」(「祈祷書」朝の祈り、赦免より)。「万能の神は、心からの悔い改めと真実な信仰をもってご自身に立ち返る者すべてに罪の赦しを約束された」(同上、聖餐式、赦免より)。神の赦しの賜物を受けたと肉的に思い込んでいる人は、この悔い改めを知りません。「砕かれた、悔いた心」(詩篇五一17)を経験したことありません。「自分の罪を思ひ出すこと」など「悲しみ」でもなく、「堪えられない重荷」でもなかったのです(「祈祷書」、聖餐式、告白より)。この告白の祈りをくり返し口にはしますが、それは内実の伴わない祈りです。神に対する単なる儀礼的な言葉にすぎません。悔い改めという、神の先行的な働きを欠いているだけで、自分がこれまで単なる影をつかんでいたこと、そして神の子ど

もとしての真の特権を未だ体験していなかったと信じてよい、十分な理由があると言えましょう。

5 聖書はまた、私たちが神から生まれるというきわめて大きな力強い変化が、私たちが神の子どもとされたことの証しに先立つべきことを記しています。その変化とは「サタンの支配から神に立ち返り」、「暗やみから光に」移される変化です(使徒二六18)。それは、「死からのちに移される」(ヨハ五24、一ヨハ三14)ことであり、死人の中からの復活です。そのことを、パウロはエペソにいるキリスト者に「あなたがたは自分の罪過と罪の中に死んでいた者であり……、しかし神は罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました」(エペ二一、5、6)と書き送っています。しかし、肉体的な思い込みで自分が神の子どもであると錯覚しているような人は、ここで語られていることを何一つ体験していないことを知るでしょう。このことについては全くの無知です。それは理解できない言語なのです。自分は常にキリスト者であったと言いますが、そのような変化を必要としていたことに気づくことさえありませんでした。このことによってまた——もしその人がじっくり考えるならば——自分が御霊によって生まれたのではなく、神を知らず、肉の声を神の声と取り違えていたことに気がつくでしょう。

6 しかし、その人がかつて何を経験し経験しなかったかという過去のことを考えることは脇に退けるとしても、現在の特徴で、神の子どもであると思ひ込みによって自らを欺いている人とを区別することができません。聖書によれば、御霊の証しに伴う主にある喜びは、謙虚な喜び、自己を塵のように卑しくする喜びです。これによって罪を赦された罪人は「ああ、私はつまらない者です。私や父の

家が何だというのでしょうか。いま、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます」(ヨブ四〇4、IIサム七18参、ヨブ四二5、6)と叫びます。そして謙遜のあるところには、心優しき、寛容、柔和、忍耐があります。そこには言葉で表現できないような、優しく人に譲る精神、穩健な暖かさ、たましいの柔らかさがあります。しかしこうした御霊の実は、思い込みで神の子どもだと信じている人が主張するところの御霊の証しに伴うのでしょうか。いや、その逆です。そのような人は、自分が神の行為に与っていると確信すればするほど、高ぶります。高慢になればなるほど、その行動の全体が傲慢に横柄になります。確かな証しを持っていてと想像すればするほど、周りの人に威圧的になり、他の批判を受ける力を失い、反対意見を許容することができなくなります。より寛容となり、心優しく、教えられ易く、より「聞くには早く、語るには遅く」(ヤコ一19)なる代わりに、ますます聞くには遅く、語るには早くなり、他から学ぶ姿勢を失い、その性格は刺々しく感情的になり、自己主張が強くなります。いやそれどころか、時にはその雰囲気、話し方、態度すべてにある種の激しさが現れ、まるで事を神の手から奪って、自分の力で「逆らう人たちを焼き尽くす」(ヘブ一〇27)かのようなのです。

7 さらに聖書は、「神を愛するとは、神の命令を守ることです」(一ヨハ五3)と教えています。神の命令を守ることは、神への愛の確かな徴です。主ご自身も「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です」(ヨハ一四21)と言われます。愛は、愛する人の御心にかなうことをすべての点で喜んで従い、実行します。神を真実に愛する人は、御心が天だけでなく、地上においてもなされることを熱心に求めます。しかし、これが肉体的な思い込みによって神を愛している人の特徴でし

よいか。とんでもありません。そのような人は、神を愛しているという根拠で、逆に神の戒めに服従しない、それを破り捨てる自由を主張します。おそらく、神の怒りを身近に感じるようなときは、御心を行うことに努力するでしょう。しかし、いま自分は「律法の下にはない」(ロマ六14)のだと判断すると、もはや律法を守る義務はないと思ひ込みます。それ故、悪を避け、良き業に励む熱心さをだんだん失い、自分の心や舌を注意深く守ることも怠慢になります。自己否定や日々十字架を追う熱心も冷めてしまいます。一言で言えば、自分は「自由なのだ」とむなしく思ひ込んで以来、その人の全生活形態が変わったのです。もはや「敬虔のために自分を鍛練」せず(1テモ四7)、「血肉に対する者ではなく、主権、力、この暗闇の支配者たちに対する戦い」(エペ六12)をやめ、「苦しみに耐えること」(11テモ1-3参)をやめ、「努力して狭い門からはいる」(ルカ一三24)ことをやめてしまします。天国に行くもつと楽な道を見つけたというのです。広く、なだらかで、花の咲き乱れる道です。そこで自分のたましいに「たましいよ。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しんで」(ルカ一二19)と言ひ聞かせることができるのです。これまでのことから、自分自身の霊の真実な証しを持っていないかつたことが疑いなく判明します。謙遜、寛容、服従という徴が自分の中にはないので、それを持つていているという意識に立てるはずはありません。勿論、真実な神の御霊は、偽りを証しすることはできません。その人が明白に悪魔の子ともであるのに神の子ともであると立証することはできません。

8 哀れに自分を欺く人よ、自己を発見しなさい。自分は神の子ともであるという確信を持ち、「私の内に証しがある」と言ひ、対抗する人々をすべて無視する人よ。あなたははかりで量られ、目方の足りないことがわかりました(ダニ五27)。神殿のはかりで量られたのです。主のことばがあなたのためを試し、朽ちた銀の器であることが証明されました。あなたの心は謙遜でないのですから、今日に至るまでイエスの霊を受けたことはありません。寛容で忍耐深くないのですから、あなたの喜びは主にある喜びではなく、価値のないものです。主の戒めを守らないのですから、主を愛してはおらず、聖霊に与る者でもありません。従って、神のことばがなしうる限り確かに明白に示しているように、あなたの場合、聖霊があなたの霊とともに、あなたが神の子ともであるということを証ししていることにはないのです。神を呼び求めて、その目からうろこが落ちるようになります。自分が知られているように自分を知り、死の判決を受けるように。そしてとうとう、「しっかりしなさい。あなたの罪は赦されたのです。あなたの信仰があなたを救ったのです」(マタ九2、22)との、死者をよみがえらせる神の声を聞くことができますように。

9 しかし、自分の内に真実な証しを持っている人は、どのようにして、それを勝手な思ひ込みから区別すればよいのでしょうか。そう質問する人に尋ねますが、あなたは昼と夜を、光と闇をどのように区別しますか。また、どのようにして、星の光や灯芯のきらめきを真昼の光と区別しますか。前者と後者との間には、固有で、明白かつ本質的な違いはないのでしょうか。そして、もしあなたの感覚が正常な働きをしていれば、その相違を即座にかつ直接的に認識するのではないのでしょうか。同じように、霊的な光と霊的な暗闇との間には、また義の太陽が私たちの心を照らす光と「身に帯びた燃えさし」(イザ五〇11)からだけ生じる小さなきらめきとの間には、固有で本質的な違いが存在します。そして、この違いも、私たちの霊的な感覚が正常に機能していれば、即座にかつ直接的に認識されるものです。

10 これらを識別する方法や、神の声を見分けるための基準や本質的な徴を、さらに詳細かつ哲学的に要求するとなると、それは決して答えることができない要求へと発展してしまいます。それは、神について最も深遠な知識を持つている人にも不可能です。かりに、パウロがアグリッパの前で弁明したとき、この賢いローマ人が言ったとしましょう。「あなたは神の御子の声を聞くと言うが、それが神の声だとのようにして判別するのか。何の基準で、どのような本質的な徴を持って、それが神の声であるとわかるのだ。その声と人間の声、あるいは天使の声とを区別する方法を私に説明してみよ。」そのような無謀な要求にパウロが答えようと一度でも試みたことがあるでしょうか。しかし、彼はその声を聞いた瞬間、疑いなく、それが神の声であると知ったのです。しかし、彼がどのようにしてこれを知ったのか、だれが説明できるでしょうか。人間にも天使にもできないことでしょうか。

11 問題の核心に迫ってみることにして、かりに神があるたましいに「あなたの罪は赦された」(マタ9:2) といま語られるとしましょう。神は、そのたましいがご自身の声を聞き分けることを望んでおられるに違いありません。さもなければ、神の語りかけは無意味となります。さらに神は、あることを望まれるとき、いつでも実行されるわけですから、その望みを達成することがおできになり、事実達成されます。そのたましいは、「これこそ神の声である」と全く確信するのです。しかし、この証しを自分自身の内に持っていないながら、それを持っていない人に説明することはできません。また実際のところ、説明することが期待されているわけでもありません。もし霊的な体験をしていない人に神のことを説明する自然的な手段や自然的な方法があるとしたら、生まれながらの人が神の御霊に関する事柄を識別し、知ることになります。しかし、「生まれながらの人間は、それ(御霊に属するこ

と)を悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわかまえるべき」(1コリ二14)であり、生まれながらの人はそうした霊的知覚を持っていないというパウロの言明と正面から矛盾することになります。

12 しかし、私の霊的知覚が正しく働いていることを、どのようにして知ることができるのでしょうか。これもまた、大変意義深い質問です。なぜなら、もし人がこの点に関して誤っていると、底なしの誤りと迷妄との中を走り続けることになるからです。自分の場合はそうではない、自分は御霊の声を聞き違えていない、と確信するのは、どのようにしてでしょうか。それは「あなた自身の霊の証し」によって、すなわち「神に向かつての正しい良心の答え」(1ペテ三21参)によります。神があなたの霊の中に働いてくださった御霊の実によって、あなたは「神の御霊の証し」が真実であることが判るのです。これによって、自分は思い違いをしていない、自分を欺いていない、と判別できます。心を支配している聖霊の内的な実は、「愛、喜び、平安」(ガラ五22)、「慈愛、謙遜、柔和、寛容、忍耐」(コロ三12、13)です。そして、外的な実は、すべての人に善を尽くし、誰に対してもいかなる害をも加えず、光の中を歩むこと——神のすべての戒めに熱心に全く服従することです。

13 同じ実によって、私たちは神の声と悪魔の惑わしとを区別します。あの傲慢な霊は、あなたを神の御前に遜らせることができません。悪魔には、あなたの心を柔らかくして、まず神を求めて真剣に悔い改めさせたり、次に私たちを子とする愛へと心を動かすことはできませんし、また悪魔はそれを望みもしません。あなたが隣人を愛することを可能にしたり、柔和・寛容・忍耐・節制、そして神のすべての武器をつけることを可能にするのは、神と人とに刃向かう悪魔のすることではありません。

悪魔は内輪もめをしないし、自分の業である罪を滅ぼすこともしません。「悪魔のしわざを打ち壊すために」来られたのは、神の御子に他ならないのです。ですから(御霊の實の裏付けがあるなら)きよめが神のものであり、罪が悪魔の業であるのと同じように確実に、あなたの内にある証しは、サタンからのものでなく、神からのものなのです。

14 ですからあなたは、「ことばに表わせないほどの賜物の故に、神に感謝します」(Ⅱコリ9:15)と行うことができます。「私は、自分の信じてきた方をよく知っており」(Ⅱテモ1:12)とご自身を知らせてくださる神に、また「アバ、父。」と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてください(ガラ4:6) 神に、そしていまでも、「私たちが神の子どもであることを、私たちの霊とともに証ししてください」(ロマ8:16) 神に、感謝します。そして、昏ただけでなく、あなたの生活が神への賛美を示すようになりますように。神はご自身のものとしてあなたに刻印を押されたのですから、神の所有となったあなたの肉体と霊とをもって、神の栄光をたたえなさい。愛する者たちよ、あなた自身の中にこの望みを抱くなら、キリストが清くあられるように、自分を清くしなさい(Ⅰヨハ2:3) 参。あなたは、神がどんなにすばらしい愛を与え、あなたを神の子どもとしてくださったかを見たのですから(Ⅰヨハ3:1) 参、「いっさいの霊肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしようにはありませんか」(Ⅱコリ7:1)。そしてあなたの考えも、言葉も、行いもすべてが、キリスト・イエスを通して神に受け入れられるきよい霊的な供え物となりますように。

説教11「御霊の証し(Ⅱ)」

「私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、証ししてください」。(ローマ人への手紙8:16)

一

1 聖書が神のみことばであると信じている人はだれでも、この聖句にある真理の重要性を疑うことはできません。この真理は、曖昧ではなく、偶然でもなく、一度ならずもしばしば、しかも明白な言葉遣いで、厳粛に、定まった目的をもって、聖書の中に啓示されています。それは、神の子どもに固有な特権の一つを表現しているのです。

2 この真理を説明し、弁護することは、左右両極端の危険が存在していることを考慮すれば、なおさら必要なこととなります。もしこの真理を否定するなら、私たちの宗教が単なる形式主義に墮落する危険性があります。それは、敬虔の型は持っていますが、その力を、否定しないまでも無視することになりかねません(Ⅱテモ3:5) 参。もしこの真理を認めても、それを正しく理解していないならば、そこには熱狂へと暴走してしまう傾向が生じます。それ故、この重大な真理を聖書と理性との観点か

ら例証し確証することによって、神を恐れる人々をこの両極端の危険から守ることは、最も必要とされていることです。

3 これまでこの問題を明確に論じたものはほとんどなく、あるとすれば誤った側に立って、霊の証しを否定しきってしまおうようなものですから、こうした種類の解説はますます必要でしょう。また、この教理に否定的な論説が書かれてきたことは、「自分の言っていることも、また強く主張していることについても理解していない」(1テモ17)人々による、辛らつで、非聖書的、非合理的な解説がきっかけとなっていたことは疑うことができません。

4 さらに、この教理を明白に理解し・説明し・弁護することは、メソジストにとっての強い関心事です。なぜなら、この教理は全人類に証しするようにと神が私たちに授けられた事柄の中でも、主要な部分を占めているからです。長年にわたり忘れられられてきたこの偉大な福音の教理が再発見されたのは、神の特別な恵みがメソジストの上に注がれ、彼らが聖書を探求し、体験によって裏付けてきたことによるのです。

二

1 しかし、聖霊の証しとは何でしょうか。原語の μαρτυρία は、(数カ所で)「立証」(the witness)と訳され、さらに限定的には「証し」(the testimony)、或は「証拠」(the record)とも訳すことができます。よって、1ヨハネ5:11は、「その証拠とは」——ここで言う証しとは、啓示の書物の全部にあっ

て神が証言されている事柄の要約のこと——「神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということ」と訳されています。いまここで考えている証しは、神の御霊によって、私たちの霊に対して(8)、そして私たちの霊とともに(9)与えられるものです。聖霊こそが証人です。御霊が私たちに証しされることは、「私たちが神の子であること」(ロマ8:16)です。この証しの直接的な結果は「御霊の実」、すなわち、「愛、喜び、平安、寛容、柔和、善意」(ガラ5:22)です。そして、御霊の実なしには、証しそのものが存続していくことができません。というのは、この証しは、外的な罪を犯すことや、義務を知っていないながらそれを怠る怠慢の罪によればかりでなく、内的な罪に陥ることによっても——すなわち、神の聖霊を悲しませるあらゆることによつて——必然的に消滅してしまふからです。

2 私は何年も前に次のように理解していました。

神についての深い事柄を説明するのに、ふさわしい言葉を見いだすのはむずかしいことです。神の御霊がその子らにいかなる働きをなさるのかを、適切に表現できる言葉は一つとしてありません。しかし、(神について見識のある方々がこの表現を訂正し・やわらげ・強めていただきましたのですが)、「聖霊の証し」という表現をもって、私は次のことを考えています。それは、たましいに与えられる内的印象です。それによつて聖霊が、私が神の子どもであり、「イエス・キリストが私を愛しておられ、ご自身を私のためにお与えになった」(ガラ2:20参)、「私の罪がすべて消され、私が、この私が、神と和解された」と、何の媒体も通さず・直接的に、私の霊に証ししてくれるのです【説教10「聖霊の証し(1)」・1・7】。

3 その後二〇年、さらに考察を加えてきましたが、上述の発言の一部たりとも撤回する理由は見いだせません。また、さらに分かり易くするために上述の表現を変えようとしても、どのようなにすればよいのか思いつかないのです。ただ、もしだれかが、さらに明白な、さらに神のことはと合致した表現を指摘してくだされば、私は喜んで上述の説明をそれに譲りましょう。

4 ところで、心を留めていただきたいのですが、神の御霊が外から聞こえる声で証しをする、そんなことを私は上述の表現で意味しているわけではありません。また証しは、いつも内なる声によるのも限りません。もちろん、その可能性は否定できませんが。また私が考えているのは、聖霊が常に聖句を心に訴えてくる（そういうことはしばしばあるでしょうが）ということでもありません。聖霊は、直接的な影響によって、強い、しかし人の言葉では説明できない作用によって、たましいに働きかけることができます。そのとき、暴風や不安の波は鎮圧され、快い静けさをもたらされ、心はイエスの腕の中にあるようにやすらぎ、罪人は、自分が神と和解され、「咎が赦され、その罪が覆い隠されている」(ロマ四7)ことを明らかに納得します。

5 それでは、これに関して論争されているのは、どのようなことでしょうか。御霊の立証や証しというものが存在するか否かということではありません。御霊が私たちの霊とともに証しするか否かということでもありません。このことを否定する人はだれでも、正面から聖書と矛盾することになり、真理の神に偽りを着せることになります。御霊の証しが存在することは、キリスト教のあらゆる派が承認することです。

6 また、私たちが神の子どもであるという間接的な立証や証しが存在することを論じているのもありません。これは、「神に対する正しい良心の証し」(1ペテ三21参)と同一でなくても、ほぼ同じ概念であり、この種の証しは自分のたましいの中に感じる理性や内省の結果として存在します。厳密に言えば、この間接的な証しは、一部は神のことはから、一部は私たち自身の経験から推し量る結論です。御霊の実を持つている人はだれでも神の子どもである、と神のことは教えています。他方、経験は、すなわち私たちの意識が、自分に御霊の実があるかどうか教えてくれます。この二者を合わせて、私たちは理性に従って、自分は神の子であると結論するのです。この事実が、あらゆる人々が認めることであつて、論争の対象ではありません。

7 また私たちは、御霊の実がないところに、御霊の証しがあるなどと主張しているのでもありません。私たちは、反対に、御霊の実が御霊の証しから即座に生じると主張しているのです。御霊の直接的な証しは、初めて与えられたときさえ、そして後にあつてはなおさらですが、常に同じ程度で存在するとは限りません。喜びも平安も、また愛でさえ、いつも一つのところに留まっているわけではないように、霊の証しそれ自体が、常に強くはつきりしているわけではありません。

8 問題にしている点は、御霊の直接的な証しが、そもそも存在するものなのか、ということですが。御霊の実を自覚することから(理性によって推し量る)証し以外に、何か他の、御霊の証しが存在するのかということですが。

1 私は、それが存在すると信じます。なぜなら、これこそが、「御霊ご自身が、私たちの霊とともに、証ししてください」という聖句の明白かつ自然な意味だからです。明らかにここに、同じことを証言する二人の証人——神の御霊と私たち自身の霊——が述べられています。今は亡きロンドンの主教 (Edmund Gibson) は、「この聖句に基づいた説教の中で、聖句を見ただけで明らかとなるこの事実を疑う人がいることに驚いているようです。主教によれば、「私たち自身の霊の証し」とは、「私たち自身の誠実さの自覚」と同じものであり、さらにははっきりとした表現を採れば、御霊の実際の自覚ということになります。私たち自身の霊が、愛・喜び・平安・寛容・柔和・善意を自覚するとき、それを根拠に、自分は神の子ともであると簡単に推論することができます。

2 この偉大な主教は、もう一つの証しとして「私たち自身の善行の自覚」を挙げています。これが「神の御霊の証しである」というのが彼の主張です。しかし、これはすでに私たち自身の霊の証しの中に、つまり誠実の中に含まれていることです——誠実という言葉は、常識的にそういうことを指すのではないのでしょうか。パウロが「私たちがこの世の中で、……聖さと神から来る誠実さをもつて、……行動していることは、私たちの良心の証しするところであつて……」(Ⅱコリ12)と記しているのを見ても、誠実とは、私たちの性格を指すのと同様、言葉と行動を指していることは明瞭です。従つて、善行の自覚は、第二の証しではなく、彼がすでに述べているものと全く同じこと、すなわち私たちの誠実さの自覚の一部であると言えます。結果として、この段階でまだ一つの証ししか挙がつていないのです。先の聖句が二つの証しを語っているとすれば、もう一つの証しは、善行の自覚でも、自分の誠実さの自覚でもありません。これらは、「自分自身の霊の証し」に含まれています。

3 それでは、もう一つの証しとは何でしょうか。一六節だけでは十分に明白でないとしても、一つ前の箇所から容易に答えを学ぶことができます。それは、「あなたがたは奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によつて、「アバ、父。」と呼びます」とあり、それにすぐ続いて、「私たちが神の子ともであることは、御霊ご自身が私たちの霊とともに証ししてください」とあります。

4 これは、ガラテヤ人への手紙四章六節の並行聖句「あなたがたは子であるゆえに、神は「アバ、父」と呼ぶ、御子の御霊を私たちの心に遣わしてくださいました」にさらに説明されています。ここにあるのは、内省や推論の結果でなくして、なにか即座の・直接の証しではないでしょうか。御霊が「アバ、父」と私たちの心の中で叫ぶのは、それが与えられた瞬間、すなわち自分自身の誠実さを考慮する以前に、いかなる理詰めにも先だつてなされるのではないのでしょうか。そして、これこそが、この聖句を聞いたときに、だれの頭にも最初に浮かぶ、明白な自然な意味ではないでしょうか。これらの聖句はみな、第一義的に聖霊の直接的な証しを説明しているのです。

5 「神の御霊の証し」が、事の性質上、「私たちの自身の霊の証し」に先立たねばならないことは、次の一考で明らかになるでしょう。私たちは、心と生活において聖いと自覚できる前に、実際に聖い存在とならなくてはなりません。しかしここで、聖い存在となる以前に、神を愛することが先決です。なぜなら、神への愛がすべてのきよめの根元だからです。そして、神が私たちを愛されていることを知るまでは、私たちは神を愛することはできません。それは、「私たちが神を愛するのは、まず神が私たちを愛してくださったからです」(Ⅰヨハ4:19)とあるからです。そして、神の御霊が、ご自身

の愛を私たちの霊に証しするまでは、その愛を知ることにはできないのです。その時まで、神の愛を信じることも、「いま私がこの世に生きているのは、私を愛し、私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです」(ガラ二・20)と言うこともできません。

そのとき そのときはじめて感じます

十字架の血潮への熱き思いを

そして たとえようのない喜びをもつて叫びます

あなたは 私の主 私の神です

(*Spirit of Faith, Come Down!*, st.2, *Poetical Works*, IV, 197)

このように、神の御霊の証しは、神への愛とすべてのきよめに先立たねばならないのですから、その証しは、後者の自覚に先立つはずです。

6 そして、この聖書的教理の確かさは、二、三人というのではなく、また数人というのではなく、数え切れない人々の経験によって裏打ちされています。いまある信仰者、そしてすでに天に帰ったあらゆる時代の信仰者が、雲のように取り囲んで、この教理の正当性を保証しています。この教理は、あなたの、そして私の経験によって確認されるものです。聖霊ご自身が、私の霊とともに、私が神の子ともであることを証しし、その確証を与え、即座に「アバ、父」と呼びました。この確証は、私が御霊の実について思いめぐらし、それを意識する以前に与えられました(あなたの場合もそうでしょう)。

う)。この確証が与えられると、そこから流れるように、愛、喜び、平安という御霊の実が与えられます。私がたましいに聞いた最初の声は、

あなたの罪は赦された あなたは神に受け入れられた

その声聞き 天の御国が私の心に広がった

(*Charles Wesley, After Preaching to the Newcastle Colliers*, st.9, 11.3-4, *Poetical Works*, V, 116)

7 しかも、聖霊の直接的な証しは、いわゆる神の子どもに注がれるばかりか、罪責に打たれ、神の怒りがその上に留まっていると感じている人々にも注がれることに注目してください。何千というキリスト者が、聖霊による直接の証しを受けるまでは、自分が神の好意の中にあることを全く知らなかったと告白することでしょう。これらの人々は、神は「彼らの不義にあわれみをかけ、もはや、彼らの罪を思い出さない」(ヘブ八12)という声を聖霊から直接に聞くまでは、他の何事によっても満足できません。罪責に打たれている人々に言うて「らんなさい」。「神があなたのうちに働かれたこと、すなわちあなたのうちにある愛、喜び、平安を思いめぐらすことで、自分が神の子どもであることを知るべきです」と。彼らは即座にこう答えるでしょう。「内側を思いめぐらせば、自分が悪魔の子であることを知るのみです。神に対する私の愛は、悪魔が抱いている程度のもです。私の肉の思いは神に敵対し、聖霊による喜びはうちにありません。私のたましいは悲しみのあまり死ぬほです。平安はなく、私の心は荒れ狂う海のようにです。はげしい嵐に翻弄されています」。こうしたたましいが慰めを

受けるとしたら、(彼が道徳的に正しいとか、誠実とか、あるいはその心と生活が聖書にかなっているということ)を根拠にするのではなく、神は「不敬虔な者を義と認めてくださる」(ロマ四5)という聖霊の直接の語りかけによる以外にはありません。その人物は、義とされるその瞬間まで、不敬虔な者であり、真のホーリネスを全く欠いていて、「何の働きもない者」(ロマ四5)です。神に受け入れられたことを意識するまでは、真に善きことを行うことはできません。「神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに」私たちを受け入れてくださいます。それは、唯一、全く、御子が私たちのためになしてくださったことと、受けてくださった苦しみによるのです。「人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰による」(ロマ三28)という以外にはありません。だとしたら、神によって義と認められる以前には、自分の心や行いに何らかの善を意識することはできないはずで、「返すことはできない」(ルカ七42)のですから、すなわち、「私のうちには善が住んでいないのを」(ロマ七18)意識し、本質的に不可欠に必要とされている内的・外的な善はなく、「ただ……キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められる」(ロマ三24)のです。この世に生まれでたときから義と認められている人などいるでしょうか。また、人が次のように告白するまで、義とされることもありません。

私はあらゆる訴えを放棄します

ただ 「主よ 私は呪われたものです

しかし あなたが私のために死んでくださいました」

との訴えをかけるだけです

(Galatians 3:22, s.12, 11, 34, Poetical Works, I, 85)

8 よって、だれでも聖霊の直接の証しを否定すれば、事実上、信仰による義認の教えを否定することになるのです。したがって、この直接の証しの存在を否定するとしたら、その体験を未だくぐったことがないのか、すなわち未だ義認を体験したことがないのか、あるいは、(ペテロが言うように)「自分の以前の罪がきよめられたこと」(τὸ καθαρσιῶν τῶν ἡμῶν αἰτησιμῶν)を忘れてしまったのです」(IIペテ一9)。以前、罪が消し去られたとき、神がそのたましいに働いてくださった独特な体験を忘れてしまったのです。

9 ここで、この世の子ともたちの経験でさえ、聖霊の直接確証という神の子ともたちの経験を裏付けています。世の人々の中にも、神を喜ばせたいと願っている者は多くいます。中には、そのために労苦している者もいるでしょう。しかし、彼らがその罪が赦されていることを知ることができる、などと論じる人は全くいないではありませんか。そんな発想は実に馬鹿げたことです。世に属する人中で、そのような確証を主張する人などいるでしょうか。しかし、彼らの多くは自らの誠実さを意識しています。疑いなく、多くの者は、程度は限られています。自分自身の霊の証しを持ち合わせ、自らの正しさを意識しています。しかし、それが、自らの罪が赦され、神の子ともとされたという自覚には至らないことは、明らかです。実に、彼らが誠実であればあるほど、その確証を手にしたいと願うものです。これらのことからわかるように、神の側からの直接の証しなしに、私たち自身の霊の

証しだけでは、神の子どもとされたということをも十分納得のいくかたちで知ることはできません。

四

しかし、この教理については、多くの反論があります。そこで以下に、考慮するに値する主要なものを取り上げてみます。

1 第一に、「教理が聖書に基づいているか否かを証明するのに、経験だけでは不十分である」と、反論する人がいます。勿論そうです。そして、この反論命題は重要な真理です。しかし、この教理が聖書に基づくものであることは、既述のとおりですので、この反論は無効でしょう。この教理は聖書に基づいており、私たちの経験は一つとなつて、この聖書の真理を保証しているのです。

2 「しかし、狂人や、フランス預言者など、あらゆる種類の熱狂主義者が聖霊の証しを経験していると思像しています」と反論する人もあるでしょう。彼らはそのように想像しているのです。いや、そうした熱狂主義者のかたりの人々が事実、経験していたかも知れませんが、確証は長続きしません。また、経験していなかったからといって、それで他の人々がそうした経験を得ることができないと結論することはできません。狂人が自分は王であると想像しているからといって、私たちは真の王が存在しないと結論することはできないのです。

「いや、この教理を主唱する者の多くが、聖書をひどくけなしている」と反論する人もいます。おそらくそのような人もいるでしょう。しかし、だからといって、この教理が誤りだと結論づける必要

はありません。聖霊の確証を主張しつつ、聖書に最高の敬意を払っている人々が何千といるからです。

「でも、この教理によって自分自身を致命的に欺き、熱狂に走っています」と反論する人もいます。しかし、人がその教理を悪用し、自らに滅びを招いているとしたところで、それが聖書の教理でなくなるわけではありません。

3 「しかし、私は、疑いなき真理として、御霊の実こそ御霊の証しであると明言します」と反論する人もあるでしょう。しかし、「疑いなき」とは言い切れません。何千の人々がそれを疑い、いやきっぱりと否定します。しかしそれは脇にどけておいて、反論者は続けて言います、「この証しが十分であれば、他の証しは必要ではない。そして以下の二つの場合をのぞいて、この証しで十分である。(一)の御霊の実を全く欠いているとき」。私はここで口を挟みますが、まさにここで反論者が認める(一)のような場合こそ、直接的な証しがまず与えられるべきなのです。そして「(二)御霊の実に自分で気が付かないとき。しかしそうなれば、神の好意を受けてはいるが、その事実を知らない場合があるということになる」。そのようなときは、そのようにときには、そのために与えられる直接の証しによるほか、私たちが神の好意の中にあることを知ることができないのです。これこそ私たちの主張するところなのです。すなわち、間接的な証しが雲の中に隠れているときさえ、直接的な証しは鮮明に輝くことができますという事です。

4 第二に、反論者は「ここで検討されている証しの意図は、私たちの信仰告白が真正なものかどうかを証明することにある。しかし、直接的な証しはこれを証明しない」と言います。私はこれに対して、これを証明することが、霊の証しの意図ではないと答えます。御霊の証しは、いかなる信仰告

白にも先立つものであり、これ以前にあるとすれば、自らが失われた・どうしようもない・罪深い・無力な罪人であるとの告白です。この証しの意図するところは、それが与えられる人に、彼らが神の子どもであり、「ただ神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いの故に、価なしに義と認められる」(ロマ三24)ということを確認させることです。この時点で、彼らの思いや言葉や行動が、聖書の示す標準に適合しているかどうかは、前提にはなりません。むしろその逆のことが、すなわち彼らが、その心においても生活においても全般的な罪人であることが前提なのです。そうでなければ、神は「敬虔な者を義とされ」、「彼らの行いが義とみなされる」ことになってしまいます(ロマ四5参)。そして、これらすべての反論を論理的に突き詰めていけば、その根底にあるのが「行いによる義認」ということになりはしないかと、危惧を抱かざるを得ないのです。神は義とするすべての者に「行いによる」とは別の義を帰してください(ロマ四6参)と心から信じる人はだれでも、御霊の実に先立って与えられる御霊の証しの存在を認めることに何の困難も見いださないことでしょう。

5 第三に、次のように反論する人もいます。「ルカの福音書は、『天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありますか』(一一13)と記しているが、マタイの福音書は、同じ箇所それぞれを「良いもの」(七11)と記している。これらの聖句は、御霊の証しが、御霊の実という「良いもの」を与えることによってなされることを豊かに証明している」。いや、そうではありません。どちらの聖句も、御霊の証しについて語っている箇所ではありません。よって、(証明)と彼らが呼ぶものがきわめて不完全である限り、取り合う必要はありません。

6 第四の反論は次のような聖句を列挙します。「木のよしあしはその実によって知られるからです」

(マタ二23)、「すべてのものを見分けなさい」(一テサ五21)、「それらの霊が神からのものかどうかをためしなさい」(一ヨハ四1)、「あなたがたは自分を試し、吟味しなさい」(二コリ二三5)。もちろんのことです。ですから、だれでも「このあかしを自分の心の中に持っている」(一ヨハ五10)と信じる人は、それが神からのものかどうか試してみるべきです。実を結ぶようになれば、それは神からのものですし、実を生じることがなければ、そうではありません。確かに、「木はその実によって知られる」のです。実によって、その証しが神からのものであるかどうかを、証明することができます。反論者は、「しかし神の書物の中には、直接の証しは言及されていない」と言います。直接的な証しは、それだけで独立した単独の証しとしては言及されてはいませんが、私たち自身の霊の証しという、もうひとつの証しと結合し、私たちが神の子どもであることを共同して証しするのです。まさにこのような証しの共同作業のことを、先のIIコリント人への手紙一三章5節は言及しているのではないのでしょうか——「あなたがたは、信仰に立っているかどうか、自分自身をためし、また吟味しなさい。それとも、あなたがたのうちにはイエス・キリストがおられることを、自分で認めないのですか」。そうではないと、証明できるでしょうか。彼らは自分たちのうちにキリストがおられることを間接的な証しによつてばかりか、直接的な証しによつて知ったのではないのでしょうか。それをまず内的な自覚によつて、次に愛、喜び、平安という御霊の実によつて知ったのではないのでしょうか。そうではないと、証明できるでしょうか。

7 「しかし、聖書の中では、内的・外的変化から生じる立証がくり返し言及されているのではないかと反論されるでしょうが、私はそれに対して、確かにそうであると答えます。そして私たちは、

内的・外的変化から生じる立証が御霊の（直接的な）証しを確認するものであると、くり返しそれに言及してきました。

「いや、これまであなたが、神の霊の働きを幻想から区別するために示してきたしは、すべて私たちの内側に、また私たちの上になされる変化を指すものである」。それも同様に、疑いなき真実です。

8 第五の反論は次のようなものです。「御霊の直接的な立証は、我々をとんでもない幻想から免れさせることはない。その証しが信頼できないとすれば、すなわちその証しの主張するところを証明しようとして、それとは全く別のものへと飛躍することを余儀なくさせられるような証しであるとすれば、その立証は信頼に値するものであろうか」。私の答えは、神は、まさに私たちをすべての幻想から守るために、私たちが神の子どもとされたことに二つの立証を与えられた、ということです。この事実を、二つの立証が共同で証しをするのです。それ故、「人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません」（マタ一九六）。そしてこの二つが結び合わさっている間は、私たちは惑わされることはありません。共同の証しは、信頼できます。それは最高度の信頼に値するもので、その主張する事柄の正しさを証明するために、他のものを要することはありません。

「いや、直接的な証しは単に自己を主張するだけで、何も証明しない」と反論されますが、私はこの二つの立証がすべてのことを打ち立てていくと考えます。そして、神が意図されたように、御霊が「私たちの霊とともに証しする」とき、それは私たちが神の子どもであることを十分に証明します。

9 第六の反論はこうです。「あなたもわかっているように、我らの救い主が十字架の上で体験され

たような厳しい試練でもない限り、神が働かれる変化で十分な立証となる。そして、だれもそのような方法で試みられることはない」。そうでしょうか。私たちがまた、そのような方法で試みられることがあるのではないのでしょうか。そのようなとき、御霊の直接的な立証なしに、私たちが子どもとして神に信頼し続けることは不可能でしょう。

10 最後に、「御霊の直接的な証しを主唱する人々の中には、非常に傲慢で、無慈悲な人々がいる」という反論があります。おそらく、それを非常に熱く語る人々の中には、傲慢で無慈悲な人が数人いることでしょう。しかし、この教えを非常に堅実に主張する人々の多くは、秀でて柔和な謙遜な心の持ち主であり、他のあらゆる点で、実に

小羊のようであった彼らの主に真実に従う者たち」 (Hymn 146, *Hymns on the Lord's Supper*, p.139)

なのです。

以上が、これまで聞いた反論の中で、考慮に値するものと私が考えたものです。なお、これらの中には反論としての強い根拠が含まれていると信じます。しかしながら、これらの反論と答えを冷静かつ公平に考察する人であれば、それらが、「神の御霊は、私たちが神の子どもであることを間接的にだけでなく直接的にも証ししてください」という偉大な真理の論拠を砕くことも、弱めることもないということをお確かめください——私はそう理解しています。

五

1 すべてを要約すれば、以下のようになります。御霊の証しは信仰者のたましいのうちになされる内的印象であり、それによって神の御霊が直接彼らの霊に、神の子どもとされたことを証しするのです。問題になっているのは、御霊の証しが存在するかどうかではなく、御霊の実を意識するという間接的な方法によって生じる証し以外に、直接的な証しがあるかどうかです。私たちはあると信じます。なぜなら、それがローマ人への手紙八章16節の明白かつ自然な意味であり、それは文脈からもガラテヤ人への手紙の平行聖句からも例証されるからです。また、神のことが明白に意味する真理は、数え切れないほど多くの神の子どもたちの経験によって確認されています。それはまた、罪責感に打たれている人々は、直接の証しを持つまでは決して平安を得ることがないという経験から考えても、また、心の中にこの証しを持っていないので、だれも自分の罪が赦されていると知ることができないと告白するこの世の子どもたちの経験から考えても、この教えの正しさは証明されるのです。

2 それから、以下のような反論を検証してきました。経験は聖書によって支持されていない教理を証明するには、不十分である。あらゆる種類の狂信者・熱狂主義者がそのような証しを持っていると思ひ込んでいる。証しの意図は、私たちの信仰告白が真正なものかどうかを証明することにあるが、直接的な証しはこれを証明しない。聖書は「木のよしあしはその実によって知られるからです」(マタ一二33)、「あなたがたは自分を試し、吟味しなさい」(IIコリ一三五)と教え、他方、聖書のどこにも、直接的な証しは言及されていない。直接的な証しは私たちをとんでもない幻想から免れさせることは

できない。最後に、私たちのうちになされる変化は、キリストだけが受けられたような厳しい試練の場合を除けば、十分な証しである、という反論でした。それに対して、私たちの答えは、(一) 経験は、聖書に基づく教理の正しさを確認するのに十分である。(二) 多くの人が実際には受けていない証しを持つているものと想像しているが、だからといって真実な経験の信憑性を疑うことはできない。(三) この証しの意図は私たちが神の子どもであることを保証することであり、この意図は果たされている。(四) 御霊の真実な証しは、愛・平安・喜びという御霊の実によって知られる。この御霊の実は、直接の証しに先立つものではなく、それに続くものである。(五) 「あなたがたのうちにはイエス・キリストがおられることを、自分で認めないのでですか」(IIコリ一三五)との聖句が言及しているのは、間接的な証しだけであって、直接的な証しはそこに含まれていないと証明することはできない。(六) 神の霊が、「私たちの霊とともにあかしする」とき、すべての幻想から私たちを守る。そして、最後に、(七) 自分自身の霊の証しだけでは不十分であるような試練を受ける可能性は私たち皆にあり、そのとき、神の御霊の直接の証し以外には、私たちが神の子どもであることを保証することはできない、というのが反論に対する回答でした。

3 最後に、全体から二つのことを導き出しておきます。第一に、いかなる御霊の証しであろうと、御霊の実から遊離しているようなものであるなら、それに安心してはなりません。もし聖霊の直接的な証しが真実であるなら、その結果、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」(ガラ五22、23) という御霊の実が即座に生じてくるものです。激しい試みの時には、これらの実が曇ることもあるでしょう。「サタンが麦のようにふるいにかける」(ルカ二二31) ように試みられている人

には、御霊の実の外には現れてこないことでしょう。しかし、そのような黒雲の下でさえ、御霊の実の實質的な部分は存続しています。確かに、聖霊における喜びは、試練の時には取り去られるかもしれませんが。いやそれだけでなく、たましいは、「暗闇の時、暗闇の力」(ルカ二二53)が続いている間は、「悲しみのあまり死ぬほど」(マタ二六38)になっていることでしょう。しかし一般的に、この喜びさえもがさらに大きくなって回復されます。そして「ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜び」(一ペテ一8)で喜ぶのです。

4 第二に、いかなる御霊の実であろうと、御霊の直接的な証しなしに安心してはなりません。私たちがうちに直接的な証しを持つ以前、すなわち聖霊が私たちの霊とともに「御子の血による贖い、すなわち罪の赦し」(エペ一7)を持っていると証しする以前に喜びや平安や愛を前もって味わうことはありません。それは幻想ではなく、神から出ている真実なものです。また、私たちが「愛する御子にあつて受け入れられる」(同一6参)以前、すなわち神に受け入れられたという証しを持つ以前に、ある程度の寛容・慈悲・誠実・柔和・自制をも味わうことがあります。(それは、神の先行的な恵みによって、単なる影としてではなく、ある程度の現実として生じるのです。)しかし、そこで留まることは、決してお勧めできません。そうするならば、私たちはたましいに危険を冒すのです。私たちが賢明であれば、聖霊が私たちの心の中で「アバ、父よ」と叫んでくださるまで、続けて神に叫び求めるはずで、御霊の直接的な証しは、すべての神の子どもに与えられた特権であり、これなしに、私たちは自分が神の子どもであることを確信することはできません。これなしに、私たちは堅実な平安を保持することも、困惑させる疑いや恐れを取り除くこともできません。しかし、ひとたび子としての身分を

授ける霊を受けるなら、「人のすべての考えにまさる神の平安が」(ピリ四7)、あらゆる刺々しい疑いや恐れを追い払う平安が、「私たちの心と思いを、キリスト・イエスにあって守ってください」(同)。そして、御霊の証しが、私たちの内と外をきよめ、真実な実を生み出していくとき、ひとたび私たちに与えた証しをいつも与えることこそ、疑いなく、私たちを召してくださった方の御心なのです。ですから、もはや私たちに、神の御霊の証しを奪われる必要も、私たち自身の霊の証し——すなわち、あらゆる義と真実なきよめの中を歩んでいるとの自覚——を奪われる必要もありません。

説教 12

私たち自身の霊の証し

The Witness of Our Own Spirit

訳者ノート

救いの確証は、個人の内側から湧いてくる主観体験でなく、聖霊という外からの働きかけによって与えられる確証 (divine conviction) であるとウエスレーは主張する。しかし、それが心で捕らえる心理的知覚であり、媒介の存在しない直感的体験であるため、それがどのようにして与えられるかというメカニズムやプロセスはわからない、ということ ウエスレーは認めている (説教 10・11・12)。そうになると、当然そこには、個人による解釈の相違・表現の違いによる混乱や、思い込みが混じり合う可能性があり、それが聖霊の声で、どれが熱狂の声か、どれが本物体験で、どれが疑似体験か、判断がむずかしい。先の説教 10 で、私たちが直接的に知覚する御霊の証しは、間接的に知覚する私たち自身の霊の証しによって、検証され、支えられる必要があることが強調されている。同一七四六年に出された説教 12 は、さらに詳しく後者に光を当て、どうしたら信仰者が自らの救いを確信し、理解し、「良心の証し」を得ることができるかを論じている。

私たち自身の霊の証し の声を聞くこと とするとき、逃してはならないウエスレーの強調点が二つある。まず第一に 聖書である。私たちの霊の証し、あるいは信仰者の良心というものは、聖書という客観的基準に立脚していなければならない。良心とは、その度合いの差はあれ、先行的な神の恵みの故にすべての人のうちに与えられている道徳律であるという理解をウエスレーは持っているが (説教 105 「良心について」)、この説教で彼は、そのような普遍的な低い基準で霊の証しを論じようとは思っていない。救いの確証を得ようとするとき、「聖書だけが、クリスチャンの良心を導く、完全な、そして唯一の外なる基準」と

なる(6)。当然、その確証は、キリストを信じる信仰による義認と新生の体験という土台がなければならず(8)、またIIコリント人への手紙12の「私たちはこの世の中で、単純さと神から来る誠実さをもつて行動してきた」という聖句に含まれる真摯なクリスチャン生活の証しが必要ならば、確証は成り立たないということ、ウエスレーは延々と論じている(9-16)。そのような生活背景を持たず、また聖書が示す善悪を明確に認識することをせずに、心の中に救われた喜びでいっぱいだと告白したところで、それは聖書の根柢を持たない感情の高まりであって、キリスト者の喜びとは言えない(17-19)。

第二にウエスレーが強調するのは理性である。この説教の87の冒頭に「実際にそのようにして導かれるとき、クリスチャンは正しい良心の神への誓いを持っています」とあるが、ウエスレーは、「そのように導かれる」という良心の証しを得るための過程、すなわち御霊による直接の証しの信憑性を客観的に(検証する過程)に細心の注意を払っている。この過程で重要な役割を果たすのが、理性である。説教のはじめの方で、ウエスレーは良心の定義分析をしながら、それが単に「現在かつ過去の事柄についての自覚」だけでなくして、「それらの事柄を許しあるいは責め、是としあるいは非とし、放免しあるいは非難する」機能を持っていることを述べている。(詳しくは説教105「良心について」を参照するとよいが)良心は、単に心に植え込まれた善悪の基準を指すのではなく、その基準に沿って自分自身の情緒・思い・言葉の善悪を判断する理性的な機能を有している(4-5)。私たちが、第一に神のことばを正しく理解し、第二に自分自身を正しく知り、第三に自分の心と生活とを基準となることばに合致させ、第四に自分と基準とが合致していることを自覚するという、きわめて理性的なプロセスを踏まなければ、私たち自身の霊の証しを

健全な意味で獲得したことにはならないことをウエスレーは強調している(7)。

これを考え合わせると、聖霊を身近に感じ、常に確信にあふれて行動し、野外で熱っぽく大衆を前に説教をし、心の宗教を第一としながらも、実際ウエスレーは熱狂主義からほど遠い人間ではなかったであろうか。「私は感情に振り回されることがほとんどなく、大概は、理性と聖書とが私の導き手である。私は感じるよりもはるかに知覚する人間である」(手紙、to Elizabeth Ritchie, 1786.2.24)との彼の告白は、都合のよい弁護ではなく、正直でありのままの彼の姿であったように思える。

説教12 「私たち自身の霊の証し」

「私たちがこの世の中で、特にあなたがたに対して、単純さと神から来る誠実さをもつて……行動していることは、私たちの良心のあかしするところであって、これこそ私たちの喜びです。」

(IIコリント人への手紙12)

*ウエスレーが使っていたエラスムス編の新約聖書では、*crōma* (キヌム) の代わりに、*carōna* (単純さ) となっている。

1 真実にキリストを信じているすべての人は、信仰と愛に留まっている限り、このように告白するものです。私たちの主は、「わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく」(ヨハ八12)と言われました。そして光を持っている者は、その光の中で楽しみます(ヨハ五35参)。「主イエス・キリストを受け入れた者は、主にあつて歩みます」(コロ二6参)。主にあつて歩む者のたましいは、パウロが奨めているような、「いつも主にあつて喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい」(ピリ四4)という喜びを味わいます。

2 しかし、私たちがその家を誤って砂の上に建てないように(雨が降り、風が吹くと、洪水が押し寄せ、その家に打ちつけ、倒し、しかもひどい倒れ方をするのですから)、私は、この論考において、クリスチャンの喜びの性質と根拠を示すことにします。私たちは総じて、それがあの幸いな平安であり、たましいの静かな充足であり、それがここでパウロが描いているような良心の証しから生じるものであると了解しています。しかし、さらに理解を深めるために、パウロの言葉の一つ一つを検討する必要があります。このことによつて、へ良心とは何か、そしてそのへ証しとは何を意味するのか、またこの証しを持っている者がどのようにして喜びを抱くことになるのかが明らかにされることでしょう。

3 第一に、へ良心」という言葉を、私たちは何と理解すべきでしょうか。だれの口にも上るこの言葉の意味は何でしょうか。この問題に関して、時代ごとに膨大な著作がなされ、古典や現代の学問の宝庫がこの問題にくまなく探りを入れてきたことを考えると、良心を定義することは途方もなく困難な課題であると想像されます。しかも、多くの綿密な研究にもかかわらず、この問題は究明されていまいと言われます。むしろ、研究者の多くは、かえつて核心を曇らせ、「知識もなく言い分を述べて、摂理を暗くし」(ヨブ三八2)、それ自体明白で容易に理解されるものを困惑させてきたのではないのでしょうか。難解な用語を避けていけば、素直な心の持ち主ならだれでもこの問題をそれほど時間をかけずに理解することでしょう。

4 神は私たちを考える存在として創造されました。私たちは、そこに今あるものを知覚し、過去にあったものを思いめぐらし、あるいは思い出すことができます。特に、私たちは自分の心と生活とを通り過ぎていくものを知覚することができ、私たちが感じたり行ったりすることを自覚することができます。それが進行中の出来事でも過去の出来事でも、同じです。人はへ自覚するへ存在(*conscious being*)であるとは、そういうことです。人は、自分自身・情緒・外側の行動にかかわる現在かつ過去の事柄についての自覚(*consciousness*)、あるいは内的知覚を持っています。しかし、普段私たちがへ良心」(*conscience*)という言葉を用いるとき、これ以上のことを意味しています。それは単に今起つている事柄の知識、あるいは過ぎし日の思い出を指すものではありません。過去や現在の事柄を思い出し自覚することは、良心の有する機能の最も小さな一つにすぎません。良心の主だった働きは、それらの事柄を許しあるいは責め、是としあるいは非とし、放免しあるいは非難することです。

5 最近の著述家の中には、これに新しい名前を与えて、〈道徳的感覚〉という名称を好む人がいます。しかし、良心という古い名称の方が、人々に親しまれ、一般的に通用し、理解されやすいので、新しいものより古い名称の方が適切かと思われます。また、もう一つの理由によって、クリスチャンは良心という呼称にこだわりません。すなわち、それが啓示の書に使われるように神の知恵によって選ばれた言葉なので、そちらが好ましいことに間違いありません。

さて、この用語が聖書一般の中で、また特にパウロ書簡の中で意味するところによれば、良心とは、神がこの世に生まれるすべてのたましいの中に植え込まれた一つの機能・能力であると理解できます。それによって私たちは、自分自身の心と生活の中で、その情緒、思い、言葉、行動において、何が良いことで何が悪いことであるかを知覚するのです。

6 しかし、人はいかなる基準によって、この善悪を判断するのでしょうか。その良心は何によって導かれるのでしょうか。パウロが他の箇所で教えているように、異邦人にとって、基準は「彼らの心に書かれている律法」(ロマ二15)です。「(外なる)律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです」。「彼らはこのようにして、(外なる)律法が命じる行いが彼らの心に(神の指によって)書かれていることを示しています」。そして彼らがこの基準によって歩んでいるかどうか「彼らの良心もいっしょになってあかしし、また彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し(ἡ καὶ ἀπολογία)」、赦免し、弁護し合ったりしています(ロマ二14、15)。しかし、クリスチャンにとって、善悪の基準は神のことばである、旧・新約聖書です。それは、預言者といにしえの時代の聖徒が「聖霊に動かされて」(Ⅱペテ一21)記したものであり、「聖書はすべて神の霊感によるもので」、「そ

れらは「教えのために」、すなわち神の御心の全体を教えるために、また御心に反抗する事柄を「戒め」、誤りを「矯正」し、「義の訓練」のために有益です(Ⅱテモ三16)。

これが、クリスチャンの足を照らすともしび、その道の光です(詩篇一一九105)。クリスチャンは、聖書のみを善悪の基準として、実際に何が良く何が悪いことなのかを判断する基準として、受け入れます。直接に聖書の中に良しとされているか、あるいはそこから明白に結論づけられることだけが、クリスチャンにとって良いことと評価されます。聖書に禁じられているか、あるいはそこから明確に導き出されることだけが、クリスチャンにとって悪なのです。聖書に(直接に、あるいは明白な結論づけによって)禁じられていないこと、あるいは勧められていないことは何でも、それ自体善とも悪とも言えない中立の性質のもの (to be of an indifferent nature) であるとクリスチャンは信じます。聖書だけが、その良心をすべてのことにおいて導く完全な、そして唯一の外なる基準なのです。

7 実際にそのようにして導かれるとき、クリスチャンは「正しい良心の神への誓い」(Ⅰペテ二21)を持っています。「正しい良心」とは、他の場所でパウロが「責められることのない良心」(使徒二四16)と称しているものです。ですから、パウロはあるとき「私は、今日まで、全くきよい良心をもって、神の前に生活して来ました」(使徒二三一)と述べ、また他のところで、「私はいつも、神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つように、と最善を尽くしています」(同二四16)と述べています。さて、このようにして良心が正しく導かれるためには、第一に、神のことばを正しく理解すること、すなわち私たちについて神が聖書の中に啓示された「きよく、受け入れられる、完全な御心」(ロマ二一1、2参)を正しく理解することが絶対に必要です。それは、私たちがある基準に従っ

て歩もうとするとき、その基準の意味するところを知らなければ不可能だからです。第二に要求されることは、自分自身を正しく知ることです。それは私たちの心と生活、内的な思いと外側に出る言葉の両方を含みます。(この知識を得る人の何と少ないことでしょうか。) それらについて知らなければ、それらを基準と照らし合わせることはできません。第三に、私たちの心と生活、思いと行状、考えと言葉と行いとが、基準である神の記されたことばと一つになることが必要です。これがなければ、良心があっても、それは悪い良心にすぎません。第四に、自分と基準とが合致していることを自覚する必要があります。まさにこの一致を習慣的に知覚している状態、すなわちこの自覚そのものが、パウロが「正しい良心」、あるいは「神の前にも人の前にも責められることのない良心」と呼んでいるものです。

8 しかしまず、このように責められることがない良心を持つとうと望む人はだれでも、正しい土台を据えることを心がけるべきです。「だれも、すでに据えられている土台の他に、他のものを据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです」(1コリ三二) ということを忘れてはなりません。さらにこのことも覚えておくべきです。だれでもキリストの上に建てるものは、生ける信仰による他はなく、また「いま私が、この世に生きているのは、私を愛し、私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によつてなのです」(ガラ二20)、すなわち私の心に啓示された御子を信じる信仰によつてなのです。と明白に証しできるまでは、だれもキリストにあずかることはできないということです。信仰のみが、目に見えない事柄を保証し、確信させ、実証させるものであり、それによつて私たちの理解の目は開かれ、神の光がそそぎ込まれ、神の御教えのうちにあるすば

らしいこと(詩篇一一九18参)、その卓越性と純粋性を、御教えとそこに含まれるあらゆる戒めの高さ・深さ・長さ・広さを見るようになります。「キリストの御顔にある神の栄光の輝き」(IIコリ四6参)を見て、私たちが、鏡を見るように、自分自身の中にあるすべてのもの、いや、たましいの奥底の動きまでわかるようになるのは、信仰によります。そして信仰のみによつて、神の愛が「私たちの心に注がれ」(ロマ五5)、これにより私たちはキリストが私たちを愛されたように、互いに愛することができます。信仰によつて、神の民イスラエル全体に約束された「わたしは、わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、彼らの心に書きつける」(ヘブ八10) という恵み深い約束が成就します。このことによつて、神の聖なる完全な律法との全的な一致が、彼らのたましいの中に生まれ、「すべてのはかりごととはとりこにされてキリストに服従する」ようになるのです(IIコリ一〇5参)。

悪しき木が善い実を結ぶことができないように、善い木は悪しき実を結ぶことができません。ですから、信仰者の心が神の律法と全的に一致していれば、その生活も神の戒めという基準にまったく従っているのです。それを自覚して、彼は神に栄光を帰し、パウロとともに告白することができます。「私たちがこの世の中で、特にあなたがたに対して、聖さと神から来る誠実さをもつて、行動してきたことは、私たちの良心のあかしするところであつて、これこそ私たちの喜びです」(IIコリ一二)。

9 「私たちは行動してきた」。原語を見ると、パウロはこのことを一つの言葉(αποφατισμῶν)で表現しています。しかし、この言葉の意味するところには非常な幅があり、それは私たちの態度全体、いやそれだけでなく、私たちのたましいと身体に関する、内的・外的すべての状態を含んでいます。そこには、私たちの心、舌、手、身体が行うすべてのことが含まれています。それは、私たちの言動

すべてに関わり、私たちが自分の能力と機能をどのように用いるか、与えられている賜物を神と人との前にどのように用いるか、という点すべてに関わってきます。

10 「私たちがこの世の中で行動してきた」。これは、単に神の子どもたちの間だけではなく（これは比較的小さなことでしよう）、不敬虔な世にあつて、悪魔の子どもたちの間で（1ヨハ3:10参）、悪の中に横たわっている者、「悪い者の支配下にある」（Evil Kingdom）者たちの間で（1ヨハ5:19）、ということですが。何という世でしょう。世は、それが絶えず呼吸している悪しき霊によって徹底的に貫かれていくのです。私たちの神が善であり、善を行われるのであれば、この世の神とその子どもたちすべては、悪であり、そして神の子どもたちすべてに対して（許される限りの）悪を行います。彼らの父と同じように彼らは待ち伏せ、「食い尽くすべき者を捜し求めながら、歩き回っています」（1ペテ5:8）。彼らは、この世に属してない人々を滅ぼすために、偽りや力、秘密工作や露骨な暴力を用います。彼らは常に私たちのたましいに戦いを仕掛け、古い武器を用い、新しい武器を用い、あらゆる種類の策略を用いて、私たちのたましいを悪魔の罠に、滅びに向かう広き道へと、引き込もうと一生懸命です。

11 「私たちはこのような世の中で、単純さと神から来る誠実さをもって行動してきた」。第一に「単純さ」です。これは、主イエスが「澄んだ目」という表現で勧めていることです。「からだのあかりは目です。それで、もしあなたの目がすんでいいるなら、あなたの全身が明るい」（マタ6:22参）のです。その意味はこうです。目が体に対してするように、意志は私たちのあらゆる言行に影響を及ぼします。ですから、意志というあなたのたましいの目が澄んでいれば、その行動も言動も、聖霊にある

愛と平安と喜びという天の光に満たされ、明るくなります。

私たちの心の目が神にまっすぐ向いているとき、すなわちすべてのことにおいて神のみを目的とし、神を私たちの神・相続分・力・幸福・非常に大きな報い・私たちのこの世と永遠におけるすべてとするとき、私たちの心は澄んできます。これが単純さです。ただ神の栄光を追求するという変わらない視点が、すなわち、神の御心を行い、たとい御心が苦難であつても喜んで受けるといふ単一の意志が、私たちのたましい全体を行きめぐり、その心全体を満たし、そして私たちのあらゆる思い・願ひ・目的の不變の泉となるとき、単純さが生まれるわけです。

12 第二に、「私たちがこの世の中で、神から来る誠実さをもって行動してきた」。単純さと誠実さとの違いは、主に、前者が意志それ自体に関わり、後者が意志を実行することに関わっているように思えます。そしてこの誠実さは、先に述べたように、単に私たちの言葉だけでなく、その行動全体に関わることです。この言葉はパウロによって狭義に用いられ、真理を語るとか、偽装・たくらみ・偽りを行わないことを意味する場合がありますが、ここではさらに広義に用いられ、私たちが誠実をもつて行おうとしている目標を實際に射抜いているというような意味で使われています。ここでは、私たちが実際に神の栄光のために話し、すべてのことを行っているということの意味します。私たちの言葉すべてが、それを心がけているというだけでなく、実際にそのように実行されていること、私たちの行いすべてが、神の栄光という偉大な目的に一樣に仕え、とうとうと流れ出ていること、そして生活のすべてにあつて私たちが神にまっすぐに、しかもたゆまなく動いて、きよめの公道、すなわち義とあわれみと真実の小道を、堅実に歩み進んでいることです。

13 パウロはこの誠実さを、神的な誠実さ、つまり神の誠実さ (eiJukpveia Boos) と呼び、私たちがそれを異教徒の誠実さと混同することを避けるようにしています。(というのは、異教徒もある種の誠実さを持っており、彼らはそれを少なからず熱心に説いていたからです。) パウロはまた、これを「神的な誠実さ」と呼ぶことによって、すべてのキリスト教の美德がそうであるように、誠実さの対象と目的が神であることを示しました。究極的に神に向かわないものはすべて、「世の汚れ」(IIペテ二20)の中に沈んでいくのです。彼はまた、「神の誠実さ」と呼ぶことによって、誠実さの起源が神であること、「すべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物は上から来る」(ヤコ一17)ということを示しています。IIコリント人への手紙一章12節で、パウロは「人間的な知恵によらず、神の恵みによって」と続けることによって、誠実の創始者が神であることをさらに明確に語っています。

14 「人間的な知恵によらず」ということで、あたかもパウロは次のように言おうとしているようです。

「私たちは、人間的な理解力によっても、人間的に獲得した知識や知恵によっても、世にあってこのように行動することはできない。良識、良い性格、良い育ちといった力によって、ここにあるような単純さを得ること、また誠実さを実行することはできない。それは、哲学が作り出す道徳的な教訓すべて、私たちに与えられた生まれながらの勇氣と決意すべてのはるか上を行くものです。習慣の力も、人間教育の凝った規則も、私たちがこれに到達するまで訓練することはできません。私パウロも、かつて享受してきたさまざまな特権を駆使したとしても、「肉にある限り」(生まれながらの状態に限り)そしてそれを人間的な生まれながらの知恵で追い求めている限り、この単純さと誠実さとは

到達することは決してなかったのです」と。

そもそも人間的な知恵でそこに到達する人がいるとしたら、パウロがそうであろうと言えます。確かに、パウロはそれほどの人でした。生まれながらの賜物も、教育によって受けた賜物も、パウロほど恵まれて受けていた人は、稀であるからです。持って生まれた能力について言えば、地上のだれと比較しても優るとも劣らないのが彼ですが、さらに教育の面でも、タルソの大学で学び、当時のユダヤ国民の中で最も知識に富み、人格者として尊敬を受けていた「ガマリエルのもとで教育を受けた」(使徒二三3)ということで、彼に並ぶ人はいませんでした。さらに彼はパリサイ派であり、パリサイ派の子どもであり、緩やかな規定に甘んじる他宗派と区別されるような、最も厳格な宗派の中で育ちました。ですから彼は、「私は、自分と同族で同年輩の多くの者たちに比べ、はるかにユダヤ教に進んでおり」、神に喜んでもらうという思いについては「人一倍熱心でした」(ガラ一14)と述べ、「律法による義についてならば非難されるところのない者です」(ロリ三六)と自負しています。しかし、これをもってしても、彼はあの単純さと誠実さに到達することはできませんでした。それは失われた労苦にすぎません。彼は最後に刺されるような思いで、押し出されるように叫んでいます。「私にとつて得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています」(ロリ三七、八)。

15 パウロがこれに到達できたのは、「私たちの主を知ることのすばらしさ」(同三八)、あるいはそれと同義のもう一つの表現を使えば、「神の恵みによる」ほかありません。神の恵みとは、罪人を愛し、

キリストの功績の故に、罪人の私がいま神と和解するところの、功績を要求しない神のあわれみと、しばしば理解されます。しかしここでは、恵みは「私たちのうちに働いて、志を立てさせ、事を行わせてくださる」(同13) 聖霊なる神の力を意味しています。神の恵み(前述でいう神の救いの愛)が私たちのたましいに明らかにされるとすぐに、神の恵み(後述でいう聖霊の力)がたましいの中に与えられます。そのとき、人にはできないことを、神の力によって行うことができます。私たちの行動を正しく制御し、私たちを強めてくださるキリストを通して、神の愛の光と力のうちにすべてのことを行うことができます。このとき、「私たちがこの世の中で、単純さと神から来る誠実さをもつて行動している」という「良心のあかし」を持つのです。これは人間的な知恵によっては得ることのできないものです。

16 これこそが、クリスチャンの喜びの基礎です。ここまでたどってくれば、私たちは、この証しをうちに持っている者が「いつも喜んでい」(1テサ516)ことを容易に理解することができます。その人は、「わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます」(ルカ146、47)と行うことができます。私は神を喜びたたえます。この方は、功績なしに与えるところのご自身の愛の故に、また罪人を優しく顧みるあわれみの故に、「この救いの状態へと私を召してください」。その中に私は今、神の力によって立っているのです(ロマ52参)。私は喜びます。なぜなら、聖霊が私の霊とともに、私が小羊の血によって買われ、キリストを信じ、「私はキリストのからだの一部であり、神の子どもであり、天の御国を相続する者である」(1コリ615、ロマ816、17、ヤコ25参)ことを証ししてくれるからです。私は喜びます。なぜなら、神が私を愛しておられることを知ったとき、

同じ聖霊の力によって、私のうちに神を愛し、また神のために人の子らを、すなわち神が創造されたすべてのたましいを愛する愛を与えられたからです。また、私は喜びます。なぜなら、神は私の中に、「キリストにあるのと同じ思い」(ピリ25)を感じるようにと次のことを与えられたからです。それは、私の心の一挙一動がすべて神を見つめる澄んだ心の目です。それは、「私を愛し、私のためにご自身をお捨てになった」(ガラ220)方にだけ、私のたましいの目を常に向け続ける力であり、何を考え、何を話し、何をするにも、主のみ求め、主の栄光ある御心のみを求める力です。それは、「自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに十字架につけ」(同524)、「地上のものでなく、天にあるものを思い」(コロ32)、神以外のなものをも求めない純潔さです。それは、聖潔、すなわち神の似姿が回復され、たましいが神の似姿に刷新されることです。それは、私たちの言動のすべてを神の栄光にかなうたものへと整えていく、神から来る誠実さです。私はまた、次のことに喜び、そしてさらに喜ぶことでしよう。それは、私の良心が聖霊にあつて、継続的に注がれる聖霊の光によって、私は召された「召しにふさわしく歩んでいる」(エペ41参)こと、蛇の頭から逃げるように罪から逃げ、「悪はどんな悪でも避けている」(1テサ522)こと、あらゆる機会を捕らえて、あらゆる種類の善をすべての人に対して可能な限り行っていること、行く道のどこにあっても主に従い、主の目に受け入れられることを行っていることを、自分の良心が証ししてくれるからです。また私は、聖霊の靈感を通して、すべての行いが神においてなされ、いやそれどころか私のうちにあつてすべての行いをなしているのは神であることを見て、感じて、喜んでいきます。また私は、自分が主の道を歩む力を持っており、恵みによってそこから右にも左にもそれることはないことを、心に照らされた神の光によって見ることに

ができ、喜んでいきます。

17 クリスチャンが常に喜んでいいる喜びの根拠、及び性質とは、以上のようなものです。上記の考察から、第一に、私たちはこれが生まれながらの人が持ち得る喜びではないと言つことができず。この喜びは、自然的原因から、すなわち突然こみ上げてくる感情の高まりから来るものではありません。そうした喜びは、一時的なものです。しかし、クリスチャンは「常に喜んでいいる」のです。それは、身体が健康である、あるいはやすらいでいいる、体質が丈夫である、あるいは健全であるということに原因してはいるはではありません。というのは、その喜びは、病氣や苦痛の中にあるときにも依然として保たれ、いや以前にまして強くなることもあるからです。多くのクリスチャンは、肉体が痛みで消耗し、病氣に打たれてやつれていいるとき、心を満たしてくるような喜びをかつて味わったことがなかったと証しています。とりわけその喜びは、外側の繁栄や人の評判や物質的な豊かさに原因するものではありません。なぜなら、火のようなあらゆる種類の外的苦難によって信仰が試されているときに、神の子どもたちは、見たことにはないけれども愛しているキリストを喜び、「栄えに満ちた喜びにおどつて」(1ペテ1-8)きたのです。彼らは、「この世のちり、あらゆるもののかす」(1コリ4-13)として取り扱われた人々たちです。彼らは、徹底した欠乏の中を、飢えと寒さと裸の中をさまよひ、「あざけられ、さらに鎖につながれ、牢に入れられた」(ヘブ1-36)人々たちです。彼らは、最後まで、自分のいのちを少しも惜しいとは思わず、喜びをもって任務を果たし終えていった人々たちです(使徒20-24)。

18 上記の考察から、第二に私たちは、クリスチャンの喜びが善悪の区別もつけないような盲目的な良心から生まれたものではない、とすることができず。それどころか、彼は理解の目が開かれるまでは、このような喜びについて全く無知であり、霊的な善と悪とを識別するのにおぼろしく霊的感覚が整うまで(ヘブ5-14参)、このような喜びを知ることはありませんでした。クリスチャンとなったとき、たましいの目はくもることなく、かつてなかったように鋭くされます。彼は小さな事柄をも敏感に知覚します。それは生まれながらの人には全くの驚きです。塵が太陽光線の中に見えるように、光の中を、創造物の太陽ではない霊的な光の中を歩む人には、罪の塵一つ一つが見えるのです。もはや良心の目を閉ざすことはありません。そのような眠りは過ぎ去ったのです。そのたましいはいつでもはつきりと目覚めていて、まどろんだり、手をこまねいて休むことはありません(箴言6-10参)。彼はいつも塔の上に立ち、主が彼について何を言われるかに耳を傾け(イザ22-8参)、そして何よりも「目に見えない方を見る」(ヘブ1-27)ことができることに喜んでいきます。

19 また、第三に、クリスチャンの喜びは、鈍い、無感覚な良心から生まれるものではありません。「無知な心が暗くなり」(ロマ1-21)、その心がかたくなで、無感覚で、鈍感で、従つて霊的な理解に欠けている人々の心の中にも、一種の喜びが生じることは確かです。感覚を失い、鈍感になった心の故に、罪を犯すことにさえ喜びを感じることもあります。これを「自由」と呼んで、楽しむのです。しかしこれは、たましいが泥酔状態にあり、霊が致命的に麻痺し、しなびた良心が無感覚になつていいるにすぎません。これとは逆に、クリスチャンの良心は、かつて自分で想像もし得なかつたほど鋭敏な感性を持っています。神の愛が心を支配して以来、良心はこれまでにない、しなやかな感性を持つようになりまし。そして、神が彼の日毎の祈りを聞いていくくださることも、また彼の誉れであり喜

びなのです。

わたしの感じやすいたましいよ 逃げてくれ
罪がおぞましい手をさしのべて近寄ってくる

瞭のようにすばやく逃げてくれ

罪のわずかな気配を感じて逃げてくれ

(“Watch in All Things”, st. 10, *Poetical Works*, II, 273)

20 結論として、クリスチャンの喜びは、従うことの喜び——神を愛し、その戒めを守ることの喜びです。しかも、それで行いによる契約の条件を満たそうと思つて守るではありません。行いや私たちの義によって神の赦しを獲得して、神に受け入れてもらおうと思つて守るではありません。私たちはキリスト・イエスにある神のあわれみによってすでに赦され、受け入れられています。また、服従することによつていのちを、罪の死からのいのちを獲得しようというのでもありません。これもまた、神の恵みによつてすでに私たちのものです。「罪過によつて死んでいた私たち」を「神は生かしてくださいました」(エペ二5)のです。今や私たちは「神に対してはキリスト・イエスにあつて生きた者」(ロマ六11)です。私たちは、恵みの契約に従つて歩むことに喜び、聖らかな愛と幸福な服従とを喜んでいます。「キリストの恵みによつて義とされ」(テト三7)、「神の恵みを無駄には受けなかつた」こと、そして神は無代価に私たちをご自身と和解させてくださり(私たちの意志や努力の故でなく、

小羊の血の故に)、神が与えてくださった力によつて、戒めの道を走っているのだということを知つて、喜んでゐるのです。神は「戦いのために我々に力を帯びさせ」(詩篇一八39)、私たちは「信仰の善き戦い」(一テモ六12)を喜んで戦います。私たちは、信仰によつて心に住んでくださる方を通して、喜んで「永遠の生命を獲得する」(同)のです。これがクリスチャンの喜びです。すなわち、「父が今に至るまで働いてくださっている」ので(ヨハ五17)、(自分の力や知恵によつてではなく、キリスト・イエスの中に自由に与えられる御霊の力によつて) 私たちもまた神の働きを行います。神が、ご自身の目にかなうことは何でも、私たちのうちになしてくださいますように。この方に、永遠に讃美がありますように。

説教 13

信仰者のうちにある罪について

On Sin in the Believers

*

説教 14

信仰者の悔い改め

The Repentance of the Believers

訳者ノート

説教13・二・4に「私たちは、義とされた人の状態が、言い尽くすことができないほど偉大であり、また栄光に満ちたものであることを認めています」とある。この言葉どおり、ウエスレーはリバイバルの初期から一貫して、信仰によって義とされた者は、神によって新たに生まれ変わり、外的にも内的にも罪に打ち勝つ力が与えられることを主張してきた。説教40「キリスト者の完全」(1741)や説教18「新生のしるし」(1745)などは、その典型である。しかし、ときに、「罪を犯さない」という恵みの力が、即、信仰者のうちに残る罪性の存在否定を意味すると極論されることもあった。その誤解を避けるため、ウエスレーは「新生のしるし」と同年の1748年に、説教19「神より生まれた者の偉大な特権」を記し、「神より生まれた者が罪を犯さない」とは、その人物が主を仰ぎ聖霊と対話し続けている限り、故意に神の律法を犯すこと(sin acted)はない、否、犯すことはできない、ということの意味すると説明を加えている。

しかし、一七六〇年を過ぎて、**誤解は**、メソジストの内側から巻き上がってきた。信徒伝道者であったトーマス・マックスフィールドやウィリアム・カドワースは、「信仰者は、『御霊に従って歩む』ものですし、神の御霊は信仰者のうちに住んでおられます。当然の結果として、彼らは罪責や罪の力から、一言で言えば、罪の存在から救われています」(説教13・四・4)と説いて歩いた。新生を謳歌しつつ極端へと走り、信仰者の実体験にもそぐわない、誤った教えがメソジスト内部から出てきたことに、ウエスレーは危機感を抱き、「**信仰者のうちにある罪について**」(1763)と「**信仰者の悔い改め**」(1767)という

二つの説教を出版した。

説教 13・一で述べられているように、義認と新生の段階で罪性さえも取り除かれていると主張するグループは、教会史の中できわめて稀な存在である。しかし、こうした極論に、ウエスレーははじめて出会ったわけではない。一七三九年から四〇年にかけて、彼はモラビア派と決裂しているが、まさにこの問題がその要因の一つであった。この説教の中で三回名前の登場するモラビア派の指導者ツインツェンドルフとウエスレーは、一七四一年九月三日、ロンドンで対談した。そのとき、ツインツェンドルフは「完全なる聖潔と完全なる義認とは同時に起こるのであって、その程度は多くも少なくもありません。……人が義とされるとき、父・御子・御霊は、その人の心の中に住むのですから、彼の心はその瞬間に義とされて、永遠にきよくなります」(「日誌」)という持論を譲ることはなく、ウエスレーの反論をことごとくはねのけた。説教 13・三・8で、ウエスレーが「もちろんキリストは、罪が支配しているところでは、支配することができません。また、どのような罪でも、手を振っているところには住むことはなさいません。しかし、あらゆる罪に対抗して戦っている信仰者であるなら、まだ『聖なるものきよめのおりには』きよめられていなくても、主はその心の中に存在することができますし、住むことができます」と主張しているのは、このときのツインツェンドルフの言葉を意識してのことと思われる。

傲慢、自我、世的な思いという内的な罪は、義とされた者の心を支配することではなくても、なお心の中に残存しているというのは、聖書と経験に照合する事実である、というのがウエスレーの考えである。それらの罪の思いの源泉は「罪性」すなわち「信仰からはずれるような心の傾向性、悪へと引きずる生まれつきの傾向」(三・7)にある。この傾向

性が内にあることに目覚め、それと戦うことこそ、クリスチャンの使命であるのに、すでにその傾向性から解放されていると思ひ込み、内に罪性は存在しないと主張することは、戦いを放棄することである。それは、信仰の成長に大きな障害となるばかりか、やがて信仰者が以前の罪に引き戻される危険性を多分に含んでいるという。

ウエスレーは、この説教の締めくくりで、「真実にキリストを信じる瞬間、私たちは更新され、洗い清められ、純潔にされ、聖化されるが、それでも、その時点では全面的に更新され、洗い清められ、純潔にされるわけではありません」と綴っている。ここで彼は、信仰者が内的な罪に目を覚まし、信仰の戦いを戦い続けるように励まし、同時に「全面的に更新される」恵みが先に備えられていることを提示して、次の説教につないでいる。

説教 14の冒頭でウエスレーは、悔い改めと信仰という二つの原理が、「一般的には宗教への単なる入り口にすぎないと考えられている」(序・1)ことに反論して、それが実は「それ以降の信仰の歩みのすべての段階に必要とされており」(3)、それがなければ、「恵みのうちに継続して成長する」(3)ことができないと述べている。これは、クリスチャンの存在と生活に関わる重要な視点である。悔い改めと信仰のダイナミックスは、「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます」(マタ一九26)というみことばに要約される(二・2)。悔い改めは「私はキリストなくして、何もできません」と言い、信仰は「私は、私を強くしてください方によって、どんなことでもできるのです」と言う(6)。悔い改めによって自らの非力を徹底的に認識し、信仰によって全能の神の可能性にかける——この二つの原理こそが、クリスチャンのあり方そのものを支え、また先の「全面的更新」の鍵となっているというのが、説教 14の主旨である。

先の説教13で、ウエスレーは、信仰者が神の武具を取って内的に修練され、聖化に成長するように勵ましている。しかし、その敬虔の修練で、内的な汚れが完全に浄化されるとは、考えていなかった。それどころか、傍目には内的な罪を制覇しつつあるように見えるものの、本人は聖化に成長すればするほど、また長期にわたって戦えば戦うほど、内側の汚れをより深く認識し、しかもその汚れを自分ではどうすることもできないという（全くの非力感）を味わうという（一・17、説教12・一・13、及び、説教43・三・8参）。全的更新の恵みは、修練によってではなく、（全き聖化）（三・2）と呼ばれる神の働きによって与えられる。この瞬時的な心の割礼を施す聖霊のメスを引き出すのは、信仰のみによるのであるが（二・1—6）、その前段階として、「贖いの血の真価を悟るために、神に受け入れられた後でも、なおも私たちの側に落ち度があることを——ある意味で、これを罪責と呼んでもかまわないのだが——深く確信することが絶対的に必要なのです」（三・3）とウエスレーは記している。信仰者の悔い改めは、「いわば、自分の外側に出て、キリストに飲み込まれるために」（三・4）どうしても必要なことである。

説教13 「信仰者のうちにある罪について」

「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です」。

（Ⅱコリント人への手紙五17）

1 それでは、キリストのうちにある者には罪があるのでしょうか。「キリストを信じる者」には、罪が残るのでしょうか（ヨハ9:36, 41参）。「神から生まれた者」（Ⅰヨハ3:9, 四7等）には、まだ多少なりとも罪が存在するのでしょうか。それとも、そこから全く救い出されているのでしょうか。だけれども、こういう質問が単なる好奇心からのものと考えてはならないし、また、どのような結論になるうとも大した違いはない、と考えるもいけません。むしろ、すべての真実なクリスチャンにとって大切な問題であり、その問題の解決が、その信仰者の現在と永遠の幸いに密接に関わっています。

2 しかも、初代教会においては、その問題に関しては少しも意見の対立を見なかったと心得ています。その問題に関しては、すべてのクリスチャンが全く同意していたので、議論の余地がなかったのです。私を知る限りにおいては、初期のクリスチャンのグループが書き残したものの声では

ろえて、キリストにある信仰者といえども、「主にあつて、その大能の力によって強められ」るまで、「主権や力」に対すると同時に、邪悪な性質にまみれた「血肉との格闘」が必要と述べています（エペ六10、12参）。

3 そして、実にこの点において（また他のほとんどの点においても）、英国国教会は初代教会に類似しているのです。それで「宗教簡条」第九条は次のように述べています。「原罪は、全人類の性質の腐敗であり、それによって人は自分自身の性質から悪に傾き、そこで肉の願うところは御霊に逆らう（ガラ五17参）のです。そして、性質に対するこの影響は確かに残っています。そうです、まさに生まれ変わった人の中です。そこで、ギリシャ語で *φονία οσφύς* と呼ばれている肉の思うことは、神の律法に従わない（ロマ八7）、ということになります。信じる人は罪に定められることがありませんが、それでもこの肉の欲自体は罪の性質を有しています」。

4 同様の証言が他のすべての教会からも呈されています。単にギリシャ正教やローマカトリック教会だけではなく、ヨーロッパのすべての改革派の教会、それもあらゆる教派教団から出されています。それどころか、いくつかの教会では、この問題を極端にまで推し進めているようです。信仰者の心の墮落を強調するあまり、信仰者自身がその性質に対して優位にあることをほとんど認めず、むしろそれに縛られている状態にあると述べる人々がいます。こうなれば、信仰者と未信者との区別が全くわからなくなります。

5 そのような極端を避けるため、多くの人々、特に故ツインツェンドルフ伯の指導の下にあった人たちは、悪意はなくとも別の極端に走ってしまいました。彼らは、「すべての信仰者は、罪の支配から救われただけではなく、外なる罪と同様に内なる罪の存在からも救われているのだから、罪はもはや彼らのうちには残存していない」と主張します。そして、約二〇年前、多数の英国人が、キリストにある信仰者のうちには、もはや性質の墮落など存在しない、という彼らの意見を受け入れてしまいました。

6 ドイツ人（モラビア派の人々）がこの点を突かれたとき、彼らは（少なくとも大多数は）、確かに罪は肉のうちには残ることをやがて認めるようになりましたが、信仰者の心の中に、罪はない、という点は保持しました。そしてしばらくたって、その点の不条理さが明確にされたとき、彼らはいさぎよくその主張を放棄しました。そして、神から生まれた人のうちにも、罪が支配しているのではないけれども、確かに残っているということを確認しました。

7 しかし、彼らからその主張を受け入れた英国側（ある人は直接的に、またある人は二次的、三次的に受け入れた）は、自分たちの好みの意見を手放すような議論には、簡単に説き伏せられようとしませんでした。しかも、彼らの大半が、自分たちの立場は完全に弁護不可能と納得させられるに至ったときでさえ、わずかな人たちはその立場を放棄せず、その意見を保って今日にまで至っているのです。

1 真実に神を恐れ、「イエスにある真理」（エペ四21）を知りたいと願っている人のために、この

問題を冷静かつ公平に考察することは間違っていないと思います。それをするに当たって、私は「生まれ変わる」「義と認められた」また「信仰者」などの用語を厳密な意味で区別をつけずに用います。というのは、それらは厳密な意味では同義語ではありません（最初の語は、内的で、実際的な変化を示し、第二のは、関係を表す語で、そして第三は、第一と第二の業の双方がそれによってなされる手段を示している語です）が、それでも「信じる」人はすべて「義とされ」そして「神から生まれる」というように、結局は同一のことを指していることになるからです。

2 「罪」という語について、私はここでは、内的な罪と理解しています。つまりあらゆる罪深い性質、欲望、あるいは情熱、例えば、プライド、自己意志、種類や程度に差はあれ世に対する愛、具体的には、肉欲、怒り、不機嫌です。それはキリストの内にあつた心に反するあらゆる心のあり方のことです。

3 問題とされているのは、神の子どもが罪を犯すか否か、というような外面的な意味での罪のことではありません。私たちは皆、「罪のうちを歩む者は、悪魔から出た者です」（一ヨハ三8）ということに同意し、また真実にその立場に立ち続けます。また、「だれでも神から生まれた者は、罪を犯しません」（一ヨハ二9）ということにも同意しています。今ここで私たちが調べようとしていることは、神の子どもたちの内に罪が常に留まっているかどうかということではありませんし、また肉体に留まり続ける限り靈魂にも罪が留まり続けるかどうかということでもありません。さらに、義とされた人が内的であれ外的であれ罪に逆戻りをするかどうか、ということも調べようとしているのでもありません。単に次のことについてです。義とされた人、あるいは生まれ変わった人は、彼が義とされた瞬間、すべての罪から解放されるのだろうか、ということなのです。つまり、そうなったとき、彼の心には罪が無いのでしょうか。また、もし彼が恵みから落ちなければ、それ以後ずっと無いのでしょうか。

4 私たちは、義とされた人の状態が、言い尽くすことが出来ないほど偉大であり、また栄光に満ちたものであることを認めています。義とされた人は、「血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってもなく、ただ、神によって生まれた」（ヨハ一13）のです。その人は、神の子どもですし、キリストに属する人で、天の御国の相続人です。「人のすべての考えにまさる神の平安が、信仰者の心と思いをキリスト・イエスにあつて守ってください」（ピリ四7参）。その人のその「からだは、聖靈の宮であり」（一コリ六19）、「御霊によって神の御住まいとなるのです」（エペ二22）。彼は、「キリスト・イエスにあつて新しく造られ」（エペ二10）、洗われ、またきよめられているのです。その心は、「信仰によってきよめ」（使徒一五9参）られています。彼は、「世にある滅び」（IIペテ一4）からきよくされています。「神の愛が、彼に与えられている聖霊によって、彼の心の隅々まで注がれています」（ロマ五5参）。そして、義とされた人が「愛のうちに歩み」（エペ五2）続けるなら（常にそうしようとする）ことでしようが、「霊とまことによって神を礼拝」（ヨハ四23、24）します。その人は、「神の命令を守り、神に喜ばれることを行い」（一ヨハ三22参）ます。そのように「神の前にも人の前にも貴められることのない良心を保つように」と最善を尽くす（使徒二四16参）のです。そして彼は義とされた瞬間から、外的内的両面の罪に対して打ち勝つ力が与えられているのです。

1 「しかし、彼は「すべての罪から解放された」(ロマ六7参)ではありませんか。それで、彼の心の中には罪がなくなるのではないでしょうか。こういう質問に対して、私はそれを認めることも信じることができません。なぜなら、パウロは逆のことを述べているからです。彼は信仰者に向けて、信仰者の状態に関して一般論を述べながら、「肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立して」(ガラ五17)と述べています。これほど明確な表現は他にありません。パウロは、ここで、「肉」つまり悪しき性質は、「御霊」に対し、それが信仰者の内にある御霊に対しても逆らうもの、ときっぱりと断言しています。生まれ変わった人にさえ、「互いに対立する」二つの原理が存在しているというのです。

2 繰り返ししますが、彼はコリントの信仰者たちに書き送って、つまり「キリスト・イエスにあって聖なるものとされた」(1コリ一2) 人々に対して、次のように述べています。「兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かつて、御霊に属する人に対するように話すことができません。肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。……あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているではありませんか」(1コリ三一、3)。さて、このところでパウロは、疑いもなく信仰者に対して語っています。彼らのことを、その同じ口で、まだ幾分肉的是であるけれども、「キリストにある兄弟」(コロ一2)と呼んでいます。彼は、「争い」の誘因となる「ねたみ」(悪しき気質)が彼らの中にあることを肯定し

ています。それにもかかわらず、彼らが信仰を失ってしまった、というようなことはどこにも示されていません。それどころか、彼らの信仰は失われていないことが明言されています。というのは、もし失っていたなら、彼らは「キリストにある幼子」とは呼ばれていません。さらに(最も顕著なこととして)、彼は「肉に属する」ということと「キリストにある幼子」とを、一つの同じこととして語っています。すべての信仰者は、いまだ「キリストにある幼子」である間は、(ある程度)「肉に属する」ということを明白に示しています。

3 実に、信仰者の内には二つの相反する原理——つまり人間性と恵み、肉と霊——が存在するというこの重要な点、パウロの書簡全体に流れています。それどころか、聖書全体を貫いています。そこにある大部分の指示や勧告は、それを前提としてなされて、信仰者のうちにある悪い気質や行動を指摘しつつも、聖書の記者は、彼らを信仰者として認めています。しかも、そういう信仰者たちは、彼らのうちに与えられている信仰の力によって、それらのものと戦い、また征服することを勧められています。

4 また、主がエベソの教会の御使いに対して、「わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。……あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった」と語りかけたとき、その御使いのうちに確かに信仰があったことは、だれも疑うことができないでしょう。しかし、それでは彼の心のうちには、その同じ時に罪がなかったのでしょうか。いいえ、もしそうならキリストは、「しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった」(黙示一二、4)と、つけ加えることはされなかったでしょう。神が彼の心のうちに見たのは、

確かに本物の罪でした。それに関して、彼は悔い改めるようにと、しかるべく勧められています。そして、そうであったとしても、彼には信仰がない、と言いつける權威を私たちは持ち合わせていません。

5 それどころか、ペルガモの教会の御使いにも「悔い改め」が勧められています。そのことは、主御自身が、「わたしに対する信仰を捨てなかつた」と、はっきりと言っておられますが、やはり罪を暗示しています。また、サルデスの教会の御使いに対して、主は、「死にかけているほかの人たち（英訳、死にかけていること）を力づけなさい」（黙示三二）と言っています。残されている良いものが「死にかけて」いたのです。でも、まだ完全に死んだわけではありません。そのような信仰者のうちにも、まだ信仰のわずかな炎があつたのです。それを「堅く守る」ように勧められています。

6 話は元に戻りますが、パウロは信仰者に対して、「いっさいの靈肉の汚れから自分をきよめ」（Ⅱコリ七一）るように勧め、それらの信仰者たちがまだそれらからきよめられていない、ということとを明白に教えています。それでもあなたは、「どんな悪でも避け」（一テサ五二二）する人は、その事実によって（*ipse factus*）、すべての汚れから自分自身をきよくする」のだと反論しますが、どのようにしてでもできません。例えば、人が私に悪口を言つたとします。私は憤慨するでしょう。その感情は、「汚れた悪い」です。でも、私は一言も言葉を発しなうとしましう。そこでは、私は「どんな悪でも避ける」ということをしていますが、それだからと言つて、それが汚れた悪いから私をきよくはしてくれません。残念ながらそれが私の体験しているところです。

7 そして、「信仰者のうちには、罪もなければ、肉のない思いもなく、また墮落への傾向性もない」という立場は、このように神のみことばに対して正反対の立場ですし、また神の子らの経験にも相違

しています。それらの経験が絶えず感じているのは、信仰からはずれるような心の傾向性や、悪へと引きずられる生まれつきの傾向、また神から離れやすい性質、さらに世のものへの執着心などです。彼らは、プライドや自己意志、また不信仰などの罪が、自分たちの心のうちに残存していることに日々感じています。また、自分たちのすべての言動の中に、たとえそれが最も崇高な営みや最もきよらかな働きであつたとしても、罪が固着し、まわりつきやすいことを感じています。しかし同時に、彼らは「神からの者」（一ヨハ五十九）であることを知っています。そのことに関しては、一瞬たりとも疑うことができません。彼らは、「御霊（ご自身）が、私たちの靈とともに、あかしして」（ロマ八六）くださっていると感じています。彼らは、「今や和解を成り立たせてくださった主イエス・キリストによって、神を喜んで」（ロマ五二）います。それで、罪が彼らのうちにあることと、また「栄光の望みであるキリストが彼らのうちにおられること」（コロ一二七）とを、等しく確信しているのです。

8 「でも、キリストは、罪があるその同じ心のうちに存在することができるとは決して有り得なくなつてしまいます。病気があるそのところにこそ、医者はいるのです。

うちにあつて主の御業は続けられ

罪を放逐するまで励み続けられる

(Hymn for Whitsunday, Poetical Works, I, 188)

もちろんキリストは、罪が支配しているところでは、支配することができません。また、どのような罪でも、罪が手を振っているところには住むことはなさいません。しかし、あらゆる罪に対抗して戦っている信仰者であるなら、まだ、「聖なるものきよめのおりには」(Ⅱ歴代三〇19)きよめられてはいなくても、その心の中に、主は存在することができますし、住むことができます。

9 すでに述べたように、「信仰者には罪がない」という正反対の教理は、キリスト教会においては非常に新しいものです。ツインツェンドルフ伯が主張するまで、一千七百年間は、全く聞かれたことがなかったものです。古代であれ現代であれ、それが突拍子もないことを大声でわめきちらしているような幾人かのアンティノミアン(律法廃棄論者)でもなければ、そのことについてごくわずかでも言及しているような著者に、私は出会った覚えはありません。そして、それらの人たちがさえ、「自分の心のうち」には罪がないけれども、「肉のうちには」罪があることを認めているので、自分たちの意見を主張しているようでもあり、また自分たちの主張を撤回しているようでもあります。しかし、どのような教理であっても、新しいものは間違っているに違いありません。なぜなら、古くからの宗教こそが唯一の真実のものだからです。また、それが「初めからあったもの」(Ⅰヨハ一1)と全く同じものでない限り、正しい教理ではありません。

10 この新しい、非聖書的な教理に反対するもう一つの論議は、その教理のもたらす結果から引き出すことができるでしょう。ある人が、「私は今日怒りを感じました」と言ったとします。私は、「それではあなたには信仰がありませんね」と答えなければならぬのでしょうか。別の人が、「私は、あなたの忠告が良いものだと言ったことがわかります。でも、私の意志がそれを全く嫌っているのです」

と言ったとします。私はその人に、「それではあなたは、神の怒りと呪いの下にある未信者です」と言わなければならぬのでしょうか。こうしたこと、当然の結果はなんなのでしょうか。もし彼が私の言うことを信じるなら、彼の靈魂は単に悲しんだり傷ついたりするだけではなく、「大きな報いをもたらす確信を投げ捨て」(ヘブ一〇35)てしまうほどに、多分徹底的に押しつぶされてしまうでしょう。そして、自分の盾を投げ捨ててしまった後では、彼はどのようにして、「悪い者が放つ火矢を消す」(エペ六16)ことができるでしょうか。彼はどのようにして、この世に勝利することができるのでしょうか(ヨハ一六33参)。「私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です」(Ⅰヨハ五4)ということがわかりながら、彼は、敵のまっただ中に、武装放棄し、敵のあらゆる攻撃に対して無防備で立っているのです。そんな状態では、全く打ちのめされても、また敵が意のままに彼を捕らえたとしても、驚くことはありません。彼が悪い者たちの手に次から次へと陥り、二度と再び良い目を見ることができなくなつたとしても、何の不思議もないでしょう。ですから、私は何としても、この「信仰者が義とされた瞬間から、罪がなくなる」という主張を受け入れることはできません。なぜなら、第一に、それは聖書全巻の主旨に反するからです。第二に、それは神の子らの経験に反するからです。第三は、それが昨日までの世界では一度も聞かれたことがなかった、全く新しい説だからです。そして最後に、それは当然の結果として、神が悲しませなかつた人々を悲しませるだけでなく、多分彼らを永遠の破滅へと引きずりこむというような、最悪の致命的な結果を伴うからです。

四

1 しかしながら、あらゆる努力をしてその主張を支持している人たちの主な議論に対しては、公平に耳を傾けようではありませんか。第一に、彼らは聖書を引用して、信仰者のうちには罪がないことを証明しようと試みます。それで彼らは次のように述べています。「聖書は、すべての信仰者は「神から生まれた」(一ヨハ三九、四七)のであり、「きよい」(ヨハ一五三)のであり、「聖く」(エペ一四)、「聖なるものとされた」(ロマ一五16)のであり、「心のきよい者」(マタ五八)であり、新しい心を与えられ、聖霊の宮なのです(一コリ六19)。そこで、「肉によって生まれた者は肉」なのですから、すべて悪です。同様に、「御霊によって生まれた者は霊」(ヨハ三六)ですから、すべて善です。繰り返し言いますが、人がきよくなく、聖化されていないし、聖でもないのに、同時にきよく、聖化され、聖くあることができるはずがありません。人は、純潔であると同時に不潔であり得ません。あるいは、新しい心と古い心を一緒に持っていることができるはずがありません。また、その霊魂が一方では聖霊の宮でありながら、同時に聖ではないということはあり得ません」。

私は、この反論をできるだけ強調して紹介しました。そうすることによって、その重大さが完全に明白になるからです。それでは、その主張を各部分ごとに考察していきましょう。さて、(1)「御霊によって生まれた者は霊」であり、すべて善です」という点に閱してですが、その聖書本文は認めましょう。でも、注釈は認めません。というのは、その聖句が確認しているのは、「御霊によって生まれた人はだれでも霊的な人である」ということで、それ以上のものではないからです。彼は確かに霊的な

人間です。でも、例えそうであっても、完全には霊的であるとは限りません。コリントのクリスチャンたちは霊的な人々でした。もしそうでないとしたら、彼らはそもそもからしてクリスチャンではなかったことになります。さらに、彼らは完全に霊的でなかったといえます。依然として彼らは、(部分的に)肉の的だったのです。「いや、彼らは恵みから落ちてしまったのです」(ガラ五4参)。パウロは、「そうではない。彼らはまだ「キリストにある幼子」(一コリ三一)だっただけなのです」と述べています。(2)「しかし、人がきよくなく、聖化されていないし、聖でもないのに、同時にきよく、聖化され、聖であるということができないはずがありません」という論についてですが、はつきり言って、そういうこともあり得るのです。コリントの人々はそうでした。パウロは、「あなたがたは洗われている」、「あなたがたはきよめられている」と述べています。すなわち、「不品行、偶像礼拝、酒に酔う」その他すべての外的な罪から洗いきよめられています(一コリ六9-11)。そして、同時にその言葉の意味を別の観点からみれば、彼らはまだ聖化されていないのです。彼らは洗われていなかった、つまり肉のな意味で、妬み、邪推、不公平などから洗いきよめられていなかったのです。「しかし、彼らが新しい心と古い心と一緒に持っていないことは確かです」と主張されています。彼らが事実持っていたことは、否定できません。なぜなら、まさにその時、彼らの心は本当に更新されていました。ただ全的にではなかったからです。彼らの肉のな思ひは十字架に釘付けにされていました。しかし、まだ完全には滅ぼされていなかったのです。「しかし、一方では「聖霊の宮」(一コリ六19)でありながら、彼らがきよくないことがあり得るのでしょうか」。あると思います。彼らが「聖霊の宮」であることは確かなことです。そして、彼らがある程度肉の、つまりきよくない、ということも同様に確か

なことです。

2 「しかしながら、その問題を疑問の余地のないものとしてしまおう一つの聖句があります。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」(Ⅱコリ五17)。さてそこで、人が新しく造られた者であると同時に古いものであることができないのは明らかなことです」。いや、それはあり得ることです。人が部分的に新しくされるといふことはあり得ます。それこそが、コリントのクリスチャンのケースでした。彼らは疑いもなく、「心の霊において新しくされ」(エペ四23)ていました。もしそうでなかったなら、彼らは「キリストにある幼子」(Ⅰコリ三一)ですらあり得なかったことでしょう。しかし、彼らは心全体がキリストの心(ピリ二5参)とはなっていないかたがたのです。というのは、彼らが互いに妬んでいたからです。「でも、「古いものは過ぎ去って、すべてが新しくなりました」と明白に述べられているではありませんか」。しかし、私たちはパウロの言葉を彼自身の言葉と矛盾するように解釈してはなりません。そして、もし私たちが彼の言葉を、彼自身と調和させると、その言葉の意味するところは単純に以下のようになります。その人のそれまでの古い判断(義認、ホーリネス、幸福、等)に関しての判断、まさに神のことに關する全般的な判断)が、今や「過ぎ去った」のです。同時に、彼の古い欲望、計画、情欲、氣質、そして行動様式も過ぎ去りました。これらすべては、否定し難いほど明白に「新しくなり」、以前の姿とは大いに変化しています。もちろん彼らは新しく造られた者ではありませんが、それでもなお、すべてにおいて新しくされてはいません。依然として、悲しくまた残念に思いながらも、「古い人」(コロ三9)の残存物があるのを感じ、以前の氣質と情欲のあまりにも明白なへ痕跡

全的聖化

とを感じています。また、心のうちにある律法に対してしばしば戦いを挑んでくる別の律法が肢体のうちにあるのを感じています。もちろん、その律法は、彼が「祈りのために、心を整え」(Ⅰペテ四7)ている限り、「欺かれる」(Ⅱコリ二11)ことはありませんが。

3 「もし彼がきよければ、彼はきよい」「もし彼が聖であれば、彼は聖である」(さらに二十以上の同様な表現を積み重ねることは容易なことでしょう)という、この議論全体は、言葉上の遊びをしているのも同然です。それは、特定から一般へと議論を進めるといふ誤りですし、特定の前提から一般的な結論を導き出すといふ誤りです。その文全体を議論に乗せるべきです。そうすれば、大体次のようになります。「もし彼がわずかでもきよいなら、彼は全くきよいのです」。この結論は誤りです。キリストにあるすべての幼子はきよいのです。しかし、全くきよいものではありません。彼は、罪から救われています。しかし、完全にというわけではありません。罪は、支配しているわけではありませんが、残っているのです。もしあなたが、罪は残っていないと考えるなら(青年や父たちの場合はともかくとして、少なくとも幼子において)、あなたは神の律法の高さ、深さ、長さ、広さを全く考慮に入れていません(すなわち、Ⅰコリント人への手紙の十三章にパウロによって示されている愛の律法)。そして、この律法からの「あらゆる不法(souja)、不一致、あるいは逸脱は罪なのです」(Ⅰヨハ三4参)。そこで、信仰者の心と生活の中に、その律法に対する不一致はないのでしょうか。成人のクリスチャンにおいてどうかは、別の問題です。しかし、不一致がないということが、キリストにあるすべての幼子の場合に該当する、ということを通してでも想像するような人は、人間性について全く無知な人に違いありません。

4 「しかし、信仰者は、『御霊に従って歩む』(ロマ八4) ものですし、神の御霊は信仰者のうちに住んでおられます。当然の結果として、彼らは罪責や罪の力から、一言でいえば罪の存在から救われています」。

その議論では、そこに記述されているものが、あたかも同じものであるように組み合わされています。しかし、それらは同じものではありません。罪責は罪責ですし、力は別のものです。さらに、本質はまた別のものです。信仰者が罪責と罪の力から救われることは、私たちは認めています。しかし、罪の存在から救われることを、私たちは否定しているのです。それらの聖句からは、どうしても認められないのです。人は、内住の神の御霊を与えられるでしょうし、『御霊に従って歩む』(ロマ八4) こともあるでしょう。それでもなお、『肉の願うことは御霊に逆らう』(ガラ五17参) ということを感じるのです。

5 「しかし、『キリストのからだとは、教会のことです』(コロ一24)。そのことは、そのメンバーがすべての汚れから洗いきよめられていることを示しています。そうでなければ、つまりキリストとペリアルが互いに受け入れられていることになりました」。

いいえ、『神秘的なキリストの体である人々が、依然として御霊に逆らう肉の願いを感じる』というようなところからは、キリストが悪魔と関わりを持っているとか、抵抗し打ち勝つ力を与えることができるような罪と関わりを持っている、というような結論は導き出せません。

6 「しかし、クリスチャンは『天のエルサレムに近づいている』ではありませんか。そこには、『すべて汚れた者は、はいれない』(黙示二二27参) ではありませんか。いいえ、『無数の御使いたち

の大祝会に』、『全うされた義人たちの霊』(ヘブ二二22、23) に入れます。つまり、

地と天はすべて賛同している

すべてが主の一つの大家族となることを

(The Communion of Saints, Poetical Works, I, 364)

そして、彼らが「御霊に従って歩いて」(ロマ八4) いる間は、聖くかつ汚されていません。でも、彼らのうちに別の原理があり、『互いに対立して』(ガラ五17) いることに気がついていきます。

7 「しかし、クリスチャンは『神と和解させられ』(ロマ五10、II コリ五20) ています。そこで、もしいくらでも『肉の思い』(ロマ八7) が残っていたとしたら、そのことはあり得なかったことでしょうか。というのは、それは『神に対する敵意』だからです。当然のこととして、肉の思いが徹底的に滅ぼされない限り、和解は効果を発揮できないでしょう」。

私たちは、『十字架の血によって神と和解させ』(コロ一20) られています。そして、その瞬間、『神に敵』(ヤコ四4) する汚れた性質である *phovnia orgkos* (肉の思い、ロマ八7) が、私たちの足の下に踏みつけられるのです。肉は、『もはや私たちを支配しません』(ロマ六9参)。でも、依然として存在しているのです。そして、依然としてその性質において、神に敵対し、御霊に逆らう願いを持っています。

8 「しかし、『キリスト・イエスにつく者は、その肉を、情欲や欲望とともに、十字架につけてし

まったのです」(ガラ五24)」。彼らはそうしました。それでも、それは彼らのうちに残っています。そして、時として、十字架から離れようと抵抗します。「いいえ、それでも彼らは、『古い人をその行ないといっしょに脱ぎ捨てた』(コロ三9)のです」。確かに彼らはそうしました。さらに、上述された点からすると、「古いものは過ぎ去って、すべてが新しく」(IIコリ五17)なっています。同じ結果をもたらすために、百もの聖句が列挙されるでしょう。そして、それらの聖句はすべて、同じ結論を認めるでしょう。「一言で表現すれば、『キリストが教会のためにご自身をささげられました。それは、教会が、聖く傷のないものとなるため』(エペ五25、27)でした」。そして、終わりには教会はそうなることでしょう。しかし、初めから今日に至るまで、教会はまだ一度もそうなっていないのです。

9 「しかし、体験に語ってもらいましょう。義とされた人はすべて、その時にあらゆる罪からの完全な自由を見いだしています」。私はそのことに疑いを抱いています。しかし、たとえ彼らがその自由を見いだしたとしても、彼らはその後、常にその自由を保持できるのでしょうか。もしそうでなかったら、あなたの主張にとって何の益にもなりません。「もしずっと見いださないとしたら、それはその人たちのせいです」。その点は、証明されなければならぬこととして残ります。

10 「しかし、事の本質として、人がその心のうちにプライドを持っていないが、それでいて高ぶらない、ということができるとでしょうか。怒りを持っていて、それでいて怒らないということができるとでしょうか」。いいえ。しかし、謙遜と柔和が大勢を占めるそんな心のうちに、多少のプライドと怒りが存在することがあるかも知れません。

人は自分のうちにプライドを持ち、ある特質において、本来考慮すべき以上に自分自身を高く評価する(そしてそのようにして、その特質に対してプライドを感じる)ことがあるでしょう。それでい

て、その全般的な人格においては高ぶっていない、ということもあるでしょう。自分のうちに怒りを持ち、否、すさまじい怒りへの強い傾向がありながら、それに負けないかも知れません。「しかし、柔和と謙遜だけが感じられるという、そんな心のうちに、怒りとプライドが存在することができるとでしょうか」。いいえ。しかし、謙遜と柔和が大勢を占めるそんな心のうちに、多少のプライドと怒りが存在することがあるかも知れません。

「それらの気質はそこにあるが、それらが支配しているのではない、ということは無益な論議です。というのは、罪は、どのような種類であれ、どのような程度であれ、それが支配しないところでは存在できません。なぜなら、罪責と力は、罪の本質的な特性だからです。それゆえ、それらの一つでも存在するところには、それらのすべてが存在しているに違いありません」。

それは奇妙です。「どのような種類であれ、どのような程度であれ、罪が支配していないところには罪は存在できません。これは、あらゆる体験、聖書全巻、すべての常識に全く反します。故意の侮辱に対する憤慨は罪です。それは *oujia*、つまり愛の律法に対する規律違反です。それは、私のうちに無数に存在していました。しかし、それが支配していたものではありませんでしたし、今も支配しているというわけではありません。でも、「罪責と力が、罪の本質的な特性であるから、それらの一つが存在しているところには、すべてが存在しているに違いない」というのでしょうか。違います。私たちの前にある例で見ると、もし私を感じている憤慨に、「瞬たりとも負けなかったとしたら、そこには全く罪責が存在しません。そのことでは、神から罪に定められることもありません。そして、この場合、罪は力がありません。もちろん、罪は「御霊に逆らうことを願う」(ガラ五17)ですが、優

位に立つことはできません。それ故、無数の実例と同様、ここにも、罪責も力もなしに罪が存在しているのです。

11 「しかし、信者のうちに罪の存在を想定することは、あらゆる恐るべきものや落胆させるようなものをはらんでいます。それは、私たちの力を占領しているある力との抗争を意味します。また、その力が私たちの心を強奪していると主張します。そして、そこで私たちの贖い主に逆らうような戦いが遂行されます」。そうではありません。罪が私たちのうちにあると想定することは、罪が私たちの力を占領していることを意味しません。十字架につけられた人が、自分を十字架につけた人々を占領していることなどないのと同じように、十字架につけられた罪は、私たちを占領することはできません。同様に、罪が「私たちの心を強奪している状態を保持している」ということを意味していません。強奪者は、その地位から引きずりおろされています。彼は、事実、かつては支配していた所に残っています。鎖につながられて残っているのです。その結果、彼はある意味では「戦いを遂行」していますが、どんどん弱くなっていくのです。一方、信者は力から力へと進んで征服し、さらに征服するため前進していくのです。

12 「私はまだ満足していません。自分のうちに罪を持っている人は、罪の奴隷です。それ故、あなたが想定しているのは、人はまだ罪の奴隷である間に義とされる、ということですが。そこで、もしあなたが、そのうちにプライド、怒り、あるいは不信仰などを持ったままで人が義とされ得る、ということを確認しているなら、——いや、もしあなたが、それらのものが義とされた人すべてのうちに（少なくとも一時は）あると断言するなら——こんなにも多くの高慢で、怒りに満ち、不信仰な信者

がいても、何の不思議もありません」。

私は、義とされた人はだれでも罪の奴隷である、と想定しているのではありません。それでもなお、私は、義とされたすべての人のうちに罪が残存している（少なくとも、一時は）と想定しています。「しかし、もし罪が信者のうちに残っているなら、その人は罪深い人です。例えば、もしプライドがあるなら、その人は高慢です。もし自己意志があるなら、その人は意地っ張りです。もし不信仰があるなら、その人は不信仰者です——従って、信者ということには絶対なりません。そうすると、その人は不信仰者とうどう違うのでしょうか。新生していない人とどう違うのでしょうか」。

これも、依然として単なる言葉の遊びにすぎません。それは、「もし、その人のうちに罪やプライド、自己意志があるなら、つまり、そこには罪やプライドや自己意志が存在している」ということを単に意味しているにすぎません。そして、このことは、だれも否定できません。言い換えると、その意味において、その人は傲慢であったり、あるいは自己意志が強いのです。しかし、プライドや自己意志で支配されている未信者と同じような意味では、信者はプライドが高いとか自己意志が強いとかいうことはありません。ここが、まだ生まれ変わっていない人々と信者の違うところです。未信者は罪に従います。信者は違います。双方ともに肉が存在しています。しかし、未信者は「肉に従って歩み」ます。信者は「御霊に従って歩む」のです。

「では、どのようにして不信仰が信者のうちに存在するのでしょうか」。その不信仰という言葉には、二つの意味があります。信仰が全く無いか、あるいはほんの少しの信仰かのいずれかです。つまり、信仰が全く欠落しているか、あるいは弱い信仰かということです。前者の意味においては、信仰

者のうちには、不信仰はありません。後者の意味においては、全ての信仰の幼子のうちに不信仰が存在しています。そういう人々の信仰は、疑いの心や恐れと混じり合っているのが普通です。つまり、(後者の意味における)不信仰と混じり合っているのです。「なぜこわがるのか、信仰の薄い者たちだ」(マタハ26)と主は言われます。また、「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか」(マタ一四31)とも言われます。信仰者のうちに不信仰があつたことがおわかりでしょう。わずかな信仰とともに、かなりの不信仰が共存していたのです。

13 「でも、信仰者のうちに罪が残り、人は心のうちに罪を持っていながら神の好意にあずかり得る、という教理は、間違ひなく人を罪のなかに留まるよう助長することになります」。その主張を正しく理解してください。そうすれば、そのような結論にはなりません。人は、罪を自覚していても、神の好意のうちにとどまることが出来ます。しかし、もし罪に屈してしまうなら、そうではありません。内に罪があることを感じるのが、神の好意を失うことにはなりません。罪に屈服することが恵みを失うことにつながるのです。あなたのうちの肉が「御霊に逆らつて願う」としても、あなたは依然として神の子どもであり得るのです。しかし、もしあなたが「肉に従つて歩む」なら、あなたは悪魔の子どもです。つまり、この教理は、罪に従うことを助長させるものではなく、むしろあらゆる力を尽くして罪に抵抗することを励ましているのです。

五

1 これまでのすべてをまとめると以下のようになります。私たちには、たとえその人が義とされた後でも、自然と恵みという二つの相反する原則があります。パウロによって、それは「肉」と「霊」という語で表されています。ですから、キリストにある幼子たちも聖化されているとは言え、それは部分的にすぎないのです。その信仰の程度に応じて霊的ではあるのですが、肉的部分も残っているのです。それゆえに、信仰者は世や悪魔に対してと同様、肉に対しても警戒するよう、絶えず勧められています。そしてそのことに關しては、神の子どもたちが常に経験しているところと合致しています。自分たちのそのような証しを感じている一方で、彼らは神の御旨に完全には明け渡していません。志を感じています。彼らは自分たちが神のうちにあることを知っています。それでありながら、神から離れようとすむ心を見いだしています。その心は、多くの場合悪に傾きやすく、また善なることに対しては背を向けやすいのです。それに真つ向から対立する教理は、全く新しいものです。それは、キリストがこの世に來られた時以降ツインツェンドルフ伯の時代まで、キリストの教会においては聞いたこともなかったものです。信仰者のうちに罪はないとする教えは、最悪の致命的な結果を伴います。それは、私たちの悪しき性質に対するすべての警戒を断ち切ります。すでに去つたものとして語られているあのデリラ(士師一六)に対する警戒をも断ち切ります。デリラはまだ私たちの胸に横たわっているのです。それは、弱い信仰者を保護する盾をすたすたに引きはがし、彼らの信仰を奪い去つてしまいます。その結果として、彼らをこの世と肉と悪魔のあらゆる攻撃にさらされたままに放置

してしまおうのです。

2 それゆえ、「聖徒にひとたび伝えられ」(ユダ3)書き記された言葉として、すべての世代へと継承された健全な教理を堅く保とうではありませんか。つまり、私たちが真実にキリストを信じる瞬間に、更新され、洗い清められ、純潔にされ、聖化されるが、それでも、その時点では全面的に更新され、洗い清められ、純潔にされるわけではありません。むしろ、悪しき性質としての肉が依然として(抑えられてはいますが)残り、御霊に対する戦いも残るのです。それゆえ、私たちは、勤勉の限りを尽くして「信仰の戦いを勇敢に戦い」(1テモ612)続けましょう。一層熱心に、内なる敵に対して「目をさまして、祈って」(マタ二六41、マコ一三33)いこうではありませんか。もっと注意深く自分自身に心を用い、「神のすべての武器をとる」ようにしようではありませんか。そうすれば、私たちは「血肉に対するとともに、主権と力、また天にいるもろもろの悪霊」に対して「格闘する」でしょうが、「邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように」(エペ六11、13参)なることでしょう。

説教14「信仰者の悔い改め」

「悔い改めて福音を信じなさい」。

(マルコの福音書一15)

序

1 一般的には、悔い改めと信仰とは宗教への単なる入り口にすぎないと考えられています。つまり、それらのものは、私たちが神の国へと歩みを始めようとする時、そのクリスチャンの歩みを開始するにあたってだけ必要なものと考えられています。そのことは、ヘブル人への手紙を記した偉大な使徒によって確認されているように見えるかも知れません。ヘブル人クリスチャンに対して「成熟を目ざす」よう勧めているところで、「キリストについての初歩の教え」を「あとにする」よう、そして「死んだ行いからの回心、神に対する信仰……を再びやり直したりしないよう」(ヘブ六1、2)教えています。しかしそれは、他のことはともかくも、「キリスト・イエスにおいて上に召してくださいる神の栄冠を得るために、目標を」(ピリ三14)目指すためには、彼らが相対的にこれらのこと、つまり最初に彼らのすべての思いを占めていたこれらのものから離れるべきことを、意味しているにすぎません。

2 信仰生活を始めるに当たって、他に勝つて格別に必要とされるような悔い改めと信仰があることは、疑いもない事実です。その悔い改めとは、自分たちが全く罪深く、また罪責に満ちていて無力なことに対する深い自覚です。その悔い改めは、私たちの主が「私たちのただ中にある」（ルカ一七二一）と述べておられる、あの神の国を受けるに先行するものです。さらに、その信仰によって私たちは神の国を受け、「義と平和と聖霊による喜び」（ロマ一四一七）をも受けるのです。

3 しかし、それにもかかわらず、私たちが「福音を信じ」（マコ一15参）た後に必要とされる悔い改めと信仰（全く同じではないが、かと言って完全に違うというのでもなく、別の意味でこれらの語を理解して）もまたあります。それどころか、それ以降の信仰の歩みのすべての段階にも必要とされています。そうでないと、私たちは「私たちの前に置かれて競走を走る」（ヘブ一二一）ことではできません。さらに、先述の悔い改めと信仰が神の国に入るために不可欠であるのとまったく同様に、この悔い改めと信仰も私たちが恵みのうちに継続し成長するために必要とされています。

しかし、義とされた後に、どのような意味において私たちは悔い改め、また信じるべきなのか、これは重要な質問です。最大限の注意を払って考慮する価値のある問題です。

—

まず第一に、どのような意味において、私たちは悔い改めるべきでしょうか。

1 悔い改めは、しばしば内面的な変化を意味します。罪からホーリネスへの心の変化です。しか

し、ここでは全く違った意味で問題にしています。それは、一種の自己認識です。自分が神の子どもであると知っているにもかかわらず、自分自身を罪人として、そのうえ、罪責に満ち、無力な罪人として自覚するという意味においてです。

2 確かに、私たちがそのことを最初に自覚するとき、つまり最初にイエスの血潮に賤いを見いだすとき、また神の愛が私たちの心に最初に注がれ（ロマ五5）、神の国がそこに据えられるとき、自分自身もはや罪人ではないと考え、私たちのすべての罪が覆われた（詩篇三二一、八五2、ロマ四7参）だけでなく、破壊されたと考え、それは自然なことです。その時、私たちは自分の心のうちに少しの悪も感じないので、そこには何もないと簡単に思い込んでしまうのです。それどころか、善意の人たちの中には、その時だけでなく、それ以降もずっと罪がないと思いついてしまった人もいました。そして、義とされたときに自分たちは全的に聖化された、ということを確認しました。そのうえ、そうした印象がみことばや理性や経験に反するにもかかわらず、それを一般的な原則としてしまったのです。これらの人々は、義とされたときすべての罪が破壊され、それで信仰者の心のうちには罪がなくなり、さらにその瞬間から心は全的に清く洗われたと本気で信じ、その立場を固守しています。しかし、「信じる者はだれでも、神によって生まれた」（一ヨハ五1）ということや、「だれでも神から生まれた者は、罪を犯しません」（一ヨハ三9参）ということを私たちが快く認めはしますが、心のうちに罪があることすら少しも感じないということはできません。罪は支配していませんが、残っています。そして、この心に残存する罪の自覚が、今ここで問題としている悔い改めの大きな枝の一つです。

3 なぜなら、すべての罪が去ったと思ひ込んだ人でも、しばらくすれば自分の心のうちに依然としてプライドがあると感ずることでしょう。多くの点で自分を必要以上に高く評価していたり、また何らかの恩恵を受けて得た賞賛を自分のものとし、さらに何も恩恵を受けず自分の力だけで成し遂げたかのように誇りとしてしまったようなことを自覚させられます。それでいて、なおかつ、自分が神の好意を受けていることを知っています。「自分の確信を投げ捨てては」(ヘブ一〇35参) なりませんし、また出来ないのです。「その人が神の子ともであることは、御霊ご自身が、証ししてください」(ロマ八16参)。

4 あるいはまた、自分のうちに自己意志が、それも神の御意に反するような意志があることを感ずるのにも、それほど長い期間を要しません。意志とは、理解力をもつ限り、すべての人が当然持っているけれども、それほど長い期間を要しません。これは、人間性の本質的な部分です。まさに、あらゆる知的存在の本質です。恵みに満ちた主ご自身、人としての意志を持っておられました。そうでなければ、主は人間ではなかったことになります。しかし、人間としての主の意志は、常に変わらぬ御父の意志に従っていました。いつでも、どんな場合でも、たとえ最も深い悩みの時にも、主は「わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように、なさってください」(マタ二六39) と言うことが出来ました。しかし、たとえキリストにある真実な信仰者であっても、いつでもそうであるという訳ではありません。自分の意志が神の意志に反して自己を喜ばせていることにはしばしば気がつかれます。自分の本性を喜ばせるといふ理由で、何かを志します。そのことは、神を喜ばせません。また、何かを拒絶するとき、それは自分の本性に苦痛を感じるからであって、それが自分に対する神のみこころであ

っても拒否してしまうのです。実に(その人が信仰にとどまり続けると仮定すれば)、それに対して自分の全力を尽くして抵抗するのです。しかし、こうしたことこそ、罪が存在し、またその存在を自覚していることを暗示しています。

5 さて、自己意志は、プライドと同様、偶像崇拜の一種です。そして、その両方ともが神の愛に對して、真つ向から反するものです。同様の観察が、この世を愛する愛にもなされるでしょう。しかし、このことはまた、真の信仰者でさえ自分自身のうちに感じがちなことです。そして、信仰者が一人残らずそのことを、多かれ少なかれ、遅かれ早かれ、様々な分野で感じます。信仰者が最初に死からいのちへと移されたときには、神以外のことは何も心に求めないということは確かなことです。彼らは心から「私の願いはすべてあなたに向けられ」(詩篇三八9参)「あなたの御名を慕います」(イザ二六8参) と言うことができます。「天では、あなたのほかに、だれを持つことができません。地上では、あなたのほかに私はだれをも望みません」(詩篇七三25)。しかし、常にそうとは限りません。時の経過とともに、再び(多分、ほんのわずかな時間ではあると思いますが)「肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢」(一ヨハ二16) などのいづれかを感じてしまう。それどころか、もし継続的に警戒し折っていないと、自分のうちに欲望が頭をもたげ始めるのに気がつくでしょう。そのうえ、自分を墮落させようとの突き通すような傷があることに気がつくでしょう。彼のうちに力がほとんど残っていないくなるまで刺し通す傷です。実に、「造り主よりも造られたものを愛する」(ロマ一25参) ——それが子どもであれ、親であれ、夫や妻、あるいは「あなたの無二の親友」(申命一三6) であれ——という強い傾向である情欲の攻撃を感じるかも知れません。地上の物や快樂に対する欲望を、あらゆる形態

で感じることでしよう。それと同じ割合で、神を忘れてしまおうでしょう。自分の幸いを神のうちに求めず、結果として「神よりも快樂を愛する者」(IIテモ三4)となってしまうでしょう。

6 もし、毎瞬間自分自身を自制していなければ、再び「目の欲」を感じるでしょう。つまり、自分の心を何か偉大な物、あるいは美しいもの、また非凡なもので満足させようとの欲求です。その欲求が、どれだけ多くの方法で靈魂を攻撃することでしょうか。多分、非常に劣等で些細なもの、例えば服装や家具のようなもの、つまり不滅の靈魂の渴望を満足させるようには決して意図されていないものに関して攻撃を受けるのです。しかしながら、「後にやがて来る世の力を味わった」(ヘブ六5)後でさえ、使用しているうちに滅びてしまうような、それらの愚かで低級なものへの欲望に、再び沈んでしまおうということも十分に可能性があります。自分が信じた方を知っている(IIテモ一12参)という人にとっても、目の欲のたった一つの分野にすぎない好奇心を征服することが、何と困難なことでしょうか。いつも好奇心を自分の足の下に踏みつけておくことや、単に新しいからという理由だけでは何も欲しがらない、というようなことは何と難しいことでしょうか。

7 また、神の子どもたちにとっても、「暮らし向きの自慢」を完全に征服することは、何と難しいことでしょうか。その言葉でヨハネは、世の中で言う「名譽心」とはほぼ同じことを意味したようです。これは、「人からの榮譽」(ヨハ五41、44参)を求め、また喜ぶことに他なりません。それは、賞賛を求め、愛することですし、同時に(常にそれと結合して生じることです)人からの賞賛を求めるのと同程度に人から批判されることを恐れます。それとほぼ同類なのが、邪悪な羞恥心、つまり本来は光榮とすべきものを恥ずかしかることで。そして、そのことは「人を恐れる」(箴言一九25)ことと

切り離すことはできません。人を恐れることは、靈魂に対して数限りないわなをもたらします。信仰が強いように見える人々の中にさえ、自分のうちにこれらすべての邪悪な性質を少しも見いださないような人は、はたしているのでしょうか。それゆえ、これらの人々でさえ「世界に対して十字架につけられた」(ガラ六14)のは部分的にすぎないのです。なぜなら、邪悪な根が彼らの心のうちに残っているからです。

8 また、私たちは他の様々な思いを感じないでしょうか。神への愛に反すると同様、隣人への愛に反するような思いをです。隣人への愛は、「人のした悪を思わない」(Iコリ一三5)ものです。そのような類のものを、少しも見いださないでしょうか。少しの嫉妬や悪意の疑り(一テモ六4)、あるいは何の根拠もなく理由もない疑りなどを、少しも見いださないでしょうか。こうした点で潔白な人、そういう人に隣人に対して最初の石を投げさせなさい(ヨハ八7参)。兄弟愛に反していると自分でも気がついているような思いや内面的な意向などを、時折にでも感じないという人はどういう人でしょうか。たとえ悪意、憎悪、あるいは苦い思いなどが全くないとしても、ちょっとした嫉妬すら存在しないでしょうか。特に、自分たちが手に入れたいと願いが手に入ることができていない善や徳(現実であれ、想像上であれ)を享受している人たちに対してどうでしょうか。傷つけられたり侮辱されたりしたとき、ごく軽い程度の憤りすら見いださないでしょうか。特に、私たちが格別に愛した人々や、一生懸命助けたり親切にしてあげたりした人々からそのような仕打ちを受けたときはどうでしょうか。不正や忘恩によって、私たちのうちに仕返しをしようとの思いがかき立てられるようなことは少しもないでしょうか。「善をもって悪に打ち勝つ」(ロマ一二21)代わりに、悪に対して悪をも

って報いようとの思いがないでしょうか。こういうこともまた、隣人への愛に反するようなものが、依然としていかに多く私たちのうちにあるかを示しています。

9 種類や程度の差はあれ、貪欲というものが、神への愛に反すると同様、隣人への愛に反することとは明白です。非常に多くの場合、「あらゆる悪の根」となっている *avaritia*、つまり「金銭を愛すること」(一テモ六10参)、あるいは文字どおりには今以上に所有したいとの願望、あるいは資産を増やしたいとの願望である *avaritia* (貪欲、コロ三5参) というものが、隣人愛に反するのです。そして、その両方のものから解放され自由とされている人は、たとえ真に神の子ともとされている人々の中にさえ、その数はごく稀です。驚くべきことに、あの偉大な人物マルチン・ルターは、「自分の中には少しの貪欲も存在しない、それは(回心した後の状態のときだけでなく)生まれた時からそうだった」(Samuel Clark, *Marrow of Ecclesiastical History*, pp.98-99参) としばしば語っています。もしそうなら、彼が女から生まれた者の中で貪欲を持っていなかった、また持って生まれて来なかった唯一の人物(神であり人であるキリストを除いて)である、と言うことを、私は躊躇しません。しかし実際には、神から生まれた者で、その後ある程度の期間を生きた者の中で、多かれ少なかれ貪欲を感じなかつた人、特に後者の意味において感じなかつた人は一人もいないと私は信じています。そのようなわけで、義とされている人々の心の中にさえ、プライドや自己意志、また怒りなどともに貪欲が残っているということを、疑いもない真理とみなしてもよいでしょう。

10 多くの真面目な人々は、このことを経験することによって、ローマ人への手紙七章の後半部分を、「律法の下にある」人——つまり罪を自覚している人、疑いもなくパウロが意味していることはこれです——に関するのではなく、「恵みの下にある」(ロマ六14、15)人、「ただ、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、義と認められた」(ロマ三24)人に関するものであると解釈する方向を取ってきました。こうした解釈が正しく指摘している点があるとすれば、義とされた人々のうちにも、ある程度「肉に属している」(一コリ二三) 思いが依然として残っているという事です。(それで、パウロはコリントの信者たちに向かって「あなたがたは肉に属している」と語っています。) また、いつでも「生ける神から離れ」(ヘブ三12) ようとしたり、また「背信からどうしても離れない」(ホセ一一7) 心や、プライド、自己意志、怒り、復讐、世に対する愛、すなわちあらゆる悪への傾向性などが信者の中に残っているという事実を、先のような解釈は認めているのです。もし一瞬間でも制止が取り除かれたなら、ただちに芽を出してくる苦い根(ヘブ一二15) が残っています。実にそのような深い腐敗は、神からの明白な光なしには、恐らく感知することすら私たちにはできないことでしょう。そして、罪が心の中に残っているという、こうしたことすべての自覚と悔悟は、義とされた者に属する悔改めです。

11 しかし、私たちは罪が心に残っているということを自覚すると同様に、罪が私たちの言葉と行いに固着していることも自覚すべきです。実に、私たちの言葉の多くは、罪が混ざっているという以上のもので、つまり全く罪深いものであることを恐れるべきです。そうした言葉はまぎれもなく、兄弟愛から湧き出たものではない、きびしい言葉 (*uncharitable conversation*) です。また、「何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい」(マタ七12、ルカ六31参) という黄金律にかなったものでもありません。こうした類に含まれるものは、あらゆる中傷、うわさ話、ひそひそ

話、悪口などです。つまり、そこにいない人の欠点を他言することです。だれも、自分がいないところではかの人が自分の欠点を他言することを望まないからです。ところで、たとえ信仰者の間にさえ、こうした点で少しの罪責もないという人は、ほとんどいません。「死者と不在者に関して、良いことだけを語れ」という、格言を常に守っている人はどこにいますか。また、それを守っているとしても、そういう人たちは無益な会話 (unprofitable conversation) をも同じように慎んでいるでしょうか。それらすべてが、疑いもなく罪深いのであって、「聖霊を悲しませる」(エペ四30参) のです。そのうえ、「人はその口にするあらゆるむだなことばについて、さばきの日には言い開きをしなければならぬ」(マタ二二36) のです。

12 しかし、彼らが継続的に「目をさまして祈り」、そうすることにより「誘惑に陥らない」(マタ二六41、マコ一四38参) と仮定して、彼らが常に自分たちの口に門守をたてて唇の戸を守った(詩篇一四一3参) と仮定しても、また彼らがこのようにして自分たちのすべての「ことばが、親切で、塩味のきいたもの」(コロ四6参) であり、それで「聞く人に恵みを与える」(エペ四29) という標準を満たすよう訓練したと仮定しても、それでもなお、彼らは日々それだけに注意しているにもかかわらず、無用な会話に陥ってしまうのではないのでしょうか。また、彼らが神の代弁者として努力をしているときでさえ、その言葉は純潔で、かつ不聖なもの混入から免れているのでしょうか。彼らの動機や目的のものに、やましさを少しも見いださないのでしょうか。ただひたすら神を喜ばせるために語り、部分的にも自分たちを喜ばせるために語っていることではないのでしょうか。全的に神の御旨を行うためであって、自分の意志を全うするためということではないのでしょうか。あるいは、もし単一の目をも

って始めたとしても、「イエスから目を離さない」(ヘブ一二二) で継続しているのでしょうか。隣人ともにいる間はいつでも、主と語り続けているのでしょうか。彼らが罪を非難しているとき、罪人に対して少しの怒りも、あるいは不親切な気分も感じないのでしょうか。無知な人を教えているとき、プライドや優越感を少しも感じないのでしょうか。苦しみ悩んでいる人を慰めているとき、あるいは愛し合っている、良い業に励むよう互いに刺激し合っているとき(ヘブ一〇24参)、心のうちに「我ながら上手に話したものだ」と自己を賞賛する思いを少しも感じないのでしょうか。あるいは、ほかの人々がそのように考え、そしてその理由で彼らが高く評価するべきとの願望である虚栄が、少しもないのでしょうか。以上の点のある部分や、あるいは全部の点において、信仰者たちの最善の会話のなかにさえ、何と多くの罪が固着していることでしょうか。そういうことを自覚することは、悔い改めのもう一つの枝であり、それは義とされた人々に属する悔い改めです。

13 また、もし彼らの良心が十分に目覚めているならば、いかに多くの罪が自分たちの行動にも固着しているかを見いだすことでしょうか。それどころか、この世が罪に定めようとしないうような類の行動の多くも、もし私たちが神のみことばの規準に従って判断するなら、推賞され得ないどころか、弁解さえできないような行動があるのではないのでしょうか。彼ら自身も、「神の栄光を現す」(一コリ一〇31、他) ことにはならないと自覚しているような、そういう行動も多いのではないのでしょうか。それを目的とさえしていない行動や、神に目を向けて企てられていない行動も多いのではないのでしょうか。たとえ神の栄光を目指して始められた行動であったとしても、その姿勢を持続することのできない場合が多いのではないのでしょうか。そのような中で、私たちは神の御旨を行いながら、実は同程度

に自分の思いを実行しているのです。神を喜ばせる以上には言わないまでも、自分たちを喜ばせようとしているのです。また、隣人たちへの良い業に励みながら、同時に様々な種類の悪い気分を感じているのではないのでしょうか。そこから、いわば彼らの善行すら、そのような悪の混入によって汚されているので、厳密な意味で善行というものは、かけ離れたものとなつていきます。彼らの慈悲深い働きでさえ、そのような類のものなのです。彼らの敬虔な働きにも、同様の混入がないのでしょうか。一方で彼らは自分たちのたましいを救うことができるみことばを聞きながら、同時にそれが彼らを救うよりも罪に定めるようになりはしないかと恐れるような思いがあることに、しばしば気がつくのではないのでしょうか。それは、公であれ個人的であれ、彼らが祈りを神に捧げようと励んでいるときにも、同じようなことがたびたびあるのではないのでしょうか。それどころか、最も敬虔な集いに携わっているときにもあるのではないのでしょうか。主の聖餐のテーブルについている間でさえ、どんな種類の思いが彼らのうちに湧いてくるのでしょうか。彼らの心は、時として地の果てをさまよっているようであったり、時として彼らの献げものが主に忌みきらわれるもの（箴言一五八参）になりはしないかと恐れるような想像で満たされるのではないのでしょうか。それで、かつて自分たちが最悪の罪を犯していたよりも、最も崇高な義務を一層恥すかしく思うのです。

14 さらに、彼らは何と多くの、為すべきことを行わないという怠慢の罪（sins of omission）の責任を負わされることでしょう。使徒の「なすべき正しいことを知っていながら行わないなら、それはその人の罪です」（ヤコ四17）ということばを知っています。しかし、彼らが、敵、見知らぬ人、あるいは兄弟たちに対して、それが身体のことであれたましいのことであれ、善を行うことが可能であったのに実行しなかった、という事例をいくらかでも見いだすことができるでしょう。神に対する義務に関して、いかに多くの怠慢の罪で彼らは有罪とされてきたことでしょうか。神と交わり、神のみことばを聞き、公であれ個人的であれ祈るというような機会を、頻繁におろそかにしてきたことでしょうか。あの聖徒アッシャー大主教でさえ、神のためにあれほど労した後、息を引き取る際に、「主よ、私の怠慢の罪をお赦してください」と叫ばなければならなかった多くの理由があつたのです。

15 しかし、こうした外面的な怠慢の罪以外にも、無数の内面的な欠点を見いださないうちか。あらゆる種類の欠点です。神に対して当然持つていなければならぬ、愛、畏敬、信頼が欠けているのです。隣人に対して、それもすべての人の子に対して当然である愛に欠けています。それどころか、すべての主にある兄弟に対しての愛にさえ欠けています。主にある兄弟と言ふとき、それは自分たちからはるかに離れた所にいようが、すぐそばにいて関わりを持つていようが違いはありません。また、聖なる思いに關しても、きわめて不十分です。あらゆる点で欠けています。ですから心の奥底では、デ・レンティ氏と共に「私はまるでいばらが一面にはびこっている地面です」と叫びたいような心境です。あるいは、ヨブのように「私はつまらない者です。……私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます」（ヨブ四〇4、四二6）と叫びたい心境です。

16 罪責感の強い自覚は、神の子どもたちに関わる悔い改めのもう一つの枝です。しかしこのことは、注意深くまた本来の意味で理解されるべきです。なぜなら、「キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」ということは確かなことですし、主を信じ、その信仰の力を信じて「肉に従って歩まず、御霊に従って歩む」（ロマ八一、4参）人は罪に定められないことも確かなこ

とだからです。しかし、彼らが今でも神の厳格な正義に耐え得ないのは、信じる前と同様です。神の義は、彼らが前述のすべての点で、依然として死に値することを明らかにしています。もし贖いの血潮がなかったなら、完全に罪に定めてしまうことでしょう。ですから、依然として自分たちが審きを受けるに値する (deserve) ということを徹底的に確信しています。もともと、その審きは贖いの血潮によって彼らから取り除けられています。しかしここに、二つの両極端な立場があります。その極端から身を避ける人はほとんどいません。ほとんどの人は、自分たちが実際に定められていないのにそうだと考えたり、あるいは自分たちは無罪が当然 (deserve) と考えたりするというように、どちらかに片寄っています。真理は、その中間にあります。厳密に言えば、ただ地獄の刑罰こそがふさわしい (deserve) にもかかわらず、それがそのまま彼らの上にふりかかることはありません。なぜなら、彼らには「御父の御前で弁護してくださる方」(イヨハ二一) がいるからです。主のいのちと死ととりなしが、依然として彼らと罪の審きとの間に割り入っているのです。

17 彼らが全く無力であるという強い自覚も、信仰者の悔い改めのもう一つの枝です。無力とは、第一に、救われた後でも救われる以前と全く同様に、自分自身からは、一つとして良いことを考えたり、良い動機を抱いたり、良い言葉を語ったりすることができないということです。つまり、種類や程度が何であれ、彼ら自身の力というものは依然として持ち合わせていません。善いことをするためであれ、悪に立ち向かうためであれ、力がないのです。世に打ち勝つどころか抵抗する能力がありません。それは、悪魔や自分自身の内にある邪悪な性質に対しても同様です。もちろん、彼らが「どんなことでもできる」(ピリ四13) ということも事実ですが、それは自分自身の能力によってではありません。

せん。それらすべてに打ち勝つ力は外から与えられるものです。「というのは、罪は彼らを支配することができないからです」(ロマ六14参) とありますが、全部または一部であっても、それは生まれつき備わっているものではありません。その力は純粋に「神の下さる賜物」(ロマ六23) です。また、それは丁度何年分もの在庫が積み上げられているように、いちどきにすべてが与えられるわけではありません。むしろ、その時々に必要な分だけが与えられるのです。

18 この無力に関して、私が意味する第二の点は、私たちが依然として意識している罪責感、または受ける刑罰から自分自身を救い出す力が全く無い、ということですが、そのうえ、与えられているすべての恵み(生まれつき持っている力は言うまでもなく)をもつてしても、新生した人々の心にさえ残っているプライド、自己意志、世に対する愛、怒り、あるいは神から離れようとする一般的な傾向などを取り除くことができないのです。それらのものが残っていることは、経験的に知っています。あらゆる努力をつぎ込んで、私たちの言動のすべてに固着してくる悪に対して無力です。加えて、愛に欠けている (uncharitable) 会話、まして益とならない会話 (unprofitable conversation) を完全に避けることに対して、全く無力です。怠慢の罪を避けることの無力さも加えなければなりません。また、自分たちで悟っている無数の欠点、特に神と人に対する愛や他の正しい気質に欠けていることを補う点で私たちは無力です。

19 もしこれまでの説明に満足していない人がいたら、また、もし義とされた人はだれでもこれらの罪を自分の心と生活から取り除くことができるかと信じている人がいたら、実験してみてください。すでに与えられている恵みを用いて、プライド、自己意志、あるいは生まれつきの罪一般であれ、追

い払えるかどうか、自分の言動をありとあらゆる悪にまみれている状態からきよくできるかどうか、愛に欠けている会話や益とならない会話をすべて避けることができるかどうか、あらゆる怠慢の罪を避けることができるかどうか、また、自分自身のうちに依然として発見する無数の欠けを、補うことができるかどうか努力してみることです。一度や二度の実験で失望せずに、何度も繰り返して試みることです。長期間試みれば試みるほど、こうしたすべての点で彼は自分の無力を、いっそう深く確信するでしょう。

20 このことは、あまりにも明白な真理なので、広く散らされている神の子どものほとんど全員が、他の点では意見を異にしている、以下の点では一般的に同意しています。つまり、たとえ「からだの行いを殺す御霊」(ロマ八13参)によって外面的な罪と内面的な罪の双方に対して抵抗したり、また征服したりできる場合もあるとはいえ、また日毎に敵の勢力を弱体化させることができる場合があるとはいえ、それらを完全に放逐することはできないということです。義認において与えられた恵みのすべてをもってしても、それらを絶滅させることはできません。どのように一生懸命に見張り、また祈ってはいても、私たちは自分の心と手を完全にはきよくすることはできません。主が私たちの心に再び語りかけ、「きよくあれ」と改めて語られるまで、私たちには絶対に不可能です。主のことがあってはじめて「らい病はきよめられた」(マタ八3)となります。その時はじめて、悪い根、肉の思いは破壊され、生得の罪はもはや存在しなくなります。しかし、もしそのような二度目の変化がなかったなら、もし義認の後に瞬間的な救済がなかったとしたら、もし神の御業が漸進的なもの以外になかったとしたら(漸進的な御業があることは、だれも否定できないことです)、私たちは死の時まで罪に

満ちたままであることに我慢しなければならぬこととなります。また、そうであるなら、それも可能でしょう。そして、もしそうならば、私たちは死ぬまで罪責の中にとどまっていなければなりませんし、罰を受けるに値するものであり続けるのです。なぜなら、すべてのこうした罪が私たちの心に残り、言葉や行いにまわり続けている間は、罪責や罪の報いが取り除かれるということが不可能だからです。それどころか、神の厳格な正義においては、私たちが考えること、話すこと、行うこと、すべてが、罪責を増し加え続けます。

一一

1 その意味において、私たちは義とされた後でも悔い改めるべきです。それをするまで、先には進むことができません。なぜなら、自分の病を自覚するまで、治療を受け入れられないからです。もし私たちが悔い改めるなら、そのとき主は「福音を信じなさい」(マコ一15)と語りかけます。

2 そして、これもまた義認の時とは異なった特別な意味で理解されるべきです。神がすべての民のために備えられた「偉大な救いの良い知らせ」(イザ五二7、ロマ一〇15参)を信じなさい。「神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われ」(ヘブ一3)であり、「ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになる」(ヘブ七25)方を信じなさい。その方は、あなたの心に依然として残っているすべての罪から、救うことができます。また、あなたの言行のあらゆる面にまわりついて、いるすべての罪から、救うことができます。怠惰の罪からも救うことができます。そして、あなたに

欠けているものが何であれ、満たすことができます。「人にはできないことです。しかし、神であり人である方にはどんなことでもできます」(マタ一九26参) ということは真実です。「天においても、地においても、いっさいの権威が与えられている」(マタ二八18) お方にとって、難しすぎるなどありえましょうか。しかし、神にそのことをする能力があるというだけでは、その能力を発揮して、そのことをしてくださるといふ私たちの信仰の、十分な保証とは言えません。そうしてくださると約束されています。その「尊い、すばらしい約束」(Ⅱペテ一4) を私たちに与えて下さっています。ですから、神のことばの最古の部分である律法の書の中に、「あなたの神、主は、あなたの心と、あなたの子孫の心を包む皮を切り捨てて、あなたが心を尽くし、精神を尽くし、あなたの神、主を愛……するようになされる」(申命三〇6参) と記されています。詩篇にも、「主は、全ての不義から、イスラエル(神のイスラエル)を贖い出される」(詩篇一三〇8) とあります。預言書にも、「わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよめられる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめる。……わたしの霊をあなたがたのうちに授け……わたしの定めを守り行わせ……わたしはあなたがたをすべての汚れから救い」(エゼ三六25、27、29) とあります。同様に、新約聖書にも、「ほめたたえよ。イスラエルの神である主を。主はその民を贖みて、贖いをなし、救いの角を、われらのために……立てられた。……われらの父アブラハムに誓われた誓いを覚えて、われらを敵の手から救い出し、われらの生涯のすべての日に、きよく、正しく、恐れなく、主の御前に仕えることを許される」(ルカ一68、69、73、75) と記されています。

3 ですから、主が単にそのことができるというだけでなく、そうすることを望んでおられる(willing) ということを信じる確かな根拠があります。主は喜んで、「いっさいの霊肉の汚れからあなたをきよめて」(Ⅱコリ七一参) くださり、「あなたがたをすべての汚れから救」(エゼ三六29) くださるので、偉大な医者であり、私の霊を愛してくださる方が、喜んで「私をきよめて」(マタ八2) 下さるといふことこそ、あなたが今切望していることであり、あなたが今特に必要としている信仰です。しかし、主はそのことを明日行おうというのでしょうか、それとも今日でしょうか。主ご自身の答えを見てください。「きょう、もし御声を聞くなら、あなたがたの心をかたくなにしてはならない」(詩篇九五7、8参、ヘブ三15、四7)。もし、それを明日まで延ばすなら、あなたは「自分の心をかたくなにしてしまい」、「主の御声に耳を傾けることを」拒絶することになります。ですから、主はあなたを今日救おうと願っていることを信じなさい。主は、今この時、救おうと願っています。「確かに、今は恵みの時です」(Ⅱコリ六2)。今主は、「きよくなれ」(マタ八3他) と語っています。ただ信じなさい。そうするならば、あなたもまた即座に、「信じる者には、どんなことでもできるのです」(マコ九23) ということを発見するでしょう。

4 主を信じ続けなさい。主は、「あなたを愛し、あなたのためにご自身をお捨てになった」(ガラ二20参) 方です。また「木の上で、あなたがたのすべての罪をその身に負った」(Ⅰペテ二24参) 方です。そして、主はご自身の血潮を常に注ぎ続けて、あなたがたをすべての罪の審きから救われます。こうして、私たちは義とされた状態に保たれるのです。私たちが、「信仰に始まり信仰に進む」(ロマ

一七)とき、内在する罪からきよめられるとの信仰をもっているとき、私たちのすべての汚れから救われる(エゼ三六29)と信じているとき、私たちは以前感じていた罪責や受けるべき当然の報いとしての刑罰など、すべてから救われます。それで、そのとき初めて私たちは、単に、

毎瞬 主よ 私は必要です、

あなたの死の功績を

と言うだけでなく、さらに信仰の十全な確信のうちに、次のように言うことができます。

毎瞬 主よ 私は持つています、

あなたの死の功績を

(Hymns on Isaiah 32:2, Poetical Works, II, 207)

なぜなら、主の生と死と私たちのためのとりなしの祈りに対するそのような信仰によって、毎瞬更新され、全きよくなり、そして今この時私たちが罪に定められることがないだけでなく、以前のよう
に罰を受けるに価するということもありません。主は、私たちの心と生活の両方をきよくしてくださいます。

5 同じ信仰によって、キリストの力が毎瞬私たちの上に留まっていると感じます(Ⅱコリ一二9

参)。それによってのみ、私たちはありのままの自分であることができますし、信仰生活を続けることができます。もしそれがなかったら、あらゆる点で今きよきを得ていたとしても、次の瞬間悪魔となり得るでしょう。しかし、主に対する信仰を保ち続けるなら、私たちは「救いの泉から水を汲」(イザ一二三)みます。私たちのうちにおられる栄光の望みであるキリスト(コロ一27参)、つまり私たちの愛するお方に寄り掛かりつつ、私たちは主の助けを得て、主の目に受け入れられるにふさわしく考え、語り、行動するのです。この方は、信仰によって私たちの心に住んでくださり(エペ三17参)、神の右にあって常に私たちのためにとりなしていただきます(ロマ八34参)。そのように、主は必ず「信じる者たちを、すべての行いにおいて導き、絶えず助けを与えて進ませ」てくださいます。それで、信仰者の意図、会話、行動などのすべてが「主にあって始まり、継続され、そして締めくくられる」(英国国教会「祈祷書」聖餐式)のです。そのように、確かに主は、「信仰者の主への愛が全きものとなり、また主の聖なる御名を崇めるように、ご自身の聖霊の靈感によって信仰者の心の思いをきよくしてくださいます」(同書)。

6 このように、神の子どもの中で、悔い改めと信仰はびつたりと互いに呼応しています。悔い改めによって私たちは自分の心のうちに罪が残っているのを感じ、また言葉や行いにまとわりついているのを感じます。信仰によってキリストにある神の力を受け、心を清らかにされ、手をきよくされます。悔い改めによって、私たちは自分の気質や言動のすべてが、依然として処罰に価するものであると感じます。信仰によって、御父と共におられる私たちの弁護人が常に嘆願しておられ、そのとりなしのゆえに、罪に定められることはなく、処罰のすべてが常に私たちから取り除けられていること

を意識します。悔い改めによって、自分が全くの無力であることを片時も忘れることなく自覚し、信仰によって、あわれみを受けるだけでなく、いつでも、「おりにかなった助け」(ヘブ四16参)をも受けるのです。悔い改めは、他のいかなる助けも役に立たないと、それを拒否し、信仰は、私たちが助けを必要としているとき、天においても、地においても、いっさいの権威が与えられている方(マタ二八18参)からのあらゆる助けを受け入れます。悔い改めは「主がいなかったら私は何もできません」と言いますが、信仰は「私を強くしてくださる方によって、すべてのことができます」(ピリ四13参)と言います。主を通して、私のたましいのすべての敵に打ち勝つことができますだけでなく、放逐することができません。主を通して、私は「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、私の神である主を愛する」(マコ一二30、ルカ一〇27参)ことができます。さらに、私の生涯のすべての日に、主の御前にあつてきよく正しく歩むことができます(ルカ一75参)。

三

1 ここまで語られてきたことから、私たちが義とされたときに全く(wholly)きよめられる、とする考えは間違っていることが容易にわかると思います。つまり、その時に私たちの罪がすべてきよくされる、という意見は誤りです。その時点で私たちが外面的な罪の支配から解放される、ということ(すでに考察されたように)事実です。また、同時に内面的な罪の力が大打撃をこうむっているのもはや私たちはその罪の力に従う必要もないし、言うことを聞く必要ありません。しかし、そ

の時に内面的な罪が完全に破壊し尽くされた、というのは決して事実ではありません。また、プライドの根、自己意志、怒り、世に対する愛などがその時に心から取り去られる、ということも決して事実ではありません。あるいは、肉の思いや罪に傾く心が、完全に根だやしにされるということも、決して事実ではありません。それを事実であると仮定しても、たいした害はないと思う人も中にはいるでしょうが、とんでもないことです。重大な害を及ぼします。恵みによって造りかえられる道の前進を完全に妨げてしまうからです。「医者が必要とするのは健康な者ではなく、病気の者です」(ルカ五31参)から、もし自分がすでに完全にされていると考えるなら、さらなる癒しを求める余地がありません。その仮定に立つと、それが漸進的であれ瞬時的であれ、罪からのさらなる解放を期待することは、不合理なこととなります。

2 一方、まだ完全にされていないという深い確信、つまり自分たちの心が全的にはきよくされていないし、まだその本質において「神に対して反抗する」という「肉の思い」(ロマ八7)がうちにあり、また罪の本体が弱められてはいても破壊されずに心のうちに残っているという確信は、あらゆる疑問を越えて、さらなる変貌の絶対的な必要性を証明します。義と認められたその瞬間に、私たちが「新しく生まれた」(ヨハ三3、7、1ペテ一23)ということは認めます。その瞬間、私たちは「やみの中から、驚くべき光の中」(1ペテ二9)へと内的に変えられる経験をします。野蠻で邪悪な姿から、神の似姿へと変えられる経験です。地上的、感覚的、悪魔的な思いから、キリスト・イエスの心(ピリ二5参)へとという変化の経験です。しかし、その時点で私たちは全的に(entirely)変えられるのでしょうか。私たちの創造主の似姿へと、完全に(wholly)変貌されているのでしょうか。とんでもない

ことです。依然として罪の深部を持っています。そして、その事実を自覚するとき、私たちは力強い救い主（イザ六三一参）に向かつて完全な救いを求めてうめくのです。このゆえに、自分の心が深く腐敗していることを自覚していない、あるいはほんの少し頭だけで理解しているような信仰者は、全的聖化にほとんど関心を示しません。彼らは、そういうものが存在はしていますが、死に際してかあるいはその少し前（彼らはいつかを知りません）にある、という意見を持つことがあるかも知れません。しかし、自分たちにそれが欠乏していることを、深刻に悩んではいませんし、またそれに対して深刻に飢え渴いてもいません。彼ら自身が深い自己認識を得るまで、追求することはできません。先に述べたような意味で悔い改めるまで、すなわち神が内住する怪物の顔を示し、自分たちのたましいの本当の状態を明示するまで、彼らは追い求めることはできません。彼らが重荷を感じたとき、そこから救出を求めてうめくでしょう。それ以前ではなく、その時になって彼らはたましいの苦悩の中から、次のように叫び出すでしょう。

内住する罪のくびきを打ち砕いてください

そうすることによって 私のだましいを全く自由にしてください

内がきよくなるまで休むことができません

あなたに全く夢中になるまで

(Hymns on Mt. 11:28, Poetical Works, II, 145)

3 そのようなことから、第二に次のことがわかります。私たちが受け入れられた後、自分たちの欠点（これはある意味で、罪責と名付けられるかもしれませんが）を深く自覚することが、贖いの血潮の真価を理解するためには絶対的に不可欠なことです。またその自覚は、義とされた後に、それ以前と同様に贖いの血潮が必要とされることを実感するためにも必要です。その自覚がなければ、過去のすべての罪がぬぐい去られているのですから、契約の血潮（出エ二四8、ヘブ一〇29）は今現在自分たちに特に必要ではない、ありふれたものとなってしまふのです。しかし、もし私たちの心と生活の両方ともが汚れているとすると、そこには毎瞬負うべき罪責が存在し、その結果、毎瞬新たに罪に定められることに自分の身をさらすこととなります。しかし、贖いの血潮は今も流されています。

主は常に上に住み給う

私たちのためにとりなすため

すべてを贖う主の愛

主の御宝血は救いを請うため

("Behold the Man", ver. 2, II, 1-4, Poetical Works, II, 323)

次の数行の力強い詩に表現されているものこそ、この悔い改めであり、またそれに密接に関連している信仰です。

一息ごとに私は罪を犯します

あなたの御旨を行いませんし あなたの戒めを守りもしません

上にて御使いたちがしているようには 地上でしていません

でも まだ泉は開かれたままで

私の足 私の心 私の手を洗います

私が愛において完全とされるまで

(“A Thanksgiving”, St. 16, Poetical Works, II, 234)

4 第三に、自分自身が完全に無力だという深い自覚——神から受けたものを保つことさえできず、まして、自分自身の心と生活の中に残存している不義の世界（ヤコ三六）から、自らを救い出すことなど不可能だという自覚——が、信仰によりキリストにあつて生きることが教えてくれます。私たちは祭司であるだけでなく、王でもあるキリストにある歩みを教えてくれます。その結果、私たちは「主をあがめ」るようになり、「主にすべての恵みの栄光を献げる」（エペ一六参）ようになります。また、「主を完全なキリストとし、全き救い主とする」ようになり、そして本当の意味で「主の頭に冠を戴かせる」ようになります。こうしたすばらしい表現は、通常、ほとんど意味がありません。しかし、主に飲み込まれるために、私たちがそのように、いわば自分自身の殻を出ていく時、力強く深い意味で成就されます。主がすべてにおいてすべてとなられ（一コリ一五28参）、私たちが沈みこんでいくとき、成就されます。そのとき、主の全能の恵みが、主に「逆らつて立つあらゆる高ぶり」を滅ぼし、

あらゆる気質、思い、言葉、また行いなどを、「キリストに服従させ」（二コリ一〇五）ます。

一七六七年、四月二四日、ロンドンデリーにて。

説教 15

大審判

The Great Assize

訳者ノート

この説教は、一七五八年三月一日、金曜日、英国南部のベドフォードの聖パウロ教会で、州の判事や司法に関わる人々を前にウエスレーが語ったものである。裁判という方法で地上の正義をつかさどる人々が、各州の第一の教会で礼拝に集まり、説教を聞くというのが当時の慣習であった。この集会を計画するのは州の長官の役目であるが、この年、ベドフォード州長官のウィリアム・コールは、自らの友人であるウエスレーを招いた。二月二十七日の日記に、「ベドフォードの裁判官たちを前にした説教を準備するため、数日間レウシラムに引きこもった」とある。説教の当日の日誌には、状況が次のように記されている。「聖パウロ教会に集まった会衆は多く、熱心に耳を傾けていた。説教が終わるとすぐ、判事から食事の招きをいただいたが、時間がなかったので、断る失礼を伝えて、一時か二時には（エプワースにむけて）出発した」。後に、州長官の依頼でこの説教をウエスレーは出版し、彼の存命中に一〇版を重ねることになる。ずっと後の一七七八年九月一日の日誌でも、「私は二〇年前に大審判について説教を書いたが、あれ以上のものを今でも書くことができない」と述べているほど、終末と最後の審判に関する考えを整理した貴重な説教である。

ウエスレーは、最後の審判を、地上の裁判と比較して説教を展開している。地上の裁判と同じく、大審判にも裁判官がいて、裁判の時も場所も決まっております。裁かれる対象もいる（二・一〜四）。その規模は地上のそれとは比較できないほどであるが、天上の裁判と地上の裁判が一番異なる点は、裁きの深さにあることをウエスレーは強調する。それぞれ

の行いばかりか、その行いを取り囲む状況、それを生み出した心のありかた、動機、性格、人格に至るまで、裁判官であるキリストは探りをいれてくる（二・5〜10）。地上の法廷では免れたことを、地上の法廷では行き届かなかった部分を、天上の法廷は追求し、「そこにおいて私たちは、ゆりかごから墓場までのすべての行いについて、すべての言葉、すべての欲求と気質、すべての思いと意図、心・からだ・財産といった種々の賜物をどのように用いてきたのかということもすべて、申し開きをしなければならぬ」（四・4）。

ウエスレーは一七二五年、オックスフォード学生時代に、トマス・ア・ケンピスやジェレミー・テイラーの書物に触れて、神に目覚めた。特に、テイラーの『聖なる生涯と聖なる死の規律と実践』は、全知全能なる神への意識をウエスレーに植え付けた。神は、この全世界を瞬時に見渡す目をもって人間の一举一動を見ておられる。そして、神はすべての人の良心に介入して、「われわれの行動を思い起こさせ、裁きに対する証人であり、また同時にそれを裁かれ、あるいは救しを与える判事でもある」（*Rules and Exercises of Holy Living and Holy Dying*, p.23）。この時以来、ウエスレーの神学実践の根底には、人間存在のあらゆる領域が永遠への意義を含んでおり、神は人の心と生活の隅々に至るまで一瞥になつていふという意識が常にあつた。終末における裁きと栄光の瞬間は、まさにそうした意識が神の御前で決算される時である。

厳粛で徹底した神の裁きを説く説教の最後は、すべての裁き主であるキリストはすべての救い主であること、主は裁くためではなく救うために世に來られ、今は救いの時であることを、強調して閉じられている。ウエスレーの教ある説教の中で、この説教が口述の形態をそのまま残している唯一のものであろう、とアウトローはコメントしている。

説教 15 「大審判」

「私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。」（ローマ人への手紙一四 10）

序

1 いかにも多くの状況が相まって、裁判の恐ろしいまでの厳粛さを引き起こしていることであろう。あらゆる年齢層、性別、階級、また生活状態の異なる人々が、本意にあるいは不本意に、それも近くからだけでなく、はるか遠くからも集められました。その中には、次のような人々が含まれています。犯罪者は速やかに前に出され、どこにも逃げ道がありません。役人は、それぞれのポストに就いて、やがて与えられる命令を執行しようと待っています。また、私たちが非常に高い尊敬と栄誉を払っている、恵みに満ちた君主の代表者もいます。同様に、こうした裁判を引き起こす理由も、その厳粛さを少なからず増し加えています。それは、あらゆる種類の原因を聴取し、そして決断を下すためです。その中には、非常に重要な性質のものも含まれています。生死にかかわる程重要なものもあります。永遠の顔の覆いを引きはがす死にかかわるものです。私たちの父祖の知恵が、裁判の厳粛な営みに若干の仰々しさを付け加えたことは、裁判に真剣さを増し加えるためということは疑いもないことです。

それも、一般大衆の心の中だけにというわけではなかったのです。というのは、裁判の厳粛なあり方を目で見、耳で聞くことにより、もつと心の奥深くに影響を与えられかねないからです。この光を通して見るとき、裁判にまつわるトランペット、杖、衣服などは、もはやつまらないものでも無意味なものでもありません。かえって、社会のもつとも価値ある目的に対して、その種類と程度において、貢献するものです。

2 しかし、地上における厳粛な審きよりはるかに恐ろしい審判が近づいています。もうしばらくすると、「私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。というのは、主は、わたしは生きている。すべてのひびきは、わたしの前にひびきまみれ、すべての舌は、神をほめたたえる、と言われ」、そしてその日には、「私たちは、おのおの自分のことを神の御前に申し開きすることになります」(ロマ一四10-12参)。

3 もし、すべての人が、このことを深く自覚しているなら、そのことが社会に対して、どんなに利益となったことでしょう。なぜなら、純粹な道徳の実践に対して、これほど強制力のある動機が、他にないからです。堅実な徳の着実な追求、正義や慈悲、また真理のうちに常に変わらずに歩き続けることなどに対する、力強い動機は、他にあるのでしょうか。「さばきの主が、戸口のところに立っています」(ヤコ五9参)という強い自覚や、また私たちがすぐに主の前に立たなければならぬ、という自覚ほど、あらゆる善を行う私たちの手を強くし、すべての悪から私たちを遠ざけるものが他にあるのでしょうか。

4 ですから、次のようなことを考慮するのは、この集まりの目的に不適當でも不似合いでもありません。

一、私たちが主の審きの御座の前に立つに先立つ主な状況。

二、審きそのものと

三、それに続く、いくつかの状況。

まず初めに、私たちがキリストの審きの座の前に立つに先立つ、主な状況について、考慮しましょう。

1 第一に、「神は、下は地にしるしを示し」(使徒二19)、特に、神は「立ち上がり、地をおののかせ」(イザ二19)ます。「地は酔いどれのように、ふらふら、ふらつき、仮小屋のように揺り動かされる」(イザ二四20)。「大地震があり、kata ton ouranou (方々にというだけでなく)、それも、全地にありまします」(ルカ二11)。つまり、一カ所だけではなく、また数カ所でもなく、人の住んでいる所の全地で、起きるといいます。さらに、「この地震は人間が地上に住んで以来、かつてなかったほどのもので、それほど大きな、強い地震」(黙示一六18)です。その地震のたった一つが起きても、「島はすべて逃げ去り、山々は見えなく」(黙示一六20)なります。一方、水と陸からなっている地球の水のすべてが、それらの恐ろしいほどの振動を感じるでしょう。あの「巨大な大いなる水の源が、ことごとく張

り裂け、天の水門が開かれた」(創世七11)あの時以来、かつて経験されたことのなかった程のどよめきで「海と波が荒れどよめいて」(ルカ二25)います。その動揺は、当時「水から出て、水によって成っていた」(Ⅱペテ三5参)大地を破壊してしまいました。大気は、あらゆる嵐と暴風雨で、暗い「蒸気と雲の柱」(ヨエ二30、使徒二19参)で満ちていて、極地から極地へと雷鳴が鳴り響き、そして数千の稲妻で引き裂かれています。しかし、動揺は、大気だけに留まっていません。「天の万象が揺り動かされ」、「日と月と星には、前兆が現れます」(ルカ二25、26)。固定しているものも周りを回っているものも同様です。「主の大きな恐るべき日が来る前に、太陽はやみとなり、月は血に変わる」(ヨエ二31)。「星は暗くなり」(ヨエ三15参)、そしてその軌道から投げ出され、「天から落ち」(マタ二四29)てしまいます。その時、天の全群からの一致した「叫び」が聞かれます。そして、神の御子であり人の子でもある方の到来を告げる「御使いのかしらの声」が続き、さらに「地のちりの中に眠っている者」(ダニ二2)すべてに対して警報を鳴り響かせる「神のラッパ」(Ⅰテサ四16)が聞かれます。この結果として、すべての墓が開き、人々のからだが起き上がります(エゼ三七12、13、マタ二七52、53参)。「海はその中にいる死者を出し」(黙示二〇13)、そしてすべての者が、それぞれ自身身のからだで起き上がります。そのからだは、私たちには今は想像できない特性のものと変えられてはいますが、本質においては私たち自身のです。なぜなら、「朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならぬからです」(Ⅰコリ一五53)。それどころか、目に見えない世界ですが、「死もハデスも、その中にいる死者を出し」(黙示二〇13)ます。つまり、神が人を創造されて以来、生きた死んだすべての者が、朽ちないものまた不死のものとして

てよみがえります。

2 同時に、「人の子は御使いを」地の上すべてに「遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます」(マタ二四31)。そして、主ご自身が、人の子と御父の栄光のうちに、ご自分の千万の聖徒と無数の御使いたちとともに「天の雲に乗って来」(マタ二四30他、参)ます。そして、「ご自身の栄光の位に着きます。そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、羊(善人)を自分の右に、山羊(悪人)を左に置きます」(マタ二五31、33)。あの愛された弟子が次のように述べているのは、この総体的な集いに関するものです。「私は、死んだ人々(これまでに死んだすべての者)が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた(明らかに人間同士の間での処分の仕方に言及している比喩的な表現)。……死んだ人々はこれらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行いに応じてさばかれた」(黙示二〇12)。

二

これらが、一般的なさばきに先立つものとして神のことばの中に記されている主要な事です。第二に、神が啓示されている範囲において、私たちはさばきそのものを考察していきます。

1 神が「世をさばかれる」(ロマ三6、Ⅰコリ六2参)のは、ご自身の独り子である神の御子によつてです。その方が「出ることは、永遠の昔からの定め」(ミカ五2)であり、その方は「万物の上に

あり、とこしえにほめたたえられる神」(ロマ九5)です。「神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れ」(ヘブ一3)であるその方に、御父は「すべてのさばきをゆだねられました。……子は人の子だからです」(ヨハ五22、27)。なぜなら、その方は「神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができなるとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられた」(ピリ二6、7)からです。さらに、「人としての性質をもつて現れ、自分を卑しくし」、さらにそのうえ「死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。それゆえ、神は……すべての名にまさる名をお与えになり」(ピリ二8、9)、人としての性質のままで、人の子たちをさばく者として、「お立てになり」(使徒一七31参)ました。「生きている人々をも死んだ人々をもさばく方」(一ペテ四五参)ですし、ご自身の来臨の時、生きて見いだされる者と「その先祖のもとに集められた」(士師二10)者との双方をさばく方です。

2 「大いなる恐るべき日」(ヨエ二31)と預言者によって名づけられている時は、聖書では普通「主の日」(ヨエ一15他)と呼ばれています。地上に人が創造されてからすべての終わりに至るまでの期間は、人の子たちの日々です。今私たちが上を通り過ぎていく時は、当然私たちの日です。これが終わるとき、主の日が始まります。しかし、それがいつまで続くかだれが言うことができるでしょうか。「主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです」(二ペテ三8)。そして、この表現そのものから、初代教会の教父たちのいく人かは、例の推論を導き出したのです。その推論とは、「さばきの日」(マタ一〇15他)と一般に呼ばれているものは、実際に一千年であろう、というものです。「千年」とは、真理をはるかに越えた数ではありません。むしろ、それは足りないくらいです。と

いうのは、もし私たちがさばかれるべき人の数を考えるなら、また探求されるべき行動の数を考えるなら、一千年でさえその実行に十分とは思えないからです。それで、数千年から成っていることもあり得ないことではないでしょう。しかし、神はこのこともその時になれば示してくださいでしょう。

3 人類がさばかれる場所に関しては、聖書の中に明白な説明がありません。一人の著名な作家(決して彼一人ではなく、多数の人が同意見です)が、それは地上で行われると推測しています。そこは、彼らがそれによってさばかれる行為を行った場所です。そして、神はそのために、ご自身の助けである天使を遣わされるでしょう。

果てしない場所を平らに引き伸ばし

全人類のためのそのところを広げる

(エドワード・ヤング 'A Poem on the Last Day', ii:19-20, Oxford, 1713)

しかし、主が「天の雲に乗って来る」(マタ二四30、マコ二三26)のは、それが「天空の二倍の高さ」(同書、三:274)ではないとしても、地上の上方と仮定する方が、主ご自身の説明にたぶん一層近いでしょう。そしてこの仮定は、パウロがテサロニケのクリスチャンに書いていることによって少なからず裏付けられています。「キリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです」(一テサ四16、17)。ですから、「大きな白い御座」(黙示二〇11)が地上はるか上方に高められる、ということも

つともなことを思われます。

4 さばかれなければならぬ人々を、だれが数えることができるでしょうか。雨のしずくや海の砂を数えることができないと同様、それはできません。ヨハネは、「だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゆるの枝を持って」(黙示七九) いるのを見た、と述べています。ですから、あらゆる国民、部族、民族、また国語の人々からなる全群衆の数は、どれほど膨大なものとなることでしょうか。この世の始めから時がもうなくなってしまうまで、アダムの腰から出てきたものすべてなのです。もし私たちが一般的な仮定を認めるなら、そしてその仮定は決してばかげたものではないかもしれませんが、地上にはどの一時期を見ても、少なくとも四億の男や女や子供たちからなる人間が生存していたということです。そうした全世代が次々と七千年の間続いて作り出してきた会衆は、何ということになるのでしょうか。

偉大なクセルクスの世界は武装し 誇り高いカンナエの軍勢は……

彼らも一人残らずここにいる そしてここでは彼らも失われたもの

彼らの数はふえ むなく数えられる

限りない大海原の一滴のように失われる

(ヤング、「上掲書」Ⅱ:189, 194-96)

男でも、女でも、幼児でも、この世界の空気を吸ったことがあるなら日数が浅くてもすべてものが、

その時神の御子の声を聞き、いのちへと歩み始め、主の前に現れるでしょう。それが、「死んだ人々が、大きい者も、小さい者も」(黙示二〇12) という表現の、自然な意味のように思われます。つまり、例外なくすべての者を含み、あらゆる年齢、性別、階級を含んでいます。かつて生を受けたすべての者として死んだすべての者、あるいは死と同様の変化を通ったすべての者が含まれています。その日が訪れるずっと以前から、人間の偉大さという幻影は消え去り、無に沈んでいます。死の瞬間にも、それは消え去ります。墓の中では、富む者とか偉大な者などいません。

5 そして、すべての人がそこで、「自分の行いに対して申し開きをする」(ルカ一六2、ロー一四12、黙示二〇12参) ことになりました。肉体をもっていた間にしたすべてのことに対して、それが良いことであっても悪いことであっても、全部を真実に申し開きをしなければなりません。その時、天使たちと人々の前で繰り広げられる光景は、何という光景となることでしょうか。伝説的なラダマンテウスどころか、天と地のすべてを知っておられる全能の主なる神が、

Castigatque, audique dolos; subigitque faeni

Quae quis apud superos, furto lactatus inani.

Distulit in seram commissa piacula mortem.

(ウェルギリウス、「アイネーイス」、v. 567-9) からの引用。一七七四年の全集には、以下のウエスレーの訳も添えられている。

この荒涼とした世界を 厳しいラダマンテウスが支配す

ずる賢い悪党をひとりひとり探し出し 彼らを縛り上げて

人の目には長く隠されてきた罪悪をさらす

隠すなどなんと空しいことか

いますべてが 彼らが恐れてきた光の前に明らかにされる)

また、すべての人の子の行いだけがさらけ出されると言うのではなく、「人はその口にするあらゆるむだなことばについて、さばきの日には言い開きをしなければなりません」(マタ二二36) という点から、そのすべての言葉もその時に明らかにされるのです。ですから、「あなたが正しいとされるのは、あなたのことばに(同様に)行いにも) よるのであり、罪に定められるのも、あなたのことばによるのです」(マタ二二37)。その時、一つ一つの言動に伴っていたあらゆる事情、その性質を変えることはなかつたとしても、その言動の善や悪を増加させたり、減少させたりしたところの事情をも、神は光の中に引き出さないうか。そのことは、「私たちの床のそばや道のそばにいて、私たちの歩みのすべてを探って」(詩篇一三九2参) いる方にとっては、何とたやすいことでしょうか。私たちは、「神にとつてやみも暗くなく、夜は昼のように明るい」(詩篇一三九12参) ということを知っています。

6 それどころか、主は、「やみの中に隠れた事」だけでなく、「心のいろいろな考えやほかりこと」(ヘブ四12) をも「明るみに出され」(一コリ四5参) ます。驚くことはありません。なぜなら、主は「人の思いを探る方」(黙示二23参) ですし、「私の思いを遠くから読みとる方」(詩篇一三九2参) なのです。「すべてのものは、神の目には裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明

をしますのです」(ヘブ四13参)。「よみと滅びの淵とは主の前に」(箴言一五11) 覆いもなくさらけ出されています。まして、「人の子らの心はなおさらのこと」(箴言一五11) です。

7 また、その日にはすべての人のたましいの内的な働きの一つ一つがあらわにされるでしょう。すべての欲望、情欲、傾向性、情愛が、様々な組み合わせをもって、個人の複雑な性格の全体を構成するすべての気質や性癖とともにあらわされるでしょう。そのようにして、だれが義人で、だれがそうでないかが、明白に、また誤りなく明らかにされるでしょう。また、一つ一つの行為や人物、あるいは性格の善し悪しが明らかにわかるでしょう。

8 「そうして、王は、その右にいる者たちに言います。「来なさい。わたしの父に祝福された人たち。あなたがたはわたしに空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、わたしが裸のとき、わたしに着る物を与えたからです」(マタ二五34-36参)。同様に、彼らが地上で行ったすべての善行は、それが「ことばによる」と行いによるとを問わず、御名によって」(コロ三17参) なされたことは何であれ、あるいは「主イエスの」(コロ三17参) ために行ったことは何であれ、人々と天使たちの前で詳述されるでしょう。彼らのすべての善い欲望、意図、思い、彼らのすべての聖なる性癖もまた、その時に記憶されていることでしょうか。そして、それらは人々の間では気がつかれていなかったり忘れ去られていでも、神はそれらを「ご自身の書物に書きしるし」(イザ三〇8参) ておられたことが明らかにされるでしょう。同様に、彼らが正しい審判者から賞賛を受けるために、また聖徒たちや天使たちの前で栄誉と「測り知れない、重い永遠の栄光」(二コリ四17) を増し加えられるために、イエスの御蔭のため

や良心の証しのために受けたすべての苦しみも、公に示されるでしょう。

9 しかし、彼らの悪い行いも明らかにされるのでしょうか。というのは、もし人の全生涯を取りあげるなら、「この地上には、罪を犯さない人はひとりもない」（伝道七20参）からです。その日には、それらの悪い行いも思い出されて、大会衆の前で言及されるのでしょうか。多くの人たちは、そうではないと信じています。そして次のように問いかけます。「もし思い出されるとしたら、それは彼らの苦しみが、いのちが終わってもまだ終わっていないことを意味しないのでしょうか。彼らには依然として耐えなければならぬ悲しみや恥、また面目を失うことがある、という点から、そうなるのではないのでしょうか」。彼らはさらに問います。「そのことは神が預言者によって『悪者でも、自分の犯したすべての罪から立ち返り、わたしのすべてのおきてを守り、公義と正義を行うなら、……彼が犯したすべてのそむきの罪は覚えられることはない』（エゼ一八21、22）と、宣言していることと、どのように調和させることができるのでしょうか」。それは、「わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さない」（エレ三一34）という福音の約束を受け入れたすべての者に対してなされた神の約束と、どのように一致するのでしょうか。あるいは、「わたしは彼らの不義にあわれみをかけ、もはや、彼らの罪を思い出さない」（ヘブ八12）と、あの使徒が言い表していることと、どのように一致するのでしょうか。

10 それらの質問には、次のように答えることができるでしょう。神の栄光がすべてに表されるため、また救いの相続者たちに対する神の知恵、正義、力、そして慈悲が明白かつ完全に表されるために、彼らの生涯のすべての環境が、彼らのすべての気質やすべての欲望、思い、心の中の意図などと

ともに、隠しだてなく公にされるべきことは、明確かつ絶対的に必要なことです。そうでなければ、どのように深い罪と悲惨の中から、神の恵みが彼らを救い出したかを明らかにすることができましょうか。そして、まさに、もしすべての人の子たちの全生活がはっきりと顕されないなら、神の摂理の驚くべき構造の全体は顕されないでしょう。あるいは、数限りない実例において「人に対する神の扱い方を義とする」（ミルトン、*Paradise Lost*, i:26）ことは、決してできないでしょう。もし、「おおわれているもので、現されないものではなく、隠されているもので知られずにもつものはありません」（マタ一〇26）という私たちの主のことばが、その最大限の意味で、しかも何の限定もなく成就されないなら、日の下におけるおびただしい神の摂理は、依然として道理に合わないものと思われたままでしょう。そして、神がやみの中にも隠されているすべてのことを光の中に引き出すその時だけ、その暗やみの中の行為者たちがだれであれ、神のすべての道が賢く善であったことがわかるでしょう。神が「黒雲を通して見ておられた」（ヨブ二12、14参）ということ、知恵に満ちた「みこころにより」（エペ一11）すべてのことを支配しておられたということ、そして一つとして偶然や人の気まぐれにまかされていなかったことがわかるでしょう。むしろ、神はすべてのことを「力強く、かつ優しく」定められておられ、すべてのことを正義、あわれみ、真理という一つの鎖に結びつけるようにうまく収められたということがわかるでしょう。

11 そして、神の完全な御業の実体がわかると、義人は言葉に言い表せないほどの喜びを覚えるでしょう。義人は、それが何であれ、ずっと以前に雲のようにぬぐい去られ小羊の血によって洗い流された過去の罪に対しては、それがどのような苦痛に満ちた悲しみや恥であれ、少しも感じません。「彼

らが犯したすべてのそむきの罪は、彼らの不利益のために、決して覚えられないことがない」（エゼ一八22参）ということ、また「彼らの罪とそむきの罪と不法とは、彼らを罪に定めるためには思い出されない」（ヘブ八12、一〇17参）ということは、彼らにとつて有り余るほど十分なことでしよう。これが、あの約束の明白な意味です。そして、すべての神の子たちは、それが真実だということを見いだし、永遠の慰めを得るでしょう。

12 義人がさばかれた後で、王はご自身の左にいる者たちに顔を向けるでしょう。そして、彼らもまたさばかれます。すべての人が、「おのおのその行いに応じて」（マタ一六27）さばかれるのです。しかし、彼らの外面的な働きだけが弁明の場に出されるものではありません。彼らが口にしたすべての悪しき言葉、それだけでなく、彼らのたましいの中に場所を占めているか、あるいは過去において占めていたところのすべての欲望、情欲、気質も弁明の場に出されます。さらに、彼らがかつて心の内に抱いたことのある、すべての悪しき思いや意図も同様です。その後、右側にいる者たちに對して、喜びに満ちた無罪放免の判決が宣告されるでしょう。左側の者たちには、恐ろしいさばきの判決です。その両方もが、まるで神の御座のように、固定され不動のまままで続くはずで

三

1 第三に、全体的な審判の後に続くであろう状況について、考察していきます。まず、悪しき者たちと善良な者たちに宣告された判決の実行に関してです。「この人たちは永遠の刑罰にはいり、正し

い者たちは永遠のいのちにはいるのです」（マタ二五46）。ここで注目すべきは、全く同じ語がその前半と後半の両方の節で用いられていることです。つまり、刑罰が永遠に続くのであれば、報賞も永遠に続くでしょうし、刑罰に終わりがあるとすれば、報賞もどこかで終わりに至ることになります。いえ、神に終わりがありません。あるいは神の慈悲と真理が力を失うようなことにならない限り、決してそうはなりません。「そのとき、正しい者たちは、天の父の御国で太陽のように輝き」（マタ一三43）、「とこしえに神の右にある、楽しみの流れから飲む」（詩篇一六四、三六8参）でしょう。しかし、この点に関して、どのような記述も不十分です。どのような人の言語も及びません。唯一、第三の天にまで引き上げられた者だけが、それに関して正確な概念を持つことができます。しかし、そのような者であっても、自分で見たものを描写することはできません。そういうことは、「人間には語ることを許されていない」（IIコリ一四）のです。

一方、「悪者どもは、よみに帰って行く。神を忘れたあらゆる人々」（詩篇九七参）も同様です。彼らは、「主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受ける」（IIテサ一9）でしょう。彼らは、「硫黄の燃える火の池に、投げ込まれる」（黙示一九20参）でしょう。そこは、元来「悪魔とその使いたちのために用意された」（マタ二五41）場所です。そこで彼らは、苦悩と苦痛のために、「舌をかみ」（黙示一六10）、「上を仰いで神をのろう」（イザ八21参）でしょう。そこでは、地獄の犬たち——プライド、悪意、復讐、怒り、恐怖、絶望——が常に彼らを食い尽くします。そこでは、「彼らは昼も夜も休みを得ず、彼らの苦しみの煙が、永遠にまでも立ち上って」（黙示一四11参）います。「そこでは、彼らを食ううじは、尽きることがなく、火は消えることがありません」（マコ九

48)

2 その後、もろもろの天は「巻き物」(黙示六四)のようにしほみ、「大きな響きをたてて消え失せ」(Ⅱペテ三10)るでしょう。そしてそれらは、「御座に着座しておられる方の御前から逃げ去りますが、あとかたもなくなってしまうでしょう」(黙示二〇11参)。それらが消え去っていく様子は、ペテロによって明らかにされています。「神の日には、天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまいます」(Ⅱペテ三12参)。美しい構造物の全体が、その荒れ狂う元素によって破壊され、その各部の結びつきはすべて壊され、そしてすべての原子がばらばらに引き裂かれるでしょう。同じものによって、「地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます」(Ⅱペテ三10)。「永遠の丘」(創世四九26)や、時代の荒波をものともせず、数千年の間動くことなくそびえ立ってきた山々というような、自然界の巨大な存在が、炎の破滅に沈んでいくでしょう。人工のものはおさらです。墓、柱、凱旋門、城、ピラミッドなど、それが最高に耐久性のあるものでも、人の勤勉を最高に発揮したものであっても、炎の征服者に耐えることができるはずがありません。すべてが一つ残らず、死に、滅ぼされ、消え去るでしょう。まるで、人が目覚めたときの夢のようになります。

3 確かに、幾人かの偉大で善良な人々によって、物質を消滅させるには創造と同じ全能の力が必要とされる、と想像されてきました。消滅させることばを出し、無から生じさせることばを発する全能の力です。ですから、全宇宙のどの一部分も、またどんな原子も、その全能の力なしには、完全に、あるいは究極的に破壊されないでしょう。むしろ、私たちがまだ観察したことのない、火の最終的な働きは、物質を圧縮してガラスにすること、と彼らは想像しています。火は、その比較的小さな力に

よって、物質を灰に変えました。同様に、神が定めたその日には、もし物理学的な意味での天がそうでないとしても、全地はこの変化を経験するでしょう。その後、火はそれ以上それらのものを支配することができません。そして、そのことがヨハネに示された啓示の、「御座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった」(黙示四六)という表現の中に暗示されていると、彼らは信じています。私たちは、現時点では肯定も否定もできません。ただ、来世でわかるでしょう。

4 もし、あざける者たちや、取るに足りない哲学者たちが、「これらのことが、どのようにしてあり得るのですか。もろもろの天や、水陸から成る地球全体を消滅させてしまうような、そんな巨大な量の火がどこから来るといいますか」と尋ねるなら、まず第一に、そうしたことに答えることの難しさは、キリスト教の体系に固有のものではない、ということを彼らに思い起こしていただくよう、お願いします。偏狭頑迷でない異邦人たちにも、同じ意見が、ほぼ例外なくいたるところで通用しています。それで、それらの有名な「自由な思想家たち」のうちの一人が、一般的に受け入れられている考えに従って、次のように語っています。

Esse quoque in factis reminiscitur, affore tempus,

Quo mare, Quo tellus, Correpique regia coeli

Ardeat, et mundi moles operosa laboret.

(オウイディウス、*Metamorphoses*「転身物語」、i: 256-58.

「彼はまた 次のことを思い出した

やがて一つの時が運命づけられていることを

その時がやってくる時 海と陸 まだ燃えていない天の王宮

そして苦勞した宇宙全体が火で滅ぼされてしまうことを」

しかし、第二に、たとえ自然界の事柄に対する私たちのわずかで表面的な知識からでも、主の日のために豊富な火の燃料がすでに備えられ蓄えられている、と答えるのは容易なことです。神によって任命された一つのすい星が、遠く離れた宇宙の果てから、何と短時間でやってくることができるのでしょうか。そして、太陽からの帰途、万一それが地球に留まるとしたら、その時それは赤熱の大砲の弾より、数千倍も熱いのですから、その直接の結果がどうなるかわからない人はだれもいないでしょう。しかし、天上界の天ほどには高く上がらなくても、「世界を照らす」(詩篇九七4) 同じ稲光が、もし自然界の主が命じられたならば、破滅をもたらす完全な破壊を与え得ないでしょうか。あるいは、地球自体だけを考えても、地球の内部に、時代から時代へと液体の火の巨大な貯蔵があったことは、誰も知りません。煙と燃えさかる炭を噴出している、エトナ、ヘクラ、ベスピアス、そして他のすべての火山は、それらの燃えさかるかまどの口と多くの証拠以外の何ものでもないでしょう。また、同時に、それによってご自身のことばを成就するものを、準備を整えて手にしていることの多くの証拠でしょう。それどころか、もし私たちがわずかに地上の表面を観察するならば、また私たちが取り囲んでいるものを観察するならば、私たち自身が、つまり私たちの全身が、私たちの周囲にあるすべてのものと同様に、火で満ちていることは(数限りない実験が少しの疑いもなく証明しているように) 明白

です。この触知できない天上界の火を、肉眼にも見えるようにすることは、容易なことではないでしょうか。また、その結果として、台所の火によって及ぼされたと全く同じ影響を、その火が燃える物質に及ぼすことは、容易なことではないでしょうか。そこで、神がその秘密の鎖を解くことが何よりも必要とされます。その鎖によって、この抵抗できない動因が今も拘束され、すべての微分子に静かに横たわっているのです。それが全宇宙の構造を粉々に引き裂き、すべてを一つの共通の破滅に引きずり込むのは、なんと速やかなことでしょうか。

5 私たちの真剣な考察に値する、さばきの後に続くもう一つの状況があります。ペテロは、「私たちは、神の約束に従って、正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます」(IIペテ三13)と述べています。その約束は、「見よ。まことにわたしは新しい天と新しい地を創造する。先の事は思い出されぬ」(イザ六五17) というイザヤの預言の中にあります。その新しいものの栄光は、非常に偉大なものとなるでしょう。これらのものを、ヨハネも神の幻の中で確かに見ました。彼は、「私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り」(黙示二一1)と述べています。そして、「そこには正義だけが住む」(IIペテ三13参)のです。それゆえに彼は、第三の「天から出る大きな声がこう言うのを聞いた。『見よ。神の幕屋が人とともにある。神は、彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの神となる』」(黙示二一3参)と付け加えています。必然的に、それゆえ、すべての者は幸せになるでしょう。神が、「彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってください。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しきもない」(黙示二一4)。「もはや、のろわれるものは何もなく、神の御顔を仰ぎ見」(黙示二一3、4)、また神のすぐ近くまで近づくことができる

き、それゆえ、神に最高に似たものとされるでしょう。これは、聖書の言葉の中で、最も完全な幸福を表現するための、最も強い表現です。「また、彼らの額には神の名がついている」(黙示二二4)。彼らは、公に神の所有物として認められるでしょう。そして、神の栄光に満ちた性質が、彼らの中にはっきりと目に見えるように輝き出るでしょう。「もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらぬ。彼らは永遠に王である」(黙示二二5)。

四

唯一残っているのは、これまで考察してきたことを、ここに神の御前にある私たちすべてに適用することです。主が「義によつて世界をさばく」(詩篇九8) 日を非常に自然に私たちに暗示している地上の裁判という状況が、この適用を直接的なものへと導いています。ですから、私たちにあのもっと恐ろしい大審判の時を思い起こさせることにより、地上の裁判は、多くの教訓を提供することができるとでしょう。それらのうちのいくつかを、少しだけ触れることにします。神が、それらを私たちすべての心に記してくださいませよう。

1 第一に、地上に正義を執行し、傷ついた者を守り、そして悪を行う者を罰するために、知恵に満ち恵み深い神の摂理によつて派遣された者たちの「足は、なんと美しいことよ」(イザ五二7参)。彼らは、「私たちに益を与えるための、神のしもべ」(ロマ一三四参)ではないでしょうか。平和社会の崇高な支持者であり、無実の者と徳の高い者の支援者であり、私たちがこの世で与えられるすべて

の祝福の偉大な保証でもあります。そして、これらの一人ひとりが、地上の君主だけでなく、地をさばく方を表していないでしょうか。その「名が、ももに、王の王、主の主、と書かれている」(黙示一九16参)という、その方です。「いと高き方の右の手」に属するこれらすべての子どもたちよ、主が聖であるように聖とされますように。御座の傍らにいる知恵によつて、御父の永遠の知恵である方のように賢くされますように。その方が公平に満ちておられるように、人をえこひいきするような人になりませぬように。むしろ、「人の行いに応じて報いる」(箴言二四12、マタ一六27)ものとなりますように。情け深く、優しい慈悲の方ですが、確固として容赦なしに正しい方ようになります。そういうわけで彼らは、悪を行っている者たちにとつて、「無意味に剣を帯びていない」(ロマ一三4)者として、実に恐ろしい存在となるでしょう。それで、私たちの国の法律は、十分に活用され、また当然の榮譽を保つでしょう。また、私たちの王の王座は、いつそう「義によつて堅く据えられる」(箴言二五5)でしょう。

2 低い階級において正義を執行するように神と王が任命したあなたがた、真に光榮ある人々よ。あなたがたは、雲のうちにやつて来られるさばき主に付き添う、仕える霊たちと、比べられないでしょうか。彼らと同様、あなたがたも神と人とに対する愛で燃え立たせられますように。義を愛し、不正を憎むように。あなたがたすべてが、自分たちの個々の範囲で(そのような榮譽を神はあなたがたに与えてもおられます)、救いの相続者となる人々と、あなたがたの偉大な主権者の栄光のために仕えますように。あなたがたが、平和の確立者であり続けますように。あなたがたの国の祝福と勳章であり、罪を犯した国の保護者であり、あなたがたのまわりにいるすべての人にとっての守護天使であり

続けますように。

3 上からの命令を実行することがその任務である、あなたがたは、人の子の御顔の前に立っている主のしもべたちに似ようと懸命になっておられることでしょうか。「みこころを行い、主に仕え」（詩篇一〇三21）、また「みことばの声に聞き従う」（詩篇一〇三20）主のしもべのことです。彼らと同様に墮落しないでいることは、あなたがたにとって非常に重要なことではないでしょうか。あなたがたが神のしもべであることを立証すること、公義を行いあわれみを愛すること、また、あなたがたがしてもらいたいようにすべての人に対してすること、こういうことも重要なことです。それゆえ、あの偉大なさばき主、その方の目の下にあなたがたは立ち続けているのですが、その方があなたがたにも次のように語られるでしょう。「よくやった。良い忠実なしもべだ。主人の喜びとともに喜んでくれ」（マタ二五21、23参）。

4 今日主の御前にいるあなたがたすべてに、もう少し言葉を付け加えることを忍んでいただきます。さらに恐ろしい日がやってくることを、一日中、心に留めておくべきです。今日の集りも大きな集会です。しかし、全地の上にかつて生きていたすべての人の子たちからなる大集会に比べたら、何になるでしょうか。やがて、すべての人がその日を経験します。今日、告訴されている事柄の審議のためにさばきの座の前に立つのは数人にすぎません。そして、彼らは、やがて引き出され、さばかれ、そして判決を受けるまで、今は多分鎖でつながれ獄中に留められています。しかし、語っている私も聞いているあなたがたも、私たちがすべては、「キリストのさばきの座に立つ」（ロマ一四10参）のです。そして、私たちは今は、私たちの家ではないこの地に、肉と血というこの獄中であって、多分多くの

者は暗やみの鎖にもつながれたまま、留められています。それは、私たちが引き出されるよう命じられるまで続きます。ここでは、ひとりの人が犯したと推定される一つか二つの行為に関して、尋問されます。やがてのさばきでは、私たちは、ゆりかごから墓場までのすべての行いについて、すべての言葉、すべての欲求と気質、すべての思いと意図、心・からだ・財産といった種々の賜物をどのよう

に用いてきたかということもすべて、申し開きをしなければなりません。神が「会計の報告を出しなさい。もうあなたは管理人ではないから」（ルカ一六2参）と語られます。この地上の法廷では、有罪のものであっても、幾人かは証拠不十分で逃れることも可能です。しかし、かの法廷では、証拠不十分という事はありません。あなたが絶対には知れない秘密の交わりを持ったすべての人、あなたのすべての計画と行為とに内々に関与していたすべての人が、あなたの面前に備えられています。同様に、悪い計画を吹き込んだり、その実行に手を貸した暗やみの霊もすべて、備えられています。神の御使いたちも、同様に備えられています。それらは、「全地を行き巡る主の目」（ゼカ四10）です。彼らは、あなたのたましいを見守り、あなたが許す範囲であなたの益のために労したのです。同様に、一千の証人をひとまとめにしたような、あなたの良心もいます。それは、もはや目隠しをされたり口を封じられたりすることはできません。むしろ、あなたのすべての思いや言葉や行動に関する、ありのままの真実を知り、また語るよう強いられています。良心は、一千の証人のようなものでしょうか。そうです。そうならば、神は、一千の良心のようなものです。だが、「大いなる神であり私たちの救い主であるイエス・キリスト」（テト二13）の面前に立つことができるでしょうか。

見てご覧なさい。主は来られます。主は雲をご自身の車とされます。主は、風の翼に乗って来られ

ます。焼き尽くす火が、主の前を歩き、燃え上がる炎が後についてきます。見てください。主は御座に座しておられます。衣のように光をまとい、尊厳と威光で飾られています。見よ。主の目は燃える炎のようで、その声は大水の音のようです。

あなたは、どのようにして逃れるのでしょうか。山々にあなたの上に覆いかぶさるよう求め、岩々があなたを覆うよう求めようというのですか。ああ、山々それ自体が、また岩々、大地、大空などが、今まさに逃げ去ろうとしているのです。あなたは判決を阻止できますか。なにをもってそうできるのですか。あなたの家の全財産や、数え切れないほどの金や銀をもってしようとするのですか。盲目で哀れな人。あなたは裸で母の胎から出、また裸で永遠へと入っていくのです。さばき主である主の言われることを聞きなさい。「さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい」(マタ二五34)。なんと喜ばしい知らせでしょうか。天の端々に響いている、「のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ」(マタ二五41)というあの声とは、なんとかけ離れていることでしょうか。どちらの判決にしろ、その完全な執行を阻止したり遅らせたりすることはできません。そのようなことを期待するのは、むなししい望みです。ご覧なさい。破滅の機が熟している人々を受けようとして、「よみは下界から動いて」(イザ一四9参)来ています。また、栄光の世継ぎが入って来ることができるよう、「永遠の戸が、そのかしらを上げ」(詩篇二四7、9参)ています。

5 「そうだとすれば、私たちは、どれほど聖い生き方をする敬虔な人でなければならぬことでしょうか」(IIペテ三11参)。主が、「御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに」(Iテサ四16参)

降って来られるのは、それほど先のことではあり得ないとわかっています。その時、私たちは、各自の前に進み出て、「自分のしたことに関して、報告を出さ」(ルカ一六2、黙示二〇12参)なければならぬでしょう。「そういうわけで、愛する人たち。このようなことを待ち望んでいるあなたの方ですから」(IIペテ三14)、また主が「もうしばらくすれば来られ、おそくなることはない」(ヘブ一〇37参)、ということを知っているのですから、「しみも傷もない者として、平安をもつて御前に出られるように、励みなさい」(IIペテ三14)。そうしない理由があるでしょうか。あなたがたのうちの一人が、主の現れの時、左側の中に見いだされて良いはずはありません。主は、「ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです」(IIペテ三9参)。悔い改めによって血を流しておられる主を信じる信仰へ進み、信仰によって、しみのない愛へ、また心のうちに新しくされた神の完全な似姿へと進み、そしてすべての交わりを聖いものとすることを望んでおられます。以上のことを、「万民の審判者が同時に」「すべての人々の救い主」(Iテモ四10)であることを思い起こすとき、あなたがたは疑うことができますか。主は、ご自身の血をもってあなたがたを買われたではありませんか。それは、あなたがたが「滅びることなく、永遠のいのちを持つため」(ヨハ三16)ではなかったのですか。主の正義よりも、主のあわれみを立証しなさい。主の力ある雷鳴よりも、主の愛を立証しなさい。主は、「私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません」(使徒一七27)、そして今や主は、「世をさばくためではなく、救うために」(ヨハ三17参)来ておられます。主は、真ん中に立つておられます。罪人よ、主は今、たった今、あなたの心の扉をたたいていませんか。ともかくも「このあなたの日のうちに」平和のことを、あなたがたが知ることができますように。謙遜な信仰と、聖い積極

説教 16

恵みの手段

Means of Grace

的なそして忍耐深い愛によって、「あなたのためにご自身をお捨てになった」(ガラ二20参) 主に、今あなた自身をささげることが出来ますように。そうすれば、あなたは、主の日に主が天の雲に乗って来られるとき、この上もない喜びで喜ぶでしょう。

ウエスレーは、恵みの手段を「神の恵みを伝達するための通例の媒介として、神によって定められた、外的なしるし、言葉、行為」として定義している(二・一・一)。(恵みの手段)という英語は、一六六一―一六二二年の英国国教会「祈祷書」においてははじめて登場する。そこに添えられたカテキズムの中で、礼典とは何かという質問に対して、アウグスチヌスの古典的な礼典定義に沿って、「我々に与えられる内的・霊的恵みの外的・可視的しるしを意味し、それは、そうした恵みを受ける手段として、またそれを確かに得る保証としてキリスト自身によって定められたものである」と答えられている。

プロテスタントの世界においては、礼典は洗礼と聖餐の二つに限定され、さらに恵みの手段の中には、みことばが含まれている。また、英国国教会の伝統の中では、聖書と二つの礼典に加えて、祈りがそうした手段として貴ばれてきた。

この説教の中で、ウエスレーは礼典・恵みの手段に関する誤った教えを、二つの角度から批評している。すなわち、それを軽視するか(*despise*)、あるいはそれを乱用するか(*abuse*)である(一・4)。

軽視するとは、手段などというものは聖霊の働きを妨害するものであり、神は外的・可視的手段を媒介としないで働くことができるという神秘主義的な考えである。歴史的には、ルターとミュンツァーの論争は有名である。ルターは、聖霊は常にみことば(恵みの手段)を通して働くものであると主張したのに対して、ミュンツァーは「文字は殺し、御霊は生かす」(IIコリ三・6)に基づき、聖霊によって与えられる内なることばの優位性に固執し、

次のように述べた。「聖霊を持っていない者は、聖書を百冊食べたとしても、神についてなんら深い事柄は知りえない」。それに対して、ルターは、「聖霊を(鳩でも飲むように)ごっこりと、その羽まで全部飲み込んだ」と思っているミュンツァーなど相手にしないと反論した。ウエスレーの論争の相手は、ツィンツェンドルフ率いるモラビア派であった。モラビア派は、人が神の前に義と認められるのが神の恵みの賜物であるなら、それを求める者は、聖霊の働きを人間側の行動で妨害しないために、静かに・何もせずに・受け身の形で待っているのが最善であろうと主張した(静止主義/*stillness*)。それに対して、ウエスレーは、確かに神を待つのであるが、それは神が定められたすべての手段を積極的に用いつつ待ち望むべきであると反論した(論争の経緯については、「日誌」1739.11.1―12.31を参照)。求道者は、備えられている手段を通して熱心に神の恵みを求めるべきことを、また救われた者は信仰を堅持し、恵みに成長するために、可能な限り恵みの手段を活用することを勧めた。恵みの手段は、神の恵みが人間に伝達されるために、神によって備えられた管(*channel*)であるという。

この説教の中で、ウエスレーは恵みの手段を軽視するのと同じく、それを乱用する考えを批判している。カトリックの *ex opere operato* という考え——即ち、儀式を正しく執行することで、恵みの臨在と提供は保証され、効力があるとする考え——は拒否されなければならぬ。手段はあくまで手段であって、それ自体に、またそれを用いる行為自体に霊的効力があるわけではない。例えば、聖餐のパンを食すること、それが自動的に恵みに通じるのではない。「キリストこそが、唯一の神の恵みの手段であり」(二・4)、個々の恵みの手段は、信仰をもってそれを用いる者を恵みの源泉であるキリストに密接につなぎ止め、

主から霊的栄養分を吸い上げるために備えられた（管）である。したがって、ウエスレーは「神はあらゆる手段を越えた存在であるという新鮮な意識を常に失わないようにしなさい」「また」あらゆる外的手段の中に、またそれを通して、ただ聖霊の力と御子の功績だけを追い求めなさい」（五・4）と、手段を用いることだけでなく、むしろ信仰を励ましている。鍵となるのはキリストとの個人的な関係に基づく信仰である。よって、誤って手段に頼ることにより、自己義認の思いが湧いてくるようなことがあるとすれば、熱心に手段を用いることがえって災いにもなりかねないという警告で説教は閉じられている。

説教 16 「恵みの手段」

「あなたがたは、わたしのおきてを離れ、それを守らなかった」。 （マラキ書三）

一

1 しかし、いのちと不死が福音によって、明るみに出されたのですから、もはやどのような「おきて」（ordinances）が存在するのでしょうか。キリスト教の時代にあつて、恵みが注がれる通常の管として、神によって定められたどのような「手段」（means）が存在するのでしょうか。初代教会では、こうした質問は、公然と自分自身を異教徒と認めている人でなければ、決して提出できなかったものです。クリスチャン全体は、キリストがご自身の恵みを人々のたましいに伝えるために、特定の外的な手段を定められたことに同意しています。彼らがその手段を絶えず実践していた事実が、その問題を議論の余地のないものにしました。「信者となった者たちはみないつしよにいて、いつさいの物を共有にして」（使徒二四） いる間は、「彼らは使徒たちの教えを堅く守り、パンを裂き、祈りをしていた」（使徒二四）とあるとおりです。

2 しかし、時がたつにつれ、「多くの人たちの愛は冷たくなり」（マタ二四） である人たちは手段を目的と間違ふようになり、そして宗教を、神の似姿へと更新される心より、むしろそれらの外的なわざを行うこととするようになりました。彼らは、すべての「命令」が、「きよい心と偽りのない信仰とから出て来る愛を目標としている」（一テモ一） であり、心を尽くして彼らの神である主を愛し、また自分自身のように隣人を愛する、ということをおぼえてしまいました。また、「神の力を信じる信仰」（コロ二） によつて、プライド・怒り・悪しき願望などからきよくされることなどが目標であることを忘れてしまいました。また、宗教は原則的にこれらの外面的な手段によつて成り立ってはい

ないが、それでもそれらの手段のうちに神が喜ぶ何かがあるのではないかと想像した人々もいたようです。彼らは、律法のより重要なもの、神の正義・憐れみ・愛において、厳格であったとは言えませんが、それでも彼らを神の目に受け入れられるものとする何かがあると想像したようです。

3 そのように、手段を乱用した人々には、それらの手段が、その定められた目的に貢献しなかったことは明らかです。むしろ、健康のためであるべきものが、つまりきつかけとなりました。彼らは、そのうちにある祝福を受けるところか、ただ自分たちの頭の上へのろいを招いただけでした。心と生活において天の御国にふさわしくさらに成長するところか、以前にも倍して地獄の子となってしまう。そのような悪魔の子たちに対して、これらの手段が神の恵みを伝達しないことにはつきりと気づいた他の人々は、この特殊なケースから、「それらは神の恵みを伝達する手段ではない」という一般的な結論を導き出すようになりました。

4 しかしながら、神のおきてを乱用した人々の数は、それらを軽蔑した人々の数よりもはるかに多数であったことは事実です。しかしここで、次のように考える人々が出てきたのです。その人たちは、すばらしい理解力（時として、それは少なからぬ学識と結合していました）を持つていたというだけでなく、同時に愛の人であり、体験的に真の内的な宗教に通じていた人たちのようです。その幾人かは、その時代の人々に良く知られた燃えて輝くともしびでした。また、あふれる不敬虔に対して、その破れ口に立ちふさがったことのゆえに、キリストの教会から称賛を受けるにふさわしい人々でした。

これらの聖なる貴い人々は、当初、うわべだけで心の伴わない宗教は何の価値もないことを示すこ

とに終始していたのだと思われれます。つまり、「神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによつて礼拝しなければならぬ」（ヨハ 4:24 参）わけですから、外的な目に見えるかたちでの礼拝は、心が神に捧げられていないならば徒勞にすぎません。ですから、外的な神の命令は、内的なホーリネスを前進させるときには大いに益となりますが、もしそれを前進させないときには、無益で空虚なものですし、空なるものよりも軽いものです。それどころか、それらが、いわば、その代わりとして用いられるなら、主にとつて全くいまわしいものとなります。

5 そこで、そうした人々のうちの幾人か、外的宗教が全く無であるかのように、またそれがキリスト教の中に何らの位置も有していないかのように語つたとしても、不思議ではありません。神の定めに対するあの恐ろしい冒瀆が教会全体に広がって、この世から真の宗教をほぼ追い出してしまつていると彼らは強く確信し、神の栄光に対する強烈な熱心と、たましいをあの致命的な錯覚から回復させようとの願いから語つていのです。もし彼らが、常に十分な注意を払いつつ自分たちの意見を述べたのではなかったとしても、少しも驚くことはありません。その結果として、不注意な聴衆は、あたかも彼らがすべての外的手段を一括して無益なものとし、また神の恵みを人のたましいに伝えるための通常の管として神が意図されたものではない、と非難していると信じたのかもしれない。

それどころか、それらの聖なる人々の中の幾人か、ついにはこの意見に陥つてしまつたといふことも、あり得ないことではありません。特に自分からではなく神の摂理によつてすべての神の定めから切り放された——多分、あちこちと放浪していたり、一定の住まいを持たず、あるいは地の穴や洞窟に住んだりしていたことにより——人々が、そうなつたことでしょう。これらの人々は、すべての

外的手段なしに神の恵みを経験したので、同じ恵みが、故意にそれらの外的な手段を絶っている人々にも与えられると推測したということもあり得るでしょう。

6 このような考えがどんなに簡単に広がって行き、人々の心の中に徐々に入り込んで行くかは、経験としてわかります。特に、たましいの死の眠りから完全に醒まされ、自分たちの罪の重荷が重すぎて担いきれないものとして自覚し始めた人々の心の中に入り込んで行きます。これらの人々は、一般的に、自分たちの現状に対して我慢できず、そこから逃れるためにあらゆることを試みる人々です。いつでも何か楽にしてくれたり幸せにしてくれるような新しいものや新しい提案があると、すぐに飛びつく人々です。彼らは多分、ほとんどの外的な手段をすでに試したことがあり、その結果自分たちのうちにやすらぎを見いださなかつたのです。むしろ見いだしたのは、一層の自責の念や恐れ、また悲しみと断罪だつたのでしょう。ですから、これらの人々に、それらすべての手段を絶つ方が良くいと説得するのは容易なことです。彼らはすでに、空しく（そのように思えるのですが）努力することに疲れ、火の中で焼かれるために勞することに疲れているのです。ですから、彼らのたましいにとつて少しの喜びもないものを投げ出す口実や、苦痛に満ちた努力をやめ、そして怠惰な無活動の中に沈み込んでいく口実があれば、どんなものでも喜ぶでしよう。

一一

1 以下の論説において、私は、恵みの手段 (means of grace) というものがあるのかなのか、詳

細に調べてみようと思ひます。

〈恵みの手段〉は、神によつて定められた外的なしるし (signs) ・言葉・行為であり、この目的のために——神が先行的な恵み、義認や聖化の恵み (grace) を人に伝達する通例の管となるよう——定められたものと私は理解しています。

私は、この〈恵みの手段〉という表現を用います。なぜなら、それ以上のものを知りませんし、長年にわたつてキリスト教会において一般的に用いられてきたからです。特に、私たち自身の英国教会によつて用いられ、そして「恵みの手段と栄光の望み」(英国国教会「祈祷書」感謝一般の項)の両方のゆえに神を崇めるように私たちを指導し、また聖礼典 (a sacrament) は「目に見えない内なる恵みの目に見える外的なしるしであり、またそれによつて私たちがその恵みを受ける手段です」(「同書」教会問答)と教えています。

これらの手段の主要なものは以下のようです。まず、祈りです。隠れた所での祈りも、大会衆とともにささげられる祈りも同じです。次に、聖書の探求。これには、読むこと、聞くこと、そして黙想することも含まれています。また、聖餐式にあずかること、つまり主を覚えてパンを食しぶどう液を飲むことです。これらは、人のたましいに神の恵みを伝えるための、通常の管として神が定められたものと私たちは信じています。

2 しかし私たちは、手段の価値のすべては宗教の目的に實際的に役立つかどうかにかかっていることを認めます。つまり結果として、これらのすべての手段は、目的から外れたときには、無よりも劣るものですし、空しいものです。また、もしそれらが實際的に神の知識と愛へと私たちを導かない

としたら、それらは神の目に受け入れられないものです。それどころか、それらは神の前に嫌悪され、神の鼻に悪臭を放つものとなります。特に、もし、それらが役立つように意図された宗教用の「減刑」(commutation)の一種として用いられるならば、神はそれらを担うのに疲れ果てておられます。そのように、神の腕を神ご自身に敵対させ、また本来は心にキリスト教信仰をもたらすために定められたその手段によって、逆に信仰を心から閉め出すとは、なんと愚かで邪悪なことでしょう。

3 また、すべての外的な手段は何であれ、もし神の御霊から離れているなら、それは全く益をもたらすことができません、少しも神の知識や愛をもたらすことはできないと認めます。議論の余地のないことですが、どのような助けであれ、地上に注がれる助けは、神ご自身がなされるのです。ご自身の全能の力によって、神の目に喜ばれることを私たちのうちになされる方は、神だけです。すべての外的なもの、神がそれらのうちに働き、神がそれらのものを用いて業をなすのでなければ、単に弱々しく卑しい要素にすぎません。ですから、どのような手段であれ、その中に何らかのそれ自体の持つ固有な力があると思っている人はだれでも、聖書も神の力も知らずに、大いに思い違いをしているのです。祈りにおいて語られる言葉そのものや、読まれる聖書の文字、あるいは聖餐式に受けるパンとぶどう酒などには、そのものに固有の力があるわけではありません。ただ神だけがあらゆる良き賜物の与え主であり、すべての恵みの創始者です。そして、すべての力は神のものであり、それによってのみ、どのような外的手段であれ、それらを通して私たちのたましいに様々な祝福が注がれるのです。同様に、もしこの地上に何等かの手段というものがなかったとしても、神は同じ恵みを与えることができるということをおぼろげに私たちが知っています。その意味において、神に関して言えば、手段というよう

なものはないと断言してもよいでしょう。神は、どのような手段を通して、あるいは全く手段がなかったとしても、ご自身を喜ばせることはどのようなことでも同じ様に行うことができるという点からすると、そう言うことができます。

4 私たちはさらに、どのような手段を用いたとしても、一つの罪さえ決して贖うことはできないと認めます。どのような罪人であれ、神と和解され得るのは、キリストの血潮による以外ありません。私たちの罪のためのなだめの供え物はほかにありません。罪と汚れのための泉も、ほかにありません。キリストにあるすべての信仰者は、キリストにある以外、何の功績もないことを深く確信しています。また、自分自身のどのような働きにも何の功績がないこと、また祈りを口に出して捧げること、聖書を探求すること、神の言葉を聞くこと、聖餐のパンを食しコップから飲むことなどにも、何の功績もないことを深く確信しています。ですから、誰かが使ってきた「キリストだけが唯一の恵みの手段です」(「日誌」1740.4.25)という表現によって、次のこと、つまり、キリストだけが恵みの功績をもたらず根拠(nutritious cause)である、ということだけが意図されているなら、それは神の恵みを知っている人ならだれも反論できません。

5 しかし、もう一度申し上げます。私たちは、クリスチャンと呼ばれている人たちの中の大部分が、今日まで、恵みの手段を乱用し、結果として自分たちのたましいを破滅させている(憂鬱な事実ではありませんが)ということをお認めします。これは、形だけで力の無い敬虔で満足し、安んじているすべての人々の場合でも同じであることは、疑いありません。彼らは、自分たちの心にキリストが一度も啓示されず、また神の愛が心のすみずみまで注がれていないにもかかわらず、あれとかこれとかを

していることの故に、自分たちがすでにクリスチャンであるとあさはかにも思いこんでいるか、そうでなければ、それらの手段を用いているというはかない根拠のゆえに、間違ひなくそうに違ひないと考えているかのいずれかです。そして、彼らは、(多分ほとんど意識してはいないでしょうが) それらの中にある種の力があり、それによってやがて(彼ら自身はいつかは知らないのですが) 聖とされるに違ひないと、愚かにも夢見ているか、それとも、それらの手段を用いること自体の中に、何らかの功績があり、それが彼らにホーリネスを与えるよう、あるいはホーリネスなしに彼らを受け入れるよう、きつと神を動かすと思かにも夢見ているのです。

6 彼らは、「恵みによって救われたのです」(エペ二5参)という、キリスト教という建物全体の大きな土台を、ほとんど何も理解していません。あなたがたが、罪や罪責と罪の力から救われ、また神の好意と似姿へと回復されるのは、いかなる働きや功績によるのでもなく、またあなた自身に何らかの値するものがあることによるのではありません。それは、無代価の恵み、つまり神の愛する御子の功績により、ただ神の憐れみによるのです。あなたがたは、このように、あなたがたの中にある力・知恵・強さによるのではなく、ただすべての人の中にあつてすべての働きを行われる聖霊の恵みと力によって救われるのです。

7 まだ中心的な疑問が残ります。私たちは、この救いが神からの賜物であり、神のわざであることを知っています。しかし、どのようにして(自分がそれを獲得していないと確信している人は言うでしょう) 私はそれを獲得するのでしょうか。もし、あなたが「信じなさい。そうすれば救われます」(使徒一六31参)と言ふなら、その人は「その通りです。でも、私はどのようにして信じるのでしょうか」と答えます。あなたが、「神を待ち望みなさい」と答えます。「そうですか。でも、私はどのようにして待たらよいのですか。恵みの手段によってですか、それともそれなしにですか。救いをもたらす神の恵みを、それらの手段によって待つのですか、それともそれらを捨てて待つのですか」。

8 神のことは、そのような大切な点に関して、何の指さしも与えていないということは、考えられないことです。私たち人間のため、私たちの救いのために天から降って来られた神の御子が、私たちの救いと密接な関わりがある問題について、何も決定しないままに私たちを放置して行かれたということは、考えられません。

そして事実、主は私たちをそのような状態に放置して行かれたではありません。主は、私たちが行くべき道を示しておかれました。私たちはただ、神のことはに相談し、そこに記されていることを探求すべきなのです。そして、もし私たちが、ただその決定に従うなら、疑問が残る余地はなくなりません。

三

1 これによれば、つまり聖書の決定によれば、神の恵みを慕い求める人はだれでも、神が定められた手段によって恵みを待ち望むべきです。それを捨て去るのではなく、用いることによってです。

そして、第一に、神の恵みを願う者はすべて、祈りの道によって待ち望むべきです。これは、主ご自身の明白な指示です。主の山上の説教の中で、宗教が何から成り立っているかを詳細に説明し、そ

の主要な部分を描写した後に、主は次のように付け加えています。「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます」(マタ七7、8)。ここで私たちは、求めるように、最も明白な方法で指示されています。それは、受けるため、受けるための手段として求めることです。また、高価な真珠である神の恵みを見出すために捜すよう、もし私たちが神の御国に入ろうとするならたたくよう、求め続け捜し続けるよう指示されています。

2 少しの疑いも残らないように、主はこの点に関して、さらに独特な論法で詳しく述べています。一人一人の心に主は次のように訴えています。「あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。また、子が魚を下さいと言うときに、だれが蛇を与えるでしょう。してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても自分の子どもには、良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父——御使いと人間の父であり、すべての肉なるものの霊の父——が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありましょう」(マタ七9、11参)。あるいは、別の機会に主(自身が、すべての良いものを一つに含めて、「とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さないことがありましょう」(ルカ一13)と述べています。ここで、特に注意しなければならぬことは、求めるよう指示されている人たちは、まだ聖霊を受けていない人たちということ。にもかかわらず、主は彼らにこの手段を用いるよう指示しています。そして、それは必ず効果があると約束しています。つまり、求めるとき、あわれみがご自身のすべてのみわざの上に行き渡っている方から、彼らは聖霊を受けるのです。

3 私たちが、どのような賜物であれ神から受けようとするならば、この手段を用いることは絶対的に必要です。そしてその必要性は、その直前に記されているあの有名なたとえによってさらに明らかになります。「また、イエスはこう言われた」(それは、どのように祈るべきかを教えておられた人々に対しての言葉です)、「あなたがたのうち、だれかに友だちがいるとして、真夜中にその人の所に行き、「君。パンを三つ貸してくれ。……」と言ったとします。……すると、彼は家の中からこう答えます。「めんどうをかけないでくれ。……起きて、何かをやることはできない。」あなたがたに言いますが、彼は友だちだからということでききて何かを与えることはしないにしても、あくまで頼み続けるなら、そのためには起き上がって、必要なものを与えるでしょう。わたしは、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます」(ルカ一一5、7参)。「彼は友だちだからという理由で与えはしませんが、その執拗な求めのゆえに起きて、必要なだけあたえます」。私たちがこの手段によって、つまり執拗な求めによって、もしそうしなければ全く受けられないようなものを神から受けることができる、と聖なる主がこれ以上明白に宣言できたでしょうか。

4 この手段によって、何であれ神に求めるものを神から受けるまで、「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるため、主は彼らに別のたとえを話された。ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、「私の相手をさばいてください。」と言っていた。彼は、しばらく取り合わなかったが、後には心ひそかに、「私は神を恐れず人を人とも思わないが、どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。でない、と、はっきりなしにやって来てうるさくて

しかたがない。」と言った(ルカ一八1-5参)。このたとえの適用を、「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい」と主ご自身が述べておられます。このやもめが求め続け、拒絶されても引き下がらないので、それで裁判をしてやろう、というのです。「まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないことがあるでしょうか。あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます」(ルカ一八7、8)——もし彼らが「祈り、失望しないなら」(ルカ一八1参)の話ですが。

5 私たちが隠れた所での祈りによって神の祝福を待ち望むようにとの、同様に詳細で明白な主の指示があります。そこでは、その手段によって私たちの唇の求めを手にすることができるといふ積極的な約束も添えられています。それは、以下の有名なことばです。「あなたは、折るときには自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見えおられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます」(マタ六6)。

6 もし、ほかにもっと明白な指示が可能であるとすれば、それは使徒を通して神が私たちに与えた指示です。それは、公的・私的にかかわらず、すべての祈りとそれに添えられた祝福に関する指示です。「あなたがたの中に、知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきつと与えられます」(ヤコ一2)——(もし求めるならばの話です。そうでないと、「あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです」(ヤコ四2)ということになります。)

しかし次のような反論もあるかもしれません。「これは神の赦しの恵みを知らない未信者に対する指

示ではありません。なぜなら、使徒は、「ただし、信じて(英訳、信仰で)願いなさい」、そうでないと、「そういう人は、主から何かをいただけると思ってはなりません」(同一6、7参)と付け加えているからです。それに対して、私は次のように答えます。この箇所での「信仰」という語の意味は、使徒自身によって(あたかも、この反論を未然に防ぐため、意図されていたかのよう)に、すぐそれに続く言葉の中で限定されています。それは、「少しも疑わず(英訳、揺れ動かず)、信じて(英訳、信仰で)願いなさい」、つまり、何も疑わない、*imēv duxov voievos*——神が祈りを聞いてくださるということや、心の願いをかなえてくださるといふこと、などを疑わないという意味です。

その箇所での「信仰」を、正規のキリスト教的な意味で理解すべきと考えることが、著しく、かつ冒瀆的に不合理であることは、以下のことから明らかです。その立場は、自分ではこの信仰(ここでは「知恵」と呼ばれています)を持っていないと自覚している人に、それを神に求めるよう聖霊が指示するということを仮定しています。しかも、「きつと与えられます」(ヤコ一5)という、積極的な約束とともに神への求めが勧められていることになり、そのすぐ後に付け加えて、もし彼がそれを求める以前にそれを持っていないならば、それは与えられない、と述べることになります。しかし、だれがそのような仮説に耐えられるでしょうか。ですから、これまでに引用された聖句と同様、この聖句から私たちは、神の恵みを求める者はすべて、それを祈りの道で待ち望まなければならないと推論すべきです。

7 第二に、神の恵みを求める者はすべて、(聖書の探求)によって待ち望まなければなりません。

この手段の使用に関する主の指示は、同様に平易で明白です。主は、信じようとしないうダヤ人た

ちに、「聖書を調べなさい。というのは、その聖書が、わたしについて証言しているのです」(ヨハ5 39参)と語っています。そして、彼らが主を信じるというその目的のために、主は彼らに聖書を探求するよう指示されたのです。

これは命令ではなく、彼らが「聖書を調べた」との主張に過ぎないという反論は、恥知らずなほどに誤っています。ここにある *Epeutae tōs ypōdōs* (聖書を調べよ) という表現が命令形なので、これが命令でなくっていったい何なのでしょう。それは、非常に多くの語を用いて表現すると同じくらい、決定的なものです。

そして、どんなにすばらしい祝福がこの手段を用いることに伴うかということとは、ペレアの人々に関して記されているところから明らかです。彼らは、パウロから聞いた後で、「はたしてそのとおりかどうか毎日聖書を調べた。そのため、彼らのうちの多くの者が信仰にはいった」(使徒一七一一二) —つまり、神が定められた道によって神の恵みを見いだしたのです。

実のところ、「非常に熱心にみことばを聞いた」(使徒一七一一) 人々の中には、「信仰が(同じパウロが述べているように) 聞くことにより来た」(ローマ一〇一七参) のであって、聖書を読むことによって、すでに聞くことによつて与えられた信仰が確立されたに過ぎなかった、というケースもあったことでしょう。しかし、「聖書を探求する」という一般的な用語の意味として、聞くこと・読むこと・思いめぐらすことなどが含まれるということは、すでに考察されたことです。

8 そして、「幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます」(Ⅱテモ三15)と

いう、テモテに対するパウロの言葉から、これは神が真の知恵を単に与えるためだけの手段ではなく、それを確立し増し加える手段でもあるということがわかります。同じ真理(すなわち、これは神のさまざまな恵みを人に伝えるために、ご自身で定められた偉大な手段であるということ)が、すぐ後に続く言葉の中に、最も十全な仕方ですべて、「聖書はすべて、神の靈感によるもので」(結果として、すべての聖書が誤りなく真実です)、「教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです」(Ⅱテモ三16-17)。

9 これは、第一義的・直接的には、テモテが「幼いころから親しんできた」聖書に関して語られていることであり、それは旧約聖書のことには違いありません。なぜなら、その当時にはまだ新約聖書は書かれていなかったからです。ということは、パウロ(もちろん彼は、「あの大使徒たちに少しも劣ってはいない」[Ⅱコリ一五])ので、現在地上にあるだれよりも劣っていることはない、と私は考えます)は、旧約聖書を軽視するという立場から、何とか離れていたことでしょう。神のことばの半分を全く重要視していないあなたがたよ、この事実を見てください。あなたがたが、ある日「驚き、そして滅びる」(使徒二三41) ということにならないためです。そして、その半分に関して、聖霊は明らかに神が定めた手段として「有益」であると述べているのです。それは、「教えと戒めと矯正と義の訓練とのために」に神が定めた手段です。「神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となる」ためにです。

10 また、これは神の人、つまりすでに神の御顔の光の中を歩いている人だけに有益なわけではありません。

ません。まだ暗やみの中にいて、まだ知らない方である神を探し求めている人々にとつても有益です。ですから、ペテロは、「また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています」(Ⅱペテ一19)と述べています。これは、文字通りには、「そして、私たちはいつそう確かなものとされた預言のみことばを持っています」(kai êxouev bebaiōtōv tōv prophētōn λόγων) ということです。私たちが「キリストの威光の目撃者」で、「おごそかな、栄光の神から来た御声を聞いた」(Ⅱペテ一16、17参)ことにより、いつそう確かなものとして確認されたのです。また、「夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまで、暗いところを照らすともしびとして、それ(預言のみことば、そのようにペテロは聖書と呼んでいます)に目を留めているとよいのです」(Ⅱペテ一19)と述べています。ですから、心の中にその日が夜明けとなるよう望んでいる人はすべて、「聖書を探求しつつ」待ち望もうではありませんか。

Ⅱ 第三に、神の恵みが増し加わるように望んでいる者はすべて、主の聖餐にあずかることによつてそれを待ち望むべきです。なぜなら、これもまた、主ご自身が与えられた指示だからです。「主イエスは、渡される夜、パンを取り、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだ(つまり、わたしのからだの聖なるしるし)です。わたしを覚えて、これを行いなさい。」杯をも同じようにして言われました。「この杯は、わたしの血(その契約の聖なるしるし)による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです」(Ⅰコリ一23、26参)。つまり、あなたがたは、これらの目に見えるしるしによつて、神の御前に、また御使いと人の前に、同

じことを公に示すのです。主が天の雲にうちにあつて来られるまで、あなたがたが嚴肅に主の死を覚えておくことを明らかにするのです。

ただ、「一人一人が(まず) 自分自身を吟味しなさい。この聖なる定め(の性質と意図)を理解しているかどうか、また主の死と同じになることを真に願っているかどうか吟味し、「そのうえで(何ら疑問がないなら) パンを食べ、杯を飲みなさい」(Ⅰコリ一28参)。

ここでも、パウロは、はじめ主によつて与えられた指示を明白に繰り返しているのです。「食べなさい」「飲みなさい」(esteta, ravena——両方とも、命令形です)という言葉は、単に許可だけを意味しているのではなく、はっきりとした明確な命令の言葉です。その命令は、信仰によつてすでに平安と喜びで満たされている人たちにも、あるいは「私たちの罪の記憶は、私たちを悲しませます。その重荷に耐え得ません」(英国国教会「祈祷書」聖餐式の項)と真実告白できる人にも与えられています。

12 そして、これが神の恵みを受けるための通常の定められた手段であるということは、その前の章に出てくるパウロの次の言葉から明らかです。「私たちが祝福する祝福の杯は、キリストの血にあずかる(communion)こと——あるいは、キリストの血の恵みを伝授すること(communion)——ではありませんか。私たちの裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか」(Ⅰコリ一〇16)。パンを食し、そして杯を飲むことは、目に見える外的な手段ではないのでしょうか。その手段によつて、神は私たちのたましいに、すべての霊的な祝福、つまり義と平安と聖霊にある喜びとを伝えられるのです。それらの祝福は、私たちのためにキリストのからだ(一度裂かれ、またキリストの血が一度流されたこと)によつて、買い求められたものではありませんか。ですから、神の恵みを真

夾に求める者はすべて、そのパンを食し、その杯を飲もうではありませんか。

四

1 神はごく平易にご自身を見出し得る道を定められました。しかしそれに対して、自らを賢いとする人々からの折りある毎の反論は無数にあります。それらのうちのいくつかを考察することは、必要なことでしよう。それらの反論に重みがあるからではありません。それらが最近目立って、足の弱い人の歩みを道から外れさせるためにしばしば用いられてきたからです。それどころか、サタンが光の使いとして現れるまでは良く走っていた人たちを、悩ませ墮落させるために、そうした反論が用いられてきたからです。

反論のうち、第一で主要なものは、「あなたがたは、これらの手段そのものに信頼することなしには、その手段（あなたがたがそう言っているもの）を用いることはできません」というものです。お願いです、それが記されているのはどこか、教えてください。そのような主張を支える明白な聖句を挙げべきです。そうでなければ、私はそのような主張を受け入れることはできません。なぜなら、あなたが神よりも賢いとは思わないからです。

もし、あなたが主張する通りであれば、キリストがそれを知っておられたに違いありません。そして、もし主が知っておられたら、主はきっと私たちに警告を与えておられたに違いありませんし、ずっと前にそれを啓示しておられたでしょう。主がそうされなかつたのですから、またイエス・キリストの全啓示の中にもそのような記述が少しもないのですから、私はキリストの啓示が神からのものであると確信すると同程度に、そのような反論が全く間違っていると確信します。

「しかしながら、あなたがそれらの手段そのものに信頼しているかどうかを確かめるために、しばらくの間それらから離れていてください」。つまり、神に信頼しつつ、神に従っているかどうかを確認するために、私が神に不服従をすべきなのですか。そのような忠告をあなたがたは公言するのですか。あなたがたは、「善をもたらすために悪を行う」ということを意図的に教えるのですか。そのような教師に対する神の審判の宣告を恐れなさい。彼らは「当然罪に定められる」（ロマ三8）のです。

「そういう意味ではなく、もしそれらの手段を中止したとき苦悩を覚えるなら、あなたがその手段そのものに信頼していたことが明白になります」。決してそういうことにはなりません。もし私が意図的に神に対して不服従を犯したとき苦悩を覚えるなら、それは御霊がまだ私と争っているということが明白なのです。しかし、もし私が意図的な罪を犯しながら苦悩を覚えないとしたら、それは私が墮落した心に身を任せていることになりました。

しかし、「それらの手段そのものに信頼している」ということで、あなたがたは何を意味しているのですか。そのなかに神の祝福を求めることですか。もしその方法で待つていれば、ほかでは決して手に入れることができないものを手に入れることができるかと信じていることですか。それなら、私はそのように信じています。また神が私の生涯の終わりに至るまで助けてくださるので、私はそのように信じて行くでしょう。神の恵みによって、私はそれらの手段を、私の死の日に至るまで、そのように信頼して行きます。つまり、神は約束されたことに対しては何でも真実であり、またその成就にも真実で

あると信じて行きます。また、神がこの方法を通して私を祝福すると約束されたのですから、神のみことばの通りになると私は信頼しています。

2 第二に反論されてきたことは、「これは行いによって救いを求めることだ」ということです。あなたがたは、自分たちが使っている表現の意味を知っていますか。「行いによって救いを求める」とはどういう意味ですか。パウロの記したものではありません、それは、モーセの律法の儀式的な行為を守ることによって救われることを求めるといふことか、あるいは自分自身の働きのゆえに自分の義の功績によって、神が定められた方法で私が待つこと、そして神ご自身が約束されたゆえに神が私にそこで会ってくださると期待することを意味しているのでしょうか。

私は、神がご自身のみことばを成就されると期待しています。そして、神がこの方法で私に会ってくださり、祝福してくださると期待しています。しかし、それは私が行ってきたどんな行いのおかげでも、私の義の功績によるのでもありません。それはただ、神の御子の功績と苦難と愛によるのです。その御子を、神は常に喜びとしておられます。

3 第三に、キリストが唯一の恵みの手段である、と猛烈に反論されてきました。これは単なる言葉の遊びに過ぎない、と私は答えます。あなたがたの用語を説明してください。そうすれば反論は消滅してしまいます。私たちが、「祈りが恵みの手段です」というとき、それは神の恵みが伝えられる管として理解しています。あなたがたが、「キリストが恵みの手段です」というとき、それは、キリストこそが唯一の代価・買手と理解しているのです。あるいは、「わたしを通してでなければ、だれひとり

父のみもとに来ることはありません」(ヨハ一四六)と理解しているのです。だれがそれを否定するのでしょうか。しかし、これは全く質問から外れているのです。

4 しかし、第四に反論されてきたことですが、聖書は私たちに、救いを待ち望むよう教えていないのでしょうか。ダビデは、「私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の救いは神から来るからだ」(詩篇六二一)と述べてはいないのでしょうか。また、イザヤは、「主よ。……わたしたちはあなたを待ち望みます」(イザ三三二)と述べ、同じことを私たちに教えていないのでしょうか。私は、これらすべてを否定しません。救いは神の贈り物ですから、私たちは疑いもなく確実に、救いのために神を待ち望まなければなりません。しかし、どのようにして待つべきなのでしょう。もし神ご自身が一つの方法を定められたとしたら、あなたは神を待ち望むためのそれ以上にすぐれた方法を見出すことができるのでしょうか。しかし、神が一つの方法を定められたことは、詳細に明らかにされてきました。また、その方法がどのような方法であるかも、明らかにされてきました。あなたがたが引用する預言者の言葉自体が、このことを疑問の余地のないものとしています。なぜなら、その全文が以下のようなになっているからです。「主よ。まことにあなたのさばき(あるいは、定め)の道で、私たちはあなたを待ち望みました」(イザ二六八参)。そして、ダビデ自身の言葉が豊かに証しているように、彼も全く同様の方法で待ち望みました。「私はあなたの救いを待ち望んでいます。主よ。私はあなたの仰せを行っています」(詩一一九16)。「主よ。あなたのおきての道を私に教えてください。そうすれば、私はそれを終わりまで守りましょう」(同33)。

5 「それはそうとして、しかし神は、「しっかりと立って、主の救いを見なさい」(出エ一四13参)

という、別の方法も定められました」と言う人もいます。

そこで、あなたがたが引用している聖書を調べてみましょう。それらのうちの最初の文章は、その前後の関係から、次のようになります。「パロは近づいていた。それでイスラエル人が目を上げて見、非常に恐れた。……そしてモーセに言った。「エジプトには墓がないので、あなたは私たちを連れて来て、この荒野で、死なせるのですか。……それでモーセは民に言った。「恐れてはいけない。しっかりと立って、……主の救いを見なさい。……主はモーセに仰せられた。……イスラエル人に前進するように言え。あなたは、あなたの杖を海の上に差し伸ばし、海を分けて、イスラエル人が海の真中のかわいた地を進み行くようにせよ。」(出エ一四10、11、13、15、16参)

これが、かれらが「しっかりと(静かに)立って」見た「神の救い」でした。しかも、全力を尽くして「前進すること」によって見る事ができた神の救いでした。

同じことが表現されている別の聖書の箇所は、次のようになっていきます。

「そこで、人々は来て、ヨシヤバテに告げて言った。「海に向こう……からおびたしい大軍があなたに向かって攻めて来ました。……」ヨシヤバテは恐れて、ただひたすら主に求め、ユダ全国に断食を布告した。ユダの人々は集まって来て、主の助けを求めた。すなわち、ユダのすべての町々から人々が出て来て、主を求めた。ヨシヤバテは、主の宮……で、……集団の中に立った。……ときに、主の霊が……ヤハジエルの上に臨んだ。……彼は言った。……「あなたがたはこのおびたしい大軍のゆえに恐れてはならない。……この戦いはあなたがたの戦いではなく、神の戦いであるから。あす、彼らのところに攻め下れ。……この戦いはあなたがたが戦うのではない。しっかりと立って動かずにいよ。

……主の救いを見よ。……主はあなたがたとともにいる。」……こうして、彼らは翌朝早く、……出陣した。……彼らが喜びの声、賛美の声をあげ始めたとき、主は伏兵を設けて、ユダに攻めて来たアモン人、モアブ人、セイル山の人々を襲わせたので、……互いに力を出して滅ぼし合った」(II歴代二〇2、5、14、17、22、23)。

これが、ユダの人々が見た救いでした。しかし、これらすべてのことがどのようにして、神が定められた手段において、私たちは神の恵みを待つべきではないということを立てるのでしょうか。

6 もう一つだけ反論に触れようと思います。その反論は、正確にはこの項目には属さないものです。にもかかわらず、あまりにも頻繁に主張されてきたので、決して見過ごすことはできません。

「パウロは、『もしあなたがたが、キリストとともに死んだのなら、どうして定め(Ordinances)に縛られるのですか』(コロ二20、21参)と述べているではありませんか。ですから、キリストは、『キリストとともに死んだ』者なのですから、もはや定めを用いる必要がないのです」。

つまり、あなたは、「もし私がキリストなら、キリストの定めに従う必要がない」と言っているのです。この主張の不合理さから、一見してそこで述べられている定めがキリストの定めであるはずがない、とわかるはずですが。それらの定めとはユダヤ教の定めということで、その定めに対してはキリストは、もはや従う必要がないことは確かなことです。

そして、同様のことが、すぐ次に続く言葉から明らかです。「すがるな。味わうな。さわるな」(コロ二21)——すべて明らかにユダヤ教の律法の昔の定めに関するものです。

ですから、この反論は、すべての反論の中で最も薄弱なものです。そして、あらゆる反論にもかか

ならず、偉大な真理は、微動だにしないで確立するはずで、神の恵みを望む人はすべて、神が定められた手段においてそれを待ち望むべきです。

五

1 しかし、神の恵みを望む人はすべて、神が定められた手段においてそれを待ち望むべきである、と認めたとして、依然としてどのようにしてその手段を用いるか、それを用いる順序と方法の両方について、質問があることでしょうか。

前者に関しては、これらの手段を用いて、罪人が救いに導かれるとき、一般的に神ご自身が好まれるある種の順序があることが観察されます。愚かで無感覚で哀れな者は、自分勝手な道を進み、神のことなど自分の考えの中には全くありません。そのような時、神が不意に（つまり、先行的に）彼のところにやって来られます。多分、良心の覚醒をもたらすような説教や会話を通したり、あるいは何らかの恐ろしい摂理によって。あるいは、一切外的な手段によらないで、罪を悟らせる神の御霊の直接的な働きによるかもしれません。結果として、やがて来る怒りから逃れたいとの願望が与えられ、その罪人は、どのようにして逃れられるかを聞こうと、意識的に出かけていきます。もし彼が、心に語りかける説教者を見つけたら、彼は驚き、そしてこれらのことが本当にその通りかどうか、「聖書を調べること」（ヨハ五39参）を始めます。彼が聞いたり読んだりすればするほど、彼は自分が罪人であることを確信します。そして、ますます昼も夜もみことばを黙想するようになります。多分、彼が聖

書で聞いたり読んだりしたことを、より良く説明したり納得させたりしてくれるような本を、他にいくらも見つけることでしょうか。そして、これらすべての手段によって、認罪の矢が、彼のたましいにより深く食い込んでいきます。彼はまた、神に関する話を語り始めます。それは、彼の思考の中では、常に最高の地位を占めるものです。それどころか、彼は神と語り、祈り始めます。もともと、恐れと恥とによって、彼は何を言ったらよいのかほとんど分らないのですが。しかし、彼が声に出して話すことができるか否かにかかわらず、彼は祈らないわけにはいきません。たとえ、それが単に、「言いたい深いうめき」（ロマ八26参）であったとしても。「いと高くあがめられ、永遠の住まいに住む方」（イザ五七15）が、彼のような罪人に心を留めてくださるかどうか疑問であったとしても、彼は、「大会衆の中で」（詩篇二二25、他）神を知っている人々、忠実な人々とともに祈りたいと願います。しかし、ここで彼は、他の人々が「主の食卓」（マラ一7、12）に進み出ていくのに気がつきません。彼は、キリストが「これを行いなさい」（1コリ一24）と語られたことを考えます。私がしないのは、どうしてだろうか。私があまりにも重大な罪人だからなのか。私はふさわしくないのか。資格がないのか。しばらくの間、このような疑念と戦った後、彼はそれを打破します。このようにして彼は、聞き、読み、黙想し、祈り、主の聖餐にあずかるという神の道を歩み続け、とうとう神は御心にかなう方法で、彼の心に「あなたの信仰が、あなたを救ったのです。安心して行きなさい」（ルカ七50）と語りかけられるのです。

2 こうした神の順序を観察することによって、私たちはある特定のたましいに對してどのような手段を推薦すべきか、学ぶことができます。もし、これらの手段のうち、愚かで不注意な罪人に届く

としたら、それは多分、聞くことか会話でしょう。ですから、そのような人に対して、もしその人が多少なりとも救いについて考えているなら、私たちはこれらの手段を用いることを勧めるでしょう。自分の罪の重さを感じ始めている人に対しては、単に神のことばを聞くだけでなく、それを読むことも——他のまじめな書物を合わせて読むことも——より深い認罪への手段となるでしょう。彼が読んだものを黙想するようにアドバイスすることもできるでしょう。そうすれば、読んだものが彼の心に十分な力を及ぼすでしょう。それどころか、特に同じ小道を歩いている人々同士で、それについて恥ずかしがらずに語ることを勧めてもよいでしょう。苦悩と憂いとが彼をとらえるとき、その時こそ、彼に心を神の御前に注ぎ出すよう、熱心に勧めるべきです。「いつでも祈るべきであり、失望してはならない」(ルカ一八一)ことを。そして、彼自身の祈りが価値のないものと感じる時には、あなたは神とともに働いて、彼に「主の家」(詩篇一二二、他)に進み行き、神を恐れるすべての人とともに祈ることを思い起こさせるべきです。彼がそのようにするなら、主の死に際してのことは、「わたしを覚えてこれを行いなさい」(コリ一二四、二六参)がすぐに彼の記憶によみがえってくるでしょう。そうなれば、私たちは聖霊が働いておられるという彼の思いを励ましてあげるべきなのです。そして、そのようにして、神が定められたすべての手段を用いて、一步一步彼を導くことができるのです。私たち自身の意志によるのではなく、ただ神の摂理と御霊が先に進んで道を開くにつれて、導いていくのです。

3 けれども、守るべきある特定の順序に関する命令を聖書の中に見いだすことができないように、神の摂理や御霊は、特定の順序に固執しないで、いろいろと変化します。そして、さまざまな人々が導かれる手段や、神の祝福を見出す手段は、それぞれ異なり、無数に異なった方法で順序が入れ替わり、組み合わせられます。それでも、依然として私たちの知恵は、神の摂理と神の御霊の導きに従うべきです。また、この点で(特に私たち自身が神の恵みを探し求めるところの手段についてはそうですが)、私たちは神の外的な摂理によって導かれるべきです。ある時には一つの手段を、そして別の時には別の手段を用いるというように。また、私たちは経験によっても導かれます。神の自由な御霊は、私たちの経験を通して、私たちの心に働くことを、一番の喜びとされるのです。その間、神の救いをうめき求めているすべての人のための、確実に一般的な法則はこれです。機会が与えられるときはいつでも、神が定められたあらゆる手段を用いることです。なぜなら、あなたに救いをもたらす恵みを携えて神があなたに出会ってくださる手段を特定することはできないからです。

4 恵みの手段を用いる方法に関して述べておきます。それを用いる人に果たして恵みが伝達されるかどうかは、すべてその方法にかかっています。第一に、神がすべての手段を越えた方であるという新鮮な意識を常に保つことです。全能者に制限を加えてしまうことのないように注意を払いなさい。神は、どのようなことでも、いつでも、ご自身のみごころにかなうことを行われます。神は、ご自身が命じられたいかなる手段を通して、通さなくても、いずれにしてもご自身の恵みを伝えることができます。実際にそうされることもあります。「だれが主のみごころを知ったのですか。また、だれが主のご計画にあずかったのですか」(ロマ一三四)。ですから、毎瞬間、神の現れに目を覚ましていきましょう。神の現れの時が、あなたが神の定めに従事しているときであろうが、あるいは、その前、そ

の後であろうが、それを用いることが妨げられているときであろうが、ともかく毎瞬間です。あなたが妨げられているときであつても、神は妨げられることはありません。神はいつでも備えておられ、いつでも可能であり、いつでも救おうと望んでおられます。「その方は主だ。主がみこころにかなうことをなさいますように」(1サム三18)。

第二に、どのような手段を用いるにしても、その前に、この手段そのものには力がない、ということとをあなたの心に深く銘記させなさい。それ自体は、つまらない、いのちのない、空しいものにすぎません。神から離れたなら、それは枯れ葉や影にすぎません。また、それを私を用いるということの中にも、何の功績もありませんし、それを用いること自体が神を喜ばせるわけではありません。それによつて、私が神の手から何らかの好意を受けるに値するようになるわけではありません。私の舌を冷やす一滴の水さえ、値しないのです。しかし、神が命じておられるという理由から、私は実行するのです。この方法で神を待ち望むように神が指示しておられるので、私は神の無代価のあわれみをここで待っているのです。そこから、私の救いがやつて来ます。

次のことをしっかりとあなたの心に据えなさい。儀式を守ることそれ自体 (opus operatum)、単なる働きは、何の益ももたらさないことです。また、神の御霊以外には、どこにも救う力がありません。キリストの血潮以外にはいかなる功績もありません。さらに、結果として、たとえ神が定められたものであつても、もしあなたが神のみに信頼していなかったとしたら、たましいに恵みを伝えることはできません。他方、神を真実に信頼する人は、たとえ彼があらゆる外的な定めから切り離されたとしても、たとえ地球の中心に閉じこめられたとしても、神の恵みに達しないということはありません。

第三に、すべての手段を用いる際、神のみを求めなさい。あらゆる外的手段の中に、またそれを通して、ただ御霊の力と御子の功績だけを追い求めなさい。その行い自体に固執しないように気をつけなさい。もしそうなると、それはすべて徒労に終わります。神に達しないものは、あなたのたましいを満足させることができません。ですから、すべてにおいて、すべてを通して、そしてすべてに勝つて、神をひたすら見つめなさい。

また、すべての手段を、手段として用いることを忘れないようにしなさい。それらが、手段自体のためではなく、あなたのたましいを義と真のホーリネスに刷新するために定められたということを忘れないことです。ですから、もしそれらがこのことに役立つなら、結構です。もしそうでないなら、それらは意味もなしくずです。

最後に、あなたがそれらの手段のいずれかを用いた後で、それを用いている自分自身をどのように評価しているかに気をつけなさい。あなたが何か偉大なことを成し遂げたかのように喜んでいたりしたら、警戒しなさい。もしそのように満悦しているなら、すべてのものを毒に変えてしまっています。「もし、神がそこにおられなかったとしたら、これは何の役に立つのでしょうか。罪に罪を加えていたのではないのでしょうか。いつまででしょうか、主よ。救ってください。そうでないと、私は滅びてしまします。この罪を私に負わせないでください」と、考えるべきです。もし神がそこにおられたなら、もし神の愛があなたの心にあふれていたなら、あなたは、いわば外的な行いそのものには、気にも留めなかったことでしょう。神がすべてにおいてすべてであることを、あなたは見、知り、感じます。へりくだりなさい。御前にくずおれなさい。神にすべての賞賛を捧げなさい。「すべてのことにおいて、

イエス・キリストを通して神があがめられる」(1ペテ四11)ようにしなさい。「私は、主の恵みを、とこしえに歌います。あなたの真実を代々限りなく私の口で知らせます」(詩篇八九1)と、「あなたのすべての骨に叫ばせ」(詩篇三五10)なさい。

編集者注

- 1 ウェスレー説教の本文は、*The Bicentennial Edition of the Works of John Wesley, Volume 1, ed. by Albert Outler* (Abingdon Press, Nashville, 1984) からの訳出である。
- 2 説教本文中の括弧内の引用は、同全集の脚注にある聖書引用を参考にした。
- 3 引用聖句については、おおむね、日本聖書刊行会の承認を受けて新改訳聖書を用いた。なお、ウェスレーの文意に添わない箇所は、私訳を試みた。

ジョン・ウェスレー説教53 上巻

1995年10月1日 初版発行

訳者 竿代忠一、勝間田充夫、藤本 満

発行者 イムヌエル綜合伝道団教学局

印刷 双美堂

135 東京都江東区森下3丁目18番13号

発行所 イムヌエル綜合伝道団教学局

101 東京都千代田区神田駿河台2丁目1番 OCCビル

電話 03 (3233) 0879 FAX 03 (3233) 3238

振替 00110-7-133609

©イムヌエル綜合伝道団 1995 Printed in Japan

ISBN4-87134-225-2